シャーロック・ホームズの冒険

|  |  |
| --- | --- |
| 原題 | The Adventures of Sherlock Holmes |
| 著者 | アーサー・コナン・ドイル |
| 訳者 | coderati |
| 公開日 | 2007/01/20 |
| 取得日 | 2013/08/04 |
| ライセンス | プロジェクト杉田玄白ライセンス |

課題内容

① すべてのページにページ番号を振る（番号の位置は自由）

② 自動生成した目次をこの下に挿入する

# ボヘミアンスキャンダル

## 一

シャーロック・ホームズがあのと言えば彼女のことだった。彼女の話をするのにほかの呼び方を聞いたことはめったにない。彼からすると彼女は女性すべてを凌駕し、その輝きを奪うのである。彼がアイリーン・アドラーに恋愛に似た感情を抱いたというのではない。あらゆる感情、特にその種のものは彼の冷静で緻密ながら見事に均衡の取れた精神と相入れないものだった。思うに彼はこの世に現れた最も完璧な推理・観察の機械であるが、恋する人としてはお門違いをすることになったろう。彼が嘲弄、冷笑を抜きにして情愛に傾く心を語ることはなかった。そういうものは観察者としては結構なものだった――効果的に人間の動機と行動をあらわにするからである。しかし訓練を積んだ理論家としては、自らの繊細で精密に調整された気質にそうしたものの侵入を許すことは、その知的成果に疑いを招きかねない気を散らす要因を持ち込むことになるのだった。高感度の計器に入った砂粒、あるいは彼が持っている高性能のレンズのひびとても、彼のような心における強い情動ほど邪魔にはならなかったろう。それでも彼にはただ一人の女性があり、その女性とは今は亡き、故アイリーン・アドラーであった。

このところホームズとはほとんど会うことがなかった。私の結婚により互いに疎遠になっていたのだ。自らのこの上ない幸福、そして初めて自分の所帯の主人となった男の周りに持ち上がる家庭を中心とした利害は私の注意をすべて奪うのに十分だったし、ホームズの方は、ボヘミアンそのものであるその精神のためにどんなものであれ社交を嫌い、ベーカー街の私たちの下宿に残って古い本に埋もれ、週ごとにコカインと野心、麻薬による惰眠と、彼本来の情熱的な性質の示す猛烈な気力の間を行きつ戻りつしていた。彼は相変わらず犯罪の研究に強く引きつけられ、その計り知れない才能、並外れた観察力を傾けて、警察が絶望的と断念した手がかりを追い、謎を解いていた。時折彼がしていることが耳に入った。トレポフ殺人事件でオデッサに召喚されたこと、トリンコマリーでアトキンソン兄弟の奇怪な事件を解決したこと、そして最後にオランダ王家のためにうまく成し遂げたデリケートな使命のこと。しかしこれら、彼の活動しているしるしを私は日刊紙の読者すべてと共有しているだけであり、ほかにかつての友、仲間について知るところはほとんどなかった。

ある晩――1888年3月20日だった――患者を訪ねて戻る私を、帰路がベーカー街へと運んだ。いつまでも私の心に、求婚しているころのこと、そして緋色の研究という陰惨な事件のことを連想させるにちがいない、あの忘れがたい家を通りかかった時、私はまたホームズに会いたい、彼がその並外れた能力をどのように用いているのか知りたい、という強い思いに襲われた。彼の部屋はあかあかと灯がともり、ちょうど私が目を上げた時、彼のやせた長身のブラインドに映る黒いシルエットが二度通過するのが見えた。彼は深く頭を垂れ、後ろ手を握り締め、足早に、しきりに部屋を行き来していた。彼の心理状態や癖に通じている私には、彼の態度や様子の意味するものは明らかだった。彼が再び仕事をしているのだ。彼は麻薬の創り出す夢から覚め、新たな問題の臭跡に迫っているのだった。私はベルを鳴らし、かつて私のものでもあった部屋へ案内された。

彼の態度に感情は見えなかった。それはめったにないことだった。しかし彼は私に会って喜んでいたと思う。言葉はほとんどなかったが、優しい目をして、手で私に肘掛け椅子を勧め、葉巻入れをほうってよこし、隅のアルコールのケースとソーダメーカーを指さした。それから彼は火の前に立ち、例の内省的な奇妙なやり方で私を吟味した。

「結婚生活が合ってるんだね」と彼は言った。「最後に見てから七ポンド半は増えているかな、ワトソン」

「七ポンドだ！」と私は答えた。

「ほう、もう少し考えるべきだったね。ほんのちょっとってところかな、ワトソン。それにまた開業してるんだね。仕事に就くつもりだなんて言わなかったけれどね」

「だがどうしてわかるんだ？」

「わかるさ、推理したんだ。最近君がびしょぬれになる羽目になったことや、君んところに不器用で不注意な女中がいることはどうしてわかるんだろうねえ？」

「ホームズ君、」私は言った、「これはかなわん。何世紀か前に生きてたら君はきっと火あぶりだよ。確かに木曜日にいなかを歩いて、恐ろしく汚れて帰ったが、洋服は変えたんだからね、どうして君にわかるのか見当もつかんよ。メアリー・ジェーンのことなら、あれは救いがたい、だから妻が辞めてもらうことにしたよ。だが、これまた君がどうしてそう考えたのかわからない」

彼はくすくす笑い、長い、神経質な両手をこすり合わせた。

「簡単そのものだよ」と彼は言った。「君の左足の靴の内側、ちょうど暖炉の火が当たってるところさ、革にほぼ平行な切り傷が六つついているのが見える。明らかにそれは誰かが靴底について固まった泥を落とそうとして縁をきわめてぞんざいにこすったせいでついた傷だ。そこで、いいかな、僕の二重の結論は、君がひどい天候の中を外出したこと、君のところにはとりわけ悪質な靴裂き屋であるロンドン女中の見本がいたこと、だ。君の開業については、部屋に入ってきた紳士がヨードホルムのにおいをさせ、右手の人さし指を硝酸銀で黒く汚し、シルクハットの右側を膨らませてそこに聴診器を忍ばせていることがわかるなら、いや、実際、僕が鈍いというならともかく、これは現役のお医者さんだと断定するはずじゃないか」

推理の過程を説明されてみれば簡単なので、私は笑わずにいられなかった。「君が理由を話してくれるのを聞くと、」私は言った、「それはいつもばかばかしいほど易しいように見える。だから私にも簡単にできるはずなんだがね。もっとも君の連続した推論の一つ一つの段階においては、君がその過程を説明してくれない限り私はまごつくばかりだ。でも私の目は君と変わらないと思うんだがね」

「そうともさ」と彼は答え、煙草に火をつけ、肘掛け椅子に身を投げ出した。「君は見ている、が、観察していない。この区別ははっきりしてるんだ。たとえばさ、君は玄関からこの部屋へ至る階段を頻繁に見ているね」

「よく見てるよ」

「どのくらい？」

「そうさね、何百回かな」

「それじゃ何段ある？」

「何段？　わからないよ」

「そうとも！　君は観察していなかったんだ。それでも君は見ていた。そこが僕の言いたいところだ。そこでだ、僕は知ってるよ、十七段あるんだ、僕は見てもいるし観察もしているからだ。ところで、君はこうした小さな問題に興味を持っているし、親切にも僕のささいな経験を一つ、二つ記録してくれたし、だからこれもおもしろいかもしれないよ」彼はテーブルに広げて置かれていた一枚の厚い、ピンク色の便箋をこちらに投げた。「さっきの郵便で来たんだ」と彼は言った。「読んで聞かせてくれ」

手紙に日付はなく、署名も住所もなかった。

「今夜八時十五分前に訪問します（と書いてあった）、紳士はきわめて重大な問題であなたに相談を望んでいます。先ごろのあなたのあるヨーロッパの王室への尽力は、あなたが誇張でなく重要な問題を託して間違いのない人であることを示したものです。あなたに関するこうした話を私たちは受け各方面からとっています。その時刻にはお部屋に、それから訪問者の覆面に気を悪くされぬよう」

「これはまったく不可解だね」と私は言った。「どういう意味かわかるかい？」

「僕にはまだデータがない。データを得る前に理論を立てるのは重大な過ちだ。気づかぬうちに人は理論を事実にあわせる代わりに、理論にあわせて事実を歪め始めるものだ。しかしその手紙そのものだが。君はそこから何を推測する？」

私はその書体やそれが書かれている紙を注意深く調べた。

「これを書いた男はたぶん裕福だろうね」と私は友の方法を真似しようと努めながら言った。「こういう紙は一束半クラウン以下では買えまい。丈夫さ、硬さは独特のものだ」

「独特――まさにその通りだ」とホームズは言った。「なにしろイギリスの紙じゃない。明かりにかざしてみたまえ」

そうすると、大きなＥと小さなｇ、Ｐ、また大きなＧと小さなｔの透かし文字が紙に織り込まれていた。

「それをどう思う？」とホームズが尋ねた。

「メーカーの名だ、間違いない。というより頭文字の意匠だね」

「とんでもない。Ｇと小さなｔは『Gesellschaft』、ドイツ語の『会社』を表している。僕たちの『Co』同様、習慣的な短縮形だ。Ｐはもちろん『Papier』、紙を表す。さてＥｇだ。大陸地名辞典を見てみるかな」彼は上の棚から茶色の重い一冊を取った。「Eglow、Eglonits――あったぞ、Egria。ドイツ語圏、ボヘミアの、カールスバートから遠くないところだ。『ヴァレンシュタイン死の舞台として、および多数のガラス工場、製紙工場のあることで注目』ハ、ハ、君、どう思う？」彼は目を輝かせ、高々と勝どきの紫煙を噴き上げた。

「この紙はボヘミアで作られたんだね」と私は言った。

「まさしくね。それにこの手紙を書いた男はドイツ人だ。妙な文章構造に注意してくれたまえ――『あなたに関するこうした話を私たちは受け各方面からとっています』フランス人やロシア人ならそうは書かなかったろう。こんなに乱暴に動詞を扱うのはドイツ人だ。従って、残るは、ボヘミア製の紙に書き、顔を見せるぐらいなら覆面をするという、このドイツ人が何をお望みかを知るだけだ。それにほら、僕の勘違いでなければ、ご当人が来て僕たちの疑いを解いてくれるよ」

彼がそう言うと、馬のひづめと縁石をこする車輪の鋭い音が聞こえ、それから激しくベルが引かれた。ホームズが口笛を吹いた。

「二頭立てだね、音からすると」と彼は言った。「そうだ、」彼は窓の外に目をやりながら続けた、「素敵な小型のブルームにすばらしいのが二頭。一頭百五十ギニーずつだな。この事件は、ワトソン、ほかに何もなくとも金にはなるよ」

「私は行ったほうがいいかな、ホームズ」

「ちっともかまわないよ、ドクター。そこにいてくれ。僕にも伝記作家がいなくては困る。それにこれはおもしろそうだよ。見逃す手はないと思うよ」

「でも依頼人は――」

「それはかまわないさ。僕が君の助けを必要とするかもしれないとなれば依頼人だって。ほら来たよ。その肘掛け椅子に座ってくれ、博士、そしてよく聞いていてくれたまえ」

ゆっくりとした重々しい足音が階段、そして廊下に聞こえ、ドアのすぐ外で止まった。それから大きな、有無を言わさぬノックの音がした。

「どうぞ！」とホームズは言った。

六フィート六インチはくだらない身長で、胸も四肢もヘラクレスのような男が入ってきた。その豪華な服はイギリスでは悪趣味に近いものと見られる豪華さであった。ダブルのコートの袖口や胸には重厚なアストラカンの帯状のスラッシュがつけられ、肩には炎の色のシルクの裏地の濃紺のマントをかけ、燃えるような緑柱石一つからなるブローチで首に留めていた。ふくらはぎまで伸びて、最上部を贅沢な茶色の毛皮で飾ったブーツが、外観全体の与える垢抜けのしない華やかな印象の仕上げとなっていた。つば広の帽子を手にしていたが、顔の上半分を横切り、頬骨にまだ達している黒い、目を隠す覆面をどうやらその瞬間まで直していたようで、部屋に入った時も手はまだそれに触れていた。顔の下半分からは強い性格がうかがわれ、厚い、垂れた唇、長くまっすぐなあごは頑固なまでの決断力を思わせた。

「手紙は受け取りましたか？」と彼は太い、耳障りな声、ひどく目立つドイツなまりで尋ねた。「訪問することは伝えました」彼はどちらに話しかけてよいのかわからないというように私たちを代わる代わる見た。

「どうぞお座りください」とホームズが言った。「これは友人で同僚のワトソン博士で、時折事件で助けになってくれています。ところでどなた様でしょうか？」

「フォン・クラム伯爵と呼んでもらって結構、ボヘミアの貴族です。こちらの紳士、あなたの友人は、きわめて重要なことを打ち明けて差し支えない、信義を重んじ、分別ある方と思いますが。さもなくば、よほどあなた一人と話したいのですが」

私は立ち上がって行こうとしたが、ホームズが手首をつかみ、私を席に押し戻した。「二人でなければだめです」とホームズは言った。「僕に話せることは何でもこの紳士の前でお話しください」

伯爵は幅広い肩をすくめた。「それではまず初めに、」彼は言った、「お二人に二年間の秘密厳守を約束してもらいましょう。そのころにはこの問題も大したことではなくなろう。現時点ではヨーロッパの歴史に影響を及ぼすほど重要と言っても過言ではないのです」

「約束します」とホームズが言った。

「私も」

「この覆面も許してください」と奇妙な訪問者は続けた。「私を遣わした高貴な方が代理人のことも知られぬようにとお望みであり、また実を言うと、今言った肩書きも必ずしも私自身の者ではないのです」

「気づいておりました」とホームズは冷淡に言った。

「状況は非常に微妙であり、あらゆる警戒をして、巨大なスキャンダルとなってヨーロッパの王室の一つに重大な傷をつける火種を消さねばなりません。はっきり言えば、この問題はボヘミア代々の王、名門オルシュタイン家が関係しているのです」

「それもまた気づいておりました」とホームズは小声で言い、肘掛け椅子に腰を下ろし、目を閉じた。

私たちを訪れた客は、ヨーロッパで最も明敏な理論家であり、最も精力的な捜査官であると確かに聞かされていた男の気のない、だらけた姿を、明らかに少々驚いて見やった。ホームズは再びその目をゆっくりと開き、巨人のような依頼人をいらだたしげに見た。

「かたじけなくも国王陛下にその問題をお話しいただければ、」彼は言った、「よりよい忠告を差し上げられます」

その人は椅子から飛び上がり、動揺を抑えきれずに部屋を行ったり来たりした。それから、捨て鉢を身ぶりに表し、彼は顔から覆面をもぎ取り、それを床に投げつけた。「その通りです、」彼は叫んだ、「私は王です。なぜ隠そうとせねばならないのか？」

「まったくなぜでしょう？」とホームズは小声で言った。「陛下がお話しになる前に、僕は自分がお話ししているのはボヘミア国王、カッセル―フェルシュタイン大公、ヴィルヘルム・ゴッツライヒ・シギスマンド・フォン・オルムシュタイン陛下であると存じてました」

「しかしおわかりのはずだが、」奇妙な客はもう一度腰をかけ、その高い、白い額をかき上げながら言った、「おわかりのはずだが、私が自分でこういう用件を処理するのは異例のことです。けれども事は微妙ゆえ、代理人などに打ち明けることはできません。自らその男の手中に陥りますから。あなたの意見を聞くためにプラハからひそかに来たのです」

「では、どうぞご相談を」とホームズはもう一度目を閉じて言った。

「では事実を手短に。五年ほど前、長くワルシャワに滞在した際、私は有名な冒険的女性、アイリーン・アドラーと知り合いになりました。名前はおそらく知っているでしょうね」

「僕の索引で調べてくれないか、博士」とホームズは目を閉じたままつぶやいた。長年にわたり、彼は人や事件に関する記事に組織的に摘要をつける方式を採用していたので、どんな問題や人物を挙げても彼は直ちにその情報をもたらすことができた。今回その人物伝は、あるヘブライ人のラビのそれと深海魚に関する研究論文を書いたある参謀将校のそれの間にあった。

「見せてくれ！」とホームズは言った。「フム！　1858年ニュージャージー生まれ。コントラルト―フム！　スカラ座、フム！　ワルシャワ帝国歌劇団でプリマドンナ―ほう！　オペラのステージから引退―おや！　ロンドン在住―そうだろう！　つまり陛下は、この若い人物と関係して、名誉にかかわる手紙を何通か書かれ、今ではそれらを取り戻したいと思っていらっしゃるんですね」

「まさにその通りです。だがどうして――」

「秘密に結婚をなさいました？」

「決して」

「法的文書、証明書はありませんか？」

「決して」

「とするとよくわかりませんね、陛下。この若い人が恐喝などの目的で手紙を出して見せるとして、どうやってそれを本物と証明するのでしょう？」

「私の筆跡です」

「フ、フン！　偽造です」

「私の私的な便箋」

「盗まれたものです」

「私の印章」

「模造です」

「私の写真」

「買ったもの」

「私たち二人が写っている」

「おやおや！　それは非常にまずい！　陛下はまったく無分別なことをしてしまいましたね」

「おかしくなっていた――正気でなかったのです」

「ご自分の体面をひどく汚された」

「当時はほんの皇太子でした。若かった。今やっと三十です」

「取り戻さなくては」

「やってみたがだめでした」

「陛下、金を出さなくては。買わなければいけません」

「彼女に売るつもりはないのです」

「では盗むのです」

「五回試みました。二度、私の雇った夜盗が彼女の家中を探しました。一度は彼女の旅行中、手荷物を行き違いにしました。二度彼女を待ち伏せしました。成果はありません」

「影も形もなしですか？」

「まったくなし」

ホームズは笑った。「小さな問題だがなかなか結構ですね」と彼は言った。

「しかし私には非常に重大なことです」と王は咎めるように答えた。

「いやまったくです。それで彼女はその写真で何をするつもりでしょう？」

「私を破滅させるのでしょう」

「しかしどうやって？」

「私は結婚を控えています」

「そう聞いています」

「スカンジナヴィア国王第二皇女、ザクセ―メニンゲン公女、クロチルド・ロスマンとです。あの家の厳格な徳義を聞いてますか。彼女その人もまさに繊細の権化のようです。私の品行にわずかな疑いがきざせばこの件は終わりでしょう」

「それでアイリーン・アドラーは？」

「写真を相手方に送ると脅しています。そうするでしょう。彼女がそうするのはわかってます。あなたは彼女を知らないが、あれは鉄の心を持っています。誰よりも美しい女の顔、誰よりも決然たる男の心の持ち主です。私がほかの女と結婚するくらいなら、彼女はどんなことでもするでしょう――何だって」

「まだ写真を送りつけていないのは確かですね？」

「確かです」

「それはなぜです？」

「結婚が公に宣言されるその日に送ると言っていたからです。来週の月曜日です」

「ああ、ではまだ三日ありますね」とホームズがあくびをしながら言った。「それは幸運です、ちょうど今、僕には重要な調査が一、二件ありますので。陛下には当然、当面ロンドンにご滞在ですね？」

「もちろんです。ランガムにフォン・クラムの名でいますので」

「では一筆書いて進捗状況はお知らせしましょう」

「どうかそうしてください。心配でたまらないから」

「ところで、金の問題は」

「白紙委任します」

「完全に？」

「あの写真を手に入れるためなら王国の一地方を差し出しましょうとも」

「それで当座の費用は？」

王は重いセーム革の袋をマントの下から取り出し、テーブルの上に置いた。

「金三百ポンドに紙幣で七百ポンドあります」と彼は言った。

ホームズは手帳の一枚に受け取りを殴り書きし、彼に手渡した。

「それでマドモワゼルの住所は？」と彼は尋ねた。

「セント・ジョンズ・ウッド、サーペンタイン通り、ブライオニ・ロッジ」

ホームズはそれを書きとめた。「もう一問」と彼は言った。「それはキャビネ判の写真ですか？」

「そうです」

「では、おやすみなさい、陛下、すぐによい知らせが入ると思います。おやすみ、ワトソン」と彼は、国王のブルームの車輪が街をすべり行くとともに、付け加えた。「明日の午後三時に訪ねてきてくれるとありがたいんだがね。君とこの小さな問題をおしゃべりしたいんだ」

## 二

三時きっかりに私はベーカー街に着いたが、ホームズはまだ戻っていなかった。おかみの話では、彼は朝の八時少し過ぎに出たそうだ。しかし私は彼がどんなに遅くなっても待つつもりで暖炉のそばに腰を下ろした。既に私は彼の調査に深い興味を抱いていた。そこには、前に私が記録した二つの犯罪を連想させる残酷、不思議な特色はなかったが、それでも、事件の本質や依頼人の高い身分が独自の特徴を与えていたからである。実際、友の手がけている事件の性質を別にしても、彼の見事な状況把握力、鋭敏至極な推理には何か魅力があり、私は最も込み入った謎すら解きほぐすその迅速、巧妙な方法をたどり、彼の仕事の組織的方法を研究することが楽しみだった。彼が常に成功することが当たり前になっていた私の頭には彼の失敗の可能性など浮かばなくなっていた。

四時近くなってドアが開き、酔っ払い風の、もじゃもじゃ頭と頬ひげ、真っ赤な顔にみすぼらしい服の馬丁が部屋に入ってきた。友の変装を使い分ける驚くべき能力には慣れていたが、それが本当に彼だと確信するまでに三度も見直してしまった。彼は一つうなずいてみせて寝室へと消え、五分して昔ながらにきちんとツイードのスーツを着て現れた。彼は両手をポケットに突っ込み、足を火の前に伸ばし、数分間、心から笑った。

「いやまったく！」と彼は叫び、それからまた息が詰まるほど笑い、ついには力が入らずにぐにゃぐにゃと椅子にひっくり返ってしまった。

「何事だね？」

「あんまりおかしくってね。僕が午前中をどうやって費やしたか、最後に何をしたか、絶対君には当たらないと思うよ」

「見当もつかんよ。アイリーン・アドラー嬢の習慣とか、あるいはその家とかを監視していたんだろうね」

「その通り。だが結果はなかなか変わってるよ。しかしまあ聞きたまえ。僕は今朝八時ちょっと過ぎに家を出た。失業中の馬丁という役柄だ。馬の仕事社会にはすばらしい友愛と支援がある。その一人になれば、知りたいことは何でもわかる。すぐにブライオニ・ロッジは見つかった。瀟洒な小住宅で、裏手は庭だが、前は道路沿いまで建てられていて、二階建てだ。玄関はチャブ錠。右手に大きな居間、調度は整い、床近くまでの大きな窓が並んでいるが、その非常識なイギリス式留め具は子供でもあけられる。その後ろ側で注目すべきものは、廊下の窓に馬車小屋の上から届くことだけだった。歩いて回ってあらゆる視点から詳しく調べたが、ほかに重要なことには気づかなかった。

それから僕が通りに沿ってぶらぶら行くと、思った通り馬屋がね、庭の一方の塀に沿った小道にあった。馬丁に手を貸して馬の体をこすり、代わりに二ペンス、ハーフアンドハーフを一杯、刻み煙草を二杯分、そしてアドラー嬢に関する情報を望みうる限りもらった。ちっとも興味ない半ダースもの近所の人たちのことは言うには及ばずだが、その一代記も聞かないわけにはいかなかったよ」

「それでアイリーン・アドラーはどうした？」と私は尋ねた。

「ああ、あのあたりの男はみんな彼女にふられてしまった。彼女はこの惑星上で最も優美な婦人だ。サーペンタインの馬屋ではみんなそう言う、例外なくね。彼女は静かに暮らし、コンサートで歌い、毎日五時に馬車で出て、七時きっかりに夕食に戻る。歌う時を除いて普段はめったにつきあいで出ない。たった一人男が訪ねてくるが、それが頻繁だ。浅黒く、ハンサム、颯爽とした男で、必ず日に一度、いや二度来ることもしばしばだ。イナー・テンプルのゴドフリー・ノートンという男だ。御者を親友にする利点がわかるね。彼を家までサーペンタインの馬屋から十回以上乗せてって、彼については何でも知っている。彼らから聞くべきことを聞いてしまうと、僕はブライオニ・ロッジの近くをぶらぶらとして、作戦計画の考慮にかかった。

このゴドフリー・ノートンは明らかにこの問題の重要な因子だ。彼は弁護士だ。それはよくない兆候だと思われた。彼らはどんな関係か、彼が繰り返し訪れる目的は何か？　彼女は彼の依頼人か、友人か、恋人か？　依頼人なら、おそらく写真は彼に渡して保管してもらっている。恋人なら、それはありそうもない。この問題を明らかにすることに、ブライオニ・ロッジで仕事を続けるべきか、それともテンプルの紳士の事務所に注意を向けるべきかがかかっていた。これは微妙な問題であり、僕の調査の範囲は広がった。こういう細かいことで君を退屈させてるんじゃないかな。でも君が事態を理解するには、小さな難しい点もいろいろ知ってもらわなければならないんだ」

「一心についていってるよ」と私は答えた。

「僕がなおこの問題を心のうちではかりにかけていると、ハンサム馬車がブライオニ・ロッジに乗りつけて紳士が一人飛び降りた。非常にハンサムな男で、浅黒く、鷲鼻、口ひげ――明らかに聞いていた男だ。ひどく急いでいるらしく、御者に待つように叫び、すっかり勝手を知った者のようにドアをあけたメイドの横をかすめ過ぎた。

彼は三十分ほど家にいたが、居間の窓から、行きつ戻りつ、興奮して話し、腕を振り回す彼が垣間見えた。彼女はまったく見えなかった。まもなく彼は前よりいっそうあわてふためいた様子で現れた。馬車に上がり込む時、彼はポケットから金時計を引っ張り出し、真剣に見つめ、『思いっきり走らせてくれ、まずリージェント街のグロスアンドハンキー、それからエッジウェア街のセントモニカ教会へ。二十分で行ったら半ギニーだ！』と彼は叫んだ。

馬車が行って、後を追ったほうがよくはないかと考えているところへ、素敵な小型のランドー馬車がやってきた。コートのボタンをやっと半分かけ、ネクタイは耳の下という御者だったが、馬具の金具はすべてバックルから突き出ていた。それが止まらぬうちに彼女が玄関のドアから飛び出して乗り込んだ。僕にはその時チラッとしか見えなかったが、彼女は美しい女で、男がそのために死にかねない顔だった。

『セントモニカ教会よ、ジョン、』彼女は叫んだ、『二十分で着いたら半ソブリンよ』

これはまったく逃すわけにいかないからね、ワトソン。走って追うべきか、ランドーの後ろにつかまるべきか、比較しているところへ通りを馬車が来るじゃないか。御者は何ともみすぼらしい乗客を二度も見直したが、僕は文句を言わさず飛び乗った。『セントモニカ教会、』僕は言った、『二十分で着いたら半ソブリンだ』十二時二十五分前、もちろん何が行われようとしているか、明々白々だった。

御者は飛ばしに飛ばした。僕もあんなに飛ばしたことはないくらいだが、彼らは僕たちの前にそこに着いていた。僕が着いた時には馬車もランドーも玄関の前にあり、馬たちは湯気を立てていた。僕は払いを済ませ、教会の中へと急いだ。そこには僕が追ってきた二人と、どうやら彼らをいさめているらしい、サープリスを着けた牧師のほか、人っ子ひとりいなかった。三人とも祭壇の前にかたまって立っていた。僕は教会に立ち寄ったひま人なら誰でもするように側廊をぶらぶらしていた。突然、驚いたことに、祭壇の三人がこちらへ振り向いて、ゴドフリー・ノートンが僕の方へ懸命に走ってきた。

『ありがたい』と彼は叫んだ。『君でいい。来てくれ！　来てくれ！』

『いったい何かね？』僕は尋ねた。

『来てくれ、君、来てくれ、ほんの三分、さもないと法的に無効になってしまう』

僕は引きずられるようにして祭壇まで行き、何が何だかわからないうちに、耳元でささやかれた応答の文句をもぐもぐ言い、まったく知りもしないことを保証し、総じてみれば未婚婦人アイリーン・アドラーを独身男性ゴドフリー・ノートンに固く結びつける手伝いをするはめになったのだ。すべてはあっという間に済み、一方では紳士が、反対側では夫人が僕に礼を言い、また正面では牧師が僕にほほえみかけていた。僕の生涯で最もばかげた立場に立たされてしまったが、さっき笑い出したのもそれを考えたからだ。どうやら彼らの許可証に多少略式のところがあり、牧師が誰か立会人なしには彼らの結婚式を行うことをきっぱりと断り、そこへ幸運にも僕が現れて花婿が付添い人を探しに街へ打って出なければならないところを救ったということらしい。花嫁が僕にソブリン金貨をくれたので、この椿事の記念として時計の鎖につけて身につけるつもりなんだ」

「まったく予期せぬ事態の展開だね」と私は言った。「それでそれからどうした？」

「そうだね、僕の計画はきわめて深刻におびやかされていることがわかった。二人がすぐに出発する可能性もありそうだったし、そうなると僕の方もきわめて迅速に、精力的に策を講じる必要がある。しかし、教会の戸口で、彼はテンプルへ、彼女は自宅へ、と馬車に乗って彼らは別れた。離れる時に『いつものように五時に公園に走らせます』と彼女は言った。それ以上は聞こえなかった。彼らは別々の方向に走り去り、僕は自らの下ごしらえをするために立ち去った」

「どんな？」

「コールドビーフを少々、ビールを一杯」とベルを鳴らしながら彼は答えた。「忙しくて食べることなんか考えられなかったし、今夜はさらに忙しくなりそうだ。ところでドクター、君の協力が必要になるんだが」

「喜んでやるよ」

「法律を破るのもいとわないかな？」

「ちっとも」

「逮捕される危険を冒すことも？」

「正当な理由があれば」

「ああ、きわめて正当なものだよ！」

「それなら何なりと」

「君は当てにできると確信していたよ」

「しかし君の望みは何だね？」

「ターナーさんが盆を持ってきたら君にわかるように説明するよ。さて、」彼はおかみの出してくれた簡単な食べ物にがつがつと飛びついて言った、「食べながら話し合わなければなるまい。あまり時間がないからね。もうじき五時だ。二時間後には活動の舞台にいなければならない。アイリーン嬢、いや夫人は七時にドライブから戻る。僕たちはブライオニ・ロッジで彼女に会わなければならない」

「それからどうする？」

「どうか僕に任せてくれたまえ。僕が既に準備したようになるはずだ。どうしても言う通りにしてもらわなければならない点が一つだけあるんだ。何があっても君は邪魔をしてはいけない。わかるね？」

「中立でいるのかい？」

「何事であれ何もしないこと。おそらくちょっとした不愉快なことがあるはずだ。それに加わらないでくれ。結局、僕があの家の中に運ばれることになる。四、五分後に居間の窓があく。君はその開いた窓の近くに位置するんだ」

「わかった」

「君は僕を注意して見ていなければいけない。僕は君に見えるだろうから」

「わかった」

「それで僕が手を上げた時――そこで君は部屋の中へ僕が渡すものを投げ込む、と同時に、火事だ、と叫び声を張り上げるんだ。よくわかった？」

「完全に」

「何も恐ろしいものじゃないんだ」と彼はポケットから長い、葉巻の型に巻いたものを取り出して言った。「普通の、配管工の持っている発煙筒で、両端に雷管が取り付けられ、自動着火式だ。君にはそれだけをやってもらう。君が火事だと叫びを上げれば、かなりの数の人がそれに加わるだろう。君はそれから通りの端まで歩いていけばいい、僕は十分後に一緒になるよ。わかってもらえたならいいんだが？」

「僕は中立を保つ、窓に近づく、君を注意して見る、合図を見てこの物体を投げる、それから火事だと叫ぶ、そして通りの角で君を待つんだね」

「その通り」

「それなら完全に当てにしてくれていいよ」

「そいつはすばらしい。たぶん、そろそろ新たな役を演ずる準備をする時間じゃないかな」

彼は寝室に姿を消し、数分後に愛想のいい、おめでたい非国教徒の牧師という役柄で戻ってきた。つば広の黒い帽子、だぶだぶのズボン、白いネクタイ、思いやりに満ちた笑み、いつもじっと注いでいる優しい好奇の目つきなどは名優、ジョン・ヘアー氏でなければ太刀打ちできないようなものだった。ホームズはただ服装を変えるだけではなかった。表情、態度、精神までもが新しい役を装うにつれて変化するようだった。彼が犯罪の専門家になった時、科学が鋭い理論家を失ったように、演劇界は優れた役者を失ったのである。

六時十五分に私たちはベーカー街を出発し、サーペンタイン通りに着いた時にはまだ時間まで十分あった。既に夕闇が迫り、私たちがブライオニ・ロッジの前を行ったり来たり、その住人の到着を待っている頃にはちょうど街灯がともり始めていた。その家はホームズの簡潔な説明から想像していた通りだったが、現場の周辺は思ったより人目が多いように感じられた。それどころか、静かな界隈の小さな通りの割には、驚くほど活気があった。角に集まって煙草を吹かし、笑っているみすぼらしいなりの男たち、自転車を引く刃物の研ぎ屋、子守娘といちゃつく二人の近衛兵、それから葉巻をくわえ、ぶらぶら行き来する、身なりのよい若い男たちがいた。

「いいかい、」家の前を行ったり来たりしながらホームズが言った、「この結婚でむしろ話は簡単になった。いまや写真は両刃の剣になる。おそらく彼女も、僕たちの依頼人がそれを王妃の目に触れさせたくないのと同様に、ゴドフリー・ノートン氏に見られるのは嫌だろう。そこで問題だ。僕たちはその写真を見つけるためにどこを捜すべきか？」

「まったくどこだろうね？」

「彼女が身につけて持ち歩くことはとてもありそうにない。キャビネサイズだからね。大きすぎて婦人の服に隠すのは容易じゃない。王が彼女を待ち伏せして捜しかねないことは彼女もわかっている。その種の試みは既に二度なされている。そこで、彼女は身につけて持ち歩かないと考えてよかろう」

「では、どこだろう？」

「銀行か弁護士だ。その二つの可能性はある。だが僕はどちらでもないと考えたい。女性は本来秘密主義で、自分で隠し事をするのが好きだ。どうして他人の手に渡す必要があろう？　誰が責任を持って守るかといえば、自分自身なら信用できるけれども、商売人にはどんな間接的、政治的な圧力がかかるかわからないじゃないか。その上、彼女がそれを数日内に使う決意だったことを思い出してくれ。彼女の手の届くところにあるにちがいない。彼女の家にあるにちがいない」

「しかし夜盗が二度入っているよ」

「フフン！　捜し方を知らないんだ」

「だが君ならどうやって捜す？」

「僕は捜さないんだ」

「ではどうする？」

「彼女に教えてもらうんだ」

「だが彼女は断るだろう？」

「そうはいかないだろうな。だが車のガタガタいう音が聞こえるよ。彼女の馬車だ。さあ、僕の指図を忠実に実行してくれたまえ」

彼がそう言うと同時に一台の馬車の側灯の淡い光が通りのカーブを曲がってきた。こぎれいな小型のランドーがブライオニ・ロッジの戸口にガラガラと乗りつけた。それが止まると、角でぶらぶらしていた男たちの一人が銅貨の稼ぎを期待してドアをあけようと突進したが、同じ目的で駆けよった別の浮浪者にひじで突きとばされた。猛烈なけんかが突発し、一方の怠け者に味方する二人の近衛兵と、同じように熱くなって他方に加わった研ぎ屋により大事になった。拳固一閃、馬車から踏み出していた婦人は、たちまち、真っ赤になって争い、互いに拳固や杖で打ち合う男たちの小さな群れに囲まれてしまった。ホームズは婦人を守ろうと人ごみに飛び込んだ、が、彼女のところまで行ったとたんに叫び声を上げ、バッタリと地面に倒れ、顔からは大量の血が流れ出た。彼が倒れると、近衛兵たちは一方へ、浮浪者どもは他方へと逃げ出したが、乱闘に加わらずに見守っていた身なりのいい多数の人々が、婦人を助け、けが人の手当てをしようと押し寄せた。アイリーン・アドラー、と今まで通りに呼ぶが、彼女は急いで戸口の段を上がった。しかし彼女は玄関の明かりを背景にすばらしいスタイルのシルエットを浮かび上がらせて最上段に立ち、振り返って街路をのぞき込んだ。

「お気の毒に、その方おけがはひどいの？」と彼女は尋ねた。

「死んでるぞ」と数人の声が叫んだ。

「いや、いや、命はある！」と別の大声が言った。「でも病院へ運び込む前にだめだろう」

「勇敢な男よ」と一人の女が言った。「この人がやらなかったら奴ら、お嬢さんの財布も時計も取ったわよ。あれは悪い一味よ、それも乱暴な。ああ、この人息をしてる」

「道に寝かせておくわけにはいかない。中に入れてもいいかね、奥さん？」

「もちろん。居間にお連れして。楽なソファがありますから。こちらよ、どうぞ！」

ゆっくりと厳粛に彼はブライオニ・ロッジに運び込まれ、重要なる部屋に寝かされたが、私の方はなおも成り行きを窓のそばの部署から見守っていた。明かりはともっていたがブラインドは引かれていなかったので、私には寝椅子に寝かされるホームズが見えた。その瞬間、彼が自分の演じている役に良心の呵責を覚えていたのかどうか私は知らないが、私自身は、自分が陰謀を企んでいるあの美しい人を、またけが人に仕えるその人の思いやりと親切を見た時ほど心底から恥ずかしい思いをしたことは生まれてこのかたないのである。とはいえそこでホームズが私に託した役割から手を引くことは彼に対するけしからぬ裏切りになったろう。私は心を鬼にし、アルスターコートの下から発煙筒を取り出した。結局、私たちは彼女を傷つけているのではない、と私は考えた。ただ彼女がほかの人を傷つけるのを防いでいるのだ、と。

ホームズは寝椅子に起き直っていたが、その彼が空気が足りないというような身振りをするのが見えた。メイドが窓に駆け寄り、さっとあけた。同時に彼が片手を上げるのを見て、それを合図に私は「火事だ！」と叫ぶとともに筒を部屋に投げ込んだ。その言葉が私の口から出るやいなや、見物している群集全体、身なりのいいのも悪いのも、馬丁も、女中も、みんなが一つになって「火事だ！」の叫びに加わった。もうもうとした濃い煙が部屋中に渦巻き、開いた窓からも立ち昇った。あわてて行きかう姿が見えたが、一瞬の後、虚報だといって皆を安心させるホームズの声が中から聞こえた。叫び声を上げる群集をすり抜けて私は通りの角へ行き、十分後にはありがたいことにホームズの腕が自分のそれに重ねられ、騒ぎの現場から立ち去ることができた。彼は足早に、数分間というもの黙って歩き、私たちはエッジウェア街に通じる静かな通りへと曲がった。

「実にうまくやってくれたねえ、博士」と彼は言った。「最高のできだったよ。申し分なしだ」

「写真はそこにあるのかい？」

「どこにあるか知っている」

「それでどうやって見つけた？」

「彼女が教えてくれたよ、そう言ったろう」

「私にはまだわからないよ」

「秘密にするつもりはないんだ」と彼は笑いながら言った。「話はまったく簡単なんだ。君はもちろん、通りにいたのは全員ぐるだとわかったね。みんな今夜のために雇ったんだ」

「そうだろうと見当はついた」

「それから、けんかが突発した時、僕は手のひらにぬれた赤い塗料を少し仕込んでいた。僕は突進し、倒れ、自分の手で顔をたたき、哀れな光景となったわけだ。古いトリックだよ」

「それも推測できた」

「それから連中が僕を運び入れた。彼女は入れないわけにいかなかった。ほかにどうしようもないじゃないか？　そして彼女の居間の中、まさに僕が疑いをかけていたところだ。そこか寝室か、どちらかにあり、それを僕は確かめる決意だった。僕は寝椅子に寝かされ、身振りで空気を求め、窓をあけざるをえないようにして、それで君にチャンス到来だ」

「どうしてあれが役に立ったんだね？」

「きわめて重要だったんだ。家が燃えていると思った女性は、本能的にすぐにいちばん大事なもののところへ駆けつける。これはまったく圧倒的な衝動であり、僕はこれを一度ならず利用したことがある。ダーリントンすり替え事件で役に立ったし、アーンズワース城の件でもそうだ。結婚している女は赤ん坊をひっつかみ、未婚の女は宝石箱に手を伸ばす。さて、明白なことだが、今日の僕たちの婦人にとって、僕たちが求めているものより貴重なものはあの家にはない。それを守るために駆け寄るはずだ。火事の警報は見事に発せられた。煙と叫び声は鉄の神経をも揺さぶった。彼女は申し分のない反応を見せた。写真は右側のベルの紐の真上のスライド式の羽目板の後ろのくぼみの中にある。彼女がすぐにそこへ行って、それを引き出しかけた時、僕にチラッと見えたんだ。虚報だと僕が叫ぶと、彼女はそれを元に戻し、発煙筒をチラッと見て、部屋から飛び出し、その後僕は彼女を見なかった。僕は立ち上がり、言い訳をして、家から逃げ出した。すぐに写真を手に入れようかと迷ったが、御者が入ってきてね、僕をじろじろ見るものだから、待った方が安全だろうと思ったんだ。少々早まったがためにすべてが台無しかもしれないんでね」

「それで今度は？」と私は尋ねた。

「僕たちの探求は終わったも同然だ。明日訪問するつもりだ、王と、それから君が一緒に行きたければ君と。僕たちは居間に案内されてあの婦人を待つ、だがたぶん、彼女が来た時には僕たちも写真も見当たらないだろうな。陛下も自分の手で取り戻せば満足だろう」

「それでいつ行くんだ？」

「朝の八時だ。彼女はまだ起きていないだろう、そこで邪魔がないからうまくいくわけさ。すぐにやらなければならないわけはそれだけじゃない、この結婚で彼女の生活、習慣がすっかり変わるかもしれないからね。即刻王様に電報を打たなければ」

私たちはベーカー街に着き、戸口に立ち止まった。彼がポケットの鍵を探っている時、誰かが通りすがりに言った。

「おやすみなさい、シャーロック・ホームズさん」

その時歩道には数人の人がいたが、そのあいさつはそばを急ぐアルスターコートを着た細身の青年から聞こえたようだった。

「あの声は前に聞いたことがある」とホームズが、ぼんやり照らされた通りを見つめながら言った。「さあて、いったいあれは誰だったかな」

## 三

その晩私はベーカー街に泊まり、翌朝、私たちがトーストとコーヒーに取り掛かっているところへボヘミア王が部屋に駆け込んできた。

「本当に手に入れたんですか？」と彼は叫び、シャーロック・ホームズの両肩をつかんでその顔を夢中になってのぞき込んだ。

「まだです」

「でも望みはあるんですね？」

「期待しています」

「それなら、さあ。早く行きたくてたまらないんです」

「辻馬車をつかまえなければ」

「いや、私のブルームを待たせてあります」

「それは事が楽になりますね」私たちは下に下り、再度ブライオニ・ロッジへ向け出発した。

「アイリーン・アドラーは結婚しました」とホームズは言った。

「結婚した！　いつです？」

「昨日です」

「しかし誰と？」

「ノートンという名のイギリス人の弁護士です」

「しかし彼女がその男を愛するはずがない」

「僕はそこに期待しています」

「なぜ期待を？」

「陛下が将来厄介なことが起こる心配をまったくしないですむからです。あの婦人が夫を愛していれば、陛下を愛することはありません。陛下を愛していなければ、彼女が陛下の計画の邪魔をする理由はありません」

「なるほど。それでも――ああ！　彼女が私と同じ身分だったら！　どんな女王になったことか！」彼はむっつりと黙り込んでしまい、それはサーペンタイン通りで止まるまで破られなかった。

ブライオニ・ロッジの玄関の戸は開いていて年配の女性が戸口の段に立っていた。彼女はブルームから踏み出す私たちをあざけるような目で見ていた。

「シャーロック・ホームズさんですよね？」と彼女は言った。

「僕はホームズです」と友は答え、いぶかしそうな、かなり驚いた目つきで彼女を見た。

「まあ！　奥様が私にあなたがおいでになりそうだとおっしゃったんです。奥様は今朝、旦那様と五時十五分の列車でチャリング・クロスから大陸へ出発されました」

「何と！」シャーロック・ホームズはよろめくように後退し、悔しさと驚きに青ざめた。「彼女がイギリスを離れたというんですか？」

「二度と戻られません」

「それで書類は？」と王はかすれ声で尋ねた。「もはやこれまでか」

「見てみよう」彼は女中を押しのけて客間に駆け込み、王と私が続いた。家具はあちこちに散乱し、棚は取り外され、引き出しは開けられ、あの婦人が逃亡の前にあわててあさり回ったかのようだった。ホームズはベルの紐のところに駆け寄り、スライド式の小さな戸を引きのけ、そして、手を突っ込み、一枚の写真と一通の手紙を引き出した。写真はイブニングドレスのアイリーン・アドラー自身で、手紙の上には『シャーロック・ホームズ様気付け』と書かれていた。友がそれを破いてあけ、私たち三人一緒にそれを読んだ。前日の真夜中の日付でこんなふうに書かれていた。

親愛なるシャーロック・ホームズ様

本当にお見事でした。完全にだまされましたわ。火事騒ぎがあるまで気づきもしませんでした。しかしそこで、自分が秘密をうっかり漏らしてしまったと知った時、数ヶ月前にあなたに注意するように言われたことに考えが至りました。陛下が捜査員を雇うとしたら間違いなくあなただろうと聞かされたのです。あなたの住所も教えていただきました。それなのに、これだけのことがあったのに、あなたはお知りになりたいことを私に白状させてしまいましたわね。疑いを持っていたとはいえ、あのように愛らしい、親切な老牧師さんを悪く思うなんて難しいことでした。でもほら、わたくし女優の訓練を受けてますでしょう。男装も珍しいことではありませんの。よくそうして自由を楽しんでいます。御者のジョンをやってあなたを見張らせ、二階へ駆け上がり、散歩服と呼んでいるものを着て、ちょうどあなたが出て行かれたところへ下りてゆきました。

さて、わたくしはお宅まであなたを尾行し、わたくしが実際に有名なシャーロック・ホームズさんの関心の対象であることを確かめました。それからわたくし、ちょっと軽率でしたがごあいさつをして、夫に会うためテンプルへ向かいました。

このように手ごわい相手に追求されているんですもの、わたくしたちは二人とも逃げるのがいちばんと考えました。そうすれば明日あなたがいらした時には巣は空っぽです。あの写真のことでしたら、あなたの依頼人は安心していいでしょう。わたくしにはあの人より立派な、愛し愛される方がおります。国王陛下には、ひどい仕打ちをなさってきた者は邪魔をいたしませぬゆえ、お好きなようになさいますよう。わたくしはただただ身を守るため、将来陛下がどのような手段をとられても永久にわたくしを守る武器を保持するため、あれは取っておきます。陛下はお望みかしら、一枚写真を残します。シャーロック・ホームズ様のご多幸をお祈り申し上げます。

かしこ

アイリーン・ノートン、旧姓アドラー

「何という女――ああ、何という女だろう！」私たち三人がこの書簡を読み終えた時、ボヘミア王が叫んだ。「彼女がどんなに利口で毅然としているか、言わなかったかな？　すばらしい王妃になったろうに。彼女が私と同格でなかったのが残念ですねえ？」

「僕の見たところでは、実際あの婦人は陛下とはまったく格が違いますね」とホームズは冷たく言った。「陛下の用件をより成功裏に終えることができなくて申し訳ありません」

「それどころか、ねえ君、」王は叫んだ、「これ以上の成功はないよ。彼女の言葉は神聖ですからね。写真はもう火に投じたも同じ、安全だよ」

「陛下にそう言っていただくと嬉しいです」

「大変感謝しますよ。どうかどんなふうに報いたらいいか言ってください。この指輪――」彼はエメラルドのスネークリングを指からはずし、手のひらにのせて差し出した。

「僕がさらに高く評価するものを陛下はお持ちです」

「何でも言ってください」

「この写真です！」

ボヘミア王は驚いて彼を見つめた。

「アイリーンの写真！」と彼は叫んだ。「いいですとも、望みとあれば」

「ありがとうございます、陛下。ではこの件は終わりです。謹んで申し上げます、ごきげんよう」彼はお辞儀し、王の差し出している手を見ることなく背を向け、私を伴って家路についた。

これがボヘミア王国を揺るがしかけた大スキャンダルであり、シャーロック・ホームズ氏の万全の策が一人の女性の機知に打ち負かされた次第である。以前は女性の才気を冷やかしていた彼だが、最近はそれを聞かなくなった。そして彼がアイリーン・アドラーについて話す時、あるいは彼女の写真のことに触れる時、常に敬意を表してあの女と言うのである。

# 赤毛連盟

昨年の秋のある日、友人のシャーロック・ホームズ君を訪ねると、彼は非常に太った赤ら顔の年配の紳士、燃えるような赤い髪の紳士と話しこんでいた。私が邪魔を詫びて退出しかけると、ホームズはいきなり私を部屋へ引き入れ、私の後ろにドアを閉めたのである。

「まったくいい時に来てくれたよ、ワトソン君」と彼は気持ちよく言った。

「仕事中かと思って」

「そうだよ。まさにその通りだ」

「それなら私は隣室で待っててもいいんだ」

「とんでもない。この紳士はね、ウィルソンさん、僕が大成功を収めた事件の多くで仲間であり、助手を務めてくれてまして、きっとあなたの事件でも非常に僕の助けになると思います」

太った紳士は椅子から半ば腰を上げ、ひょいとお辞儀をし、脂肪の奥の小さな目から少し不審そうにすばやく視線を走らせた。

「長椅子でどうだい」とホームズは言い、判事のような気分の時の習慣として、自分の肘掛け椅子に戻り、指先を組み合わせた。「わかってるよワトソン君、君も僕同様、奇怪なこと、慣習や日常生活の単調な繰り返しを外れたことが好きなのは。僕のちょっとした冒険を記録しようなんて、それからそう言ってかまわなければ、いささか尾ひれまでつけようなんて思い立つ君の熱心さを見れば、君のそういう趣味がわかるよ」

「君の事件には実際、非常な興味を持ち続けてきたよ」と私は言った。

「君は覚えているかな、いつだか僕が言ったろう、ちょうどミス・メアリー・サザーランドが出したきわめて簡単な問題を調査する前に、不思議な現象、異常な事態の組み合わせは人生そのものに求めるべきである、それは常に、どんなに想像をたくましくするよりもはるかに大胆なものなのだ、と」

「失礼だが僕が疑問を呈した主張だね」

「そうだったね、博士、でもね、そうは言っても必ず君も僕と同じ意見に変わるさ、そうでなければ僕は君の前で事実の上に事実を積み重ね続けるからね、君の理屈がそれらに押しつぶされ、僕が正しいと認めるまで。さて、こちらのジェイベズ・ウィルソンさんがご親切にも今朝僕を訪ねてきて話を始められたんだが、それは僕が長いこと聞いてきた中でも飛び切り奇妙なものの一つになりそうなんだ。君も知っている僕の意見だが、最も不思議な、最も独特な事柄というものは多くの場合、大きな犯罪よりも小さな犯罪に関係していて、実際、往々にしてそこでは何か明確な犯罪が行われたのかどうか疑問の余地があることもある。僕の聞いた限りでは今回の事件が犯罪にあたるかどうか僕には言えないが、事の成り行きは間違いなく、僕がこれまでに聞いたものとしては最も奇妙な部類に属するね。できましたらウィルソンさん、大変すみませんがお話をもう一度初めからお願いできませんか。単に友人のワトソン博士が初めの部分を聞いていないからというだけでなく、異常な性質の話ですので、ぜひともあなたの口からできる限り詳しく聞きたいと思いますので。通例僕はわずかでも事の成り行きを示す話を聞いてしまえば、記憶に浮かぶ何千もの類似の事件に導かれて進むことができます。今回の場合、さまざまな事実は、僕の信ずる限り、他に類を見ないものと認めざるをえません」

恰幅のいい依頼人は少し誇らしそうに胸を張り、汚れてしわくちゃになった新聞をオーバーの内ポケットから引っ張り出した。彼が頭を前に突き出し、ひざの上で紙面を平らにし、広告欄に目を走らせた時、私はその人をじっくり観察し、友のやり方にならって、その洋服や外観が示すものを読み取ろうと努力した。

しかし私がその観察から得たものはあまり多くなかった。私たちの客は太りすぎでもったいぶってのんびりしていて、平凡な平均的イギリス商人のあらゆる特色を身につけていた。彼はかなりだぶだぶの灰色のチェック柄のズボン、あまりきれいともいえない黒いフロックコートを身につけ、前のボタンをはずし、茶色のベストには重い真ちゅうのアルバートの鎖、四角い穴の開いた小さな金属が装飾としてぶら下がっていた。すりきれたシルクハット、ビロードの襟にしわのよったあせた茶色のオーバーはそばの椅子の上に置かれていた。要するに、私が見ても、燃えるように赤い頭と、その顔に表れた極度の無念、不満の表情を除くと、注目すべきところは何もない人だった。

シャーロック・ホームズの鋭い目が私のしていたことを見て取り、私の探求する視線に気づいた彼は微笑みながら首を振った。「この方が手仕事の経験があり、嗅ぎ煙草を吸い、フリーメーソンの会員であり、中国へおいでになったことがあり、最近相当量の書き物をなさったという明白な事実のほかには僕には何も引き出せないな」

ジェイベズ・ウィルソン氏はびっくりして椅子から飛び上がり、人差し指を新聞においたまま、目を友に向けた。

「いったいぜんたいどうしてそんなことがみんなわかったんですか、ホームズさん？」と彼は尋ねた。「どうして、いやたとえば私が手仕事をしたことがわかりました？　まったく本当のこってす、私は船大工から始めたんですから」

「あなたの手ですよ、ねえ。右手がたっぷり一回り左手より大きい。そちらで仕事をしたので筋肉がより発達しているんです」

「それじゃあ嗅ぎ煙草は、それにフリーメーソンは？」

「どうしてわかったかはお話しするまでもない他愛ないことです、特に、あなたが結社の厳しい規則に大いに反して弧とコンパスの飾りピンを使用されてるのですから」

「ああ、そうか、忘れてました。しかし書き物のことは？」

「五インチばかりすっかりテカテカになった右の袖口、机にのせるひじの近くにすべすべのつぎのあたった左、それらの示すものがほかに何かありますか？」

「なるほど、だが中国は？」

「あなたの右手首の真上にある魚の刺青は中国でしかできないものです。僕は刺青の模様についてつまらん研究をしたことがありましてね、その主題の文献に寄稿したことさえあるんです。その魚の鱗を微妙なピンクに色づける見事な方法はまったく中国独特のものです。加えて、中国のコインが時計の鎖からぶらさがっているのを見れば、いっそう簡単なことです」

ジェイベズ・ウィルソン氏は大いに笑った。「いや驚いた！」と彼は言った。「初めは気の利いたことをするもんだと思ったが、なあに、結局何のことはなかった」

「僕はねえ、ワトソン、」ホームズは言った、「説明するのは間違いだという気がしてきたよ。『およそ未知なるものはすばらしい』だからねえ、こう率直にやっては僕のささやかな評判も、まあこの程度のものだけどね、沈没の憂き目を見ることになるね。広告は見つかりませんか、ウィルソンさん？」

「いや、ちょうど見つけました」と彼は太くて赤い指を広告欄の真ん中に立てて答えた。「ここです。これがすべての始まりです。ちょっとご自分で読んでみてくださいな」

私は彼から新聞を受け取り、以下のものを読んだ。

赤毛連盟へ

米国ペンシルバニア州レバノン、故エゼキヤ・ホプキンズの遺贈による連盟に現在欠員あり。メンバーには純粋に名目上の貢献に対して週四ポンドの俸給の権利を与える。赤髪の心身健康な二十一歳以上の男子すべてに資格あり。申し込みは本人が月曜十一時、フリート街、ポープス・コート七番地、連盟事務所のダンカン・ロスまで。

「いったいこれはどういう意味だ？」私はこのとっぴな告知に二度、目を通した後思わず叫んだ。

ホームズは機嫌のよい時の癖で、くすくす笑い、椅子の上で身をよじった。「これはちょっと変わってるじゃないか、え？」と彼は言った。「さてウィルソンさん、先へ進んでご自身、ご家族、この広告があなたの運勢に与えた影響についてお話しください。君は、博士、まずその新聞と日付を書き留めてくれたまえ」

「1890年4月27日のモーニング・クロニクル。ちょうど二ヶ月前だ」

「結構。さ、ウィルソンさん」

「ええと、あなたにお話しした通りなんですが、シャーロック・ホームズさん」とジェイベズ・ウィルソンは額の汗を拭きながら言った。「私はシティーの近くのコバーグスクエアで小さな質屋の店をやってます。あまり大きな商売じゃなく、近頃ではちょうど私が暮らす分しか出ません。前には二人店員を雇っておけたんですがね、今じゃ一人がやっとです。その払いをするのも大変なところなんですが、その男は商売を覚えるためにと半分の給料で喜んで来てるんです」

「そのありがたい若者の名は？」とシャーロック・ホームズは尋ねた。

「名前はヴィンセント・スポールディングですが、と言っても、そんなに若くはないんです。歳はわかりません。あれより気の利いた店員は望めませんよ、ホームズさん。それにあれがもっといい仕事にありつけるし、私のやれるものの二倍は稼げるってことも、私ゃよくわかってるんですがね。でもなにしろあれが満足なら、どうしてこっちで知恵をつけてやらなきゃならんのです？」

「そうですとも。相場の上限を取らずにこようという従業員を持ってあなたはとても幸運のようですね。この時代、雇い主がやたらに経験できることではないですよ。お宅の店員もその広告並みに珍しいんじゃないですか」

「ああ、あの男にも欠点があるんです」とウィルソン氏は言った。「写真となるとあんな奴はいませんや。いろいろ覚えなきゃならん時にカメラを持って絶えずパチパチやっては巣穴にもぐるウサギのように地下にもぐりこんで撮った写真を現像してるんです。それがあの男の欠点ですが、だいたいにおいて働き者です。悪いこともしませんし」

「まだお宅にいるんでしょうね？」

「ええ。あの男と、それから簡単な料理を少しと家の掃除をする十四の娘、家にはそれだけです。なにしろ私はやもめですし子供もできなかったんでね。とても静かに暮らしてます、私たち三人は。住処を確保して支払いを済ます、ほかに何もないにしてもね。

面倒なことの起こりはその広告です。スポールディングですよ、あれがちょうど八週間前、店に下りてきて、ほら、その新聞を手に持って、言うじゃありませんか、

『いやあ、ウィルソンさん、俺の髪が赤かったらなあ』

『なぜそんなことを？』と私ゃ尋ねる。

『なに、』奴は言う、『ここでも赤い髪の男の連盟に一つ空きがあるんです。これを手に入れりゃあ誰でも相当の金になるし、人間より欠員のが多いとかで、管財人は金をどうしたものか困り果てているそうですよ。俺の髪の毛の色が変わりさえすりゃあなあ、ちょっとしたうまい仕事がすっかり俺が行くのを待ってるんだがなあ』

『何だって、そりゃ何のことだ？』と私は尋ねました。だってねえホームズさん、私はすごく出不精でね、それに仕事のほうがやってきてこっちは出かけなくてもすむんで、私は何週間もドアマットの向こうへ足を踏み出さないことがよくあります。そんなわけで外で何が起こっているかあまり知らないし、いつもニュースを楽しみにしてるんです。

『赤い髪の男の連盟のことを聞いたことがないんですか？』とあれは目を見開いて訊きました。

『全然』

『へえ、そりゃ驚いた、自分が欠員を一つ埋める資格があるのに』

『それでそれにはどんな値打ちがあるんだい？』と私は尋ねました。

『ああ、ほんの年二百ですがね、でも仕事はわずかだし、必ずしもほかの仕事の大した支障にならないんです』

ねえ、容易におわかりでしょうが、その話に私は耳をそばだてました。商売は何年もあまりうまくいってないし、余分な二百があればずいぶん役に立ちますから。

『すっかり聞かしてくれよ』と私は言いました。

『なにね、』彼はその広告を示しながら言いました、『自分で見てくださいよ、連盟に欠員とあるでしょ、それに詳しいことの問い合わせ先も。俺の知ってる限りじゃあ、連盟はアメリカ人のエゼキヤ・ホプキンズという百万長者が創ったとかで、なかなか変わった人だったそうです。本人が赤毛で赤毛の男すべてにいたく思いを馳せていたんですね。それで死んだ時、莫大な財産を管財人に託して、利息は赤い髪をした男に楽な仕事を提供することに当てるよう、指示を残したんです。すばらしい給料で、やることはほんの少しって話しですよ』

『でもなあ、』私は言いました、『たっくさんの赤毛の男が応募するだろうなあ』

『ご主人が考えるほどたくさんじゃないですよ』と彼は答えました。『だってねえ実際ロンドン市民で成人男子に限られるんですから。このアメリカ人は若い頃ロンドンから世に出て、懐かしい街に善行を施したいんです。それにまた、髪の毛が明るい赤や暗い赤、本当に鮮やかな燃えるような炎の赤以外の赤だったら申し込んでも無駄ですってよ。さあ、申し込みたかったらウィルソンさん、ちょっと行ってみるこってす。でもたぶんあれだな、数百ポンドのためにわざわざやるほどのことはないですね』

さて、事実、見ればおわかりでしょうが、ねえ、私の髪はこれ以上はない鮮やかな色合いですから、これに関しちゃあ今まで負けたことがないし、どんな相手がいるにしても勝算は十分と思われました。ヴィンセント・スポールディングはこの話をよく知っているようなので役に立つこともあるかもしれん、と私は思い、そのままその日はシャッターを下ろし、すぐに一緒について出てくるように彼に命じました。あれも休日になるのは大喜びですから、私たちは店を閉め、広告にある住所へと出かけました。

あんな光景は二度と見たいと思いませんね、ホームズさん。北から、南から、東から、西から少しでも髪の赤い男という男が広告に応じてどやどやとシティーに踏み入ってきてるんです。フリート街は赤毛の人間でふさがるし、ポープス・コートは行商のオレンジの荷車のようでした。私はね、あの広告たった一つで国中から来たってあんなにたくさん集まるとは思いませんでしたよ。わら、レモン、オレンジ、レンガ、アイリッシュセッター、レバー、粘土――濃淡さまざまな色合いでした。しかしですね、スポールディングの言ったように、本当に鮮明な炎の色合いというのはあまり多くはありませんでした。どれだけ人が待っているかを見た私はあきらめてやめるところでしたが、スポールディングが聞き入れませんでした。あいつがどうやってやったのか想像もつきませんが、押したり引いたりぶつかったりして、ついにあいつは私を群集から抜け出させ、その事務所に通じる階段のまん前まで連れていきました。階段には希望を持って上がるもの、落胆して下りるもの、二つの流れがありました。しかし私たちは何とかうまく割り込んで、まもなく事務所に入っていました」

「あなたのなさった経験はとても愉快ですね」と、依頼人が一息つき、嗅ぎ煙草をたっぷりつまんで記憶を新たにするところで、ホームズが言った。「どうかその非常におもしろいお話を続けてください」

「事務所には椅子が二つとモミのテーブルのほか何もなく、テーブルの後ろに私よりもさらに赤い髪をした小柄な男が座っていました。彼は近づいてくる志願者に簡単な言葉をかけ、それから必ず彼らを不適格とする欠点を何か見つけ出してしまうのです。やはり空席を勝ち取るのはそれほどたやすいことではなさそうでした。それがですね、私たちの番になるとその小さな男が私に対してほかの誰よりも断然好意的になりまして、私たちが入るとドアを閉めて、私たちと内密の話をしようというわけなのです。

『こちらはジェイベズ・ウィルソンさんで、』と私の連れが言いました、『連盟の欠員を埋めたいと思っているんです』

『しかも立派に適格ですね』とあちらは答えました。『すべての条件を満たしてます。これほどすばらしいのは見た覚えがありません』男は一歩後にさがり、片方に小首をかしげ、すっかり恥ずかしくなるほど私の髪をじっと見つめるのです。それから突然突進し、私の手を固く握り、心から私の合格を祝ってくれました。

『躊躇しては不正になりますので』と男は言いました。『しかし、あなたはきっと私が露骨な警戒をするのを許してくださるでしょう』そう言うと男は両手で私の髪をつかみ、私が痛くて叫び声を上げるまでぐいぐい引っ張ったんです。『目に涙が出てますね』と言って男は私を放しました。『すべて申し分ないとわかりました。しかし気をつけませんとね、かつらで二度、ペンキで一度、だまされたことがあるんですよ。靴屋の蝋のことでは人間の本性に愛想がつきるような話もあるんです』彼は窓に歩み寄り、そこから声を限りに欠員は満たされたと叫びました。失望のうめきが下から聞こえ、人々は皆さまざまな方向へぞろぞろと消えていき、私とその支部長を除いて赤い髪は見えなくなりました。

『私は、』その人は言いました、『ダンカン・ロスです。私自身も我々の高潔な恩人の遺した基金の受給者の一人です。あなたは結婚なさってますか、ウィルソンさん？　ご家族はありますか？』

私はないと答えました。

たちまち男の顔が曇りました。

『なんとまあ！』あの人は重々しく言いました、『それは本当に重大なことなんです！　そうおっしゃるのを聞いて残念です。この基金はもちろん、赤い髪を持つ者たちの維持ばかりでなく、その繁栄と広がりのためにあるのです。あなたが独身とは実に運が悪い』

私も浮かない顔になりましたよ、ホームズさん、だって結局私はその空席を手にする運命じゃなかったと思いましたから。しかししばらく考えてからあの人はそれでかまわないと言いました。

『ほかの場合なら、』あの人は言いました、『この欠点は致命的になりかねませんが、あなたのような髪を持った方ではひいき目に見て拡大解釈しなければなりますまい。いつから新しい職務に取り掛かれますか？』

『ええ、それが困るんですが、既に店もありまして』と私は言いました。

『ああ、そりゃ心配いりませんや、旦那！』とヴィンセント・スポールディングが言いました。『そりゃあ旦那の代わりに俺が見られるじゃないですか』

『時間はどうなってますんで？』

『十時から二時です』

ところで質屋の商いってのはほとんど晩方でしてね、ホームズさん、特に木曜日と金曜日の晩、ちょうど給料日の前なんでね。だから午前中に少し稼ぐってのは私には実に好都合なんです。その上店員は優秀で、何があっても任せられますんでねえ。

『それは実に好都合です』と私は言いました。『それで給料は？』

『週四ポンドです』

『それで仕事は？』

『単に名目上のものです』

『単に名目上とはどんなものを言うんでしょう？』

『そうですね、あなたは事務所の中にいなければなりません、少なくとも建物の中に、その間ずっとですよ。もし離れたら、あなたは地位すべてを、永久に失います。遺言書もその点非常にはっきりしています。時間中に事務所から動くということは条件に従わないということです』

『一日にわずか四時間です、離れるなんて思いもしません』

『言い訳は通りませんよ』とダンカン・ロス氏は言いました。『病気だろうが用事だろうが何事であろうが。そこにいなくてはいけません、さもないとあなたは口を失います』

『それで仕事は？』

『大英百科事典をそっくり写すことです。第一巻がその棚にあります。インクとペンと吸い取り紙は自分で手に入れていただきますが、テーブルと椅子はこちらで提供します。明日からでもできますか？』

『承知しました』と私は答えました。

『ではさようなら、ジェイベズ・ウィルソンさん、貴重な地位を獲得された幸運にもう一度お祝いを言わせてください』あの人はお辞儀をして私を部屋から送り出し、私は何を言ったら、何をしたらいいのかわからないまま、連れと一緒に家へ帰りました。それほど自分の幸運が嬉しかったんです。

さて、私はその日一日つくづくそのことを考えて、夕方にはまた意気消沈です。私はね、あの出来事は全部、何かひどいいたずらかペテンにちがいない、とすっかり確信したんです。もっともその目的が何かは想像もつきませんでしたが。誰かがそんな遺言をするとか、大英百科事典をそっくり写すなんていう簡単なことをやらせてそんな金額を払う連中がいるとか、まるっきり信じられないような気がしたんです。ヴィンセント・スポールディングはできるだけ私を励ましてくれましたが、寝る時間までには私は自分に言い聞かせてそんなことは全部やめにしました。しかし朝になって私はとにかくちょっと見てみようと決心し、一ペニーのインク瓶、羽ペン、フールスキャップ紙を七枚買って、ポープス・コートへ出かけました。

さて、嬉しい驚きでしたが、すべてはまったく申し分なしでした。テーブルは私を待って並べてあるし、ダンカン・ロス氏も私がちゃんと仕事を始めるか見にきてました。私にＡの文字から始めさせ、それから出て行きました。が、時々ひょっこりのぞいては私がちゃんとやってるか確かめました。二時にあの人は私にさよならを言いにきて、私の書き終えた量をほめ、私の後から事務所のドアに鍵をかけました。

これが毎日毎日続きましてね、ホームズさん、土曜日には支部長が来て一週間の仕事に対してソブリン金貨四枚を支払いました。次の週も同じ、その翌週も同じでした。毎朝私は十時にそこに行って、毎日午後二時に帰りました。次第にダンカン・ロス氏は朝一度だけ来るようになり、それからしばらくするともうまったく来ませんでした。それでももちろん、私は一瞬だって部屋を離れる気になんかなりませんでした。あの人がいつ来るかわかりませんし、仕事は実に結構だし、私にぴったりですから、それを失うようなことはするもんじゃありません。

こんなふうに八週間が過ぎ、私はAbbots、Archery、Armour、Architecture、Atticaと書き終え、励めば近いうちにＢのところに進めると思いました。フールスキャップ紙にはそこそこかかってますし、私の書いたもので棚が一段、ほとんどもういっぱいになっていました。そこで突然、それが全部終わりになりました」

「終わりに？」

「ええ、ええ。今朝までにね。いつものように十時に仕事先に行きましたが、ドアが閉まって鍵がかかってまして、小さな四角いボール紙がドアの板の真ん中にびょうで打ち付けてありました。これですが、読んでみてくださいよ」

彼は便箋一枚ぐらいの大きさの白い厚紙を掲げた。それにはこんなふうに書かれていた。

赤毛連盟は解散  
1890年10月9日

シャーロック・ホームズと私はこのそっけない告知とその後ろの無念そうな顔を見ているうちに、出来事のこっけいな面が完全にほかの問題すべてを圧倒し、二人そろって大声で笑い出してしまった。

「何がそんなにおかしいんだかわかりませんね」と、依頼人は燃え立つ髪の根元まで赤くなって叫んだ。「私を笑いものにするほかできないんだったら、よそへ行ってもいいんです」

「いえ、いえ」とホームズは、立ち上がりかけた客を椅子に押し戻しながら叫んだ。「実際あなたの事件は何としても逃すつもりはありません。実に目新しい珍事件です。しかしですね、言わせていただくなら、何かほんのちょっとおかしなところがありますね。どうぞ、ドアにカードを発見してあなたは何をしましたか？」

「私はぼう然としました。何をしていいのかわかりませんでしたよ。それから私は事務所を訪ね回ったんですが、そのことを何か知っているところは一つもないようでした。最後に私は一階に住んで会計士をやっている家主のところへ行き、赤毛連盟がどうなったのか知っているかと尋ねました。そんなものは一度も聞いたことがないと言われましてね。そこで私はダンカン・ロスさんってのは何者か訊きました。初めて聞く名前だという答えでした。

『ほらあの、』私は言いました。『四号室の人』

『え、赤い髪の人？』

『そうです』

『ああ、』家主は言いました、『あの人ならウィリアム・モリスって言うんですよ。弁護士で、新しい家屋が整うまで、便宜上一時的にうちの部屋を使っていたんですよ』

『どこへ行けば会えますかね？』

『ああ、新しい事務所ですよ。住所を言っていきました。ええ、キング・エドワード街17、セントポール大聖堂の近くです』

私は出かけましたがね、ホームズさん、その住所に着いてみるとそこは膝当ての工場で、ウィリアム・モリス氏にしろ、ダンカン・ロス氏にしろ、誰も知りませんでした」

「それで、それからどうしました？」とホームズが尋ねた。

「サクス―コバーグスクエアの家に帰り、スポールディングの助言を聞きました。しかしちっとも役に立ちませんでしたよ。待ってりゃ郵便で言ってくるだろうって言うばかりで。でもそれではあまりおもしろくないんですよ、ホームズさん。こんな身分を何もせずに失いたくありませんでした、で、あなたがね、貧乏人でも困っていたら親切に助言してくれるって聞いていたもんで、まっすぐにこちらへ来たってわけです」

「それは非常に賢明でした」とホームズは言った。「これはきわめて珍しい事件ですし、喜んで調査しましょう。あなたの話からすると、一見して思うよりも重大な問題がぶら下がってそうな気がします」

「重大ですとも！」とジェイベズ・ウィルソン氏は言った。「私は週四ポンドを失っちまったんですよ」

「あなた個人についていえば、」ホームズは言った、「この異常な団体に何ら不満はないものと思いますが。それどころかあなたは、僕の理解するところ、三十ポンドほど豊かになったし、それに詳細な知識を文字Ａの項に記述されている事柄すべてにおいて得たことは言うまでもありません。それであなたが失ったものは何もありません」

「ええ。ですがね、私は知りたいんですよ、連中のことを、連中が何者で、私にこんないたずらを――もしいたずらなら――をする連中の目的は何なのかを。だいぶ金のかかる悪ふざけでしたがね、なにしろ三十二ポンドかかったんですからね」

「あなたのためにそれらの点を解明するよう努力しましょう。それと、まず一つ、二つ質問を、ウィルソンさん。あなたのとこのその店員ですがね、最初にあなたの注意を広告に向けさせた――どのくらいお宅にいたんですか？」

「あれが約ひと月たった頃です」

「どうしてお宅へ？」

「広告に応じて」

「応募したのは一人だけですか？」

「いえ、十人以上でした」

「なぜ彼を選びました？」

「使いやすいし、安く来るもんで」

「事実、半分の賃金でね」

「そうです」

「どんな男ですか、そのヴィンセント・スポールディングは？」

「小柄で、丈夫な体格で、やることは非常に敏捷で、三十はいってるのに顔にひげはありません。額に酸がはねて白くなったところがあります」

ホームズはかなり興奮して椅子の上で座り直した。「そうだろうと思った」と彼は言った。「耳にイヤリングのための穴があいているのに気づきませんでしたか？」

「知ってます。子供の頃ジプシーがやってくれたと言ってましたが」

「フム！」とホームズは言い、深い物思いに沈み込んでしまった。「その男はまだお宅にいますね？」

「ああ、ええ。たった今置いてきたところです」

「あなたのいない間も商売に精を出していましたか？」

「何の文句もありません。午前中はあまりすることのあったためしがないですし」

「結構です、ウィルソンさん。ぜひ一日、二日のうちにこの問題について意見を差し上げましょう。今日は土曜日、月曜日には結論を出したいですね」

「さて、ワトソン、」客が立ち去るとホームズが言った、「これをいったいどう思う？」

「さっぱりわからないよ」と私は率直に答えた。「実に不可解なことだね」

「一般に、」ホームズは言った、「異様なことほど、結局はそれほど不可解ではなかったことがわかるものだ。本当に難しいのは平凡な、特色のない犯罪だ。ちょうど平凡な顔が最も見分けにくいのと同じようにね。しかしこの件は迅速にやらなければなるまい」

「それで何をするつもりだね？」と私は尋ねた。

「煙草を吸うんだ」と彼は答えた。「まずはパイプ三服の問題だから、五十分間僕に話しかけないように頼むよ」彼は椅子の上で丸くなり、やせた膝を鷹のような鼻のところまで引き上げ、目を閉じ、陶製の黒いパイプを奇妙な何か鳥のくちばしのように突き出して座っていた。私がうとうとしながら、彼も寝入ってしまったと思い込んだ時、彼は突然、決断がついたというしぐさで椅子からパッと立ち上がり、パイプをマントルピースの上に置いた。

「セントジェイムズホールで午後、サラサーテの演奏があるんだ」と彼は言った。「どうかな、ワトソン？　君の患者は数時間君がいなくても大丈夫かな？」

「今日は暇だよ。患者に忙殺されることなどないんだ」

「では帽子をかぶって来たまえ。まずはシティーを通るから、途中で昼食にしてもいいね。ドイツ音楽が豊富なプログラムだよ。イタリアやフランスのよりも僕の好みに合うんだ。内省的だし、僕は内省したいんだ。行こう！」

私たちはアルダスゲイトまで地下鉄で行き、少し歩くと、その朝聞いた奇妙な物語の現場、サクス―コバーグスクエアに着いた。それはちっぽけな斜陽の地であり、二階建ての薄汚いレンガ造りの家々が四方から柵に囲まれた小さな空き地に面し、そこでは雑草だらけの芝生といくつかのしおれた月桂樹の茂みが煙漂う居心地の悪い大気に悪戦苦闘していた。角の家の三つの金色の球と茶色の板に白い文字の『ジェイベズ・ウィルソン』とが私たちの赤い髪の依頼人が店を経営している場所を知らせていた。シャーロック・ホームズはその前に立ち止まり、首をかしげ、すぼめたまぶたの間の目をきらきらと輝かせ、その全体をざっと見渡した。それから彼は、家並みを鋭い目で見つめながら、ゆっくりと通りを行ったり、そしてまた角まで来たり、と歩いた。最後に彼は質屋の店に戻り、ステッキで二、三度、力強く歩道を叩き、ドアに近寄り、ノックした。すぐにドアは開き、快活そうな、ひげのない若者がお入りくださいと言った。

「ありがとう、」ホームズは言った、「ここからストランドへはどう行けばいいのか聞きたいだけなんですが」

「三つ目を右、四つ目を左」と店員は、ドアを閉めながら即座に答えた。

「頭のいい奴だ、あれは」と、店から離れ、ホームズは言った。「僕の考えではロンドンで四番目に頭のいい男であり、大胆不敵さにおいては第三位の資格もないとは言えないな。僕は前からちょっと知ってるんだ」

「明らかに、」私は言った、「ウィルソン氏の店員はこの赤毛連盟の謎にかなり重要な意味を持っているね。単にあの男を見たいがために道を尋ねたんだね」

「あの男をではない」

「では何を？」

「あの男のズボンの膝だ」

「それで何を見たんだ？」

「予期していたものを」

「歩道を叩いたのはなぜだね？」

「ねえ博士、今は観察の時であって議論の時ではない。僕たちは敵国にいるスパイだ。サクス―コバーグスクエアについてはちょっとわかった。今度はその裏の地域を探検しようじゃないか」

角を曲がると、後にしたサクス―コバーグスクエアとは絵画の裏と表ほどの著しい対照をなす道路に出た。そこは北と西へのシティーの交通を担う大動脈の一つであった。車道は流れ込み、流れ出る通商の二対の潮の巨大な流れにふさがれ、歩道は急ぎ歩く人々の群れで真っ黒だった。立ち並ぶ立派な店や堂々たる事務所を目の当たりにしながら、その裏側に実際に隣接しているところが、たった今出てきた、衰退し、活気のない一角であるとは本当にしにくいものがあった。

「さてと、」ホームズは角に立ち、家並みに沿って見渡しながら言った、「ちょっとここの建物の順序を覚えておきたいんだ。ロンドンを正確に知ることは僕の趣味だからね。モーティマーの店、煙草屋、小さな新聞屋、シティーアンドサバーバン銀行コバーグ支店、ベジタリアンレストラン、マクファーレン馬車製造の倉庫。それで別のブロックになる。さあ、博士、僕たちは仕事を終えたのだから、もう遊んでもいい時間だ。サンドイッチとコーヒー、それからバイオリンの世界へ出発だ。甘美と上品とハーモニーの世界には判じ物で僕たちを悩ませる赤毛の依頼人もいないよ」

友は音楽にも熱中していて、彼自身、きわめて優れた演奏家であるばかりでなく非凡な作曲家でもあった。その午後を通して彼はこれ以上はない幸せに包まれて一等席に座り、細く、長い指を音楽に合わせて優しく揺らし、その優しく微笑んだ顔や気だるい、夢見るような目は探偵ホームズ、容赦ない、頭の切れる、迅速な犯罪捜査官ホームズのそれとは想像も及ばぬほど違っていた。彼の奇妙な性格においては二つの性質が交互に自己主張し、その極端な厳正さ、明敏さは時折彼のうちで優位を占める詩的、瞑想的気分に対する反動を表している、と私はよく考えたものだ。性質の振幅が彼を極端な気だるさから猛烈な活動へと導くのだ。そして、私にはよくわかっているが、何日も続けて肘掛け椅子に横になり、即興演奏やゴシック版に浸っている時の彼ほど恐るべきものはなかったのである。その時こそ追跡の欲望が不意に彼を襲い、彼の目覚しい推理能力が直感のレベルまで高まり、ついには彼の方法をよく知らない者などは普通の人間が誰も持ち得ない知識を持つ人として彼を不審の目で見ることになるのだった。その午後、セントジェイムズホールですっかり音楽に夢中になっているホームズを見た私は、彼が追いつめにかかっている連中に不吉な時が近づいているのを感じた。

「君は家に帰りたいだろうね、博士」と外に出た時彼が言った。

「ああ、その方がいい」

「それに僕もやることがあって数時間かかりそうだ。このコバーグスクエアの事件は重大だよ」

「重大とはなぜだね？」

「相当の犯罪が計画中なんだ。間に合ってそれを止められると信じるだけの根拠は十分にある。だが今日が土曜日だということがちょっと事を面倒にしているんだ。今夜は君の助けが必要になる」

「何時に？」

「十時で充分間に合うだろう」

「十時にベーカー街に行くよ」

「結構。それからね、博士、ちょっと危険なことがあるかもしれないから、軍用のリボルバーをポケットに入れておいてくれ」彼は手を振り、さっと向きを変え、たちまち人ごみの中へ姿を消した。

私は自分が周りの人間より鈍いとは思っていないが、シャーロック・ホームズと付き合っていると、自分が愚かだと感じていつも悲しくなる。この際、彼が聞いたことは私も聞いていたし、彼が見たことは私も見ていたのに、彼の言葉からすると、明らかに彼が何が起こったか、だけではなく、何が起ころうとしているか、もはっきりわかっているのに対して、私には事件全体がわけのわからぬばかげたもののままだった。馬車でケンジントンの家へ向かいながら私は、百科事典を複写する赤い髪の人の異常な物語から始まって、サクス―コバーグスクエアへの訪問、そして別れ際の彼の不穏な言葉に至るまで、すべてを熟考した。この夜の遠征はなんなのか、なぜ私は武装しなければならないのか？　どこへ行こうとし、何をしようとしているのか？　ホームズは、あの顔にひげのない質屋の店員は恐るべき男――深いたくらみを図りうる男だとほのめかした。私はその謎を解こうとしたが、あきらめて投げ出し、問題を棚上げにし、説明のもたらされる夜を待った。

九時十五分に私は家を出、ハイドパークを横切り、オックスフォード街を通ってベーカー街へ行った。二台のハンサムが玄関に止まっていて、廊下へ通ると、上から人声が聞こえた。部屋に入ってみると、ホームズは二人の男と活発に話を交わしていた。一人は警察官のピーター・ジョーンズとわかったが、もう一人は長く、細い、陰気な顔の男で、ぴかぴかの帽子と息も詰まるほどきちんとしたフロックコートを着けていた。

「やあ！　僕たちの部隊は完成だ」と言いながら、ホームズはピージャケットのボタンをかけ、棚から重い狩猟用の鞭を取った。「ワトソン、スコットランドヤードのジョーンズ君は知っているね？　こちらはメリーウェザーさんと言って、今夜の冒険で僕たちの仲間になっていただく人だ」

「また二人一組で狩りですね、先生」とジョーンズはいつものもったいぶった言い方をした。「こちらの我々の友人は獲物を狩り出すことにかけては驚くべき人ですからね。あと必要なのは追い詰めるのを助ける老練な犬だけですよ」

「狙った獲物はガチョウ一羽だったということにならないよう願いたいですな」とメリーウェザー氏が陰気に言った。

「ホームズさんのことは相当に信用してかまいません」と警察官は高慢ちきに言った。「この人には独自のちょっとした方式がありましてね、これがまあ、言わせてもらえれば、ほんのちょっと理論に偏り過ぎで空想的ですがね、探偵の素質はありますよ。一度か二度、あのショルトー殺しとアグラの財宝の事件のように、警察より真相に近かったことがあると言っても過言ではありません」

「ああ、あなたがそう言うなら、ジョーンズさん、結構ですよ」と、まだよく知らないその人は服従して言った。「それでもねえ、実のところブリッジをやりそこねましたよ。三番勝負をやらない土曜の夜は二十七年間で初めてです」

「今夜あなた方は、」シャーロック・ホームズが言った、「これまでに経験のない大きな賭けをすることになるし、最高にわくわくする勝負になると思いますよ。あなたにとっては、メリーウェザーさん、約三万ポンドの賭けになります。君にはね、ジョーンズ、君がつかまえたいと思っている男だ」

「殺人犯、泥棒、偽造犯、模造犯のジョン・クレイ。若い男ですがね、メリーウェザーさん、その道ではトップですし、私はね、ロンドンのどんな犯罪者よりも奴に手錠をかけてやりたいんです。驚くべき男です、ジョン・クレイって奴は。おじいさんは王族の公爵、本人もイートンからオックスフォードです。器用な上に知能の方も狡猾な奴でね、事あるごとにあいつの気配に出くわすんだが、あの男本人をどこで見つけたらいいのかわかったためしがない。ある時はスコットランドでけちな窃盗をする、と次の週はコーンウォールで孤児院建設のために金を調達する。何年も追っていてまだ一度もあいつを見たことがないんです」

「今夜君に紹介させてもらえるといいねえ。僕は一、二回ちょっとばかりジョン・クレイ氏と手合わせをしたが、君の言うとおりその道のトップだ。しかし十時を過ぎたし、まったくのところ出発する時間だ。君たち二人が一台目のハンサムに乗れば、ワトソンと僕は二番目ので追っかけますよ」

長い道のりの間、シャーロック・ホームズはあまり話をせず、馬車の後ろにもたれ、昼間聞いた曲をハミングしていた。果てしなく入り組んだガス灯のともる街路を疾走し、やっと私たちはファリントン街へ出た。

「さああそこに近づいた」と友が言った。「あのメリーウェザーという男は銀行の重役で、事件に直接利害関係があるんだ。ジョーンズも一緒にいてもらった方がいいと思ってね。仕事の方はまったく無能だが、悪い男じゃない。明らかに一つ長所もある。ブルドッグのように勇敢だし、ロブスターのようにつかんだらもうしっかり握って離さない。さあ着いた、連中も僕たちを待っている」

私たちは午前中に来た時と同じ、混雑した往来に着いた。私たちは馬車を乗り捨て、メリーウェザー氏の案内に従い、狭い通路を抜け、彼があけてくれた通用口から通った。中には細い廊下があり、その突き当たりは非常にどっしりした鉄の扉だった。これもまたあけられ、下に通じる石のらせん階段が続き、その終わりにはまたもや恐ろしげな扉だった。メリーウェザー氏は立ち止まって角灯をともし、それから私たちを下の暗い、土の匂いのする通路へ、そこで三番目の戸をあけ、そこらじゅうに木枠のやら大きなのやら箱が積まれている大きな地下室というか穴蔵へ案内した。

「上からに対してはあまり弱点はないですね」とホームズは、角灯をかざし、あたりを見つめながら言った。

「下からだって」とメリーウェザー氏は、床に敷き詰められた板石を叩きながら言った。「おや、ばかにうつろな音だな！」驚いて目を上げながら彼は言った。

「本当にもう少し静かにお願いしますよ！」とホームズはきつく言った。「あなたは早くもこの遠征隊の成功全体を危険にさらしたのですよ。失礼ですが、どうかそこらの箱の上に座って邪魔しないようお願いしたいですね」

まじめくさったメリーウェザー氏は木箱に腰を下ろし、気を悪くした顔つきだったが、ホームズの方は床に膝をつき、角灯と拡大鏡を使って敷石の間の裂け目を詳細に調べ始めた。ほんの数秒で満足した彼はパッと立ち上がり、拡大鏡をポケットに入れた。

「少なくともまだ一時間あります、」彼は言った、「善良な質屋が間違いなく寝るまでは連中も何をするわけにもいかないですからね。その後は一刻も無駄にしないでしょう。仕事を早く済ませればそれだけ逃げる時間を長く取れますから。僕たちは今ね、博士―おそらく君は見抜いているだろうが―ロンドンの主要な銀行の一つのシティーにある支店の地下室にいる。メリーウェザーさんはその頭取だが、ロンドンの大胆な犯罪者たちが現在この地下室に相当の興味を持つ理由があることを説明してくださるだろう」

「フランス金貨ですよ」と頭取は小声で言った。「何か企てがあるかもしれない、と何度か注意されてはいました」

「フランス金貨？」

「ええ。数ヶ月前に財源を強化する必要があり、そのためにフランス銀行からナポレオン金貨三万枚を借り入れました。その金の荷を解く必要がなかったこと、それでまだこの地下室に眠っていることが漏れてしまいましてね。私が座っている木箱の中には二千枚のナポレオン金貨が幾層もの鉛の箔の間に詰められています。この準備した金は目下一支店が通常保管するものよりはるかに多いですし、重役の間でも不安を持っていたんですが」

「それはきわめてもっともなことです」とホームズが言った。「さて、そろそろ手はずを決めておく時間ですね。一時間以内に事件は山場を迎えると思います。それまでメリーウェザーさん、その暗室灯に覆いをしなければなりません」

「それで暗闇に座ってるんですか？」

「残念ながらそうなんです。ポケットにカードを一組持ってきましてね、アベック二組ですから、それでも三番勝負をやれるかと思いまして。しかし敵の準備もかなり進んでますので、あえて明かりをつけておくわけにはいかないようですね。ではまず初めに立つ位置を選ばなければなりません。大胆な連中ですからね、僕たちが不意打ちを食わせるにしても、注意しないと危害を加えられるかもしれません。僕はこの木の箱の陰に立ちますから、あなた方はその辺の後ろに隠れてください。それから、僕が連中を明かりで照らしたら、すみやかに包囲してください。連中が発砲したら、ワトソン、ためらうことなく撃ってくれたまえ」

私は銃の撃鉄を起こし、木製の箱の上に置き、その陰にかがんだ。ホームズが角灯の前の滑板をさっと動かし、真っ暗闇になった――私が経験したことのない完全な闇だった。残っている熱した金属の匂いが、明かりがまだそこにあり、いつでも即座に光を放つことを私たちに保証していた。私は期待とともに神経を高ぶらせながら、突然の暗闇と地下室の冷たく湿った空気の中で何か気のめいる、抑えつけられるようなものを感じていた。

「退路は一つだけだ」と小声でホームズが言った。「すなわちあの家を通ってサクス―コバーグスクエアへ戻ることだ。僕が頼んだことをやってくれたろうね、ジョーンズ？」

「玄関口に警部が一人、警官が二人待機しています」

「するとすべての穴をふさいだわけだ。それでは静かに待つばかりだ」

何という時間だったろう！　後で記録を突き合わせるとほんの一時間十五分だったのに、私には夜はほとんど過ぎ行き、夜明けが訪れているにちがいない、と思われた。位置を変えるのをためらったため、手足が疲れ、こわばっていた。それでも神経の緊張は最高度に高まっていたし、聴覚は鋭敏になって仲間たちの静かな息遣いが聞こえるばかりでなく、大きなジョーンズのより深く、激しく吸い込む息と、銀行の重役のかぼそい、ため息のような音を聞き分けることもできた。私の位置からは箱越しに床の方向が見えた。突然、私の目が光のきらめきを捉えた。

初めそれは石の舗装の上の薄黄色の閃光にすぎなかった。それからそれは長くのびて一筋の黄色い線になり、それから前兆も音もなく、裂け目が口をあけたように見え、手が一つ現れた。白い、女のような手で、それが光の当たる小さな範囲の中心を探った。一分かそこら、その手は指をくねらせながら床から突き出ていた。それからそれは現れた時と同じように突然引っ込み、石の間の裂け目を示す一筋の薄黄色のきらめきを除いて再び真っ暗になった。

しかしそれが姿を消したのはほんの束の間のことだった。つんざき、引き裂くような音とともに、幅の広い、白い石の一つが横倒しにひっくり返り、四角い穴がぽっかりと口をあけ、そこから角灯の光が流れ込んだ。その縁からひげのない少年のような顔がのぞき、あたりを鋭く見回し、それから開口部の両側に手をかけ、自身を肩の高さまで、そして腰の高さまで引き上げ、ついには片膝を縁にのせた。次の瞬間、彼は穴の傍らに立ち、彼に続く仲間、彼と同じようにしなやかで小柄で、青白い顔に真っ赤なもじゃもじゃ頭の仲間を引っ張っていた。

「邪魔物はない」と男はささやいた。「のみと袋は持ってきたか？　なんてこった！　跳べ、アーチー、跳べ、ひどいことになった！」

シャーロック・ホームズが飛び出し、侵入者の襟をつかんだ。もう一人は穴へもぐりこんだが、ジョーンズにすそをつかまれ、服のちぎれる音が聞こえた。リボルバーの銃身に光が当たってきらめいたが、ホームズの狩猟用の鞭が男の手首を襲い、ピストルは石の床にかちりと音を立てた。

「無駄だ、ジョン・クレイ」とホームズは穏やかに言った。「君の勝ち目はまったくない」

「そのようだな」と相手はまったく冷静に答えた。「仲間は大丈夫らしいな、コートのすそを持っているようだが」

「玄関で三人待っているよ」とホームズが言った。

「ほう、そうかい！　どうやら完璧にやってのけたようだな。敬意を表さねばならんな」

「それはこちらもね」とホームズは答えた。「赤毛の着想はきわめて斬新で有効だった」

「すぐにまた仲間に会えるさ」とジョーンズが言った。「穴を這い下りるのが私より速かったな。手錠をかける間ちょっと手を差し出すんだ」

「その不浄な手で私に触らないでいただきたいな」と、手首にがちゃりと手錠をかけられた囚人は言った。「ご存じなかろうが私のからだには王室の血が流れているんだ。私に話しかける時は常に『どうぞ』とか『お願いします』とか言うようにしてもらいましょう」

「結構」とジョーンズはじろじろ見、くすくす笑って言った。「では、まことにあいすみませんが、どうぞ、階上の方へお運びいただきますれば、馬車をば整えまして、殿下を警察署へお連れ申し上げたく存じます」

「それでよろしかろう」とジョン・クレイは穏やかに言った。彼は私たち三人にさっとお辞儀をし、刑事に付き添われて静かに歩み去った。

「本当にホームズさん、」彼らに続いて地下室を出ながらメリーウェザー氏は言った、「当銀行はどのようにあなたにお礼を申し、報いたらいいのかわかりません。間違いなくあなたは、私の経験からしても最も胆の据わった銀行強盗の企てを完璧なやり方で看破し、打ち破ったのです」

「僕自身一つ、二つ、ジョン・クレイ氏には返さなければならない借りがあったんです」とホームズは言った。「この件では少しばかり費用がかかりましたので、銀行に払ってもらうつもりですが、それにもまして、いろいろな意味で比類ない経験をしたこと、赤毛連盟という実に珍しい物語を聞けたことで充分な報酬を受けているのです」

「いいかい、ワトソン、」翌朝早く、ベーカー街でウィスキーソーダを飲みながら彼は説明した、「初めから明々白々なことだったが、このかなり異様な連盟の広告、百科事典の複写の目的として唯一考えられるのは、あのあまり頭のよくない質屋に毎日幾時間かよそへ行ってもらうことにちがいない。奇妙なやり方でやってのけたものさ、しかし、実際のところ、もっといいやり方を挙げてみろといっても難しいね。この方法は疑いなく、共犯者の髪の色を見てクレイの独創的な頭に浮かんだものだ。週四ポンドのおとりで質屋を引きつけなければならなかったが、それが何だろう、彼らは何千の勝負をしていたんだからね。悪党どもは広告を出し、一人が仮の事務所を構え、もう一人があの男が応募するようにそそのかす、連携して平日は毎朝必ず彼が留守にするよう、うまくやってのける。店員が半分の給料で来ていると聞いた時から、僕にはそいつに何かその勤め口を確保する強い動機のあることが明白だったよ」

「しかしどうやってその動機が何かを解き当てたんだね？」

「あのうちに女どもでもいれば、単なる下劣な陰謀を疑うべきところだった。しかしそれは問題外だった。あの男の商売は小体で、連中がしたような手の込んだ準備や支出の説明となりうるものは何もなかった。何がありうるだろうか？　僕は店員の写真の趣味、地下室へ姿を消すやり方を考えてみた。地下室！　そこにこのもつれた手がかりの端があったのだ。そこで僕はこの不可思議な店員について尋ねてみたのだが、ロンドンでも最も冷静で大胆な犯罪者の一人を相手にしなければならないことがわかった。その男が地下室で何かをやっている――一日何時間もかけて何ヶ月も続く何事かを。ここでもう一度、何がありうるだろうか？　僕が思いついたことはただ一つ、彼はどこか別の建物へトンネルを通しているんだ。

ここまで達してから、僕は君と活動の現場を訪れた。ステッキで歩道を叩いて君をびっくりさせたね。地下室が伸びているのは前か後ろか、僕は確かめていたんだ。そこで僕はベルを鳴らし、すると期待通り、件の店員が出てきた。僕たちは以前に何度か小競り合いを経験したが、互いを見たことは一度もなかった。顔はほとんど見なかったよ。見たかったのはあの男の膝だ。君も気づいていたろう、どれだけすりきれ、しわになり、汚れていたか。穴掘りの時間を語っていたね。残ったのは何のために穴を掘っているかという点だけだ。あの角を曲がり、シティーアンドサバーバン銀行が僕たちの友人の建物と隣り合っていることがわかって、問題を解決したぞ、と僕は思った。コンサートの後、君が家に帰ると、僕はスコットランドヤードに寄り、あの銀行の頭取を訪ね、結果は見ての通りだ」

「だがどうして今夜企てるとわかったんだね？」と私は尋ねた。

「そうだね、連盟の事務所を閉めたということはもうジェイベズ・ウィルソン氏がいてもかまわないことを示していた――言い換えれば、連中はトンネルを完成させたんだ。ところがそいつはすぐさま利用することが肝要だ、見つかるかもしれないし、金貨が移されるかもしれないからね。土曜日は彼らにとってほかの日より都合がいい、逃げるのに二日あるから。こうした理由すべてから、僕は連中が今夜来ると思ったのだ」

「見事に論理的に解決したね」と私は偽らざる感嘆とともに叫んだ。「とても長い鎖だが、すべての環から真実の音色が響いている」

「僕を退屈から救ってくれたよ」と彼はあくびをしながら答えた。「ああ！　早くもそいつが近づいてくるのを感じる。僕の人生は平凡な存在から逃れようとする長く続く努力に費やされるんだ。こういうちょっとした問題がそれを助けてくれるのさ」

「それでいて君は人類の恩人だよ」と私は言った。

彼は肩をすくめた。「まあ、ことによると、とにかく多少は役に立っているのかな」と彼は言った。「ギュスターヴ・フローベールがジョルジュ・サンドに言っている通り、『人間は無である――仕事がすべてだ』」

# 事件の正体

「ねえ君」とシャーロック・ホームズは言った。私たちはベーカー街の彼の下宿の暖炉を間にして座っていた。「人生は人間の頭が創り出せるどんなものよりもはるかに不思議だね。僕たちの思ってもみないことが現にまったくありふれたものとして存在しているんだからねえ。もしも僕たちがその窓から手を携えて飛び立ち、この大都会の上空に浮かび、そっと家々の屋根を取り去り、中をのぞき込むと、そこでは変わったことが起こっている、奇妙な偶然の一致、さまざまな計画、行き違い、不思議な出来事の連鎖、それらは何世代にもわたって生じきて、きわめて突飛な結果をもたらす、それを見れば因習的で結末が見越せる小説などみんなひどく古くさくて無益なものになってしまうさ」

「でも私にはそうとばかりは思えないな」と私は答えた。「新聞で明るみに出る事件は、概して、まったくあからさまだし、まったく俗悪だ。警察の調書では極限ぎりぎりまでリアリズムが押し進められるが、でもその結果は、実のところ、魅惑的でも芸術的でもない」

「現実的な効果を生み出すには一定の選択と裁量が必要なんだ」とホームズは言った。「それが警察調書には欠けているんだ。たぶん、観察者にとって事件全体のきわめて重要な本質を含んでいる細部よりも、裁判官の使う決まり文句が強調されるからだね。間違いないよ、平凡なものくらい異常なものはないんだ」

私は微笑み、首を振った。「君がそう考えているのはよくわかったよ」と私は言った。「もちろん君は、三大陸の至る所、私的にすべての困り果てている人の相談に乗り、力を貸すと言う立場で、あらゆる不思議なこと、奇怪なことに接している。しかしほら」―私は床の朝刊を拾った―「それを実地に試してみようじゃないか。じゃあ、最初に私の目に付いた見出しだ。『夫の妻に対する虐待』この欄の半分に印刷されているが、私には読まなくてももうすっかりなじみのものだとわかるよ。もちろん、ほかの女、酒、突く、殴る、打ち身、同情する姉やおかみさん、だ。よほど露骨な記者じゃなければこれ以上露骨なものは考えつくまい」

「まったくねえ、君の挙げた例は君の主張にはあいにくだなあ」とホームズは、新聞を手に取り、そこにチラと目を落としながら言った。「これはダンダスの別居の件だが、たまたま僕はね、これに関係したいくつかの小さな問題を解決する仕事をしたんだ。ご亭主は禁酒主義者で、ほかに女なんかいない、で、不満の元になったふるまいというのがいつの間にか出来上がったその男の習慣さ、それが食事の終わりのたんびに入れ歯をはずして女房に投げつけるというもので、これなんかどうだい、並みの作家の想像の及ぶところではなさそうな行為だろう。嗅ぎ煙草を一服やりたまえ、博士、そして君の例で僕が勝ったことを認めたまえ」

彼はふたの中央に大きなアメジストのついた古びた金の嗅ぎ煙草入れを差し出した。彼の質素な習慣、簡素な暮らしとあまりにも対照的なその輝きを見て、私は一言言わずにいられなかった。

「ああ、」彼は言った、「君には何週間か会ってなかったっけね。それはボヘミア王からのちょっとした記念品で、アイリーン・アドラーの文書の事件での僕の助力への返礼さ」

「それでその指輪は？」と私は、彼の指にきらめく、目を見張るようなブリリアントカットの石を見て尋ねた。

「オランダ王室からだ。もっとも僕が彼らの役に立った件はとても微妙でね、親切にも僕のちょっとした問題を一つ、二つ記録してくれた君と言えども打ち明けるわけにはいかないんだ」

「それで今手がけているものは何かあるのかね？」と私は興味津々で尋ねた。

「十か十二かな、だがおもしろい特色のあるものは一つもないよ。重大なものだ、わかるだろ、おもしろくなくてもね。実際、僕は発見したんだ、一般に取るに足らない事柄の中にこそ、調査の魅力となる観察の場があり、原因と結果を迅速に分析する場があるんだ。大規模な犯罪は単純になりがちでね。犯罪が大きくなるほど概して動機も明白になるからね。今ある事件には、マルセイユから僕に託されたちょっと複雑な件一つを除いて、おもしろい特色を示しているものはないんだ。しかし、どうやらそれほど待たなくてもましなものにありつけるかもしれないな、依頼人が一人来てるからね、僕のひどい思い違いでなければ」

椅子から立ち上がっていた彼は、引き分けられたブラインドの間に立ち、ぼんやりとくすんだ色合いのロンドンの街をじっと見下ろしていた。彼の肩越しに見ると、反対側の歩道に、首に重い毛皮のボアを巻き、カールした大きな赤い羽飾りのついたつば広の帽子を色っぽいデボンシャー公爵夫人風に片耳の側に傾けた大柄な女性が立っていた。その大げさな装いの下から、彼女は神経質に、ためらいがちにこちらの窓をのぞいていたが、そのからだは前後に揺れ、その指は手袋のボタンをいじっていた。突然彼女は、岸を離れるスイマーのように、道路に飛び込んで急いで横切り、私たちは鋭いベルの音を聞いた。

「あの症状は前に見たことがある」とホームズは火に煙草を投げ込んで言った。「路上でためらっている時は必ず恋愛問題だ。助言は欲しいが、話すには問題がデリケートすぎるんじゃないかと思っている。といっても、ここにも違いが見分けられよう。男にひどい目に合わされた女はもうためらったりしないし、通常ベルの針金を引きちぎるのがその症状だ。そこで僕たちは、ここには愛情の問題があるが、乙女は困っているか悲しんでいるかしているもののそれほど怒っていないと理解していいね。だがここに彼女本人が来て疑問を解決してくれるよ」

彼がそう言った時ドアを叩く音がして、制服のボーイが入ってきてミス・メアリー・サザーランドを取り次いだ。婦人その人はボーイの小柄な黒い姿の後ろに、小さな水先案内船の後ろにすべての帆を広げた商船のようにしてぼんやりと現れた。シャーロック・ホームズは得意とする気さくで礼儀正しい態度で彼女を迎え入れ、ドアを閉めて彼女を肘掛け椅子に案内しながら、彼特有の綿密ながらも放心したようなやり方で彼女を見回した。

「あなたのその近眼ではそんなにたくさんタイプライターを打つのはちょっと辛くありませんか？」

「最初はそうでした、」彼女は答えた、「でも今では見なくても文字がどこにあるかわかりますので」そこで、突然彼の言葉の意味をすっかり理解し、彼女はひどくはっとして、その幅の広い、愛想のいい顔に恐怖と驚きを浮かべて目を上げた。「私のことをお聞きになったことがあるんですの、ホームズさん、」彼女は叫んだ、「でなければどうしてそれがすっかりわかったんでしょう？」

「まあ気になさらずに」とホームズは笑いながら言った。「ものを知るのが僕の仕事ですから。あるいは僕はほかの人が見逃すようなものを見る訓練を積んできてるんでしょう。そうでなければ、どうしてあなたは僕の意見を聞きに来るんでしょう？」

「私が参りましたのはエサリッジ夫人にあなたのことを伺ったからですわ。警察も誰も彼も死んだものとあきらめたご主人をあなたがいとも簡単に見つけた人です。ああ、ホームズさん、私にも同じことをしてくださいませんか。私は金持ちではありませんが、それでもタイプの仕事で得るわずかなもののほかに、年に百は自分の権利として持っています。ホズマー・エンジェルさんがどうなったのか知るためならそれをすべて差し出します」

「なぜあなたはそんなに急いで僕に相談しに来たんですか？」とホームズは指先をあわせ、目を天井に向けて尋ねた。

再び驚きの色がミス・メアリー・サザーランドのいくぶん間のびした顔に現れた。「ええ、私はバタバタと家を出てきましたわ、」彼女は言った、「ウィンディバンクさん―つまり、私の父ですが―がまったくのんきに考えるのを見て腹が立ったからです。あの人は警察へ行こうとしない、あなたの所へ行こうとしない、それでとうとう、だってあの人は何もしようとしないで、何も害はなかったんだからって言い続けているんですもの、私かんかんになって、ちょうど服を着て出るところでしたのでまっすぐにこちらへ来ましたの」

「あなたのお父さんは、」ホームズが言った、「義理のお父さんですね、きっと、名前が違いますから」

「ええ、義父です。父と呼んでますけど、それもおかしいんです。だって私より五年と二ヶ月上なだけですもの」

「で、お母さんはご健在ですか？」

「ああ、ええ、母は生きてますし元気です。私はそれほど嬉しくありませんでしたわ、ホームズさん、父が死んでそれこそすぐにまた結婚するし、自分より十五歳近くも若い男なんですもの。父はトットナム・コート街で配管業をやってましたが、死んでかなりの事業を残し、それを母は職工長のハーディさんと続けてました。でもウィンディバンクさんが現れて母に事業を売却させました。あの人はワインのセールスマンで相当やり手ですから。有形無形の資産の代わりに4700ポンド手にしましたが、それでも父が生きていたら手にしたはずのものには程遠いものでした」

私はシャーロック・ホームズがこの散漫なくだらない話に短気を起こすだろうと予期していたが、どうして彼は非常に注意を集中して聞いていた。

「あなた自身のちょっとした収入はその事業から生じるのですか？」

「ああ、いいええ。それはまったく別でオークランドの叔父のネッドが私に遺したんです。ニュージーランドの株で4.5%つきます。総額2500ポンドですが、私が手をつけられるのは利息だけです」

「非常におもしろいお話です」とホームズは言った。「それとあなたは年に百もの大金を受け取り、そのうえご自分で稼ぐものもあるのですから、おそらくちょっとは旅行したり、あらゆる面で気ままにしたりしてるんでしょうね。独身女性は六十ポンドも収入があればかなり快適に暮らせるでしょう」

「私はそれよりずっと少なくても済ませられますわ、ホームズさん、でもおわかりでしょう、家で暮らす限り私はあの人たちの負担になりたくないし、私が厄介になっている間はあの人たちもあのお金を使う権利があるわけですわ。もちろん当座だけのことですけど。ウィンディバンクさんは四半期ごとに私の利息を引き出して、母にそれを渡していますが、私はタイピストの稼ぎでかなりうまくやっていけることがわかりました。一枚二ペンスになるんですが、日に十五から二十枚できることもよくあるんです」

「あなたの立場はとてもよくわかりました」とホームズは言った。「こちらは友人のワトソン博士ですが、この人の前では僕に対するのと同じように遠慮なく話してかまいません。どうか今度はあなたとホズマー・エンジェルさんの関係をすっかりお話しください」

ミス・サザーランドの顔を赤らみがおおい、彼女は上着の房飾りを神経質にいじった。「初めて彼に会ったのはガス取り付け業者の舞踏会でした」と彼女は言った。「父が生きていた頃はいつも父にチケットを送ってくれたものですが、その後も私たちを忘れなかったのですね、母に送られてきました。ウィンディバンクさんは私たちが行くのを嫌がりました。あの人は私たちをどこへも行かせたくないんです。私が日曜学校のお楽しみに参加したいというだけでもう、かんかんに怒るんですから。でも今回は私、行くと決心して、無理にも出かけましたわ。だってどんな権利があってあの人が止めるんですの？　あの人はそこの人たちは私たちの知り合いとしてふさわしくないとか言いますが、父の友達がみんな来るんですからねえ。それから私にはふさわしい服がないなんて言ったんです、私にはたんすから取り出したこともない紫のビロードのがあるのに。結局、どうしようもないとなると、あの人は会社の仕事でフランスに行きましたが、私たち、母と私と、前にうちの職工長だったハーディさんとで出かけましたら、そこでホズマー・エンジェルさんに出会ったんです」

「きっと、」ホームズが言った、「フランスから戻ったウィンディバンクさんはあなた方が舞踏会へ行ったことでずいぶん怒ったでしょうね」

「ああ、それがね、とても物分りがよくって。あの人は笑って、そうでしたわ、それから肩をすくめて、女にだめだなんて言っても何にもならない、どうせ好きなようにするんだから、と言いました」

「なるほど。それでガス取り付け業者の舞踏会であなたはホズマー・エンジェルさんという紳士に出会ったということですね」

「そうですわ。私はその晩彼に会って、翌日彼が立ち寄って私たちが無事に帰ったかと訊いて、その後私たちは彼に会いました――つまりね、ホームズさん、私は二度彼に会って散歩したんですが、その後父がまた帰ってきて、ホズマー・エンジェルさんはもう家へ来るわけにはいかなくなったんです」

「いけませんか？」

「そうですわね、なにしろ父がそういうことは一切嫌いですし。父はなるべくならお客がないようにしてますし、よく言ってますわ、女は自分の家族に囲まれてこそ幸せだと。そう言いますけどねえ、私も母によく言いましたわ、女にはまず自分の家族が必要だと、ところが私のはまだないんですから」

「しかしホズマー・エンジェルさんはどうなんですか？　あなたに会おうとしなかったんですか？」

「それがね、父がまた一週間以内にフランスへ出かけることになって、ホズマーが手紙で言ってきたんです、父が行くまでお互い会わない方が安全だしよかろうって。それまでは私たち手紙を書くことができましたし、彼も毎日手紙をくれたものでした。私は朝のうちに手紙を取りに行って、そうすれば父に知られずにすみますから」

「この時点であなたはその紳士と婚約していましたか？」

「ああ、ええ、ホームズさん。私たちは最初にした散歩の後婚約しました。ホズマー――エンジェルさん――はレドゥンホール街の会社の出納係で、それから――」

「何という会社？」

「そこがいちばんまずいんですがホームズさん、私知らないんです」

「ではどこに彼は住んでました？」

「その建物に泊まってましたわ、」

「それで彼の住所を知らないんですね？」

「ええ――レドゥンホール街だということ以外は」

「では手紙のあて先はどこにしたんですか？」

「レドゥンホール街郵便局です、局留めで。会社宛に出すと婦人から手紙をもらったと言ってほかの事務員がみんなで冷やかすからと彼が言いますし、それで私タイプで打とうかと言ったんです、彼が自分のをそうしてますようにね、でもそれじゃあ彼いらないって、だって私が書いたものなら私から来たと感じられるけれども、タイプしたものではいつも機械が私たちの邪魔をするような気がすると彼は言いますの。これはまさしく彼がどのくらい私のことを好きかを示してますわ、ホームズさん、それと小さなことに彼が気がつくことも」

「それはとても示唆に富むことでした」とホームズは言った。「長年僕の原理としてきたことですが、小さなことは何よりもきわめて重要なんです。ホズマー・エンジェルさんに関してほかに何か小さなことを覚えていませんか？」

「とても恥ずかしがりでしたわ、ホームズさん。私と歩くのも日中よりも夕方でした、彼が人目につくのがいやだと言って。とても遠慮がちで紳士的な人でしたわ。声まで穏やかでした。若い頃、扁桃腺を腫らしたことがあって、それでのどが弱くなって、口ごもるような、ささやくような話し方になった、と彼は言いました。いつも立派な身なりで、とてもきちんとして地味で、ですが目が弱くて、ちょうど私と同じように、それでまぶしくないようにサングラスをかけてましたわ」

「さて、それでどうなりました、あなたの義理のお父さんのウィンディバンクさんがフランスへ戻った時？」

「ホズマー・エンジェルさんがまた家へ来て、父が帰る前に結婚しようと提案しました。彼は恐ろしく真剣で、私に誓わせるんです、私の手を聖書にのせ、何があろうと私がいつまでも彼に忠実であるように、と。母は言いましたわ、彼が私に誓いを立てさせるのは全く正しいし、それは愛情のしるしだと。母は最初から彼の味方で、私よりもっと彼を気に入ってるくらいでした。それから、二人が一週間以内に結婚するような話をするので、私が父のことを尋ねかけると、二人とも父のことは心配するな、ただ後から言えばいいと言い、母は自分が父のことはうまくやると言いました。私はそれがあまり気に入りませんでしたわ、ホームズさん。歳がいくつも上でもない人に許可を求めなければならないなんておかしいようですもの。でも私は何にしろこそこそやりたくなかったので、ボルドーの父に、あ、そこに会社のフランスでの事務所のあるんですけど、手紙を書きましたが、その手紙は結婚式当日の朝、私の所に戻ってきました」

「ではお父さんと行き違ったんですね？」

「ええ。それが届く直前にイギリスへ発ったからです」

「ほう！　それは残念でした。それで、あなた方の結婚式はその金曜日に決められた。教会でやる予定でしたか？」

「ええ、でもごく簡素に。キングスクロスの近くのセント・セイヴャーズで挙げて、その後セント・パンクラスホテルで披露宴をする予定でした。ホズマーは二人乗りで私たちを迎えに来ましたが、私たち二人いましたので、彼は私たち二人をそれに押し込んで、自分は四輪馬車に乗り込みました。たまたま通りにはほかに馬車がいなかったのです。私たちが先に教会に着き、それから四輪馬車がやってきて、私たちは彼が出てくるのを待ちましたが、彼は出てきませんでした。御者が席から降りてきて見ると、そこには誰もいなかったのです！　御者は、自分の目で彼が乗り込むのを見たのだから、彼がどうなってしまったか想像もつかないと言いました。それが先週の金曜日です、ホームズさん、それ以来、彼がどうなったかについて光明を投ずるようなことを何一つ見も聞きもしないのです」

「僕にはあなたがずいぶんけしからん扱いを受けたように思えますが」とホームズが言った。

「おお、いいえ！　彼は優しい、いい人ですからそんなふうに私を捨てるはずがありません。ええ、あの朝も彼は私にずっと言ってましたわ、何があろうと、私は忠実でなければならない、そして何かまったく予期せぬことが起こって私たちを引き離しても、私が彼に誓ったこと、そしていつかは彼が自分の誓いの正当性を主張することを私はいつまでも忘れてはいけないと。結婚式の朝にしては妙な話ですけど、その後起こったことを見ればそれが意味を持ってきますわ」

「間違いなくそうですね。すると、あなたご自身の考えでは、彼に予期せぬ災難が降りかかったと？」

「そうですわ。私、彼が何か危険を予期していたと信じます、でなければあんな話はしなかったでしょう。そこへ彼の予期したことが起こったんですわ」

「しかしどんなことが起こったかについては何も考えはないんですね？」

「何にも」

「もう一問。お母さんはこの事をどう見ました？」

「母は腹を立てて、この問題は二度と口にしちゃいけないと言いました」

「それでお父さんは？　お父さんには話しましたか？」

「ええ。父は私に賛成して、何事かが起こったと、だからまたホズマーの消息は聞けるだろうと思ったようです。父の言うように、誰にしろ私を教会の玄関まで連れていってそこで私を放り出して何の得があるんです？　そこですわ、彼が私からお金を借りていたとか、結婚して私のお金を彼に分与させたとかいうならわからなくもないですけど、ホズマーはお金のことでは全く誰に頼る必要もありませんでしたし、私のお金なんかちっとも問題にしませんでした。それなのに、いったいどうしちゃったんでしょう？　それにどうして手紙も出せないの？　ああ、そう考えると私、おかしくなりそうで、夜も一睡もできないんです」彼女は小さなハンカチをマフから引っ張り出し、激しいすすり泣きを始めた。

「あなたの事件をちょっと調べてみましょう、」ホームズは立ち上がりながら言った、「間違いなく明確な結果が得られると思います。もう今回の事の重荷は僕に預けて、これ以上そのことを考えないことです。とりわけ、ホズマー・エンジェルさんをあなたの記憶から消し去るようにすることですね、彼があなたの人生から消えてしまったのと同じように」

「それでは私はもう彼には会えないとお思いですの？」

「ではないかと思います」

「それでは彼に何があったんでしょう？」

「その問題は僕に任せてください。彼の正確な人相書きとできれば手紙があれば欲しいんですが」

「先週土曜日のクロニクルに尋ね人広告を出しました」と彼女は言った。「これが切り抜きで、それと彼からの手紙が四通あります」

「ありがとう。それであなたの住所は？」

「キャンバーウェル、ライオン・プレイス31番地です」

「エンジェル氏の住所はなかったんでしたね。ではどこでお父さんは仕事をしていますか？」

「父はウェストハウスアンドマーバンクのセールスをしてますが、フェンチャーチ街にある大きなクラレットの輸入会社ですわ」

「ありがとう。あなたのお話はきわめて明瞭です。手紙と切り抜きは置いていってくれますね、それから僕の差し上げた忠告を忘れないように。出来事すべてを封印して、それがあなたの人生に影響を与えないようにすることです」

「ご親切にありがとうございます、ホームズさん、でもそうはできませんわ。私はホズマーに忠実であろうと思います。彼が戻ってきた時にいつでも迎えられるように」

ばかげた帽子、間のびした顔にもかかわらず、尊敬しないわけにはいかない訪問者の純真な信念には何か崇高なものがあった。彼女は手紙などの小さな束をテーブルに置き、呼ばれればいつでもまた来ることを約束して帰っていった。

シャーロック・ホームズは両手の指先を押し合わせたまま、足を前方に伸ばし、視線をじっと天井に向け、数分間黙って座っていた。それから彼は上の棚から彼にとって相談相手でもある、古い、やにのしみこんだ陶製のパイプを取り、それに火をつけ、濃い渦を巻く紫煙を立ち昇らせ、顔に無量のけだるさを浮かべて椅子の背にもたれた。

「きわめて興味深い研究対象だね、あの娘さんは」と彼は言った。「彼女自身の方がおもしろいと思ったね。あのちょっとした問題の方は、ついでだが、かなり使い古されたやつさ。僕の索引を調べれば、77年のアンドーバーで類似の例が見つかるだろうし、去年ハーグでもその種のことがあったよ。だが古いアイデアとはいえ、細部に一つ、二つ僕にも目新しいものがあったな。しかしいちばん勉強になったのはあの娘さん本人だね」

「僕に全く見えなかったものをたくさん君は彼女から読み取ったらしいね」と私は言った。

「見えないのではなくて気がつかないんだよ、ワトソン。君はどこを見るべきかわからなかった、それで重要なことをすべて見逃したんだ。君にはいまだにわかってもらえないねえ、袖の重要性も、親指の爪が示唆に富んでいることも、靴の紐に重大な問題が付随しているかもしれないことも。さあ、あの女性の外観から何がわかる？　言ってみたまえ」

「そうだね、彼女はねずみ色のつば広の麦わら帽子に赤レンガ色の羽をつけていた。ジャケットは黒で、黒いビーズが縫い付けられ、小さな黒玉の装飾の房飾りがあった。ドレスは茶色だがコーヒーの色より濃く、小さな紫色のプラシ天が首と袖についていた。手袋は灰色がかっていて、右の人差し指のところが擦り切れていた。靴は観察しなかった。小さな丸い金のイヤリングを下げていて、全般的にはかなり裕福で、庶民的だが気楽でのんきにやっている」

シャーロック・ホームズは静かに手を叩き、くすくす笑った。

「驚いたね、ワトソン、すばらしいできじゃないか。ほんとに実にうまくやってのけたもんだ。なるほど君は大事なことはみんな見逃したが、それでも君は方法に思い至ったし、それに君は色には目ざといね。全般的な印象は決して当てにせずに、細部に集中することだ。僕は常に最初に女性の袖口に目をやる。男の場合はズボンの膝を最初に確かめる方がいいかもしれない。君も気がついたように、あの女性の袖口にはプラシ天がついていたが、これは痕跡を見るにはとても役に立つ生地だ。タイピストがテーブルに押し付けてできる手首の少し上の二重線が見事にくっきりと見えていた。手回しミシンでも同じような痕が残るが、左腕だけであり、それも親指から遠い側で、今のように広い部分に渡ることはない。それから僕は彼女の顔を見て、彼女の鼻の両側に鼻眼鏡のくぼみを見つけて、思い切って近視とタイプライターのことを言ってみたんだが彼女を驚かせたようだね」

「私も驚いたよ」

「しかし、間違いなく明白だった。それから僕がとても驚いたし興味を持ったのは下を見て、彼女がはいているブーツが左右似てなくはないけれども実際は別物であるのに気がついた時だ。片方はつま先にほんの少し飾りがついていたが、もう一方には飾りがなかった。一方は五つのボタンのうち下の二つだけ、他方は一、三、五番目のボタンが留められていた。さて、若い婦人がほかの点ではきちんとした身なりなのに、左右違うブーツで、ボタンもろくに留めずに家を出てきたのを見て、彼女があわてて出てきたと言うのに大した推理もいるまい」

「それでほかには？」私は、いつものことながら、友の鋭利な推論に強い興味を抱いて尋ねた。

「ついでに気がついたことだが、彼女は家を出る前、すっかり身支度を終えてから手紙を書いている。君は彼女の右の手袋の人差し指のところが破れているのに気づいたが、どうやら手袋も指も紫のインクで汚れているのは見なかったようだね。彼女はあわてて書いて、ペンを深く浸しすぎたのだ。それは今朝のことにちがいない、さもなければ指についたしみははっきりとは残るまい。こうしたことはみんなかなり初歩的とはいえ、おもしろいね、だが僕は仕事に戻らなければならないよ、ワトソン。ホズマー・エンジェル氏の広告の人相書きを読み上げてもらえまいか？」

私は印刷された小さな紙片を明かりにかざした。

「十四日朝（と書いてあった）行方不明、ホズマー・エンジェルという男性。身長約五フィート七インチ、頑丈な体格、黄ばんだ顔、髪は黒、中央に小さなはげ、濃く、黒い頬ひげと口ひげ、サングラス、少し弱々しい話し方。最後に見られた時の服は絹で縁取った黒いフロックコート、黒いベスト、金のアルバートの鎖、グレーのハリスツイードのズボン、脇にゴムの入ったブーツの上に茶色のゲートル。レドゥンホール街の会社に雇われていたことが知られている。情報をお持ちの―」

「それで充分」とホームズは言った。「手紙の方は、」彼はそれらに目を通しながら続けた、「きわめてありふれたものだ。一度バルザックを引用しているほかはエンジェル氏につながる手がかりは全くない。だが一つ驚くべき点があってきっと君もびっくりするよ」

「タイプライターで打たれているね」と私は言った。

「それだけじゃなく、署名もタイプなんだ。下のきちんとして小さな『ホズマー・エンジェル』を見たまえ。日付があるだろ、ところがかなりぼやけたレドゥンホール街のほか上書きはない。署名に関する点はきわめて暗示的だ――事実上、決定的と言ってもいいかな」

「何がだね？」

「ねえ君、ほんとに君にはこれがどれだけ大きく事件に関係するかわからないのかい？」

「婚約不履行の裁判を起こされても署名を否認できるようにしたかったとしか思えないがね」

「いや、そういうことじゃないんだ。しかし僕は手紙を二通書こう、それで問題は解決するはずだ。一通はシティーにある会社、もう一通はあの若い婦人の義父、ウィンディバンク氏に明日の晩六時にここで僕たちに会えるかどうか尋ねる手紙だ。男の親族と話を進めた方が何かといいからね。さてと、博士、手紙の返事が来るまでは何もできないから、当面このちょっとした問題は棚上げにしてもいいね」

私はさまざま理由から友の不思議な推理力や並外れた行動力を信じていたので、彼が探索を求められている奇妙な謎を自信ありげな、気楽な態度で扱うのには確かな根拠があるにちがいないと思った。一度だけ、ボヘミア王とアイリーン・アドラーの写真の事件で彼が失敗したのを私は知っていたが、『四つの署名』に関する異様な事件や『緋色の研究』に関連した異常な状況を振り返ると、よほど変わったごたごたでなければ彼には解明できると私は思った。

私はその時、なおも黒い陶のパイプを吹かしている彼を残して帰ったが、翌日の晩にもう一度来る時にはミス・メアリー・サザーランドの失踪した花婿の身元につながるあらゆる手がかりを彼が手中に入れているだろうと確信していた。

その頃私は仕事の方で、きわめて重い患者に心を奪われ、翌日はまる一日病人の枕元で忙しかった。六時近くになってやっと手がすいた私は、この小さな謎の大団円に手助けをするには遅れてしまったのではないかと半ば思いながら、ハンサム馬車に飛び乗り、ベーカー街へ走らせた。しかし行ってみるとシャーロック・ホームズは一人で、半ば眠るようにして、そのやせた長身を肘掛け椅子に深々と丸めていた。恐ろしく並んだ瓶や試験管と純然たる塩酸の刺激臭により、彼が一日、彼にとって大切な化学の作業をしていたことがわかった。

「それで解けたかい？」私は部屋に入るなり尋ねた。

「うん。バリウム化合物の重硫酸塩だったよ」

「いや、いや、あの謎だよ！」と私は叫んだ。

「ああ、あれ！　僕は今取り組んでいた塩類のことかと思った。あの問題には謎などないよ、もっとも、昨日も言ったが、細部にはおもしろいところもあったがね。唯一の障害は法律がないので悪党に手を出せないんじゃないかと思うんだ」

「じゃあ、あれは何者で、ミス・サザーランドを捨てた目的は何なんだ？」

その質問が私の口から出て、ホームズがまだ口を開いて答えないうちに、廊下に重い足音が、そしてドアを叩く音が聞こえた。

「あの娘の義父、ジェイムズ・ウィンディバンク氏だ」とホームズが言った。「六時にここへ来ると手紙で言ってきてたんだ。どうぞ！」

入ってきたのはたくましい中背の男で、三十歳ぐらい、ひげをきれいにそり、黄ばんだ肌、人当たりのよい、こびるような物腰で、驚くほど鋭い、見通すような灰色の目をしていた。彼は物問いたげな視線を私たち二人に向け、ぴかぴかのシルクハットをサイドボードの上にのせ、かすかにお辞儀していちばん近い椅子にそっと腰を下ろした。

「こんばんは、ジェイムズ・ウィンディバンクさん」とホームズが言った。「六時に僕と約束をしたこのタイプで打たれた手紙はあなたからですね？」

「そうです。残念ながら少し遅くなりましたが、そう自分の思い通りになる身ではないですからね。今回はミス・サザーランドがつまらないことで厄介をおかけしてすみません。私はこういうことは世間にさらけ出さない方がずっといいと思ってますんで。全く私の希望に反して彼女は来たわけですが、お気づきでもありましょうが、彼女は興奮しやすく、衝動的な娘でして、何か心に決めたときには容易に抑えられません。もちろん、あなたは警察と関係ないから、私はあなたのことをさほど気にしはしませんが、家族の不幸をこんなふうに言いふらされるのは愉快じゃありません。そのうえ、無駄な出費ですよ、だってどうしてあなたにそのホズマー・エンジェルが見つけられますか？」

「それどころか、」ホームズは静かに言った、「僕にはホズマー・エンジェルさんを発見に成功するものと信じる根拠があります」

ウィンディバンク氏はひどくびっくりして手袋を落とした。「それを聞いて嬉しいです」と彼は言った。

「不思議なことに、」ホームズは言った、「実はタイプライターには人の手書きと同じくらい個性がありましてね。全くの新品でない限り、二つのものが寸分違わぬ印字ということはありません。ある文字が他の字より磨り減るし、あるものは片側だけ磨り減るのです。さて、あなたのこの手紙ですがね、ウィンディバンクさん、『ｅ』はどの場合も上が少し不明瞭ですし、『ｒ』の尻尾がわずかに欠けていますでしょう。ほかにも十四の特色がありますが、より明瞭なのはそれらです」

「会社ではすべての書状をその機械で書いてますし、少し磨り減ってるのは確かですね」と客は明るい小さな目でホームズを見やりながら答えた。

「さてそこで、まったくのところきわめておもしろい研究結果を一つお見せしましょう、ウィンディバンクさん」とホームズは続けた。「僕は近いうちにタイプライターとその犯罪との関係についてまたちょっとした研究論文でも書こうかと考えているんです。少しばかり注意を集中したことのある主題でしてね。ここに失踪した人から来たと言われる手紙が四通あります。すべてタイプライターで書かれています。いずれの場合も、不明瞭な『ｅ』や尻尾の欠けた『ｒ』ばかりでなく、僕の拡大鏡を使えばあなたにもおわかりでしょうが、僕が言及した十四のほかの特色も同様です」

ウィンディバンク氏は椅子から飛び出し、帽子を取り上げた。「私はこんな空想めいた話で時間を無駄にできませんよ、ホームズさん」と彼は言った。「その男を捕まえられるなら、捕まえてください、そうした後で知らせてもらいましょう」

「いいですとも」とホームズは言い、戸口へ行き、鍵を回した。「それではあなたにお知らせします、彼を捕まえました！」

「何だって！　どこに？」ウィンディバンク氏は唇まで蒼白になり、わなにかかったネズミのようにきょろきょろ見回しながら叫んだ。

「ああ、いけない――本当にいけませんよ」とホームズは物柔らかに言った。「逃れられる可能性はありません、ウィンディバンクさん。まったくあまりにも見え透いてるし、こんな簡単な問題を僕には解けないと君は言ったが、実にひどい賛辞だ。そうそう！　座って話し合いましょう」

訪問者は死人のような顔をして額に汗を光らせ、椅子にくずおれた。「これ―これは起訴できませんよ」と彼はどもった。

「非常に残念だがそのようだね。しかしここだけの話、ウィンディバンク、これは残酷で利己的で無情なたくらみで、下劣なやり口で、僕も今まで出くわしたことがないほどだ。さて、僕が事の成り行きをおさらいしよう、もし僕が間違ったらそう言ってくれたまえ」

男はすっかり打ちのめされたように、頭をがっくりと落とし、小さくなって椅子に座っていた。ホームズはマントルピースの隅に足をかけ、手をポケットに入れて寄りかかり、私たちに、というよりも見たところ独り言のように語り始めた。

「その男は自分よりずっと年上の女性と彼女の金目当てに結婚し、」彼は言った、「またその娘が一緒に暮らす限り、娘の金も好きに使うことができた。それは彼らのような地位の人々にしてみればかなりの額であり、それを失っては重大な違いが生じることになったろう。それを守る努力をする価値はあった。善良で気立てのいい娘だが、彼女なりに愛情深く、優しくもあり、そうなると明らかに、彼女のなかなかの個人的長所や彼女のそこそこの収入を持ってすれば、長く独身でい続けるはずがなかった。ところで彼女の結婚の意味するものは、もちろん年に百の損失であり、そうなると彼女の継父はそれを防ぐために何をする？　彼は彼女を家に留め置き、彼女が自分と同年代の人々との交際を求めるのを禁じるという明白な方針を採る。しかしすぐに、いつまでもそれではすまないことがわかった。彼女は反抗的になり、自分の権利を主張し、ついにはある舞踏会に行くという明確な意向を宣言した。そこで利口な継父はどうするか？　彼の思いついた考えは、その心ではなく、その頭脳の名誉となるものだった。妻の黙認と助力を得て、彼は変装し、その鋭い目をサングラスで隠し、口ひげと濃い頬ひげで顔を覆い、その明瞭な声を低めて猫なで声のささやきにし、それに娘は近視だから二重に安心、ということで、彼はホズマー・エンジェル氏として現れ、彼自身が恋人になってほかの恋人を近づけないでおく」

「初めはほんの冗談だったんです」と客はうめいた。「彼女がそこまで夢中になるなんて思いもしなかった」

「おそらくそうだろう。たとえそうであっても、若い婦人は断然夢中になり、継父はフランスとすっかり思い込み、不実ではないかという疑念は一瞬たりとも彼女の頭に浮かばなかった。彼女はその紳士の心づかいを喜び、その効果は母親が声高に表明する賞賛により増大した。そこでエンジェル氏は訪問を開始した。というのも実質的効果が生み出されるものなら、事が行く所まで押し進められるのは明らかだった。デートがあり、婚約があり、それによって結局娘の愛情がほかの誰かに向けられるのを防いだ。しかしこのごまかしはいつまでも続けられるものじゃなかった。フランスへ旅をするふりをするのもなかなか厄介だった。やるべきことは明らかだった。事を劇的に終わらせ、それが若い婦人の心に永続的な印象を残すようにして、当面、彼女の目がほかの求婚者に向かないようにすることだ。それゆえの、聖書に誓っての貞節の強要であり、結婚当日の朝に何かが起こる可能性の暗示もまたしかりだ。ジェイムズ・ウィンディバンク氏が望んだのは、ミス・サザーランドがホズマー・エンジェルに縛り付けられ、なおかつ彼の運命が不確かで、それで少なくともこの先十年、彼女がほかの男に耳を貸さないことだった。彼は教会のドアまで彼女を連れて行き、それ以上先へは行けないから、四輪馬車の片側から乗り込み、反対側から出るという古いトリックを使って都合よく姿を消した。これが一連の出来事だと思うがね、ウィンディバンクさん！」

訪問客はホームズが話している間にいくらかその厚かましさを取り戻し、ここで椅子から立ち上がった時には青白い顔に冷笑を浮かべていた。

「そうかもしれないし、そうでないかもしれませんね、ホームズさん、」彼は言った、「しかしあんたがそれほど聡明なら、今、法を犯しているのは私じゃなくてあんただってことがわからなきゃいけませんな。私は最初から違法なことは何もしてませんがね、あんたはそのドアに鍵をかけておくとなると、暴行と不法監禁で訴えられることになりますぜ」

「法は、君の言う通り、君に手出しできない、」ホームズは鍵をはずし、ドアをさっとあけて言った、「とはいえ、これほど処罰に値する男もまた、いたためしがない。あの若い婦人に兄弟か友人がいれば、君の肩に鞭を打ち据えるはずだ。まったく！」彼は男の顔にどぎつい冷笑を見て赤くなり、続けた、「依頼人に対する務めに含まれるわけではないが、ここにはちょうど狩猟用鞭があるし、ここはひとつ思い切って――」彼はさっと鞭の方へ二歩進んだが、それをつかむ前に、狂ったように階段を下りる騒々しい足音がして、玄関の重いドアがバタンと閉まり、窓から全速力で道を走るジェイムズ・ウィンディバンク氏が見えた。

「血も涙もない悪党！」ホームズは笑いながら、もう一度椅子に身を投げ出して言った。「ああいうやからは犯罪から犯罪へと走り、ついには非常に悪いことをしでかして、絞首台の上で終わるんだ。事件はいくつかの点でまったく面白みがないわけではなかったね」

「私にはいまだに君の推論の全段階がすっかりはわからないんだが」と私は言った。

「そうさね、もちろんこのホズマー・エンジェル氏に奇妙なふるまいをする強い目的があるにちがいないのは最初から明らかだったし、同様に、この出来事により実際に利益を得る唯一の男が、僕たちの見る限り、継父であることもはっきりしていた。それから、二人の男が決して一緒にならない、ところが一方がいなくなるといつも他方が現れる、という事実は暗示的だった。サングラスと奇妙な声もそうで、どちらも変装を示唆していた、濃い頬ひげ同様にね。署名をタイプライターで打つという妙な行為が僕の疑いを確かなものにしたが、これはもちろん、彼の手書きを見慣れている彼女では最小限のサンプルでもそれを見分けてしまうことを示していた。これらの個々の事実すべてが、多くの小さなこととともに、皆同じ方向を指しているのがわかるだろう」

「で、どうやってそれを確かめたんだね？」

「一度目星をつけてしまえば、確証を得るのは易しかった。この男が働いている会社を知っていたからね。新聞に載った人相書きもあったし、そこから変装の結果でありうるものすべて、すなわち頬ひげ、眼鏡、声を取り除き、それを会社に送って、社のセールスマンの誰かの人相に一致するかどうかを僕に知らせるように頼んだ。僕は既にタイプライターの特色にも気づいていたので、その男本人に仕事場を宛先として手紙を書き、ここへ来られるか尋ねた。予期した通り、彼の返事はタイプで打たれ、ささいだが特徴的な同一の欠陥が現れていた。同じ郵便で届いた、フェンチャーチ街のウェストハウスアンドマーバンクからの手紙には、人相書きはあらゆる点で従業員、ジェイムズ・ウィンディバンクのそれに合致すると書いてあった。以上！」

「それでミス・サザーランドは？」

「話したところで彼女は僕を信じやしないよ。昔のペルシャ人の言った言葉を君は覚えてるかな、『虎の子供を捕らえるのは危険だが、女性の幻想を奪うのもまた危険である』ハフィズはホラチウスと同じぐらいセンスがあるが、世の中も同じようによく知っているよ」

# ボスコム谷の謎

ある朝、食事の席に着いていた私たち、妻と私の所へメイドが電報を持って入ってきた。シャーロック・ホームズからで、こんな風に書かれていた。

二日間割けないか？　ボスコム谷の悲劇のことで西部イングランドから電報で呼ばれたところだ。一緒に来てくれると嬉しいのだが。空気も景色も申し分なし。パディントンを11時15分出発。

「どうするの、あなた？」と妻がテーブル越しに私を見て言った。「行くの？」

「どうしたものだろうねえ。今のところかなり予約が入ってるんだ」

「ああ、アンストルーザーが代わりに診てくれるでしょう。近頃あなた、少し顔色が悪いわよ。気分転換もいいんじゃないかしら、シャーロック・ホームズさんの事件にはいつもとても興味を持ってるんだし」

「そうじゃなかったら恩知らずだよ、その一つのおかげで私が手にしたものを考えれば」と私は答えた。「しかし行くとなるとすぐに荷造りしなくては。三十分しかないからね」

アフガニスタンでの野営生活の経験には私を迅速に動ける旅行者にするだけの効果はあった。私に必要だったのは最小限の簡単なもので、言ったよりも短い時間で私は荷物を手に馬車に乗り、パディントン駅へ音高く走らせていた。シャーロック・ホームズはプラットホームを行ったり来たりしていたが、そのやせた長身は、グレーの長い旅行マントとぴったりしたハンチングにより、さらにやせて高く見えた。

「来てくれて本当にありがとう、ワトソン」と彼は言った。「完全に信頼できる人が一緒にいるのといないのでは大変な違いだからね。地元の手伝いはいつだって役に立たないか、さもなきゃ偏見があるんだ。隅の席を二つ取っておいてくれれば、僕が切符を買ってこよう」

客車はホームズが持ってきて散らかした新聞の山を除くと私たちだけだった。その中を彼はひっかき回し、読み、時にはメモを取ったり、瞑想したりして、ついに私たちはレディングを過ぎた。すると彼は突然、全部まとめて巨大なボールに丸め、棚の上に放り上げた。

「事件のことを何か聞いているかい？」と彼は尋ねた。

「全然。ここ数日新聞を見ていないんだ」

「ロンドンの新聞にあまり詳しい話はなかったよ。詳細に通じるために最近の新聞全部に今ざっと目を通してみた。思うにこれはいわゆる単純な事件の一つ、つまりそれだけきわめて難しいものと思われるんだ」

「それはちょっと逆説的だね」

「しかしそれが真実と強く感じられるね。奇妙な点はたいてい手がかりになる。特色のない、平凡な犯罪であればそれだけはっきりさせるのが難しいんだ。しかし、この事件では殺された男の息子に対する重大な容疑が固められている」

「では殺人なんだね？」

「まあ、そう推測されるね。僕は自分で調べる機会があるまではどんな思い込みも避けることにしている。僕に知れる限りの事情をごく簡単に君に説明しよう。

ボスコム谷はヘレフォードシャーのロスからあまり遠くない、いなかの地方だ。その地域で最大の地主はジョン・ターナー氏で、この人はオーストラリアで金をもうけて、数年前に祖国へ戻った。彼は所有する農場の一つ、ハザレイの農場をやはりオーストラリアから来たチャールズ・マッカーシー氏に貸していた。植民地で互いに知っていたとあれば、落ち着くにあたって互いにできるだけ近くにするのも不自然なことではなかった。ターナーの方が明らかに金持ちだったが、それでもしょっちゅう一緒だったように、そのまま完全に対等な間柄でいたらしい。マッカーシーには十八の少年である息子が一人あり、ターナーには同い年の一人娘がいたが、どちらも妻は亡くしていた。彼らは近所のイギリス人の家族との付き合いを避け、隠遁生活を送っていたらしいが、とはいえマッカーシー家は二人ともスポーツが好きで、近くの競馬大会でしばしば見られていた。マッカーシーは召使を二人、男と娘を置いていた。ターナーは少なくとも半ダースほどの大所帯を構えていた。それが両家について僕のわかる限りのことだ。さて次は事実だ。

6月3日、すなわち去る月曜日、マッカーシーは午後三時ごろハザレイの家を出て、ボスコム池というボスコム谷を下る流れが広がってできた小さな湖まで歩いて行った。彼は午前中一緒にロスへ出かけた召使に、急がなければいけない、三時に大事な約束があるからと言っていた。その約束から彼は二度と生きて戻らなかったのだ。

ハザレイ農場の家からボスコム池までは四分の一マイルで、二人の人間がそこを通り過ぎる彼を見ていた。一人は年取った婦人で名前は載っていないが、もう一人はウィリアム・クラウダーという、ターナー氏の使っている猟場の番人だ。この目撃者は二人ともマッカーシー氏は一人で歩いていたと証言している。猟場の番人は、マッカーシー氏が通るのを見て数分以内に息子のジェイムズ・マッカーシー氏が銃を小脇に同じ道を行くのを見た、と付け加えた。彼の信じる限り、その時現に父親が見えていて、息子はそれを追っていた。起きた悲劇についてその晩聞くまで、彼はそのことを忘れていた。

マッカーシー親子は猟場の番人、ウィリアム・クラウダーから見えなくなった後にも見られている。ボスコム池はうっそうと植えられた木に囲まれ、外べりにはぐるりと草や葦があった。ボスコム谷の地所の番小屋の管理人の娘、ペイシェンス・モランという十四の少女が森の一つで花を摘んでいた。彼女がそこにいた間、森の縁の湖に近い所にマッカーシー氏と息子が見え、激しい口げんかをしているようだった、と彼女は言っている。彼女は父親のマッカーシーが息子を激しくののしるのを聞き、息子が父親を手を上げて殴りそうになるのを見た。その荒っぽさにぎょっとして彼女は逃げだし、家に着くと母親に、ボスコム池の近くで口論をしている二人のマッカーシーをそのままにしてきたが、彼らはけんかになるんじゃないかと思う、と知らせた。彼女がその話をして間もなく、若いマッカーシー氏が番小屋まで走ってきて、父親が死んでいるのを見つけたと言って管理人の助けを求めた。彼はひどく興奮し、銃も帽子もなく、右手とその袖が鮮血で汚れているのが認められた。彼についていくと、池のそばの草の上に大の字になった死体が見つかった。頭は何か重い鈍器で繰り返し殴られていた。傷はまさしく息子の銃の台尻によって加えられたと思われるようなもので、銃は死体から数歩の草の上に転がっていた。こうした状況のもと、青年は即座に逮捕され、火曜日の検死で『故殺』の評決が下され、彼は水曜にはロスの判事たちの前へ引き出され、判事は次の巡回裁判に事件を付託した。これらが検視官と警察裁判所の前に明らかになった事件の主要な事実だ」

「それ以上決定的な事件は想像もつかないくらいだ」と私は言った。「状況証拠が犯人を指し示すとすればこれこそそうだ」

「状況証拠はきわめて油断のならないものだ」と彼は考え込むように答えた。「間違いなくまっすぐに一つのことを示すように見えても、少し観点をずらすと、同じように妥協の余地なく何かまったく別のことを示していることがわかるかもしれない。とはいえ、この事件で青年に不利な状況がきわめて容易ならぬものに見えるのは認めなければならないし、彼が実際に犯人であることも大いにありうる。しかし、近くにいる地主の娘、ミス・ターナーを始め、近所には彼の無実を信じる人たちもいて、彼のために事件を解決するよう、レストレードを雇っているわけだが、ほら、『緋色の研究』に関連して思い出すだろう。いささか途方に暮れたレストレードが僕に事件を託したんだが、そういうわけで中年紳士二人が家で静かに朝食を消化する代わりに時速五十マイルで西へ向かって飛んでいるわけだ」

「この事件は、」私は言った、「あまりに事実が明白で君の面目の施しようがないんじゃないかね」

「明白な事実ほど当てにならないものはないんだ」と彼は笑って答えた。「それに、ほかにもいくつか明白な事実があるかもしれないし、それがレストレードには決して明白ではなくても、僕たちが偶然見つけるかもしれないよ。君は僕をよく知っているから僕のうぬぼれとは思わないだろうが、僕はね、彼がそれこそ用いるどころか理解することさえできない方法によって彼の説を裏付けるなり破壊するなりしてみせるよ。手近な例をとるなら、君の寝室の窓が右側にあることを僕はきわめてはっきりと見て取るが、それにしてもレストレード氏はこんな自明なことさえ気づくかどうか、僕には疑問だねえ」

「いったいぜんたい――」

「ねえ君、僕は君をよく知っている。君の特徴である軍隊式身だしなみを知っている。君は毎朝ひげをそるが、この季節は日光を頼りにそるね。ところが左側の後ろの方へ行くほどにだんだんそり方が完璧でなくなり、あごの隅のまわりとなるとまったくだらしなくなる、ということは、そっちの側が反対側より明かり不足なことが間違いなく非常にはっきりしている。君のような習慣の男が均等な光の中で見てそんな結果に満足するとは考えられないからね。観察と推理、そのささいな例として僕はこれを引き合いに出しただけだ。そこに僕の専門とするところがあるわけだし、これから行う調査でも何かの役に立つかもしれないな。一つ、二つ、検死で明らかになった小さな問題点があって、よく考えてみる価値があるね」

「何だね、それは？」

「彼はその場でではなく、ハザレイ農場に戻った後、逮捕されたらしい。地区の警察の警部に収監されると知らされた彼は、それを聞いても驚かない、それは当然の報いにすぎない、と言った。彼のこの発言が当然影響して、検死陪審の頭に残っていたかもしれないわずかな疑念も取り除かれてしまった」

「それは自白だよ」と私は叫んだ。

「いや、その後、無罪の主張をしてるんだ」

「それだけ決定的な出来事が続いた挙句となると、少なくとも非常に疑惑を呼ぶ言葉だね」

「とんでもない、」ホームズは言った。「それが現在僕に見える最も明るい雲の切れ目なんだ。いかに彼が無実であるにせよ、彼にとってきわめて暗澹たる状況がわからないほどまったくのばか者のはずもあるまい。彼が自分の逮捕に驚くように見えたり、憤りを装ったりすれば、僕も大いに疑わしいものと考えるけれどね。なぜならそうした怒りや驚きはこの状況では不自然なものになるが、それでも策を弄する男はそれが最善のやり方と思うかもしれないからね。率直に立場を受け入れたことは、彼が無実の人間であるか、あるいは相当自制的で堅固な人間であることを示している。彼が当然の報いだと言ったことについて言えば、これもまた不自然ではない。だって考えてもみたまえ、彼は父親の死体のそばに立っていたわけだし、その当日にすっかり子としての義務を忘れて父親と激しくやりあったばかりか、少女のとても重要な証言によれば、手を上げて殴りそうにさえしたのは確かなんだからね。自責と悔恨を示す彼の言葉は有罪のしるしというよりは健全な心のしるしと僕には思えるよ」

私は首を振った。「ずっとわずかな証拠で絞首刑になった男はたくさんいたよ」と私は言った。

「その通り。そして不当に絞首刑になった人もたくさんいたんだ」

「青年自身は事件のことを何て言っている？」

「それがねえ、どうも彼を支持する者にはあまり心強いものじゃないようでね、もっとも一つ二つ暗示的な点もあるが。ここにあるから自分で読んでみるといいよ」

彼は束から一部、ヘレフォードシャーの地元紙を選び出し、紙面を折り返して記事を指し示した。そこには何が起こったかについて、不幸な若者自身の供述が載っていた。私は客車の隅に腰を落ち着け、大いに念を入れて読んだ。こんな風に書かれていた。

そこで故人の一人息子、ジェイムズ・マッカーシー氏が召喚され、次のような証言をした。「私は三日間家を離れてブリストルに行っており、この前の月曜日、三日の朝に戻ったばかりでした。私が到着した時父は家を留守にし、馬丁のジョン・コブとロスへ馬車で出かけている、とメイドに聞かされました。私が帰ってまもなく庭に父のトラップ馬車の車輪の音がし、窓から外を見ると、父が降りて急ぎ足で庭を出て行くのが見えました。もっとも父がどこへ向かっているのかはわかりませんでした。それから私は銃を取り、ボスコム池の方へぶらぶら出かけました。反対側のウサギのいるところへ行ってみるつもりでした。途中私は猟場の番人のウィリアム・クラウダーを見ました。彼が証言した通りです。しかし私が父を追っていると思ったのは彼の誤解です。前に父がいるのは知りませんでした。池まで約百ヤードの時です、いつも父と私の間の合図にしている『クーイー！』という叫び声が聞こえました。そこで私は先へと急ぎ、池のそばに立っている父を見つけました。父は私を見てひどく驚いたらしく、やや乱暴に私がそこで何をしているのかを尋ねました。話をするうちに口論になり、殴り合いになりそうでした。父はとても気性が激しいのです。父のかんしゃくが手におえなくなってきたので、私は父を置いてハザレイ農場の方へ戻りました。ところが百五十ヤードも行かないうちに背後に恐ろしい叫び声を聞き、私はまた走って取って返しました。私は、頭にひどい傷を負って倒れ、息を引き取ろうとしている父を見つけました。私は銃を落とし、父を抱きかかえましたが、父はほとんどすぐに息を引き取りました。私は数分間父のそばにひざまずいていましたが、それからいちばん近い家である、ターナーさんの番小屋の管理人のところへ助けを求めに行きました。戻った時に父のそばには誰も見えませんでしたし、どうして父が傷を負ったのかわかりません。父は態度がちょっと冷たいし、近寄りがたいので好かれてはいませんでした。しかし、私の知る限り、父に何かするような敵はいませんでした。これ以上の事は何も知りません」

検死官―お父さんは死ぬ前にあなたに何か言いましたか？

証人―二言三言もぐもぐ言いましたが、私に聞き取れたのは何かラットのことのようでした。

検死官―あなたはそれをどう解釈しますか？

証人―私にはまったく何の意味かわかりません。うわごとを言っていると思いました。

検死官―あなたとお父さんはどんな問題で最後のけんかをしたのですか？

証人―できれば答えたくありません。

検死官―恐縮ですがどうしてもお願いします。

証人―本当に私にはお話しできないのです。その後に起こった悲しい事件と何も関係がないことは請合います。

検死官―それは法廷が決めることです。指摘するまでもありませんが、答えを拒絶すると、今後行われる裁判であなたの立場はかなり不利になりますよ。

証人―それでも拒否します。

検死官―『クーイー』という叫びはあなたとお父さんが共有する合図でしたね？

証人―そうです。

検死官―それでは、あなたを見もしないのに、あなたがブリストルから帰ったことを知りもしないのに、お父さんがそれを発したのはなぜですか？

証人（かなりろうばいして）―わかりません。

陪審員―あなたは叫び声を聞いて戻り、致命傷を負った父親を発見した時、疑惑を抱かせるようなものを何も見ませんでしたか？

証人―はっきりとは何も。

検死官―どういう意味ですか？

証人―開けた所に走り出た時、私は動揺し、興奮していて父のこと以外何も考えられなかったのです。しかし漠然とした印象ですが、走って行った時左側の地面に何かがあったようです。何か灰色のもので、コートか何か、あるいは肩掛けのようでした。父を置いて立ち上がって見回した時には、それはなくなってました。

「あなたが助けを求めに行く前に消えていたというんですね？」

「そうです、なくなっていました」

「それが何だったかはわかりませんね？」

「ええ、何かがそこにあるという感じがしたのです」

「遺体からどのくらい離れていましたか？」

「十二ヤードかそこらです」

「それで森の端からはどのくらいでしたか？」

「だいたい同じくらいです」

「ではそれが取り除かれたとするとそれはあなたが十二ヤードと離れていない時ですね？」

「そうです、でも私はそれに背中を向けていました」

これでこの証人の尋問は終わった。

「どうも、」私はその欄を見下ろしながら言った、「検死官の締めくくりの意見はマッカーシー青年にはかなり厳しいね。父親が彼を見る前に彼に合図したという矛盾、また父親との会話の詳細を説明するのを拒否したこと、父親の最後の言葉についての奇妙な話、検死官がこれらに注意を促したのももっともだ。検死官の言うように、すべて息子にとって非常に不利なことだ」

ホームズは一人で静かに笑い、クッションのきいた座席の上で伸びをした。「君も検死官もさ、」彼は言った、「骨を折って、まさにいちばん強力な若者に有利な点を選び出してくれたね。君が彼の想像力をある時は過大に評価し、ある時は過少に評価しているのがわからないのかい？　陪審の共感を得るような口論の原因を考え出せないとしたら、あまりに想像力不足だ。一方、意識の中にあるものを、ラットに関する最後の言葉とか、消えた服のエピソードとかに発展させたとすると、想像力過剰だ。いや、僕はこの若者が言っていることは本当であるという観点からこの事件に取り掛かるつもりだし、その仮説が僕たちをどこへ導くか、見てみようよ。さて、ここにポケット版のペトラルカを持ってることだし、仕事の現場に着くまで、もうこの事件のことはしゃべらないよ。昼食はスウィンドンでだが、二十分で着きそうだね」

四時近くになってやっと私たちは美しいストラウド渓谷を通り過ぎ、幅の広いセバン川のきらめきの上を渡り、小さな田舎町、ロスに着いた。プラットホームではこそこそしてずるそうな顔つきの、やせてフェレットのような男が私たちを待っていた。彼は周りが田舎であることを配慮してライトブラウンのダスターコートと革のゲートルを着けていたけれども、苦もなくスコットランドヤードのレストレードとわかった。私たちは彼と、既に私たちの部屋が取ってあるヘレフォード・アームズへ向かった。

「四輪馬車を命じておきました」とレストレードが言った。私たちは座って茶を飲んでいた。「よくわかってますからね、あなたが精力的なことも、犯罪現場に行くまで満足しないことも」

「それは親切にありがとう」とホームズは答えた。「完全に気圧の問題だな」

レストレードはびっくりしたようだった。「おっしゃることがよくわかりませんが」と彼は言った。

「晴雨計はどうかな？　二十九か、なるほど。風はなし、空に雲もなし。煙草も一箱あって吸わなきゃならないし、ソファは田舎のホテルにありがちな不快なものよりはずっと上等だ。たぶん今晩は馬車を使うことにはならないだろうと思うよ」

レストレードは寛大に笑った。「あなたはおそらく新聞を見てもう結論を出したんですな」と彼は言った。「事件は火を見るより明らかだし、調べれば調べるほど明白になりますからね。それでももちろん、ご婦人の頼みは断れませんし、それもあのように確信を持っていては。彼女はあなたのことを知っていて、あなたの意見を聞きたいと言う、もっとも私は何度も彼女に言ったんですよ、私が既にやったこと以外にあなたにできることはないって。おやおや、何とまあ！　彼女の馬車が玄関に来ている」

彼がそう言う間もなく部屋の中へ、私が今までに見た中でも飛び切り美しい若い女性が駆け込んできた。そのスミレ色の目は輝き、唇は開き気味で、頬はピンク色に染まり、彼女本来の慎み深い考えは、圧倒する興奮と心配にすっかり失われていた。

「おお、シャーロック・ホームズさん！」彼女は私たちの顔を見比べ、最後に女性の鋭い直感で我が友にじっと目を向けながら叫んだ。「来てくださってほんとに嬉しいですわ。それを申し上げたくて走らせてきました。私はジェイムズがやっていないのを知っています。私はそれを知っていますし、あなたにもそれを知って仕事に取り掛かっていただきたいのです。その点を決して疑わないでください。私たちは幼い頃から互いによく知っていますし、私は彼の欠点を誰よりもよく知っています。でも彼は虫も殺せないほど心の優しい人です。そんな罪は彼を本当に知る者にはばかげてます」

「僕たちで疑惑を晴らしたいものです、ターナーさん」とシャーロック・ホームズは言った。「できる限りのことをしますので信頼してください」

「でも証言をお読みになりまして。何か結論が出まして？　何か抜け穴が、欠陥が見つかりませんか？　あなたご自身は彼が潔白だと思いませんか？」

「おそらく潔白だろうと思います」

「ほら、ごらんなさい！」彼女は頭をのけぞらせ、挑むようにレストレードを見ながら叫んだ。「お聞きになって！　希望を与えてくださったわ」

レストレードは肩をすくめた。「同僚は結論を出すのが少し早かったんじゃないでしょうか」と彼は言った。

「でもこの方が正しいわ。ああ！　私はこの方が正しいのを知っています。ジェイムズは決してやっていません。それに彼とお父さんのけんかのことですが、彼がそれについて検死官に話そうとしなかったのは私がそれに関係しているからです。そう私は確信します」

「どんなふうに？」とホームズは尋ねた。

「隠している場合じゃありません。ジェイムズとお父さんは私のことでずいぶん意見の食い違いがあったんです。マッカーシーさんは私たちが結婚するように強く願っていました。ジェイムズと私はいつも兄妹のように愛し合っていましたが、もちろん彼はまだ若いし、とても世間知らずですし、それに―それに、その、当然彼はまだそのようなことをまったく望んでいませんでした。それでよくけんかしていましたが、今度のもきっとそれですわ」

「それであなたのお父さんは？」とホームズは尋ねた。「その結婚に賛成でしたか？」

「いいえ、父も反対でした。マッカーシーさんのほかは誰も賛成ではありませんでした」ホームズが鋭い、物問いたげな視線を投げかけると、彼女の生き生きした若い顔をさっと紅が通り過ぎた。

「いろいろとありがとうございます」と彼は言った。「明日伺えばお父さんに会えますか？」

「お医者さまが許さないのではないかと思います」

「医者？」

「ええ、お聞き及びではないんですのね？　父はもう何年も体が本当ではなかったんですが、今度のことですっかりがっくりときてしまいました。寝ついてしまって、ウィロウ先生のおっしゃるにはからだはボロボロだし、神経系が損なわれていると。ヴィクトリア州での昔の父を知っていた人で生きてらしたのはマッカーシーさんだけでしたから」

「ほう！　ヴィクトリア州で！　それは重要です」

「ええ、鉱山ですわ」

「そうでしょうとも。金鉱ですね、そこでお父さんは財産を作ったんでしょうね」

「ええ、その通りです」

「ありがとう、ターナーさん。あなたには重大な点で役に立っていただきました」

「明日何かありましたら知らせてくださいますね。おそらく拘置所においでになってジェイムズに会われるでしょうね。ああ、もしお会いになったらホームズさん、ぜひ彼に私は彼の潔白を知ってるとお伝えください」

「伝えますとも、ターナーさん」

「私はもう帰らなくては、父の容態は悪いし、私がそばを離れるととても寂しがりますので。さようなら、お仕事がうまくいきますよう」彼女は入ってきた時と同じように衝動的に、急いで部屋を出、私たちには彼女の馬車の車輪がガラガラと通りを遠ざかるのが聞こえた。

「恥ずかしいことですよ、ホームズ」とレストレードは数分の沈黙の後、威厳をこめて言った。「どうして期待を抱かせなけりゃならんのです、裏切ることになるのに決まっているのに。私もあまり心優しい方じゃないが、それでもこれは残酷というものです」

「僕はジェイムズ・マッカーシーの疑惑を晴らせるだろうと思うんだ」とホームズは言った。「拘置所の彼に会う許可はあるのかい？」

「ええ、でもあなたと私だけですよ」

「それでは決めたことだが考え直して出かけるかな。まだ列車でヘレフォードへ行って今夜彼に会う時間はあるかね？」

「充分に」

「ではそうするとしよう。ワトソン、君は退屈するんじゃないかと思うが、ほんの二時間出るだけだから」

私は彼らと駅まで歩き、それから小さな町のあちこちの通りをぶらつき、最後にホテルに戻り、ソファに横になり、黄表紙の小説を楽しもうとした。しかし、私たちが探ろうとしている深い謎に比べると、その物語のつまらない筋は薄っぺらであり、また気がつくと私の注意はしきりにフィクションから事実へとさまよっているので、とうとう私はそれを部屋の向こうへ放り出し、その日の出来事の検討にすっかり没頭したのだった。この不幸な若者の言っていることが絶対の真実と仮定すると、彼が父親と別れてから、叫び声に引き戻されて空き地に駆け込むまでの間に、どのようなひどいことが、どのような、まったく予期せぬ異常な惨事が起こりえたのだろう？　それは何か恐ろしい、致命的なことだ。何が起こりえたか？　傷の性質を知れば私の医者としての直感から何かが明らかになるかもしれないのではないか？　私はベルを鳴らし、検死の逐語的記述の載った週刊の地方紙を求めた。外科医の証言によると、鈍器による強打で、左頭頂骨の後ろ側三分の一と後頭骨の左半分が粉砕されていた。私は自分の頭でその箇所を確かめた。そのような打撃は明らかに背後から加えられたにちがいない。これはある程度被疑者に有利だ。口論を見られた時、彼は父親と向かい合っていたからである。それでも、父親は打撃が降りかかる前に背を向けたかもしれないので、それも大して役に立たない。それでも、ホームズの注意を促す価値はあるかもしれない。それから、ラットに関する奇妙な死に際の言葉があった。これはどんな意味だろう？　錯乱ではありえない。突然殴られて死に瀕している男は通例錯乱状態にはならない。いや、おそらくどうして死ぬようなことになったか説明しようとしたのだろう。だが、それが何を示しうるのか？　私は可能な説明を発見しようと脳みそを絞った。それからマッカーシー青年が灰色の布を見た話だ。それが事実だとすれば、殺人犯が逃げる時に服の一部、たぶんオーバーを落としたにちがいなく、息子が十歩しか離れていない所に背を向けてひざまずいている時に大胆にも戻ってそれを持ち去ったにちがいない。すべてが何と不可解な、ありそうもないことの連続なのだろう！　私はレストレードの見解を不思議に思わなかったが、それでもシャーロック・ホームズの洞察力を非常に信頼していたので、新たな事実がすべてマッカーシー青年の無実についての彼の確信を強めるように見える限り、私も希望を失うことはありえなかった。

シャーロック・ホームズは遅くなるまで帰らなかった。レストレードは町の宿に泊まり、彼は一人で戻った。

「晴雨計はまだ非常に高いままだね」と言って彼は腰を下ろした。「重要なのは雨が降る前に地面を調べることだ。一方、そういう難しい仕事をするには研ぎ澄まされたベストコンディションでなければならないから、僕は長旅でくたくたの時にはやりたくなかったのだ。マッカーシー青年に会ってきたよ」

「それで何が聞けた？」

「何も」

「青年は光明を投じられなかったのか？」

「全然ね。一度は僕もあの男、誰がやったか知っていて彼もしくは彼女をかばっている、と考えかけたが、今では確信しているよ、彼はほかのみんなと同様途方に暮れているんだ。彼はあまり頭の回転の早い若者ではないが、といっても見た目はハンサムだし、心も健全だと思うよ」

「彼の趣味は称賛できないなあ、」私は言った、「あのミス・ターナーのような魅力的な若い婦人との結婚に反対していたというのが実際に事実だとするとね」

「ああ、それにはちょっと痛ましい話があるんだ。この男は死ぬほどに、気も狂わんばかりに彼女に恋している、ところが二年ほど前、まだほんの少年の頃、彼女を本当に知る前、というのも彼女は寄宿学校に行って五年間いなかったからだが、何とこのばかはブリストルのバーのホステスにつかまっちまって登記所に届け出て結婚をしたんだ。誰もこの話は知らないんだが、想像がつくだろう、彼だってなんとしても結婚したいけれども、絶対に不可能とわかっているからしない、それを咎められるのがどれほど腹立たしいか。二人が最後に会った時も、そんな具合ですっかり逆上してしまって手を空中に振り上げたというわけだ。父親がミス・ターナーにプロポーズしろと迫ってくるんでね。他方、彼には自活するだけの収入はなかったし、父親は誰に聞いても非常に厳しい人だったから、本当の事を知ったら彼を完全に見捨ててしまったろう。彼が事件の前の三日間ブリストルで過ごしたのはバーのホステスの妻と一緒で、父親は彼がどこにいたのか知らなかった。その点に注目してくれたまえ。重要なんだ。しかし、災い転じて福じゃあないが、そのホステスがね、新聞で彼が重い罪でつるされそうだ知ると、彼をすっかり見捨てて、彼女にはバミューダ海軍工廠に既に夫がいると手紙で言ってよこしてね、だから二人の間には実際、何の縁もないわけさ。マッカーシー青年は苦しんでいるとはいえ、そのニュース一つで慰められたと思うよ」

「しかし彼が潔白なら、誰がやったんだね？」

「ああ！　誰？　僕は特に二つの点に君の注意を促したい。一つは、殺された男は誰かと池で会う約束があり、その誰かは息子ではありえなかった、なぜなら息子は出かけていて、いつ戻るか彼は知らなかったから、ということだ。第二点は、殺された男が息子が帰ったことを知る前に『クーイー』と叫ぶのを聞かれたことだ。それらが重大なポイントで、そこにこの事件はかかっているんだ。さて、よかったら今はジョージ・メレディスの話でもすることにして、小さな問題はすべて明日まで置いておこうよ」

ホームズの予知した通り、雨は降らず、雲ひとつない晴れやかな朝を迎えた。九時にレストレードが馬車で私たちを迎えに来、私たちはハザレイ農場、ボスコム池に向けて出発した。

「今朝は重大なニュースがあります」とレストレードが言った。「地主のターナーさんがかなり悪いようで、見込みはないそうですよ」

「年配なんだね？」とホームズが言った。

「六十ぐらいです。しかし外国暮らしでからだを壊して長いこと健康を害していましてね。この事件が非常によくなかったんですな。彼はマッカーシーの古い友人ですし、それに、付け加えるなら、大恩人でもあったんです。なにしろ地代を取らずにハザレイ農場を貸してたそうですからなあ」

「へえ！　それはおもしろい」とホームズは言った。

「ああ、そうなんです！　ほかにも多くの点で彼を助けていたんですよ。ここらじゃみんながその親切ぶりを噂しあってます」

「何とまあ！　君は少し妙だと思わないかい、このマッカーシーはだよ、自分ではほとんど何も持っていなかったし、ターナーにはそれだけの恩を受けていた、それなのに、息子をそう、おそらく地所を相続するターナーの娘と結婚させると言う、それも自信たっぷりに、まるで問題はただプロポーズするかだけで、後のことはみんなついてくるとでも言うようじゃないか。ターナー本人がその考えに反対しているのを知ればなおさら不思議だ。そこから何か推測しないのかね？」

「推理、推測に立ち至ってしまいましたね」とレストレードは私にウィンクして言った。「私はね、ホームズ、理屈や空想に頼るのはさっさとやめないと事実と取り組むのは難しいと思いますね」

「君の言う通りだ」とホームズは取り澄まして言った。「君が事実と取り組むのは非常に難しいと思うのは当然だ」

「とにかく、私は事実を一つつかみましたよ、あなたにはそれを飲み込むのが難しいようですが」と、レストレードはやや興奮して答えた。

「で、それは――」

「父親のマッカーシーは息子のマッカーシーのせいで死んだこと、そしてそれに反する理論はすべてピンボケもいいとこですよ」

「まあ、ピンボケでも見えないよりいいからね」とホームズは笑いながら言った。「だが僕の思い違いでなければ左側がハザレイ農場の家じゃないかな」

「ええ、そうですよ」それは翼を広げた、快適そうな建物で、二階建てのスレート葺き、灰色の壁にはコケが大きな黄色いしみを作っていた。しかし、ブラインドが引かれ、煙突に煙のないそれは悲嘆に暮れているように見え、まるで惨事の重みがなお重くのしかかっているかのようだった。私たちは玄関口を訪ね、メイドは、ホームズの頼みに応じて、主人が死んだ時に履いていたブーツを、それから息子のものも一足、もっともこれはその時履いていたものではなかったが、見せてくれた。きわめて入念にこれらの七、八箇所におよぶ測定を終えると、ホームズは中庭への案内を所望し、そこから私たちはそろってボスコム池へ通じる曲がりくねった小道をたどった。

シャーロック・ホームズはこのように臭跡に近くなると一変した。ベーカー街の静かな思索家、論理学者を知るのみの人は彼とわからなかっただろう。彼の顔は紅潮し、陰鬱になった。眉は二本の厳しい黒い線に描かれ、両眼はその下から容赦ない輝きを放っていた。顔は下に向き、肩はかがめられ、唇は固く結ばれ、長く、筋っぽい首の静脈は鞭縄のように浮き出ていた。獲物を追う純粋な動物的欲望に鼻孔が広がるように見え、精神が完全に目の前の物に集中されるため、質問や意見はその耳に無視されるか、せいぜい、気短に答える苛立ちのうなり声を引き起こすだけだった。牧草地の間を通る小道に沿って、それからボスコム池までは森を通り、彼は迅速に、黙々と進んだ。この地方全体の例に漏れず、地面はじめじめとした湿地帯のもので、小道の上にも両側の境となる短い草地の真ん中にも多くの足跡があった。ホームズは時に急ぎ、時にぴたりと静止し、一度は草地の中へとかなり遠回りをした。レストレードと私は後ろについて歩き、探偵はばかにしたように無関心だったが、私は、彼の行動はすべて明確な目的に向けられたものだとの確信から生じる興味を抱いて友を注視していた。

ボスコム池は幅約五十ヤードの葦に囲まれた小さな湖で、ハザレイ農場と富裕なターナー氏の庭園の境界に位置していた。境界に沿った森より高く、その向こう側に豊かな地主の住まいのある場所を示す、赤く突き出た尖塔が見えた。池のハザレイの側では森はうっそうと茂り、木立の端と湖に沿った葦の間には幅二十歩の狭い、水につかった草地帯があった。レストレードが死体の発見された正確な場所を示し、実際、地面が湿っていたので殴打されて倒れた男が残した跡が私にもはっきりと見えた。ホームズはといえば、その熱心な顔、凝視する目からして、踏みつけられた草地に非常に多くのものを読み取ったことが見て取れた。彼は臭跡を発見した犬のように駆け回り、それから連れの方に向き直った。

「何のために君は池に入ったんだい？」と彼は尋ねた。

「くま手であちこち探したんですよ。何か武器かほかに痕跡があるんじゃないかと思って。しかしいったいぜんたいどうして――」

「ああ、ツッ、ツッ！　暇じゃないんだよ！　君のその内側へ湾曲した左の足がいたるところにあるんだ。モグラでもたどれるが、それがほら、葦の間に消えている。ああ、どんなにすべてが簡単だったろうねえ、連中が水牛の群れのようにやってきてそこらじゅう転げまわる前にここへ来ていたら。ここは小屋の管理人を連れた一団が来た所だが、死体の周り六フィートから八フィートにわたってすべての痕跡を隠してしまった。しかしここには三つ、同じ足跡が独立してある」彼はレンズを取り出し、よく見ようとレインコートの上に横になり、私たちにというよりも独り言のようにずっとしゃべり続けていた。「これらはマッカーシー青年の足だ。二度彼は歩いているし、一度は急いで走っていて、だから、靴底の跡が深くついているが、かかとはほとんど見えない。それは彼の話を裏付けるね。父親が倒れているのを見て彼は走ったんだ。それからここに行ったり来たりしている父親の足跡がある。それからこれは何だ？　銃の台尻だ、息子が立って聞いていた時のものだ。ではこれは？　ハ、ハ！　何があったと思う？　つま先だ！　つま先だよ！　それも四角い、実に珍しい靴だ！　来て、行って、もう一度来ている――もちろんそれはマントのためだ。さてどこから来てるのかな？」彼はあちらへこちらへと走り、時には足跡を見失い、時には発見し、ついに私たちはかなり森の縁から中に入り、あたりでいちばん大きな木であるブナの巨木の陰に入った。ホームズはその向こう側へとたどって行き、もう一度うつぶせに横になり、小さな満足の叫びを上げた。彼は長いことそこにいて、葉や乾いた木の枝をひっくり返し、私にはちりに見えるものを封筒に集め、レンズを使って地面だけでなく、木の樹皮までも届く限り調べていた。コケの中にぎざぎざの石が一つ転がっていたが、これも彼は入念に調べてそのまま持っていた。それから彼は森の中の小道をたどり、とうとう本道に出、そこで跡はすべて失われた。

「かなりおもしろい事件だったね」と彼は、持ち前の態度に戻って言った。「この右のグレーの家が番小屋にちがいなさそうだね。中に入ってちょっとモランと話をして、たぶん短い手紙を書くことになるかな。それがすんだら、昼食に戻ってもいいね。君たちは馬車まで歩いていってていいよ、僕もおっつけ合流するから」

十分ほどして、私たちは馬車に戻り、ロスへと走らせた。ホームズはまだ森の中で拾った石を持っていた。

「これは君も興味あるんじゃないか、レストレード」と彼はそれを差し出して言った。「殺人はそれで行われたんだ」

「私には跡が一つも見えませんが」

「跡はないよ」

「じゃあどうしてわかるんです？」

「その下の草が育っていた。数日間転がっていただけなんだ。それを取ってきた場所を示すものは何もなかった。傷とは一致する。ほかの武器が使われた形跡はなかった」

「それで殺人犯は？」

「背の高い男、左利き、右足をひきずり、厚底の狩猟靴とグレーのマントを着けている、インド葉巻を吸い、葉巻パイプを使う、ポケットに刃先の鈍いペンナイフを入れている。ほかにもいくつか指標があるが、これだけで充分捜索の助けになるんじゃないかな」

レストレードは笑った。「残念ながら私はまだ懐疑的ですね」と彼は言った。「理論は大変結構ですが、我々は石頭の英国陪審を相手にしなければなりませんから」

「今にわかるさ」とホームズは穏やかに答えた。「君は君の方法でやる、僕は僕のでやらせてもらうよ。午後は忙しくなるし、おそらく夕方の列車でロンドンに帰ることになろう」

「事件は未解決にしていくのですか？」

「いや、終えてだ」

「でも謎は？」

「解けている」

「では犯人は誰だったんです？」

「僕が描写する男だ」

「しかしそれは誰です？」

「きっと見つけるのは難しくあるまい。このあたりはそう人口が多くないから」

レストレードは肩をすくめた。「私は現実的人間ですから、」彼は言った、「実際、左利きで足の不自由な紳士を探して田舎を歩き回るという約束をするわけにはいきませんなあ。私はスコットランドヤードの物笑いの種になってしまいますよ」

「結構」とホームズは静かに言った。「君にチャンスをやったんだ。さあ君の宿だ。ごきげんよう。発つ前には一筆するから」

私たちがレストレードを彼の下宿先に残し、ホテルへと走らせると、昼食が用意されていた。ホームズは黙々として物思いにふけり、顔には厄介な立場に陥った人のような悩ましげな表情を浮かべていた。

「あのねえ、ワトソン」と、食卓が片付けられると、彼は言った。「ちょっとこの椅子に座ってしばらく僕の御託を聞いてくれないか。まったくどうしたらいいかわからなくてね、君のアドバイスを大切にしたいんだ。葉巻に火をつけて僕に説明させてくれたまえ」

「どうぞそうしてくれ」

「さて、そこで、この事件を考える時、マッカーシー青年の話で二つの点がすぐに僕たちの心を打った。もっとも僕には彼に有利な、君には彼に不利な印象を与えたんだがね。一つは彼の説明によれば、父親が彼を見る前に『クーイー！』と叫んだ事実だ。もう一つはラットに関する死に際の妙な言葉だ。父親はいくつかの言葉をもぐもぐ言ったが、それだけが彼に聞き取れたんだったね。そこでこの二つの点を僕たちの研究の出発点としなければならないが、少年の言うことは絶対の真実と仮定して始めるとしよう」

「するとその『クーイー！』はどうなる？」

「そうだね、明らかにそれは息子に向けられたものではなかった。息子は、父親の知る限りではブリストルにいた。聞こえる所に彼がいたのはほんの偶然だった。『クーイー！』は誰にせよ、父が約束をしていた人の注意を引くことを意図していた。だが『クーイー』は明らかにオーストラリア人の合図で、オーストラリア人同士で使われるものだ。そこで、マッカーシーがボスコム池で会うつもりでいた人物はかつてオーストラリアにいたことのある誰かだったと強く推定される」

「それでラットはどうなる？」

シャーロック・ホームズはポケットから折りたたんだ紙を一枚出し、テーブルの上に広げた。「これはヴィクトリア州の植民地の地図だ」と彼は言った。「昨日の晩そのためにブリストルに電報を打ったんだ」彼は地図の一部に手を置いた。「何と読める？」

「ラット」と私は読んだ。

「ではこれなら？」彼は手を上げた。

「バララット」

「その通り。それがあの男が発した言葉であり、息子はその最後の音節だけを聞き取ったんだ。彼は殺人犯の名を口にしようとしていたんだ。バララットの誰それと」

「すばらしい！」私は叫んだ。

「明白なことだ。さて、これでかなり範囲を絞ったことになるだろ。息子の陳述が正しいと仮定すると、グレーの衣類を持っていることも第三の確実な点だ。僕たちは今、あいまいにすぎないものから出発してグレーのマントを持つバララットから来たオーストラリア人という明確な概念に至った」

「間違いない」

「それにあの地域の家の人間だ。なぜなら池に近づくには農場を通るか地所を通るしかないが、よそ者はとても歩き回れない所だからね」

「その通りだ」

「それから僕たちの今日の探索だ。地面を調査して僕はあの低能なレストレードに教えてやった細かいことをいくつか得た。犯人の個性に関してね」

「しかしどうやってあれはわかったのかね？」

「君は僕の方法を知っているだろう。ささいなことの観察をもとにしたものだ」

「身長は歩幅からざっと判断したものとわかるよ。ブーツも足跡から言ったのだろうね」

「そう、変わったブーツだった」

「しかし足が悪いことは？」

「右足の跡が常に左よりはっきりしていなかった。そちらに体重をかけなかったんだ。なぜか？　足を引きずっている―足が悪いからだ」

「しかし左利きのことは」

「君自身も検死で外科医の記録した傷の性質に強い印象を受けていたね。打撃はすぐ後ろから加えられ、しかも左側だ。さあ、左利きの男でなければどうしてできる？　父と息子が話している間、男はあの木の後ろに立っていた。そこで煙草まで吸ったのだ。葉巻の灰を見つけたんだが、煙草の灰に関する僕の専門知識によれば、インドの葉巻であるとはっきり言える。知っての通り、僕はこれにかなりの注意を傾け、百四十種のパイプ、葉巻、紙巻煙草の灰についてちょっとした論文を書いたことがある。灰を見つけると、僕は周りを見て、コケの間に投げ捨てられた吸いさしを発見した。インド葉巻、ロッテルダムで巻かれた種類のものだった」

「それで葉巻パイプは？」

「見ると端をくわえていないのがわかった。従ってパイプを使ったのだ。吸い口は噛み切ったのではなく、切られていたが、切り口がきれいじゃなかったので、刃先の鈍いペンナイフと推論した」

「ホームズ、」私は言った、「君はその男の周りに逃れられない網をかけ、無実の人間の生命を、まさに吊るそうとしている縄を切るかのごとくして救ったのだ。それらすべてが指す方向はわかるよ。犯人は――」

「ジョン・ターナーさんです」と、ホテルのウェーターが私たちの居間のドアをあけ、訪問者を案内して叫んだ。

入ってきた男は奇妙な、印象的な姿をしていた。ゆっくりと片足を引きずる歩み、かがめた肩は老いを表していたが、厳しい、しわの深い、ごつごつした顔だち、太い四肢はこの人が異常に力強い肉体と個性を持っていることを示していた。もつれたあごひげ、白髪交じりの髪、突き出て、垂れ下がった眉が合わさって彼の外観に貫禄と力を与えていたが、顔は蒼白で、唇と小鼻の隅は青い色合いを帯びていた。彼が致命的な慢性の病気に捕らえられていることは私には一目で明らかだった。

「どうぞソファにおかけください」とホームズは優しく言った。「僕の手紙を受け取りましたね？」

「ええ、小屋の管理人が持ってきました。あなたはスキャンダルを避けるためにここで私に会いたいとおっしゃる」

「僕がお屋敷に行くと人が噂すると思います」

「それでなぜ私に会うことを望まれました？」彼はまるでその質問の答えを既に受けたかのように、疲れた目に絶望を浮かべて友を見やった。

「はい」と、ホームズは言葉よりも目つきで答えるようにして言った。「そうです。僕はマッカーシーの件はすべて知っています」

老人はその顔を手の中に埋めた。「ああ、神よ！」と彼は叫んだ。「しかしあの若者をひどい目に会わせるつもりはなかった。誓って、巡回裁判で彼に不利に運んだら打ち明けるつもりでした」

「そうおっしゃるのを聞いて嬉しいです」とホームズは重々しく言った。

「娘のためを考えなければもう話していたでしょう。あれは悲嘆に暮れるでしょう―私が逮捕されると聞けば悲嘆に暮れることでしょう」

「そうはならないかもしれません」とホームズは言った。

「何ですって？」

「僕は公的な捜査員ではありません。こちらで僕を必要とされたのは娘さんですし、僕は娘さんのために行動していると理解しています。ただ、マッカーシー青年は放免させなければなりません」

「私は死にかけています」とターナー老人は言った。「長年糖尿病を患っています。主治医は一月持つかどうかの問題だと言います。でも私は拘置所よりも自分の家で死にたいと思います」

ホームズは立ち上がり、ペンを手に、紙束を前にしてテーブルに着いた。「真実を話してください」と彼は言った。「僕が事実を書き留めましょう。あなたはそれに署名し、ここにいるワトソンが証人として署名すればいい。そうすればあなたの自白をマッカーシー青年を救う最後の手段として提出することができます。絶対に必要でない限り、それを使わないと約束します」

「結構です」と老人は言った。「巡回裁判まで私が生きているかどうか疑問ですから、それは私にとって大したことではない。でもアリスにショックを与えたくありません。それでは事件をはっきりとさせましょう。長年にわたることですが、話すのに長くはかかりません。

あなたはあの死んだ男、マッカーシーをご存じなかった。あれは悪魔の化身でした。本当です。あなた方があのような男の魔手に落ちませんように。奴はこの二十年、私を支配し、私の人生を台無しにしてきました。まずどうして私が奴の手中の陥ったかお話ししましょう。

六十年代初頭、金鉱でのことです。その頃私は血気盛んで向こう見ずな若者で、どんなことにもすぐ手を出したものでした。私は悪い仲間に入り、酒を飲むようになり、鉱区には恵まれず、奥地に逃れ、早い話がこちらであなた方の言う白昼強盗になったのです。私たちは六人で、無法で自由な暮らしをし、時々駅を襲ったり、金鉱への道で荷馬車を止めたりしました。バララットのブラック・ジャックが私の通り名で、我々の一味は今でもバララットのギャングとして植民地では忘れられていません。

ある日、金の護送隊がバララットからメルボルンに向けてやってくるのを、私たちは待ち伏せして襲いました。騎兵が六人、私たちも六人、ですから危ないところでしたが、私たちの最初の一斉射撃で相手の鞍は四つ、空になりました。しかし私たちの仲間もぶつを手に入れるまでに三人殺されました。私がピストルを頭に突きつけた荷馬車の御者、それがまさしくあの男、マッカーシーだったのです。まったくあの時撃ってしまえばよかったんですがねえ、しかし私は、この目も鼻も口も何一つ忘れないぞとばかりに私の顔に据えられた奴の邪悪な小さい目を見たのに、奴の命を助けてやりました。私たちは金を持って逃亡し、金持ちになり、疑われることもなくイングランドまで来ました。そこで私は古い仲間たちと別れ、落ち着いて静かな、ちゃんとした暮らしをしようと決意しました。私は偶然市場に出ていたこの地所を買い、自分の金で少しは善行をしよう、金をもうけたやり口の埋め合わせをしよう、とつとめました。私はまた結婚もし、妻は若死にしましたが、かわいいアリスをのこしてくれました。ほんの赤ん坊の時でさえ、あのこのちっぽけな手が何にもまして私を正道へ導いてくれたようです。一言で言えば私は改心し、全力を尽くして過去の償いをしたのです。何もかもうまくいっている時、マッカーシーにぐいとつかまれました。

ある投資のことでロンドンへ行き、リージェント街でコートも靴もろくにない有様の奴に会ったのです。

『来たぜ、ジャック、』私の腕に触れて奴は言います、『俺たちゃあんたの家族同然になるんだ。俺たちゃ二人、俺と息子だ、そんであんたは俺たちを保護できる。でなけりゃ―結構なこった、法治国家だからな、イギリスは、それにいつも近くに警官がいる』

それで、奴らは西部へやってきて、追い払うこともできず、それ以来いちばんいい土地にただで住んでいるんです。安らぎもなく、平和もなく、忘れることもできません。どこを向こうと、近くであのずるい顔がニヤニヤ笑っています。アリスがおとなになるにつれてさらに悪くなりました。私が過去のことを警察よりもあのこに知られるのを余計に恐れているのを奴はすぐに見て取ったからです。欲しいものはなんであれ、奴は手に入れ、何であれ文句を言わずに私は奴にやりました、土地も、金も、家も、そしてついに奴は私がやれないものを求めました。アリスを求めたのです。

息子がおとなになって、娘と結婚する、で、私の健康が弱っているのは周知のことですからね、息子が全財産を継ぐとなれば奴には大成功でしょう。しかしその点私は断固としていました。あの呪うべき血統が私のに混ざるのはいやです。少しもあの若者を嫌っているのではありませんが、奴の血が入っている、それで充分です。私は断固として譲りませんでした。マッカーシーは脅しました。私は奴が最悪のことをしようとも恐れはしませんでした。私たちはそのことを話し合うため、お互いの家の中間にある池で会うことにしました。

私がそこまで行くと、奴は息子と話をしていました。それで私は木の陰で葉巻を吸い、奴が一人になるのを待ちました。しかし奴の話を聞いていると私の中の怒りと憎しみが挙げて他を圧倒するかのようになりました。奴が息子に私の娘との結婚を迫っているのですが、まるで娘を街の売春婦かなにかのように、娘の考えなど少しも気にかけていないのです。私と私が最も大切にしているものすべてがこんな男の自由にされるのかと思うと私は逆上しました。このつながりは断ち切れないのか？　私は既に死にかかっている、捨て鉢な人間です。頭ははっきりしているし、手足はかなり強靭とはいえ、私の運命が定まっていることはわかっていました。だが私の死後の名誉と私の娘は！　あの汚らわしい舌を黙らせることさえできれば、どちらも救うことができます。私はそうしたのです、ホームズさん。もう一度と言われても私はやりますよ。私は深い罪を犯しましたが、それを償うために受難の暮らしを送ってきました。しかし、私を捉えたその網に娘も巻き込まれるのは耐えられませんでした。私は奴を汚らわしい、毒のある動物のように、良心の呵責もなく殴り倒しました。奴の叫び声が息子を連れ戻しましたが、私はもう森に隠れていました。けれども逃げる時に落としてしまったマントを取りに戻らなければなりませんでした。これが起きたことすべての本当の話です」

「あなたを裁くのは僕のすべきことではありません」とホームズは、老人が今引き出された陳述に署名する時に言った。「僕たちがそうした誘惑にさらされることのないよう、心から願いますよ」

「私もそう願います。それであなたはどうなさるつもりです？」

「あなたの健康を考慮すれば、何も。あなた自身、お気づきでしょうが、あなたはまもなく巡回裁判よりも高い所にある法廷であなたの行為の責任を問われなければなりません。僕はあなたの自白を保管しますが、マッカーシーが有罪になれば使わざるをえないでしょう。そうでなければ決して人の目に触れることはないでしょう。そしてあなたの秘密はあなたの生死にかかわらず、漏れることはありません」

「では、ごきげんよう」と老人は厳かに言った。「あなたご自身に死の時が訪れても、私にくださった平穏を考えれば気が楽になることでしょう」よろめき、巨大な骨格をぶるぶる震わせながら、彼はゆっくりと部屋を出て行った。

「何てことだ！」ホームズは長い沈黙の後に言った。「どうして運命は哀れで無力な一寸の虫にこんないたずらをしかけるんだろう？　こういう事件を耳にするとバクスターの言葉を思い出して言わずにはいられないよ、『見よ、神の恵みがなければ、シャーロック・ホームズもああなるんだ』」

ジェイムズ・マッカーシーは、ホームズが調べ出して被告側弁護士に提出したいくつもの反対意見のおかげで、巡回裁判で無罪になった。ターナー老人は私たちと会った後七ヶ月間生き延びたが、既に死んでいる。あらゆる点から見て、息子と娘は過去に漂う暗雲も知らずに、仲良く暮らすことになりそうである。

# 五つのオレンジの種

82年から90年の間のシャーロック・ホームズの事件に関する覚書や記録に目を通すと、私の目の前には多くの不思議な、おもしろい特徴を示すものがあって、どれを取り、どれを捨てるか見分けるのは易しいことではない。しかし、新聞を通して既に世間に知られているものもあり、また、そうした新聞が描写する対象となる、我が友が高度に所有するあの特殊な性質を生かす場がなかったものもある。さらに、彼の分析技能を惑わし、物語としては始まりあって終わりなしと言うべきものもあり、部分的に解明されただけで、彼が大事にしている完璧な論理による証明よりも推測、推論に基づいて説明されているものもある。しかし、この最後のものの一つに関しては完全には解明されておらず、おそらくこれからも解明されないだろう点があるのも事実だが、細部に珍しさが、また結末に驚くべきものがある事件なので、その顛末を語ってみたいのである。

87年は興味の大小こそあれ、数多くの事件が私たちにもたらされ、私はその記録を保持している。この十二ヶ月に属する項目を見ると、パラドール・チェンバーの冒険、家具倉庫の地下室に豪華なクラブを構えていたアマチュアこじき協会の事件、イギリス帆船ソフィー・アンダーソンの消失に関する事実、ウファ島のグライス・パターソン一家の奇妙な冒険、最後にカンバーウェル毒殺事件といった記述がある。最後の事件では、ご記憶でもあろうが、シャーロック・ホームズは死者の時計を巻くことで、それが二時間前に巻かれたこと、従って故人はこの時間内に寝たことを証明することができた――事件を解明する上で非常に重要な推論だったのである。いつの日かこれらすべてを略述するかもしれないが、これらのうちに、今ペンを取って記述しようとする不思議な状況の連続に匹敵する奇妙な特色を呈するものはない。

九月下旬、秋の嵐が激しく吹き荒れ始めていた。一日中風がうなりを上げ、雨が窓に叩きつけていたので、ここ、大きな人工の町、ロンドンの中心にいてさえも、私たちは決まりきった日常生活から束の間、心をもたげ、人類に対して檻の中の野獣のごとく文明の鉄格子のすき間から叫びかかる、偉大な自然の力を認識せざるをえないのだった。日が暮れて嵐は激しく、騒がしくなり、風は煙突の中の子供のように咽び泣いていた。シャーロック・ホームズはむっつりと炉辺の片側に座って犯罪記録に参照をつけていたが、私は反対側でクラーク・ラッセルの海洋小説に夢中になるあまり、外の風の咆哮が本文に溶け込み、雨のしずくが遠く海の波のしぶきに変じるようだった。妻が母親を訪ねていたため、再び私は数日間だけベーカー街の旧居の住人になっていた。

「おや、」私は友の方にちょっと目を上げて言った、「確かにベルが鳴ったよ。今日あたり誰が来るんだい？　たぶん君の友達だろうね？」

「君のほかには一人もいないよ」と彼は答えた。「客は歓迎しないんだ」

「じゃ、依頼人かな？」

「それなら重大事件だ。そうでなきゃこんな日のこんな時間に誰も出てきはしないよ。だけどどうやらおかみさんの友達じゃないかと思うけどね」

しかしシャーロック・ホームズの推測は間違いで、廊下を足音が近づき、ドアが叩かれた。彼は長い腕を伸ばして自身に向いたランプを新来者が座る空いた椅子に振り向けた。「お入り！」と彼は言った。

入ってきたのは若い男でせいぜい二十二くらい、身だしなみのよいきちんとした姿で、態度にも洗練された上品なところがあった。手に持つ水のしたたる傘、光っている長いレインコートが道中の荒れ狂う天気を語っていた。彼はまばゆいランプの光を浴びて不安そうに身の回りを見回したが、私には、その顔は青白く、目は憂わしげで、何か大きな不安に気の重い人のように見えた。

「お詫びしなければいけませんね」と彼は、金縁の鼻眼鏡を目に当てて言った。「お邪魔ではないでしょうか。どうも気持ちのよいお部屋に少々嵐と雨を持ち込んでしまったようです」

「コートと傘をこちらへ」とホームズが言った。「ここのフックにかけておけばまもなく乾くでしょう。南西部からいらしたんですね」

「ええ、ホーシャムからです」

「あなたの靴のつま先にのっている、その粘土と石灰岩の混合物はきわめて特徴的です」

「ご相談に参りました」

「お安いご用です」

「それに助けていただこうと」

「それは必ずしも易しいとは限りませんね」

「あなたのことをお聞きしました、ホームズさん。プレンダーガスト少佐からタンカーヴィルクラブのスキャンダルに巻き込まれたあの人を救ったことを」

「ああ、当然です。あの人はカードのいかさまをしたと不当に告発されたのです」

「あなたなら何でも解決できると言ってましたよ」

「それは大げさです」

「負けることがない、とも」

「四度してやられたことがあります―三度は男に、一度は女に」

「でも成功した数に比べたら何でしょう？」

「確かに大体は成功してきました」

「では私の場合もそうでしょう」

「どうか椅子を火の方へ引き寄せて、あなたの事件の詳細を聞かせてください」

「普通のものではありません」

「僕の所へ来るものは皆そうです。僕は最終審裁判所ですから」

「それでもどうでしょう、あなたのご経験をもってしても、私どもの一家に起こった一連の出来事のように謎めいて不可解なことはお聞きになったことがないんじゃないでしょうか」

「興味津々ですね」とホームズは言った。「どうぞことの初めから肝心なところを話してください。その後で僕が重要と思われる細かい点について質問しましょう」

若い男は椅子を引き寄せ、濡れた足を炎の方へ伸ばした。

「私は、」彼は言った、「ジョン・オープンショーと申しますが、私自身のことは、私の理解するところでは、この恐ろしい問題とほとんど関係がありません。これは親譲りの事柄でして、ですから事実を理解していただくにはことの始まりまで戻らなくてはなりません。

まず、私の祖父には二人の息子、伯父のイライアスと父のジョセフがあったとご理解ください。父はコベントリーに小さな工場を持っていましたが、自転車が発明された頃、それを大きくしました。父はオープンショーの破れないタイヤの特許を所有し、商売も成功したので、それを売ってかなりの財産を持って引退することができました。

伯父のイライアスは若い頃アメリカへ移住してフロリダで農場主になりましたが、大成功したと聞いています。戦争ではジャクソン軍で戦い、その後フッドの下で大佐になりました。リーが軍を退いた時、叔父は農園に戻り、三、四年そこに残りました。1869年か1870年頃、伯父はヨーロッパに戻り、サセックスの、ホーシャムの近くに小さな地所を買いました。伯父は合衆国で相当の財産を作りましたが、離れた理由というのが黒人が嫌いなのと彼らに参政権を広げる共和党の政策がいやだったからなのです。伯父は変わった男で、激しく短気なところがあり、怒ると下品な言葉を使い、隠遁生活を好んでいました。ホーシャムで暮らす間に町を訪れたことがあるかどうか、疑問ですね。家の周りには庭や二、三の畑があって、運動することもできましたが、伯父は何週間も続けてまったく部屋を離れないこともしょっちゅうでした。ブランデーをがぶがぶ飲み、煙草をすぱすぱ吸い、人付き合いをしようとせず、友達も欲しがらず、自分の弟さえ必要としませんでした。

伯父は私のことはいやがりませんでした。それどころか私を好きでした。初めて会った時、私は十二かそこらの子供でしたからね。それは1878年、伯父がイングランドに来て八、九年たった頃でしたでしょう。伯父は父に頼んで私を一緒に住まわせ、私には伯父なりにとても優しくしてくれました。しらふの時はいつも私とバックギャモンやチェッカーをしたものです。召使や商人に対して伯父が私を代理人に仕立てたものですから、十六の頃の私はすっかり家の主人でした。私がすべての鍵を保管し、伯父の私生活を邪魔しない限り、好きな所へ行き、好きなことをすることができました。ただ、一つ奇妙な例外がありまして、一部屋だけ、屋根裏にある物置だけは常に鍵がかかっていて、そこへは私にしろ、ほかの誰かにしろ、伯父は決して入るのを許そうとしませんでした。少年の好奇心から私は鍵穴からのぞいてみたものですが、そういう部屋にありそうな古いかばんや包みが積み重なっているほかには何も見えませんでした。

ある日―1883年の三月でした―外国の切手が貼られた手紙がテーブルの上の大佐の皿の前に置かれていました。伯父が手紙を受け取るのはあまりないことです。勘定はすべて現金で払いますし、どのような友人もありませんでしたから。『インドからだ！』と取り上げて伯父は言いました。『ポンディシェリーの消印！　いったいなんだろう？』急いでそれをあけると、五つの小さな乾燥したオレンジの種が飛び出し、伯父の皿にぱらぱらと落ちました。これには私も笑い出してしまいましたが、その笑いは伯父の顔を見て私の唇から消え去りました。伯父の唇は垂れ、目は飛び出し、顔色はパテのようで、震える手にまだ持っている封筒をにらみつけ、『Ｋ.Ｋ.Ｋ.！』と悲鳴を上げ、それから、『ああ、ああ、罪の報いが来た！』

『何なの、伯父さん？』と私は叫びました。

『死だ』と伯父は言い、席を立って部屋へ引き下がり、恐怖に震える私を残したのです。私は封筒を取り上げ、折り返しの内側のゴムのりの上にＫの文字が三度繰り返し殴り書きされているのを見ました。五つの乾燥した種のほかには何もありませんでした。伯父を圧倒した恐怖の理由は何だったのか？　私が朝食の席を離れ、階段を昇っていくと、屋根裏のものの鍵にちがいない、古いさびついたやつを一方の手に、キャッシュボックスのような小さな真ちゅうの箱を他方の手に持った伯父が下りてきました。

『好きなようにするがいい、だがそれでもこっちがやつらを負かしてやる』と伯父は呪いの言葉とともに言いました。『今日は部屋に火を入れるようにメアリーに言ってくれ、それからホーシャムの弁護士のフォーダムを呼んでくれ』

私は命令通りにし、弁護士が着くと、私も部屋へ上がってくるよう呼ばれました。火は煌々と燃え、暖炉には紙を燃やしたような黒い、ふわふわした灰がたくさんあり、そばに立つ真ちゅうの箱はあいていて空でした。箱をチラッと見た私は、ふたの上に、朝封筒に見た、あの三つのＫの印がついているのに気がついてびっくりしました。

『ジョン、』伯父が言いました、『俺の遺言の証人になってくれ。俺は財産を利益も不利益もすべて含めて弟に、お前の親父に残す、だから間違いなくお前に引き継がれるだろう。お前がそれを無事に満喫できれば、それで結構！　だめだとわかったら、俺の言うことを聞いて、いいか、恐るべき敵にそいつをくれちまえ。そんな両刃のしろものをお前にやることになってすまないが、ことがどっちに転ぶかわからないんでな。フォーダムさんの指図で書類にサインしてくれ』

私は指示通りにサインし、弁護士はそれを持っていきました。この奇妙な出来事は、ご想像通り、私に深い印象を与え、私はそのことをあらゆる点から考え、頭を悩ませましたが、何もわかりませんでした。それでも、その漠然とした恐怖感は振り払うことができずに後に残りましたが、何週間も過ぎるにつれてその感じは鈍くなり、また私たちのいつもと変わらぬ日常生活を乱すことは何も起きませんでした。しかし伯父の変化は見て取れました。それまで以上に酒を飲み、ますます交際する気をなくしました。ほとんどを自分の部屋で、中から鍵を閉めて過ごしていましたが、時々酔っ払い、一種の狂乱状態で姿を現し、家を飛び出して銃を手に庭を暴れ回り、俺は誰も恐れない、人間でも悪魔でも、俺を檻の中の羊のように閉じ込めることはできない、と叫んだりすることもありました。しかし激しい興奮が過ぎ去ると、もはや魂の根源にある恐怖に知らぬ顔で立ち向かうことはできない、とばかりに、大慌てでドアの内へ駆け込み、すぐに鍵もかんぬきも閉めたものでした。そんな時伯父の顔を見ると、寒い日でさえ、洗面器から上げたばかりのように濡れて光っていました。

さて、話も終わりに来まして、ホームズさん、ご辛抱をお願いしてますが、ある晩、伯父は例によって酔っ払って突撃し、二度と帰ってこなかったのです。私たちは捜しに出て、庭のすそにある緑のかすが浮いた小さな池にうつぶせになっている伯父を見つけました。暴力を受けた形跡はなく、水もたった二フィートの深さでしたので、陪審は伯父の奇行で知られていることも顧慮し、『自殺』の評決を下しました。しかし、伯父がその、死という考えにどれだけひるんでいたかを知る私には、伯父が故意にそんな目を見たと納得するのは大変でした。しかし事は過ぎ去り、父は地所と、銀行に父名義の預金、約一万四千ポンドを所有することになりました」

「ちょっと待って、」ホームズが口を挟んだ、「あなたの話は僕が今まで聞いたうちでも最も驚くべきものの一つになりそうです。伯父さんが手紙を受け取った日付、それと自殺と思われる死の日付を教えてください」

「手紙は1883年三月十日に着きました。死んだのは七週間後、五月二日の夜です」

「ありがとう。どうぞ続けて」

「ホーシャムの資産を引き継いだ父は、私の頼みに応じて、常に鍵がかかっていた屋根裏を注意深く調べました。私たちは真ちゅうの箱をそこに見つけましたが、中身は破棄されていました。ふたの内側には紙のラベルが貼ってあり、そこにはＫ．Ｋ．Ｋ．の頭文字が繰り返され、下に『手紙、覚書、領収書、記録』と書かれていた。こうした種類の書類をオープンショー大佐が破棄したことを示している、と思われました。そのほかには、屋根裏に重要なものは何もなく、伯父のアメリカ生活に関係した書類やノートが大量に散乱しているだけでした。その一部は戦時のもので、伯父が見事に任務を果たし、勇敢な軍人という評判をとっていたことを示していました。ほかは南部の州の復興時代のもので、大部分は政治に関係していました。明らかに伯父は送りこまれてきた渡り北部人の政治家への反対に強く関わっていたのです。

さて、84年の初めに父がホーシャムに来て住むようになり、85年の一月までは何もかも実にうまくいっていました。新年の四日、一緒に朝食の席に着いている時、私は父が鋭い驚きの叫びを上げるのを聞きました。父はそこに座り、片手にはあけたばかりの封筒が、もう一方の広げた手のひらには五つの乾燥したオレンジの種がありました。父はいつも私の伯父に関する話をばかばかしいと言って笑っていましたが、同じものが自分の所へ来て、非常におびえ、当惑しているようでした。

『一体全体これはどういうことなんだ、ジョン？』と父は口ごもりました。

私の心臓は鉛のようでした。『Ｋ．Ｋ．Ｋ．だ』と私は言いました。

父は封筒の内側を見ました。『そうだ』と父は叫びました。『ここにその文字がある。だがその上に書いてあるこれは何だ？』

私は父の肩越しに覗き込んで読みました。『書類を日時計の上に置け』

『何の書類だ？　どの日時計だ？』と父は尋ねました。

『庭の日時計さ。ほかにないもの』と私は言いました。『でも書類はあの破棄したものにちがいないよ』

『ばかな！』父は勇気を振り絞って言いました。『我々は文明の地にいるんだ。そんなばかなまねはごめんだ。こいつはどこから来たんだ？』

『ダンディーからだ』と、私は消印を見て答えました。

『何かばかげた悪ふざけだ』と彼は言いました。『日時計と書類なんか私に何の関係がある？　そんなたわごとを気にするものか』

『僕ならきっと警察に話すけど』と私は言った。

『面倒な思いをしたあげくに笑われるのか。とんでもない』

『じゃあ僕にそうさせて？』

『だめだ、そんなことしちゃいけない。こんなたわごとで空騒ぎしてもらいたくない』

父はとても頑固な人で議論をしてもむだでした。しかし私の心にはずっと虫の知らせのようなものがいっぱいでした。

手紙が来て三日目、父は古い友人で、ポーツダウン・ヒルのとりでの一つの指揮官であるフリーボディー少佐を訪問するために出かけました。私は父が出かけてよかったと思いました。家から離れれば危険から遠のくように思ったからです。しかし、その点、私は間違っていました。父の留守の二日目に私は少佐から直ちに来るように請う電報を受け取りました。父はその近くにたくさんある石灰岩の採掘場の深い穴に落ち、頭蓋骨を砕いて意識もなく横たわっていたのです。私は父の所へ急ぎましたが、意識を回復することもなく亡くなりました。どうやら父はたそがれ時にフェアラムから戻るところで、土地には不慣れだし、採掘場には柵がなかったので、陪審はちゅうちょなく『不測の原因による死』の評決を下しました。父の死に関係する事実をすべて注意深く調べましたが、殺人という考えを示唆するものは何も見つけられませんでした。暴力の形跡も、足跡も、泥棒も、道で目撃された見知らぬ人間の記録もありませんでした。それでも、私が少しも安心しなかったこと、父の周りに何か卑劣な策略が巡らされたと私がほとんど確信したことは言うまでもないでしょう。

私はこのように不吉な相続をしました。どうして処分しなかったのかとお尋ねになるでしょうか？　それは私が、私たちの厄介事はどうしたわけか伯父の生涯に会った出来事に左右されていて、危険はどこの家にいても同じように執拗なものだと充分確信しているからです。

85年の一月に父が死に、それから二年八ヶ月が経過しています。その間私はホーシャムで幸せに暮らし、この災いも私たちの一家から消滅し、前の世代で終わったのであれば、と思い始めたところでした。しかし、慰めを見出すには早すぎたのです。昨日の朝、父を襲ったのとまったく同じ形で打撃が降りかかったのです」

青年はベストからしわくちゃになった封筒を取り出し、テーブルに向かうと、その上に五つの小さな乾燥したオレンジの種を振って出した。

「これがその封筒です」と彼は続けた。「消印はロンドン東部です。内側には父への最後の通信にあった例の言葉がありました。『Ｋ．Ｋ．Ｋ．』とそれから『書類を日時計の上に置け』です」

「あなたはどうしました？」とホームズは尋ねた。

「何も」

「何も？」

「実を言うと」―彼は顔をやせた、白い手に埋めた―「私はどうしようもないと思っているんです。身をくねらせ近寄る蛇の前の哀れなウサギのように感じているんです。私は何か抵抗できない、容赦のない邪悪なものの手に落ちて、どんなに慎重にして警戒しても防ぐことができないように思うのです。

「ツッ！　ツッ！」シャーロック・ホームズは舌打ちした。「行動しなければ、君、でなければ君の負けだ。君を救えるのは活動力だけです。絶望している場合じゃない」

「警察には行きました」

「ああ！」

「でも私の話を笑って聞いていました。私は確信します、手紙はすべて悪ふざけで、私の親族の死は陪審の言うように本当に事故で、警告と関係あるはずもない、と警部は意見を固めてしまったのです」

ホームズは固めた両手のこぶしを空中で振るった。「信じられない愚かさだ！」と彼は叫んだ。

「それでも警官を一人回して私と家に残るようにしてくれました」

「今夜は一緒に来ていますか？」

「いいえ。命令は家にとどまることです」

再びホームズが空中にほえた。

「どうして僕の所へ来たのです、」彼は叫んだ、「それに、何よりも、どうしてすぐに来なかったのです？」

「知らなかったのです。今日になって初めてプレンダーガスト少佐に私の悩みを話し、こちらへ伺うようアドバイスされたのです」

「実際あなたが手紙を受け取ってから二日です。その前に行動すべきだった。今僕たちに提出されたもののほかには証拠はないんでしょうね――何かを示唆する細かいことで役に立つものは」

「一つあります」とジョン・オープンショーは言った。彼はコートのポケットを引っ掻き回し、色あせた青っぽい一片の紙を引っ張り出し、テーブルの上に広げた。「ちょっと記憶に残っているのですが、」彼は言った、「伯父が書類を焼いた日、小さな焼け残った端っこがいくつか灰の中にあったのですが、まさにこの色だったのです。私はただ一枚、これを伯父の部屋の床で見つけたのですが、おそらくほかのものの間から舞い上がり、それで破棄を免れた書類の一つかもしれないと考えてもいいんじゃないかと思うんです。種に言及しているほかには、大いに役に立つのかわかりませんが。私自身は個人的な日記かなにかの一ページと思ってます。筆跡は間違いなく伯父のものです」

ホームズはランプを動かし、私たち二人でその紙にかがみこんだが、そのびりびりの端を見れば、実際それが帳面から破られたことがわかった。見出しには『1869年三月』とあり、その下には以下の謎の記述があった。

4日、ハドソン来る。いつもの綱領。  
7日、セント・オーガスティンのマコーリー、パラモア、ジョン・スウェインに種を送る。  
9日、マコーリー消える。  
10日、ジョン・スウェイン消える。  
12日、パラモアを訪ねる。万事上首尾。

「ありがとう！」とホームズは言い、その紙をたたんで客に返した。「さてあなたはもう一瞬たりとも絶対にむだにしてはいけません。今のお話の検討にもさく時間はないのです。あなたは直ちに帰宅し、行動を取らなければなりません」

「何をするのでしょう？」

「するべきことはただ一つです。すぐにやらなければいけません。今見せていただいたその紙片をお話の真ちゅうの箱に入れるのです。また、ほかの書類はすべて伯父さんが燃やしてしまった、残っているのはこれ一枚だけだ、と書いたメモも入れなければいけません。相手を確信させる言葉で断言しなければだめです。それがすんだら、すぐにその箱を指示通りに日時計の上に置くのです。わかりましたか？」

「完全に」

「今は復讐とか、そういったようなことは考えないことです。それは法の力でできると僕は思いますが、こちらは網を編まなくてはいけませんが、あちらは既に編み終えているのです。第一に考慮すべきはあなたをおびやかす差し迫った危険を取り除くことです。次に、謎を解明し、犯人たちを罰するのです」

「ありがとうございます」と若者は言い、立ち上がり、急いでオーバーを着た。「おかげさまで希望に生き返った思いです。間違いなくご忠告通りにします」

「一瞬もむだにしないでください。それから何より、途中も気をつけてください。あなたが本当に切迫した危険におびやかされていることに疑う余地はないと僕は考えます。どうやって帰ります？」

「ウォータールーから列車で」

「まだ九時にならない。通りは込んでいるだろうし、安全だろうと思います。それでもよほど厳重に警戒しないと」

「武器を持ってます」

「それは結構。明日は僕もあなたの件に取り掛かります」

「ではホーシャムでお会いできますね？」

「いえ、あなたの秘密はロンドンにあります。僕が探すべきはここです」

「では私が一両日中に箱と書類についてのニュースを持って伺います。あなたのご忠告を必ず一から十まで守ります」彼は私たちと握手をして別れを告げた。外では相変わらず風が吹きぬけ、雨が窓にはねかかり、パラパラ音を立てていた。この不思議な、無法な話は狂った世界のただ中から私たちの所へ――嵐の中の一枚の海藻のように吹き寄せられ、今再びその中へ吸い込まれていくようだった。

シャーロック・ホームズは頭を前方に垂れ、目を暖炉の赤い輝きに向け、しばらく黙って座っていた。それから彼はパイプに火をつけ、椅子の背にもたれ、紫煙の輪が次々と天井まで互いを追っていくのを見ていた。

「ねえワトソン、」やっと彼が言った、「僕たちの事件にもこれほど異様なものはなかったね」

「たぶん、四つの署名を除けば」

「まあ、そうだね。たぶんそれを除けば。それでもね、ジョン・オープンショーはショルトー兄弟よりもさらに大きな危険の中を歩いているように思えるんだ」

「しかし君、」私は訊いた、「その危険が何なのか、明確な考えがまとまっているのかね？」

「その性質については疑問の余地もないくらいだ」と彼は答えた。

「ではそれは何なんだ？　そのＫ．Ｋ．Ｋ．というのは誰で、なぜこの不幸な一家につきまとうんだ？」

シャーロック・ホームズは目を閉じ、ひじを椅子の腕にのせ、両手の指先を合わせた。「理想の理論家は、」彼は言った、「ひとたび、たった一つの事実を余すところなく示されれば、そこに至る一連の出来事のすべてだけでなく、そこから生じる結果すべてを、その事実から推論するものなのだ。キュヴィエがたった一つの骨を熟視することで動物の全容を正確に描写できたように、一連の出来事のうちの一つの環を完全に理解した観察者はほかの環もすべて、前段も後段も精確に述べることができるはずだ。我々はまだ理性のみが成果に到達できることを理解していない。難問は研究の中で解決されうるが、感覚を用いて解を求める連中は皆それに失敗している。しかし、技術を最高度にまで高めるには、理論家が知りえた事実すべてを活用できることが必要だ。このこと自体には、君にも容易にわかるだろうが、あらゆる知識を所有することを含むが、それは、この無償教育と百科事典の時代においても、なかなかめったに成し遂げられることではない。しかし、自分の仕事に役立つと思われる知識をすべて持つことはそれほど不可能ではないし、僕の場合そうしようと努力してきた。僕の記憶が正確なら、君は前に、友達になった初めの頃さ、僕の守備範囲を実に的確に定義したね」

「ああ」と私は笑いながら答えた。「妙な記録だったね。哲学、天文学、政治学は零点だったよ、確か。植物学は気まぐれ、地質学はロンドンから五十マイル以内の泥汚れに関しては深遠、化学は常軌を逸するほど、解剖学は非体系的、扇情的文学及び犯罪記録は比類ない、バイオリン奏者、ボクサー、剣士、法律家、コカインと煙草で自分に毒を盛っている。こういったところが私の分析の主要な点だったと思うが」

ホームズは最後の項目ににやりとした。「まあ、」彼は言った、「あの時と同じ事を今も言うけどね、人は自分の小さな脳の屋根裏に使いそうな家具をすべて備えておくべきだし、残りのものは必要な時に取ってこられるように自分の図書館の納戸に蓄えておくといい。さて、今夜僕たちに託されたような事件には、僕たちの総力を招集する必要があるのは間違いない。君の横の棚の上にあるアメリカ百科事典のＫを取ってくれないか。ありがとう。さあ、一つ状況を考慮し、そこから何が推論されるか見てみよう。まず第一に、僕たちは、オープンショー大佐には何か非常に強い、アメリカを離れる理由があったという有力な仮定から始めてもよかろう。彼ぐらいの歳の人間は、習慣をすべて変えたり、進んでフロリダの魅力的な気候をイギリスの田舎町の寂しい生活と取り替えたりしない。イングランドに来て極度に孤独を好んだことは彼が誰か、もしくは何かを恐れていたと思わせるが、そこで僕たちは、実際的な仮説として、誰かもしくは何かを恐れて彼はアメリカから追い立てられたと決めてかかっていいだろう。彼が何を恐れたのかについては、彼自身とその相続者たちが受け取った恐るべき手紙を検討することによって推測するよりない。それらの手紙の消印に気づいたかい？」

「最初はポンディシェリーから、二番目はダンディーから、三番目はロンドンからだった」

「イースト・ロンドンからだ。それから何を推測するね？」

「みんな港町だ。書いた者は船に乗っていた」

「すばらしい。もう僕たちは手がかりをつかんだね。疑いの余地なく、どうやら―かなりの公算で―書いた者は船に乗っていた。さて今度は別の点を検討しよう。ポンディシェリーの場合、脅しと遂行の間に七週間が経過したが、ダンディーならほんの三、四日だった。それが何かを示唆しないかな？」

「より遠距離を旅したから」

「しかし手紙が着くまでの距離も遠い」

「となると私には論旨がわからないよ」

「少なくともその男、あるいは男たちが乗った船は帆船であると推定できる。彼らは任務に取り掛かる時、常に自分たちの前に奇妙な警告だか象徴だかを送るようだ。前触れがダンディーから来た時はすぐに行為が続いたじゃないか。彼らが蒸気船でポンディシェリーから来たなら、手紙とほとんど同時に着いたはずだ。ところが、実際には七週間が経過した。その七週間は手紙を運んだ郵便船と書き手を運んだ帆船の違いを表していると僕は思うんだ」

「それはありうるね」

「それ以上だよ。おそらくそうなんだ。もうわかるだろう、今度の場合、きわめて切迫していることも、なぜ僕がオープンショー青年にしきりに注意するよう促したかも。不幸は常に差出人がその距離を旅するのに要する時間の終わりに降りかかっている。しかし今度のはロンドンからだ、そうなると僕たちは猶予を当てにするわけにいかないんだ」

「なんてこった！」私は叫んだ。「どういう意味なんだ、この容赦ない迫害は？」

「オープンショーが持っていた書類は明らかに、帆船の人物もしくは人物たちにとってきわめて重要なものだ。連中が複数にちがいないのもまったくはっきりしていると思う。検視陪審を欺くようなやり方で二つの死をもたらすことは男一人ではできなかったろう。数人いて、それも力量と決断力のある連中にちがいない。彼らの書類を彼らは手に入れようとしている、その保有者が誰であろうとも。こういうわけで、わかるね、Ｋ．Ｋ．Ｋ．というのは個人のイニシャルではなく、ある結社の象徴となるわけさ」

「といってどんな結社のだね？」

「君はあの―」シャーロック・ホームズは前にかがみこみ、声を低めて言った―「君はあのクークラクスクランを聞いたことがないかい？」

「ないが」

ホームズは膝の上で事典のページをめくった。まもなく彼は「ここにある」と言った。

クークラクスクラン。名の由来は銃の撃鉄を起こす時を思わせる擬音から。この恐るべき秘密結社は南北戦争後、南部の州の元南軍の兵士たちにより作られ、急速に同国のさまざまな地域、とりわけテネシー州、ルイシアナ州、南北カロライナ州、ジョージア州、フロリダ州に地方支部を形成した。政治目的、主として黒人有権者を威嚇し、その見解に反対する者たちを殺害し、国から追い出すためにその力をふるった。その非道な行為に先立ち、狙われた者には常に風変わりだが一般に知られた形で警告が送られた―オークの葉のついた小枝の地域もあれば、メロンやオレンジの種の地域もある。これを受け取った犠牲者は公然とそれまでのやり方を放棄するか国から逃げるよりなかった。問題に立ち向かおうとすると、確実に死が、いつも不思議な、思いがけない方法で襲った。結社の機構は完璧であり、その方法が組織的だったため、これに対して無事に持ちこたえたという事例、あるいはその暴力の加害者が正しく突き止められたという事例はほとんど記録されていない。合衆国政府及び南部の上流階級社会の努力にもかかわらず、組織は長期間繁栄した。結局、1869年、運動は突然のごとく崩壊したが、その後も同様のことが散発的に発生している。

「気がつくだろう、」ホームズは本を下に置いて言った、「結社の突然の分解が、書類とともにオープンショーがアメリカから消えたのと同時に発生していることに。たぶん因果関係があったのだろう。中でもより執念深い連中が彼とその一族を追跡するのも不思議はない。この記録や日誌が南部の最初のメンバーの一部を巻き込むことになるかもしれないし、これを取り戻すまで夜も安心して眠れない者が多数いるかもしれないのはわかるだろう」

「それでは私たちが見たページは――」

「思った通りのことだ。確かこんなふうに書かれていたね、『Ａ、Ｂ、Ｃに種を送った』―すなわち、結社の警告を彼らに送った。それから連続してこう書かれていた、ＡとＢが消えた、つまり国を離れた、そして最後にＣを訪ね、Ｃには不吉な結果になったんじゃないかな。さて博士、僕たちはこの暗闇にいくらか光を当てられたと思うが、当面オープンショー青年にとって唯一のチャンスは僕が彼に言ったことをすることと信じるよ。今夜はもう言うべきこともするべきこともないから、僕のバイオリンを取ってくれないか、三十分ばかりひどい天気のことやそれよりもっとひどい我々の同胞の行状のことを忘れる努力をしようよ」

朝には晴れ、おぼろなベールがこの大都会に垂れ込めていたものの、太陽は柔らかな輝きを放っていた。私が下りていくと、シャーロック・ホームズはもう朝食を取っていた。

「待たずに始めて悪かったね」と彼は言った。「あのオープンショー青年の事件を調べるんでこれからとても忙しい一日になると思うんでね」

「何をするつもりだね？」と私は訊いた。

「それは最初の問い合わせの結果に大いに左右されるだろうね。結局ホーシャムまで行かなければならないかもしれないな」

「最初に行くんじゃないのか？」

「ああ、どうしてもシティーから始めなくてはね。ベルを鳴らしたまえ、メイドが君のコーヒーを持ってくるよ」

待つ間、私はテーブルからまだ広げられていない新聞を取り上げ、目を通した。ある見出しに目を向けた私は胸がゾッとした。

「ホームズ、」私は叫んだ、「手遅れだよ」

「ああ！」彼はカップを置いて言った、「恐れていた通りだ。どんなふうにやられた？」彼は静かに話していたが、深く心を痛めているのが私には見て取れた。

「オープンショーの名と『ウォータールー橋近くの悲劇』の見出しが目に飛び込んだんだ」以下がその記事である。

昨夜九時から十時の間、Ｈ区域の、ウォータールー橋近くの当番であるクック巡査が助けを求める叫び声と水に落ちる音を聞いた。しかし、非常に暗い嵐の夜であったため、数人の通行人が助けようとしたものの救助はまったく不可能だった。しかし警報が発せられ、水上警察の救援を受け、結局遺体は回収された。それは若い男性で、ポケットに発見された封筒からジョン・オープンショーという名の、ホーシャムの近くの住人であると判明した。男性がウォータールー駅発の最終列車に間に合うよう急いでいて、急いでいるのと極度に暗かったために道を見失い、蒸気船用の小さな桟橋の端を踏み越えたものと推測される。遺体に暴力の跡はなく、疑いなく故人は不運な事故の犠牲者であり、それは当局に川岸の桟橋の状況に対する注意を促すことになろう」

私たちは数分間黙って座っていたが、ホームズはかつて見たことがないほど力を落とし、動揺していた。

「自尊心が傷つくよ、ワトソン」と、やっと彼は言った。「そんなものは取るに足らない感情さ、確かに、でも自尊心が傷つくんだ。今やこれは僕個人の問題となるし、健康である限り、絶対僕の手でこの一味を捕らえてやる。あの男は僕の助けを求めて来たのに、僕が彼を死に追いやってしまうとは――！」彼はぱっと椅子から立ち、動揺を抑えきれずに部屋を歩き回っていたが、その血色の悪い頬には赤みがさし、長くやせた両手を握ったり開いたりしていた。

「狡猾なやつらにちがいない」と彼は声高に言った。「どうやったら彼をそこまでおびき寄せることができたのか？　北岸通りは駅への最短の道筋じゃないからね。橋は疑いなく、たとえあんな晩でも、連中の目的には人が多すぎる。まあ、ワトソン、長い目で見れば誰が勝つかわかるだろう。さて、僕は出てくるよ！」

「警察へかい？」

「いや。僕自身が警察にならなくては。僕がクモの巣を張り終えた時、連中がハエを捕まえるかもしれないが、それは後のことだ」

終日私は自分の仕事に従事し、夕方遅く、ベーカー街へ戻った。シャーロック・ホームズはまだ帰っていなかった。十時近くなって彼は青ざめ、疲れ果てた様子で部屋に入ってきた。彼はサイドボードに歩みより、パンの塊から一片を引きちぎり、がつがつとそれをむさぼり、ぐいと水を一飲みしてそれを流し込んだ。

「腹がへってるのか」と私は言った。

「飢え死にしそうだ。忘れていたんだ。朝食から何も食べてないんだ」

「何も？」

「一口もね。そんなこと考えるひまもなかったんだ」

「それでどう、うまくいったかい？」

「まあね」

「手がかりをつかんだんだね？」

「この手のうちに握ったよ。オープンショー青年の仇が取れるのも遠くはあるまい。そうだ、ワトソン、連中自身の非道なトレードマークを連中に送りつけてやろうじゃないか。うまい思いつきだ！」

「どういうことだ？」

彼は戸棚からオレンジを取り、小さく裂き、テーブルの上に種を搾り出した。そのうち五つを取り、彼は封筒に押し込んだ。その折り返しの内側に彼は『Ｊ．Ｏ．に代わりＳ．Ｈ．』と書いた。それから封をし、宛名は『ジョージア州サバンナ、帆船ローン・スター、ジェイムズ・カルフーン船長』とした。

「港に入ったところをこれが待ち構えているわけだ」と彼はくすくす笑いながら言った。「やつは夜も眠れないだろうよ。ここに自分の悲運の確実な前兆を見るだろう、オープンショーがそうだったのと同様に」

「それでそのカルフーン船長とは何者だね？」

「一味のリーダーだ。ほかのもきっと捕まえるがね、こいつが最初だ」

「でもどうやって突き止めた？」

彼はポケットから日付と名前でいっぱいになった大きな紙を一枚取り出した。

「僕はまる一日かけてね、」彼は言った、「ロイドの古い書類のファイルや登記簿をあたって、83年の一月と二月にポンディシェリーに寄港したすべての船のその後の経路をたどったんだ。その間に報告された有望なトン数の船は三十六あった。このうちの一つ、ローン・スターがすぐに僕の注意を引いた。既にロンドンを離れたと報告されていたが、それは合衆国の州のひとつにつけられた名前だからね」

「テキサスだったかな」

「その確信はなかったし、今もないがね、アメリカから来た船にちがいないのはわかった」

「それから何を？」

「ダンディーの記録を捜し、帆船ローン・スターが85年の一月にそこにいたのを見つけた時、僕の疑いは確かなものとなった。そこで僕は現在ロンドンの港にいる船について尋ねた」

「いたかい？」

「ローン・スターは先週ここに着いていた。僕はアルバート・ドックまで行き、船が今朝早くの潮に運ばれて川を下り、サバンナへの帰路に着いたと知った。グレイヴズエンドに電報すると、船は少し前に通り過ぎたところだったので、風は東よりだから、もうグッドウィンを過ぎてワイト島からもそう遠くあるまい」

「ではどうするつもりだね？」

「ああ、奴を捕まえるさ。聞いたところでは奴と仲間二人だけが船に乗っている生粋のアメリカ人だ。残りはフィンランド人とドイツ人だ。またそれはみんなで三人でゆうべ船を離れたそうだ。船荷を積んでいた港湾労働者からそう聞いたんだ。彼らの帆船がサバンナに着くまでに郵便船がこの手紙を運んでいるだろうし、こちらでこの三人の紳士たちが殺人罪でお尋ね者になっているという知らせが海底電信でサバンナ警察に届いているだろう」

しかしどんなに優れていても人間の立てた計画には常に欠陥があるもので、ジョン・オープンショーの殺害者たちは、彼ら同様に狡猾で断固たるもう一人の人間が彼らを追跡していることを示すはずのオレンジの種を受け取らぬ運命にあった。この年の秋分の大風は非常に長く続き、非常に厳しいものだった。私たちはサバンナのローン・スターの知らせを長い間待ったが、何一つ私たちの所へ届かなかった。やっと私たちの耳に入ってきたのは、どこか大西洋のはるか沖合いで、波間に揺れる砕けた帆船の船尾の柱に、『Ｌ．Ｓ．』の文字が刻まれているのが見られたことで、それがローン・スターの運命について私たちの知りうるすべてなのである。

# 唇のねじれた男

セントジョージズ神学校長、故イライアス・ウィットニー神学博士の弟、アイザ・ウィットニーはひどいアヘン中毒になっていた。私の知るところでは、彼のこの習慣はカレッジ時代の愚かな酔狂が高じたものだった。ド・クインシーの夢と感覚に関する記述を読んだ彼は、同じ効果を引き起こそうとして煙草をアヘンチンキに浸したのだ。彼は多くの人と同様、この習慣が得るは易く、取り除きがたいものと知り、長年にわたって麻薬の奴隷状態を抜けられず、友人や親戚の恐怖と同情の対象になっていた。今の彼は黄色い不健康な顔、うなだれたまぶた、小さな瞳で、全身を椅子に縮こまらせ、高潔さなど見る影もなく落ちぶれ果てていた。

ある晩―89年の六月だった―私の所のベルが鳴った。誰しもあくびを始めて時計に目をやる時刻だった。私は椅子の上で居住まいを正し、妻は針仕事を膝に下ろして小さな顔に失望を浮かべた。

「患者さんよ！」と彼女は言った。「あなた出かけなければならないわ」

一日疲れて戻ったばかりの私はうめいた。

ドアが開く音、あわただしい短い言葉、それからリノリウムの上を急ぐ足音が聞こえた。私たちの部屋のドアがパッと開き、暗色の生地の服を着、黒いベールをかけた婦人が入ってきた。

「こんなに遅く伺ってごめんなさい」と彼女は話し始めたが、そこで突然自制を失い、妻に駆け寄って首に腕を回し、その肩で涙に咽んだ。「ああ、私とても困ってるの！」と彼女は叫んだ。「どうしても少し助けが必要なの」

「まあ、」妻が彼女のベールを上げて言った、「ケイト・ウィットニーじゃないの。びっくりするじゃない、ケイト！　あなたが入って来た時誰だかちっともわからなかったわ」

「どうしていいかわからなくて、それでまっすぐあなたの所へ」いつもそうだった。人々は悲しいことがあると、灯台へ向かう鳥のように妻の所へ来るのだった。

「来てくれて嬉しいわ。さあ、あなた少しワインと、水を飲まなくちゃいけないわ。それからここにゆったりと座って、それを話してちょうだい。それともジェイムズには寝室に行ってもらったほうがいいかしら？」

「ああ、いえ、いいえ！　先生の助言と助力も必要なの。アイザのことよ。二日も家をあけてるの。彼のことでひどくおびえてるの！」

彼女が夫の厄介ごとについて私たちに、私には医者として、妻には学校時代からの旧友として話すのはこれが初めてではなかった。私たちは思いつく限りの言葉で彼女をなだめ、慰めた。彼女は夫の居場所を知っていたのか？　私たちが彼女の元へ夫を連れ戻すことはできそうだったのか？

そのようだった。彼女は、夫が最近、どうかすると、シティーの東の端のアヘン窟を利用するという確かな情報を持っていた。これまでは彼の乱行も常に一日にとどまり、晩にはひきつり、疲れて戻ってきていた。しかし今度はその魔力は四十八時間に及び、彼はそこで、おそらくドックのくずどもに混ざって横になり、毒を吸い込んでいるか、眠って薬を抜いているのだった。そこで彼は見つかるはず、と彼女は確信していた。アッパー・スワンダム・レーンのバー・オブ・ゴールドである。しかし彼女に何ができる？　どうして彼女、若い臆病な女がそんな場所に足を踏み入れ、ごろつきに囲まれた夫を引き連れて出られよう？

その通りだったし、もちろんそれには一つしか方法はなかった。私がその場所まで彼女に付き添ってはいけないだろうか？　それから、さらに考えてみれば、いったいなぜ彼女が行かなければならないのか？　私は彼の主治医だし、それだけ彼に対する影響力もある。私一人ならうまくやれる。私は彼女に、彼が本当に彼女の言う所番地にいるなら二時間以内に家へ送り届ける、と約束した。それで十分のうちに私はひじかけ椅子と気持ちのよい居間を後にし、東に向け、ハンサム馬車に乗って疾走していた。奇妙な用向きだ、とその時はそのように思ったのだが、これがどれほど奇妙なことになるのか、知る由もなかった。

しかし私の冒険の第一段階に大した困難はなかった。アッパー・スワンダム・レーンは汚い路地で、ロンドン橋の東の、川の北側に並ぶ高い岸壁の裏に隠れている。仕事着の店とジンの店の間を、洞穴の入り口のような黒い割れ目へ続く急な階段を下りていくと、捜していたアヘン窟が見つかった。私は馬車に待つように命じ、絶え間なく酔っ払いが歩くので中央が磨り減ってくぼんだ階段を下まで下りた。そしてチラチラする石油ランプの明かりでドアの掛け金を見つけ、私は長い、天井の低い部屋へ進んでいった。アヘンがもうもうとして茶色く煙り、木のベッドが移民船の船首楼のように段々になっていた。

暗がりの中にぼんやりとうかがえる人々は、肩を丸め、膝を曲げ、頭をのけぞらせ、あごで上を指すといった、奇妙な、異様な姿勢で横たわり、そこここの暗い、どんよりした目が新来者に向けられていた。それぞれの黒い影の中に小さな赤い光の輪が時に明るく、時にほのかにチラチラしていた。金属パイプの火皿の中で、毒の火が燃え上がったり衰えたりしていたのだ。大方は黙って横になっていたが、ぶつぶつひとり言を言う者もあり、奇妙な、低い、一本調子の声で話を交わす者たちもあった。彼らの会話は奔流となり、それから突然消えていって沈黙し、それぞれが自分の考えをつぶやき、隣の言葉を心に留めなくなるのだった。向こうの端には小さな火鉢に石炭が燃えており、そのそばの三脚の木の椅子には背の高い、やせた老人が座り、あごを両のこぶしにのせ、ひざにひじをつき、火を見つめていた。

私が入っていくと、黄ばんだマレー人の案内係が私のためのパイプと必要な麻薬を持って急ぎ、空のベッドに私を手招きしていた。

「ありがとう。客で来たんじゃないんだ」と私は言った。「友人がここにいてね、アイザ・ウィットニーさんだが、彼と話がしたいんだ」

私の右手に動きがあり、叫び声がして、暗がりを覗き込むと、青ざめ、やつれ、だらしなくなったウィットニーが私を見つめているのが見えた。

「なんと！　ワトソンじゃないか」と彼は言った。彼は哀れな無気力状態で、体中の神経を震わせていた。「ねえ、ワトソン、何時だい？」

「十一時近くだ」

「何日の？」

「金曜日だ、六月十九日の」

「しまった！　水曜だと思った。水曜だよう。どうして脅かしたりするんだ？」彼はがっくりと顔を腕の上に垂れ、甲高い声ですすり泣きを始めた。

「いいかね、君、金曜日なんだ。奥さんは二日間君を待っていたんだ。恥ずかしいじゃないか、君！」

「まったくだ。でも君は混ぜこぜにしてるよ、だって僕はほんの数時間ここにいただけだよ、パイプ三服か四服―いくつか忘れた。でも君と家に帰ろう。ケイトをびっくりさせるつもりはなかったんだ。かわいそうなケイト。手を貸してくれ。馬車はあるかい？」

「ああ。待たせてある」

「じゃあそれに乗ってこう。だがいくらか借りがあるにちがいない。いくら借りてるか調べてくれ、ワトソン。すっかり気分が悪いんだ。自分じゃ何もできない」

私は二列の段ベッドの間の狭い通路に沿って歩き、不愉快な、ぼうっとさせる麻薬の煙を吸わないように息を殺し、支配人を探した。火鉢のそばに座る背の高い男の横を通った時、突然服の裾を引かれ、低い声が『通り過ぎたら振り返ってこっちを見るんだ』とささやいたように思われた。その言葉は明白に私に向けられていた。私はチラッと見やった。それは傍らの老人から聞こえたにちがいなかったが、けれども彼は相変わらず忘我の境で座り、やせ細り、しわだらけで、年で腰が曲がり、アヘンのパイプは極度の倦怠で指から落ちてしまったかのように、膝の間からぶら下がっていた。私は二歩前へ進んで振り返った。私は驚きの叫び声を急に上げないよう、全力で自制した。彼が背を向けていたので私のほか誰も彼が見えなかった。その姿が大きくなり、しわが消え、鈍い目に輝きを取り戻し、火のそばに座り、驚く私ににやりとしたのは、ほかでもない、シャーロック・ホームズだったのだ。彼はかすかな合図で私を近寄らせ、直ちに、顔を再び皆のほうへ半ば振り向け、同時によぼよぼした、唇にしまりのない老いぼれに落ち込んだ。

「ホームズ！」私はささやいた。「いったいこのアヘン窟で何をやっているんだ？」

「できる限り小声で」と彼は答えた。「僕は耳はすごくいいんだ。すまないが君、あの君の愚かな友達を追い払ってしまって、ちょっと君と話ができたらとても嬉しいんだがね」

「外に馬車がある」

「ではどうかそれで彼を家に帰してやってくれ。あの男は信用して大丈夫だよ。あれだけぐったりしていたら悪さはできそうもないからね。君も御者に奥さんへの手紙を届けさせてね、僕と運命を共にするからって言ったほうがいいと思うよ。外で待っていてくれたら五分で一緒になるよ」

シャーロック・ホームズの頼みはいつも非常にはっきりしたものであり、穏やかな支配的態度で持ち出されるので、断るのは難しかった。といっても、ウィットニーを馬車に閉じ込めさえすれば私の使命は終わったも同然である、と私は思った。それにそれさえなければ友と一緒に風変わりな冒険ができるのは私にとって何よりのことだった。彼にはそれがあたりまえの状態だったが。数分で私は短い手紙を書き、ウィットニーの勘定を払い、彼を馬車まで連れて行き、闇を走り去る彼を見送った。まもなくよぼよぼの人影がアヘン窟から現れ、私はシャーロック・ホームズとともに通りを歩いていた。通り二つ分、彼は背中を曲げ、引きずる足どりも心もとなく歩いた。それから彼はすばやくあたりに目をやり、からだをまっすぐに伸ばし、腹の底から笑い出した。

「たぶん君は、ワトソン、」彼は言った、「僕がコカインの注射やら、君が医学的見解を聞かせてくれた、ほかにもあるちょっとした欠点すべてに加えてアヘンまで吸い始めたと思ったろうね」

「確かに君があそこにいるのを見つけて驚いたよ」

「だが君を見つけた僕ほどじゃあないさ」

「私は友人を捜しに来たんだ」

「僕は敵を捜してだ」

「敵？」

「そうだ。僕の天敵、というか、僕が天敵というべきかな。手短に言うと、ワトソン、僕は非常に驚くべき調査の真っ最中でね、あの飲んだくれどもの支離滅裂なとりとめのない話の中に手がかりを見つけようと思って今までそうしていたんだ。あそこで正体がばれていたら僕の命も一時間ともたなかったろう。今まで自分の都合で利用していたあそこだがね、その経営をしている悪党のインド人水夫は僕に復讐を誓ったことがあるんだ。あの建物の裏にはポールズ・ウォーフの角近くにはねぶたがあって、闇夜にそこから出て行ったものが何かについては奇妙な話がいくつかあるんだ」

「何だって！　死体だって言うんじゃないだろうな？」

「そうだ、死体だよ、ワトソン。あのアヘン窟で殺されているかわいそうなやつ一人につき千ポンドもらっていたら、金持ちになってるんだがね。川沿い全体を見てもあれは最も凶悪、危険な落とし穴で、ネヴィル・セントクレアはあそこに入ってもう二度と出てこないんじゃないかと思うんだ。しかし僕たちもここで馬車に乗ったほうがいいな」彼は人差し指二本を歯の間にくわえ、鋭い口笛を鳴らした―その合図に同様の口笛が遠くから答え、まもなく車輪のがらがらいう音と馬のひづめの金属音が続いた。

「さて、ワトソン」とホームズが言った。背の高い二輪馬車は闇の中を突進し、側灯から放たれる黄色い光が二本の黄金のトンネルになっていた。「一緒に来てくれるね？」

「私が役に立つなら」

「おお、信頼できる仲間は必ず役に立つ。記録者とあればなおさらだ。スギ屋敷の僕の部屋は二人用だし」

「スギ屋敷？」

「そう。セントクレア氏の家だよ。調査をする間、そこに泊まっているんだ」

「それでどこにあるんだ？」

「ケント州のリーの近くだ。これから七マイルの遠乗りだよ」

「しかし私には何もわからないよ」

「そりゃそうだろう。すぐにすべてわかるさ。こっちに飛び移れ。もういいよ、ジョン。君は必要ない。さ、半クラウンだ。明日十一時ごろ僕を捜してくれ。彼女の言うことを聞いてやるんだね。じゃ、また！」

彼は馬に鞭を入れ、私たちは果てしなく続く、薄暗く、人のいない通りを飛ばしていった。通りは次第に広くなり、やがて私たちは下を濁った川がゆっくりと流れる、欄干の支柱の間隔の広い橋を飛ぶように越えた。その向こうにはまた単調なレンガとモルタルがごたごたと続き、その静けさを破るのは警官の重い、規則正しい足音か、宵っ張りの酒盛りの一行か何かの歌声、叫び声だけだった。沈滞したちぎれ雲が空をゆっくりと流れ、星はそこここに一つ、二つ、雲の切れ目からかすかにきらめいていた。ホームズは無言で馬を駆り、首を深く垂れ、物思いにふける様子だったが、私のほうは彼の隣に座り、彼の能力にそれほどの負担をかけているらしいこの新たな探求がどんなものなのか知りたくてたまらなかったけれども、彼の思考の流れに口をさしはさむ勇気はなかった。私たちが既に数マイル走り、郊外の住宅地帯の外べりに達しようという時、彼はからだを揺すり、肩をすくめ、自分のしていることが最善であると確信した、といった様子でパイプに火をつけた。

「君には沈黙というすばらしい才能があるね、ワトソン」と彼は言った。「だから君は仲間としてきわめて貴重なんだ。まったく、話しをする人がいて僕は実にありがたいよ。僕の考えていることはあまり愉快じゃないんでねえ。今夜玄関で会った時にあのかわいい女性に何と言ったものかと思っているんだ」

「私が何も知らないのを君は忘れているよ」

「ちょうどリーに着くまでに事件に関する事実を話す時間がある。ばかげているほど単純に見えるんだが、それなのに、どういうわけか、少しもはかどらない。確かに糸はたくさんあるんだが、その端をこの手につかむことができないんだ。では、君に事件についてはっきりと簡潔に話すよ、ワトソン、もしかしたら僕には真っ暗な所に君は火花を見るかもしれない」

「続けてくれたまえ」

「数年前――はっきり言うと1884年の五月――リーにネヴィル・セントクレアという金持ちらしい紳士がやってきた。彼は大きな家を手に入れ、立派な庭を造り、大体において上等な暮らしぶりだった。次第に近所に友達もでき、1887年には地元の醸造業者の娘と結婚をし、今では二人の子供がいる。彼は無職だったが、いくつかの会社に関与し、通例、朝ロンドンへ出かけ、毎晩キャノン街から五時十四分発で戻った。セントクレア氏は現在三十七歳で、節制家で、よい夫で、子供にはとても優しく、誰にも好かれている。付けくわうるに、現時点で彼の借金は、確認できた限りで、総額八十八ポンド十シリングになるが、彼にはキャピタルアンドカウンティーズに二百二十ポンドの預金がある。従って金銭の問題が彼の心の重荷になっていたと考える理由はない。

去る月曜日、ネヴィル・セントクレア氏は、大事な仕事を二つやらなければならない、男の子に積み木の箱を持って帰る、と出かける前に言って、いつもよりやや早く市中に入った。さて、まったく偶然に、ほかならぬこの月曜日のこと、彼が出かけてまもなく、彼の妻も、待っていた価値ある小包がアバディーン汽船の事務所に届いているという電報を受け取った。ところで、君がロンドンに精通していればわかるだろうが、その会社の事務所はフレズノ街にあるが、この通りは君が今晩僕を見つけたスワンダム・レーンのところで分岐する。セントクレア夫人は昼食を取り、シティーへ出発し、いくつか買い物をし、それから会社の事務所に行き、小包を受け取り、きっかり四時三十五分には駅への帰り道、スワンダム・レーンを歩いている、ということになった。ここまではわかるね？」

「きわめて明瞭だ」

「覚えてるかな、月曜日は非常に暑い日で、セントクレア夫人はゆっくり歩いていたが、あの界隈にいるのがいやだったので、馬車が見あたらないかとまわりに目をやっていた。そうやってスワンダム・レーンを歩いていた時だ、彼女は突然叫び声のようなものを聞き、三階の窓から夫が彼女を見下ろし、彼女を差し招くかのように見えた時にはぞっとした。窓は開いていて、彼女は彼の顔をはっきりと見たが、それはひどく動揺していたそうだ。彼は半狂乱で彼女に向かって手を振り、それから突然窓から見えなくなったので、彼女には彼が何か後ろからの力に抵抗できずに引き剥がされたように思えた。敏感な女性の目に強く感じられた奇妙な点は、彼がロンドンに出る時と同じような黒っぽい上着を着ていたにもかかわらず、カラーもネクタイも着けていないことだった。

彼に何かまずいことがあったと確信し、彼女は階段を駆け下り――というのもその家はほかでもない、今晩君が僕を見つけたアヘン窟だったのだ――正面の部屋を駆け抜け、二階へ行く階段を昇ろうとした。しかし階段の下で彼女は僕が今さっき話したインド人の悪党に出くわし、そいつが彼女を突き戻し、それからそこで助手をやっているデンマーク人に手伝わせて彼女を表に追い出した。狂わんばかりの疑念と恐怖でいっぱいになり、彼女があの横丁を駆けていくと、まったく幸運なことに、フレズノ街を警部一人を含む多数の警官が区域の巡回に向かうところに出会った。警部と警官二人が付き添って彼女は戻り、経営者が抵抗し続けたけれども、彼らはセントクレア氏が最後に見られた部屋まで通った。彼は影も形もなかった。それどころか、その階全部を見ても誰一人見つからず、ただ、ひどく醜い顔の哀れな不具の男がいたが、これはそこを住まいにしていたらしい。この男もインド人もその午後はずっと表側の部屋にほかに誰一人いなかったと頑強に主張した。彼らの否定があまり断固としていたので、警部の気持ちもぐらつき、セントクレア夫人が思い違いをしていると信じかけた時だった。叫び声とともに彼女がテーブルの上に置いてあった小さなモミでできた箱に飛びつき、そのふたをもぎ取った。そこから転がり出たのは子供の積み木だった。彼が土産にすると約束したおもちゃだ。

この発見と不具の男が見せた明らかなろうばいが、警部に事は重大であると認識させた。部屋は入念に調査され、その結果はことごとく極悪非道な犯罪を示していた。表側の部屋は質素な家具のある居間で、船着場の裏側に面した小さな寝室に通じていた。船着場と寝室の窓の間には狭い、細長い地面があり、干潮の時は乾いているが満潮になると少なくとも四フィート半の水に覆われる。寝室の窓は広く、下から邪魔するものはない。調べると窓敷居の上に血の痕跡が見られ、寝室の木の床の上にもいくつか点々と落ちていた。表側の部屋のカーテンの後ろにはネヴィル・セントクレア氏の着ていたものが上着を除いてすべて押し込まれていた。靴、ソックス、帽子、時計―すべてそこにあった。これらの衣類に暴力の痕跡はなく、またほかにネヴィル・セントクレア氏のいた形跡はなかった。ほかに出口が発見できないから、どうやら彼は窓から出て行ったにちがいなく、敷居の不吉な血痕を見ると、彼が泳いで助かったという見込みはあまりなさそうだ。悲劇の時間、潮は最高に満ちていたからね。

さてそこで事件に直接関係があると思われる悪党たちだ。インド人の素性がひどいものであることはわかっていたが、セントクレア夫人の話によれば、彼は彼女の夫の姿が窓に見えてからほんの数秒のうちに階段の下にいたことがわかっているので、従犯以上のものではありえなかった。彼の言い分はまったく何も知らないの一点張りで、間借りしているヒュー・ブーンのしたことについても何も知らないし、行方不明の紳士の衣類がある理由もどうにも説明ができないと主張した。

インド人の経営者についてはそのくらいにしよう。今度はアヘン窟の三階に住み、間違いなくネヴィル・セントクレア氏に最後に目を向けた人間である、悪そうな不具の男だ。彼の名はヒュー・ブーンで、その見るも恐ろしい顔はシティーによく行く人なら誰でもなじみのものだ。彼はこじきを仕事にしているが、警察の取締りを避けるためにロウのマッチの小商いを装っている。スレッドニードル街を少し行って左側に、君も気づいたかもしれないが、壁に小さな天使がある。そこにこの男は毎日座り、あぐらをかき、わずかなマッチの在庫を膝の上に置く、すると男の哀れな見てくれに、ちょっとした施しの雨がそばの歩道に置いた油じみた革の帽子の中にふりそそぐわけだ。僕は何度かやつに注目したことがあって、それであの職業にも精通しようと考えたのだが、あの男が短い時間に上げた収穫には驚いたものだ。びっくりするような外見だからねえ、誰だって通り過ぎる時見てしまうんだ。オレンジ色のもじゃもじゃした髪、青白い顔を醜くしている恐ろしい傷、それが引きつれて端がめくれ上がった上唇、ブルドッグのようなあご、髪の色と奇妙な対照をなす非常に鋭い、黒い目、彼が普通のこじき連中の中で目立っているのは、それらすべてと、それから彼の機知のためだ。というのは、彼は通行人の投げかけるあらゆるからかいに対していつもさっと言葉を返すんだ。これがあのアヘン窟に間借りしていて、僕たちが捜している紳士を最後に見た人間、とわかっている男だ」

「しかし不具じゃないか！」と私は言った。「壮年の男を相手にしてその男一人で何ができる？」

「不具と言っても片足を引きずって歩くという意味だ。だがほかの点では力もあり、よく発達している男に見える。きっと医学的経験から知ってるだろう、ワトソン、四肢の一つに弱点があると、ほかが異常に強くなって補うことがよくあるのを」

「どうぞ話を続けてくれ」

「セントクレア夫人は窓の血を見て卒倒してしまい、警察が馬車で家まで送った。彼女がいても彼らの調査の役には立たないからね。事件を担当したバートン警部はきわめて入念にその建物を調査したが、問題に光明を投じることを何も発見できなかった。一つ犯した誤りは直ちにブーンを逮捕しなかったことで、彼には数分、仲間であるインド人と話をする間があり、それでもこの失敗はすぐに正され、彼は捕まって捜索されたが、彼を有罪にできるものは何も発見できなかった。確かに彼のワイシャツの右袖にいくらか血のしみがあったけれども、彼は爪の近くが傷ついた薬指を示し、そこから出血したと説明し、少し前に窓の所へ行ったので、見つかったしみは間違いなく同じ所から出たものだと付け加えた。彼は懸命にネヴィル・セントクレア氏を見たことはないと否定し、部屋に衣類があったのは警察同様、彼にとっても謎だと主張した。セントクレア夫人が本当に窓の所に夫を見たと断言していることについて彼は、彼女は気が狂っていたか夢を見ていたにちがいないと言い放った。彼は大声で抗議しつつも警察署へ移され、一方、警部は引き潮が何か新たな手がかりが与えないかと期待して建物の上に残った。

で、そうなったものの、彼らが泥の土手に発見したものは、彼らが見つけるのを恐れていたものとはだいぶ違った。潮が引いてあらわになったのは、ネヴィル・セントクレアの上着で、ネヴィル・セントクレアではなかった。そして彼らがポケットに何を発見したと思う？」

「見当もつかないよ」

「いや、君に当てられるとは思ってないよ。ポケットというポケットにペニーと半ペニーの硬貨が詰め込まれていたのだ―421枚のペニーと270枚の半ペニーだ。潮に押し流されなかったのも不思議ではなかった。だが人間の死体となると話は別だ。船着場と家の間では激しい渦が巻く。重みのついた上着は残り、服をはがれたからだは川に飲み込まれる、ということもまったくありそうに思えた」

「だが、ほかの服は全部部屋で発見されたんだったね。死体は上着だけを着けていたんだろうか？」

「いや、だがね、もっともらしい説明はつくよ。このブーンという男がネヴィル・セントクレアを窓から突き落とし、その行為を見ていた者はいない、としよう。それから彼はどうするだろう？　もちろんすぐに彼の心に証拠となる衣類を処分しなければならないとの考えが浮かんだはずだ。彼は上着をつかみ、それから、外に投げようという時になって、それは沈まずに浮かんでいるだろうと思い至る。時間はわずかだ、彼は夫人が強引に上がってこようとした時の階下の争いを聞いているし、たぶん既にインド人の共謀者から警察が急いで通りを近づいてくると聞いていただろうからね。一刻の猶予もない。彼はこじきで得た収益をためている秘密の収蔵場所へと急ぎ、つかめるだけのコインをすべてポケットに詰め込み、確実に上着を沈める。それを投げ出し、下の殺到する足音が聞こえなかったらほかの衣類も同じようにしていただろうが、ちょうど警察が現れた時窓を閉めるだけの時間しかなかったのだ」

「確かにもっともらしく聞こえるね」

「では、ほかに適当なのもないからこれを実際的仮説とみなそう。ブーンは既に話した通り、逮捕され、署に連れていかれたが、これまで彼に不利なことは何も明らかにされていない。彼のこじき稼業は長年知られていたが、暮らしぶりは穏やかで罪のないもののようだった。そういった現状だが、解くべき問題は――ネヴィル・セントクレアはアヘン窟で何をしていたのか、そこにいた時何が起きたのか、今彼はどこにいるのか、ヒュー・ブーンは彼の失踪にどんな関係があるのか――すべて依然、解決には程遠い。実を言うと、一見とても簡単に見えるのにこれほど困難を呈した事件は経験した覚えがないんだ」

シャーロック・ホームズがこの奇妙な一連の出来事を詳しく語っている間、私たちは大都会の郊外を疾走し、ようやくそのはずれのまとまりなく広がる家々を後にし、両側のいなかの生垣に沿って飛ばしていた。しかし彼が話し終えた時にはちょうど、私たちはまだいくつかの窓に明かりがチラチラ光る、散在する二つの村の間を走っていた。

「リーの郊外にいるんだ」と連れは言った。「僕たちは短いドライブでイングランドの三つの州に触れたわけだ。最初がミドルセックス、サリーを通り過ぎ、最後がケントだ。あそこの木の間に明かりが見えるだろう？　あれがスギ屋敷で、あのランプのそばには女の人が座って、心配でもう僕たちの馬のひづめの音を聞きつけているのは疑いないと思うよ」

「しかしなぜベーカー街にいて事件を処理しないんだい？」と私は尋ねた。

「多くの調査をここでしなければならないからだ。セントクレア夫人はまったく親切にも二部屋自由に使わせてくれるし、僕の友人や同僚なら歓迎してくれるに決まっているから君も安心して休めるよ。彼女と顔を合わせるのがいやでね、ワトソン、夫の消息を持ち合わせないとなると。さあ着いた。どう、それ、どう！」

私たちは庭の中に立つ大きな家の前に止めた。馬丁の少年が馬の正面に走り出、私はホームズに続いて家に至る狭い、曲がりくねった砂利道に飛び降りた。私たちが近づくと、ドアがパッと開き、その開いた所に小柄なブロンドの、襟と手首に小さなふわふわしたピンクのシフォンがついた、軽い絹モスリンのようなものを着た女性が立っていた。彼女の立ち姿の輪郭を背景のあふれる光が描いていた。一方の手はドアに、他方は待ち焦がれて半ば持ち上げ、からだはわずかにかがめ、頭と顔を突き出し、真剣な目つきをして唇は開き、立ったまま質問していた。

「それで？」と彼女は叫んだ。「それで？」それから、私たちが二人であるのを見て希望の叫びを上げたが、それは私の連れが首を振り、肩をすくめるのを見てうめき声に変わった。

「いい知らせはないんですの？」

「一つも」

「悪い知らせは？」

「ありません」

「それはよかったわ。でもお入りになって。お疲れでしょう、大変な一日だったのですから」

「これは友人のワトソン博士です。これまでいくつかの事件で非常に力になってくれていまして、幸運にも連れ出してこの調査を一緒にできることになりました」

「お会いできて嬉しいですわ」と彼女は、熱心に私の手を握りしめて言った。「何かと行き届かないところもあるでしょうがお許しくださいますわね、何しろこんなふうに突然打撃に見舞われたんですもの」

「奥さん、」私は言った、「私は老兵ですから、それにそうでないとしてもそんなご心配はまったく無用ですとも。私が何かあなたやこの友人のためにお役に立つなら、本当に嬉しいです」

「さあ、シャーロック・ホームズさん、」と、テーブルに夜食の用意された明るいダイニングルームに入った時、婦人が言った、「どうしてもあなたに一つ、二つ率直な質問をしたいんですの、どうかあなたも率直にお答えいただけませんかしら」

「いいですとも、奥様」

「私の気持ちは気になさらないで。私はヒステリーでもないし、しょっちゅう気絶するわけでもないですから。私はただあなたの本当の、本当のご意見を聞きたいんです」

「何についてです？」

「心の底ではどうです、ネヴィルは生きているとお思いでしょうか？」

シャーロック・ホームズはこの質問に困ったように見えた。

「さあ、隠し立てなさらずに！」と、彼女は敷物の上に立ち、枝編み細工の椅子の背にもたれた彼を鋭く見下ろして繰り返した。

「では率直に申しますが、奥様、そうは思いません」

「彼が死んでいるとお思いですの？」

「そうです」

「殺されたと？」

「そうは申しません。あるいは」

「それで彼が死んだのは何日でしょう？」

「月曜日です」

「ではよろしければ、ホームズさん、どうして私が手紙を彼から、今日、受け取ったのか、説明していただけませんか」

シャーロック・ホームズは電気に打たれたかのように椅子から飛び出した。

「何ですって！」彼は大声で言った。

「ええ、今日です」彼女は微笑んで立ち、小さな紙片を空中に掲げた。

「見てもいいですか？」

「もちろん」

彼は待ちきれないように彼女からそれをひったくり、テーブルの上でしわをのばすと、ランプを引き寄せ、一心になって調べた。私は椅子を離れ、彼の肩越しにそれを見つめた。封筒はごく粗末なもので、グレイヴズエンドの消印と、当日の、というより、とうに真夜中を過ぎていたので、前日の日付が押してあった。

「粗野な字だ」とホームズはつぶやいた。「きっとご主人が書いたのではありませんね、奥様」

「ええ、でも中のものは」

「それと誰が宛名を書いたにせよ、住所を訊きに行かなければならなかったこともわかります」

「どうしてそれがわかるんですの？」

「名前のインクはほら、真っ黒ですから、自然に乾いたものです。ほかの部分は灰色がかっていて、吸い取り紙が使われたことを示しています。続けてすらすら書かれたものなら、その場で吸い取って、濃い黒の色合いの所はないはずです。この男は名前を書いたものの、宛先を書く前に間があったわけで、その意味するところはその男が住所をよく知らなかったというほかにありえません。もちろんささいなことですが、ささいなことが何より重要なのです。それでは手紙を見てみましょう。ほう！　何か同封されてますね！」

「ええ、指輪が。彼の認印つきの指輪です」

「そしてご主人の筆跡であるのは確かですね？」

「彼の筆跡の一つです」

「一つ？」

「大急ぎで書いた時のものです。いつもの彼の字とはまったく違いますが、それでも私はよく知ってますから」

「最愛の君、怖がらないで。何もかもうまくいくから。とてつもない間違いだが正すには少し時間がかかるかもしれない。辛抱して待っていてくれ。

ネヴィル

本の見返しに鉛筆で書かれている、八つ折版、透かしはなし。フム！　今日グレイヴズエンドで親指の汚れた男が投函している。ほう！　折り返しを糊付けしたのは、僕のひどい考え違いでなければ、煙草をかんでいる人間です。それで、ご主人の筆跡であることに疑いの余地はないですね、奥様？」

「間違いありません。ネヴィルが書いたものです」

「そして今日グレイヴズエンドで投函された。そうですね、セントクレアさん、雲は明るくなりましたね、危険が去ったとまでは言いにくいですが」

「でも彼は生きているにちがいありませんわ、ホームズさん」

「これが僕たちを間違った手がかりでだまそうという巧妙な偽物でない限りね。何にしても指輪は何の証拠にもなりません。取られたのかもしれません」

「いいえ、いいえ。これは、これは彼自身が書いたものです」

「いいでしょう。でも月曜日に書かれて今日になって投函されたかもしれません」

「それはありえますわね」

「だとすると、その間に多くのことが起こりえたわけです」

「ああ、がっかりさせないでください、ホームズさん。私には彼が無事とわかります。私たち二人は強く共鳴していますから、彼に悪いことがあれば私にわかるはずです。私が彼を最後に見たあの日、彼が寝室でちょっとけがをしたんです。私はダイニングルームにいたのに何かあったものと完全に確信してすぐに二階へ駆け上がりました。そんなささいなことに反応する私が彼の死に気づかないとお思いになります？」

「多くのことを見てきた僕は女性の感じる印象のほうが分析的理論家の結論より役立つことがあるのを知っています。それにこの手紙は確かにあなたの考えを裏付ける強い証拠になります。しかしご主人が生きていて手紙を書けるなら、なぜあなたから離れたままでいなければならないのでしょう？」

「見当もつきません。考えられません」

「ご主人は月曜日に出かける前、何か言いませんでしたか？」

「いいえ」

「スワンダム・レーンでご主人を見て驚いたでしょうね？」

「大変に」

「窓は開いていましたか？」

「ええ」

「その時あなたに声をかけるところだったのでしょうか？」

「そうかもしれません」

「ご主人はただ、言葉にならない叫び声を上げただけでしたね？」

「ええ」

「助けを求める叫び、そう思いましたか？」

「ええ。彼は手を振ってました」

「しかし驚いて叫んだのかもしれませんね。思いがけなくあなたを見てびっくりしたせいで手を振り上げたのでは？」

「ありえます」

「それからご主人が後ろへ引っ張られたと思ったのですね？」

「それほど突然見えなくなりましたの」

「後ろへ跳びのいたのかもしれません。部屋の中にほかに誰も見ませんでしたか？」

「ええ、でもあのぞっとするような男があそこにいたと自分で言ってますし、インド人が階段の下にいましたわ」

「その通りです。ご主人は見たところでは普通に服を着ていましたか？」

「でもカラーとネクタイはなしでした。むき出しののどがはっきりと見えましたから」

「ご主人が前にスワンダム・レーンのことを話したことは？」

「一度も」

「アヘンをやっているような様子を見せたことは？」

「一度も」

「ありがとう、セントクレアさん。完全にはっきりさせたかった主要な点はそれだけです。それでは軽く夜食を取って下がるとしましょう。明日は非常に忙しくなるかもしれませんから」

大きく、快適な二人用寝室を自由に使えたので、夜の冒険で疲れていた私はすぐにベッドに入った。しかし、シャーロック・ホームズという男は未解決の問題が念頭にある時、何日も、いや一週間でも、休むことなく、説明を見つけるかデータが不十分であると納得するまで、あれこれ思い巡らし、事実を再整理し、あらゆる観点から考察したものだった。彼がその時徹夜の準備をしていることはすぐにはっきりとわかった。彼は上着とチョッキを脱ぎ、大きな青い部屋着を着け、それから部屋を歩き回ってベッドから枕、ソファや肘掛け椅子からクッションを集めていた。これらを使って彼は東洋風のソファのようなものを組み立て、そこに足を組んで座り、刻み煙草一オンスとマッチの箱を目の前に並べた。薄暗いランプの明かりの中に見える彼は、使い古したブライアーパイプを口にくわえ、目は天井の隅をぼんやりと見据え、渦巻く紫煙を立ち昇らせ、静かに、じっと動かずにそこに座り、その力強い鷲のような顔に明かりが当たって光っていた。私が眠りに落ちた時にも彼はそうして座り、突然の叫び声に私が目を覚まし、室内に夏の日が輝いているのに気がついた時にも彼はそうして座っていた。パイプは相変わらず口にくわえられ、煙は相変わらず渦巻いて立ち昇り、部屋中もうもうと煙草のもやが立ちこめ、前夜に私が見た刻み煙草の山はまったく残っていなかった。

「目が覚めたかい、ワトソン？」と彼は尋ねた。

「うん」

「朝のドライブに行ってくれるかい？」

「いいとも」

「では服を着たまえ。まだ誰も起きだしていないが、馬丁が寝ている場所は知っているからすぐにトラップ馬車は出せるだろう」そう言いながら彼は一人でくすくす笑い、目を輝かせ、前夜の陰気な思索家とは別人のようだった。

服を着ながら私は時計を見やった。誰も起きていないのも不思議ではなかった。四時二十五分だった。私が着替えを終えた時には少年が馬をつけているという知らせを持ってホームズが戻った。

「ちょっとした仮説を試してみたいんだ」と、彼は靴をはきながら言った。「ねえワトソン、君は今ヨーロッパ一の大ばか者の前に立ってるんだよ。僕はここからチャリング・クロスまで蹴飛ばされても文句は言えないな。だが今や事件の鍵を握ったと思うんだ」

「で、それはどこにあるんだ？」私は微笑みながら尋ねた。

「バスルームにさ」と彼は答えた。「ああ、そうなんだよ、ジョークを言ってるんじゃないんだ」と、私の不審の顔つきを見て彼は続けた。「今バスルームに行って、それを持ち出して、旅行バッグに入れたところだ。さあ、君、そいつが錠に合わないものか、見てみようじゃないか」

私たちはできるだけ静かに階下へ下り、明るい朝の陽光の中へ出た。道には私たちの馬と馬車があり、着替えかけの馬丁の少年が口取りして待っていた。私たち二人、飛び乗ってロンドン街道を突進していった。数台の首都へ野菜を運ぶいなかの荷馬車が動いていたが、両側に並ぶ住宅は、夢の中のどこかの町のように静かで生気がなかった。

「いくつかの点でまれにみる事件だったね」とホームズは馬に鞭を当てて疾走させながら言った。「白状すると僕にはまったく見えていなかったが、何も学ばないよりは後で学ぶほうがましだからね」

ロンドンではちょうど早起きの人々が窓から外を眠そうに眺め始める頃、私たちはサリー側の道々を走らせていった。私たちはウォータールー・ブリッジ街道を通り過ぎ、川を越え、ウェリントン街を駆け、急に右に向きを変えたところはボウ街だった。シャーロック・ホームズは警察によく知られており、玄関で二人の巡査が彼に敬礼した。その一人が馬のくつわを取り、もう一人が私たちを中へ案内した。

「当番は誰かな？」とホームズは尋ねた。

「ブラッドストリート警部です」

「ああ、ブラッドストリート、どうだい？」ハンチングと飾りボタンのついたジャケット姿の、長身の太った警官が石を敷いた廊下を近づいてきた。「君と内密に話したいのだがね、ブラッドストリート」

「いいですとも、ホームズさん。こちらの私の部屋へどうぞ」

それは小さな事務室のような部屋で、テーブルの上に巨大な台帳があり、壁から電話が突き出ていた。警部は机の前に座った。

「どんなご用件ですか、ホームズさん？」

「僕はあのこじきのブーンのことで来たんだ――リーのネヴィル・セントクレア氏の失踪にかかわったとして告発されている男だ」

「ええ。あれなら連れてこられて、さらに取り調べるために再拘留しました」

「そう聞いてるよ。ここにいるんだね？」

「独房に」

「おとなしくしてるのかな？」

「ああ、まったく手数はかかりません。だが汚いやつです！」

「汚い？」

「ええ、手を洗わせるのがせいぜいで、顔は路上暮らしのように真っ黒ですから。ま、事件が解決したら、正規の刑務所で風呂に入るでしょうよ。あなたもあれを見たら、それが必要だと同意してもらえますよ」

「ぜひ会いたいんだがね」

「あなたが？　簡単なことです。こちらへどうぞ。バッグは置いていけばいい」

「いや、持っていこうと思うんだ」

「結構です。こちらへどうぞ、よかったら」

彼は通路を案内し、かんぬきのかかったドアをあけ、曲がりくねった階段を下り、両側にドアの並んだ、しっくいを塗った廊下へ私たちを連れて行った。

「右側の三番目にいますよ」と警部は言った。「ここです！」彼はドアの上部にあるパネルをさっと引き、中を見やった。

「寝てます」と彼は言った。「やつがよく見えますよ」

私たち二人は目を鉄格子につけた。囚人は私たちのほうへ顔を向け、ぐっすり眠り込み、ゆっくりと、重苦しい息をしていた。彼は中肉中背で、職業にふさわしく粗末な服を着け、ぼろぼろの上着の裂け目から色つきのシャツがはみ出ていた。彼は、警部の言っていたように、きわめて汚いが、顔を覆う汚れも、そのぞっとするような醜さを隠すことはできなかった。古い傷跡の幅広いみみずばれがその顔を目からのどにかけて横切り、その引きつれによって上唇の片方の端がめくれ上がっているので、絶えず三本の歯をむいてうなっているようだった。もじゃもじゃの明るい赤毛が目や額の上に伸びていた。

「美男子でしょう？」と警部は言った。

「確かに洗う必要がある」とホームズが言った。「そうかもしれないと思ってね、失礼だが道具を持ってきたんだ」彼は話しながらグラッドストーンバッグを開き、驚いたことに非常に大きな風呂用のスポンジを取り出した。

「ヘ！　ヘ！　おかしな人だなあ」と警部はくすくす笑った。

「さて、大変お手数だが、ドアをそおっとあけてもらえれば、すぐに彼にもっと見苦しくない姿になってもらえると思うんだがね」

「いや、そりゃ結構ですな」と警部は言った。「これではボウ街の独房の誉れには見えないですよね？」彼は錠に鍵をするりと入れ、私たち皆、非常に静かに独房に入った。眠っている人は半回転し、それからもう一度深い眠りに落ち込んだ。ホームズは水差しにかがみ、スポンジをぬらし、それからそれで囚人の顔を力強く二度、縦横にこすった。

「ご紹介します、」彼は叫んだ、「ケント州、リー在住のネヴィル・セントクレア氏です」

生涯見たことのない光景だった。男の顔はスポンジによって木の皮のようにはがれ落ちた。下品な茶の色合いが消えた！　顔を横切る傷跡も、ぞっとする冷笑に見えるねじれた唇も消えた！　ぐいと引くともつれた赤い髪も取れ、ベッドに起き上がったのは黒い髪、つるつるの肌の、青白い、悲しそうな顔の上品そうな男で、眠気と当惑に目をこすったりまわりをきょろきょろ見たりしていた。それから突然、露見したことを悟り、ワッと叫び、身を投げ出し、枕に顔を埋めた。

「なんてことだ！」警部が叫んだ、「ほんとに行方不明の男だ。写真で知ってるんです」

囚人はやけになって運命に身を任せるといった様子で振り向いた。「それでいいとしましょう」と彼は言った。「それなら言ってください、私は何の罪で告発されるんですか？」

「ネヴィル・セントクレア氏を亡き者に――おお、やあ、罪には問えないなあ、自殺未遂事件とでもしなければ」と警部は言ってニヤリと笑った。「やれやれ、二十七年警察にいるが、こんなことはほんとに聞いたことがない」

「私がネヴィル・セントクレア氏だとすると、明らかに何の犯罪も行われていません、従って、私は不法に拘留されているのです」

「犯罪はない、しかし非常に大きな間違いが犯されています」とホームズが言った。「奥さんに打ち明けたほうがよかったでしょうに」

「妻はいいんです。子供たちですよ」と囚人はうめいた。「何としても父親を恥じるようなことにしたくなかったのに。ああ！　ばれてしまうとは！　どうしたらいいんでしょう？」

シャーロック・ホームズは寝椅子の彼のそばに腰を下ろし、優しく彼の肩をたたいた。

「もし君が事を明らかにするために法廷に託せば、」彼は言った、「当然世間に知られずにはすまない。一方君が、君に対してはいかなる訴訟事実もないと警察当局を納得させれば、細かいことまで新聞種になるべき理由はないと思います。ブラッドストリート警部はきっと君の話をすべて記録し、しかるべき筋に提出するはずです。それで事件が法廷に持ち込まれることは決してないでしょう」

「ありがとうございます！」囚人は熱を込めて叫んだ。「私はこの惨めな秘密を一家の汚点として子供たちに残すぐらいなら、懲役だって、ええ、死刑だって耐え忍んだでしょう。

私の身の上話を聞くのはあなた方が初めてです。私の父はチェスターフィールドで教員をしていましたが、そこで私は優れた教育を受けました。私は若い頃は旅をし、俳優になり、最後にロンドンの夕刊紙の記者になりました。ある日編集者が首都のこじきについての連載記事を求め、私がその役を買って出ました。それが私の冒険すべての出発点となりました。しろうととしてこじきをやってみるしか記事の基になる事実を得られません。俳優だった時、もちろん私は扮装の秘訣を学びましたし、私の腕前は楽屋で有名でした。私はここで芸を役立てたのです。私は顔を塗り、できるだけ哀れっぽく見せるためにうまく傷跡を作り、唇の端をねじり、肌色のしっくいを少し使って固定しました。それから赤い髪の毛とふさわしい服を着け、表面上はマッチ売りですが、実際はこじきとして、シティーのオフィス街の持ち場としました。七時間私は商売に精を出し、夕方家へ帰って見てみると、驚いたことに26シリング4ペンスももらっていたのです。

私は記事を書き、そんなことはもう考えもしなかったのですが、しばらくして友人の手形の裏書をして、25ポンド払えという令状が送達されてきました。私はどこで金を工面したものか困り果てましたが、突然ある考えが浮かんだのです。私は債権者に二週間の猶予を願い、雇い主に休暇を求め、変装してシティーでこじきをして過ごしました。私は十日でその金を得て借金を払ってしまいました。

さて、顔にちょっと絵の具を塗りつけて、地面に帽子を置いて、じっと座っていれば一日で二ポンド稼げるとわかっているのに、週二ポンドで楽じゃない仕事に着いているのがどれほどつらいかおわかりでしょう。長いこと自尊心と金を戦わせましたが、とうとうドルが勝ちを占め、私は記事を書くのをやめ、毎日毎日最初に選んだ隅に座り、ぞっとするような顔で哀れを誘い、ポケットを銅貨でいっぱいにしたのです。一人だけ私の秘密を知っていました。私が宿にしていたスワンダム・レーンの粗末な隠れ家の持ち主で、私はそこから毎朝汚いこじきとして現れ、夕方には都会的な身なりのよい人間に変身しました。あのインド人の男には部屋代をたっぷり払いましたから、秘密を握られていても安全だとわかっていました。

さて、あっという間に私はかなりの金額を蓄えていたのです。ロンドンの街に出たこじきが誰でも年700ポンド稼げる――それでも私の平均収入より少ないのです――とは言いませんが、私には特別な強みとして扮装する能力がある上、当意即妙の応酬をする才もあり、これが実践によって上達し、おかげでシティーでもかなり名の知れた人物になりました。一日中流れるようにペニーが、時には銀貨も含め、注ぎ込まれ、二ポンド得られないのはよほどついていない日でした。

金持ちになるにつれて野心も出てきて私はいなかに家を買い、ついには結婚し、真の職業については誰にも疑われませんでした。妻は私がシティーで仕事をしていることは知っていました。それが何かは知らなかったのです。

この間の月曜日、私が一日を終えてアヘン窟の上の自分の部屋で着替えをしている時です、窓から外を見てぞっとし、びっくりしました。妻が通りに立ってまともに私を見据えていたのです。私は驚いて叫び、顔を隠そうとして両腕を上げ、急いで腹心のインド人を捕まえ、誰も私の所へ上がってこないようにしてくれと頼みました。階下に妻の声が聞こえましたが、上がってこられないのはわかっていました。すぐに私は服を脱ぎ、こじきの服を着け、顔料とかつらをつけました。妻の目にも見抜けないほど完璧な変装です。しかしその時、部屋を捜索されるかもしれない、服で秘密がばれるかもしれないと思い至りました。私はさっと窓をあけましたが、その乱暴により朝寝室で自分で負った小さな傷が再び口をあけました。それから私が、上がりを入れて運ぶ革のバッグから移したばかりの銅貨で重くなった上着をつかんで窓から放り投げると、それはテームズの中へ消えました。ほかの服も同様にするつもりでしたが、その時巡査たちが階段を上がって殺到し、数分後に私は、白状するとむしろほっとしたのですが、ネヴィル・セントクレア氏と見分けられることなく、その殺人犯として逮捕されたのです。

ほかに説明すべきことはないと思います。私はできるだけ長く変装を続けよう、従って好んで汚れた顔でいようと決意しました。妻が恐ろしく心配しているだろうと思い、巡査が見張っていない時に、そっと指輪をはずし、恐れることは何もないと彼女に伝える急いで殴り書きした手紙と一緒にインド人に託しました」

「その手紙はやっときのう奥さんに届いたのです」とホームズが言った。

「まさか！　一週間ひどい思いをしたろう！」

「あのインド人は警察が見張っていましたし、」ブラッドストリート警部が言った、「まったく、手紙一通投函するのも難しかったろうと察しがつきますよ。おそらく客の船員か何かにそれを手渡したところが、そいつが何日もそれをすっかり忘れていたんでしょう」

「そうだな」とホームズは賛成してうなずきながら言った。「それに間違いない。しかし君はこじきで起訴されたことはないんですか？」

「何度も。しかし私にとって罰金なんか何でもありません」

「しかしこれでやめなければ」とブラッドストリートが言った。「警察がこの事をもみ消すとなれば、もはやヒュー・ブーンもいてはならない」

「私はこれ以上はない厳粛な誓いを立てたところです」

「もしそうなら、たぶんこれ以上、手段が取られることはないでしょう。しかしもしあなたがまた見つかったら、その時はすべてが明るみに出ることになります。本当に、ホームズさん、事件を解決していただいて、私たちは大いに感謝します。どうやって結果に到達したのか知りたいものですね」

「これにはね、」友は言った、「枕五つの上に座り、刻み煙草一オンスを費やして到達したんだ。どうだろう、ワトソン、ベーカー街へ走らせればちょうど朝食に間に合うんじゃないかな」

# 青いガーネット

クリスマスがすんで二日目の朝、私は挨拶とお祝いかたがた友人のシャーロック・ホームズを訪ねていた。彼は紫の部屋着姿で、パイプ立てを右手を伸ばせば届く所に、明らかに調べたばかりのしわくちゃになった朝刊を手元に山と積んで、ソファにゆったりしていた。カウチのそばには木の椅子があり、その背の角にはすっかりくたびれ、数箇所ひびの入った、きわめてみすぼらしくみっともない硬いフェルト帽がかかっていた。椅子の座面にレンズとピンセットがのっており、帽子は検査を目的としてそのように吊るされたのだと思われた。

「仕事中だね、」私は言った、「もしかしたら邪魔かな」

「ちっとも。成果を議論できる友人は歓迎だ。まったくささいな問題だが」―彼は親指を古い帽子に向けた―「これに関してはいくつかの点で興味や教訓が全然ないわけではない」

私は彼の肘掛け椅子に座り、ぱちぱち言う暖炉で手を暖めた。厳寒が訪れ、窓には厚く氷の結晶がついていた。「きっとこれが、」私は言った、「何でもないように見えるけれども、何か恐ろしい物語と関連しているんだろうね―それが手がかりになって君を何かの謎の解決、何かの犯罪の処罰に導くんだろう」

「いや、いや。犯罪じゃないんだ」とシャーロック・ホームズは笑いながら言った。「数平方マイルの空間の中に四百万もの人間が押し合いへし合いしていれば起こりがちなちょっとした気まぐれな出来事の一つにすぎないんだ。これほど密集した人間の群れの作用と反作用の只中では出来事の可能な組み合わせがすべて起こっておかしくないし、犯罪はなくても印象的で奇怪な、小さな問題がたくさん引き起こされるものなのだ。既にそういう経験はしているじゃないか」

「それゆえに、」私は言った、「最近私が記録に付け加えた六つの事件のうち三つはまったく法律上の罪を免れていたね」

「まさにその通りだ。君が言っているのはアイリーン・アドラーの文書を取り戻す試み、ミス・メアリー・サザーランドの風変わりな事件、それと唇のねじれた男の冒険のことだね。まあ、この小さな問題も同様に罪のない部類に属することになるのは疑いないな。守衛のピーターソンは知ってるね？」

「ああ」

「この戦利品はあの男のものなんだ」

「彼の帽子だね」

「いやいや。彼が見つけたものだ。持ち主は不明だ。これをつぶれた山高帽でなく知的な問題と考えてほしいんだ。まず第一に、どうやってここへ来たかということだ。これはクリスマスの朝、見事に太ったガチョウと一緒に届いた。そいつが今頃ピーターソンの暖炉の前で焼かれているのは間違いないね。事実はこういうことだ。クリスマスの朝四時ごろ、ピーターソンは、君も知っているように非常に正直な男だが、ちょっと浮かれ騒いでの帰り、トッテナム・コート街への家路についているところだった。彼の目の前にはガス灯を浴びて大柄な男がわずかによろめきながら、白いガチョウを肩に背負って歩いていた。グッジ街の角に着いた時、この見知らぬ人と数人の乱暴者との間にけんかが始まった。乱暴者の一人が男の帽子をたたき落し、これに対して彼はステッキを振り上げて自分を守り、頭の上でそれを振り回し、後ろにある店のウィンドーを壊してしまった。ピーターソンは見知らぬ男を、襲った連中からかばおうと駆け寄ったが、男はウィンドーを壊してしまったことに驚き、制服の警官のような人物が彼のほうへ駆けて来るのを見て、ガチョウを落とし、三十六計を決めこみ、トッテナム・コート街の裏手に広がる入り組んだ狭い街路の中へ消えうせた。乱暴者たちもピーターソンを見て逃げ出し、それで彼のもとには戦場と、さらにこの帽子と大変に申し分のないクリスマスのガチョウという形で戦利品が残された」

「それは持ち主に返したんじゃないのか？」

「ねえ君、問題はそこにあるんだ。確かに『ヘンリー・ベイカー夫人へ』と印刷された小さなカードが鳥の左足に結び付けられていたし、また、確かに『Ｈ．Ｂ．』のイニシャルがこの帽子の裏地に読めたけれども、このロンドンの街には数千のベイカー、数百のヘンリー・ベイカーがいて、その誰か一人に遺失物を返還するのは容易ではない」

「じゃあピーターソンはどうしたんだ？」

「彼はクリスマスの朝、帽子もガチョウも僕の所へ持ってきた。どんなに小さな問題でも僕には興味があるのを知ってるからね。ガチョウは今朝まで置いていたんだが、霜が降り始めたとはいえ、もはや猶予は無用で食べたほうがいいという兆しが出ていたんでね。そこでそれは拾得者がガチョウの究極的運命を全うさせるために持っていき、一方僕はクリスマスのディナーを失った見知らぬ紳士の帽子を引き続き保持しているんだ」

「広告は出なかったかい？」

「なかった」

「ではどんな手がかりから男の身元を割り出すんだ？」

「推論できる限りのこと、それだけだ」

「男の帽子から？」

「まさにその通り」

「いや冗談だろう。こんなつぶれたフェルトから何が推測できるものか？」

「ここの僕のレンズがある。君は僕の方法を知っている。この物品を着けていた男の個人的人格に関して、君自身で何が推測できるかな？」

私はぼろぼろの対象物を手に取り、やや後悔しながらひっくり返してみた。それはありふれた丸い形のきわめて平凡な黒い帽子で、硬いがすっかりくたびれていた。赤い絹の裏地だったが、だいぶ色あせていた。製造元の名はなかったが、ホームズが言った通り、『Ｈ．Ｂ．』のイニシャルが片側にぞんざいに書かれていた。飛ばさないよう、つばに穴があいていたが、ゴムひもはなくなっていた。そのほか、裂け目があり、非常にほこりっぽく、何箇所も汚れがついていたが、それでもインクを塗りつけて変色した部分を隠そうとした様子も見られた。

「私には何も見えてこないよ」と言い、私はそれを友に返した。

「それどころか、ワトソン、君には何もかもが見えている。ところが、見たものから推論することができないんだ。君は臆病で推理に踏み込めないんだ」

「じゃあ、君がこの帽子から推論したことは何か、どうか聞かせてくれたまえ」

彼はそれを取り上げ、彼独特の、特異な内省的視線を向けた。「あるいは思っていたより示唆するところは少ないかもしれないが、」彼は言った、「それでもいくつかのことはきわめて明瞭に推論できるし、ほかにもいくつかのことが少なくとも有力な可能性を示している。まず、この男が高い知性の持ち主であることはもちろん一見して明らかであり、また三年もさかのぼらずとも彼はかなり裕福であったのに、ここにきて不運な目にあっている。彼には慎重さがあったが、今では以前ほどではなく、つまり堕落してしまったわけだが、これは、彼の運勢の衰微と合わせて考えれば、何かの悪影響、おそらく酒が彼に作用していることを示すものと思われる。これはさらに、彼が妻に大事にされなくなったという明白な事実の説明となるかもしれない」

「ホームズ君！」

「とはいっても彼はまだいささかの自尊心は保持している」と、彼は私の抗議を無視して続けた。「この人は座っていることの多い生活を送り、あまり外へ出ず、まったく運動不足であり、中年で、白髪交じりの髪の毛をここ数日の間に切っており、そこにライムクリームを塗りこんでいる。これらが彼の帽子から推論されるべき、より明白な事実だ。それからついでだが、彼のうちにガスが引かれているってことはとてもありそうもないね」

「これは間違いなく冗談だろう、ホームズ」

「いやちっとも。これらの結果を提示した今になっても、君にはどうやってそれに達したのかわからないなんてことがあるものかね？」

「確かに私は愚か者だが、正直言って君にはついていけないよ。たとえば、どうやってこれを知性的な男と推測したんだね？」

答える代わりにホームズは帽子をポンと頭にのせた。それは彼の頭をすっぽりと覆い、鼻梁で止まった。「容積の問題だよ」と彼は言った。「これだけ大きな脳なら何か詰まっているだろう」

「では運勢の衰微は？」

「この帽子は三年前の物だ。この平らなつばの縁がカールしているのはその頃はやりだしたものだ。この帽子は最高級品だ。うねのついた絹の帯とすばらしい裏地を見たまえ。三年前にはこんな高価な帽子を買う余裕があり、それ以後の帽子は一つもないとなると、この男がすっかり落ちぶれてしまったのは確実だ」

「まあ、確かにそれは明白だね。だが慎重さと堕落はどうなんだ？」

シャーロック・ホームズは笑った。「これが慎重さだ」と彼は言い、帽子を飛ばさないための小さな円盤と輪に指をはめた。「これは帽子について売っているものじゃない。この男が注文したとすれば、一定の慎重さのしるしだ。わざわざ風に対する用心をしたんだからね。ところがゴムが切れてしまったのに取り替えようとしないところを見ると、今や以前ほど慎重でないのは明らかで、それは心の弱くなった明瞭な証拠だ。他方、彼はフェルトについたこういうしみの一部をインクを塗って隠そうと努めているが、それは彼が自尊心を完全には失っていないしるしだ」

「君の推理は確かにもっともらしいね」

「そのほかの点、中年であること、白髪交じりなこと、最近それを切ったこと、ライムクリームを使っていること、はすべて裏地の下の方を綿密に調べれば推測できる。レンズを使えば床屋のはさみでスパッと切れたたくさんの髪の毛の端が見える。どれもこれもべたついているし、紛れもないライムクリームの匂いがしている。このほこりは、わかるだろう、街なかの灰色の砂ぼこりではなくて家の中の茶色の綿ぼこりであり、これが大部分の時間、室内にかけられていたことを示している。同時に内側の湿り気による跡はかぶっている人が大量に汗をかいたという、従ってほとんど鍛えていないという明確な証拠だ」

「だが奥さんのことは―君は奥さんがその男を大事にしなくなったと言ったよ」

「この帽子は何週間もブラシをかけていない。ワトソン君、僕が君の帽子に一週間分のほこりが積もっているのを見たら、つまり君がそんな状態で出かけても奥さんが平気だとしたら、君も不幸なことに奥さんの愛情を失ったものと思うよ」

「でも彼は独身かもしれないよ」

「いや、彼は妻へ仲直りのしるしとしてガチョウを持ち帰っている。鳥の足にあったカードを思い出したまえ」

「何にでも答えられるね。だがいったいどうして彼の家にガスは引かれてないと推測できるんだ？」

「獣脂のしみが一つか、まあ二つぐらいなら偶然につくかもしれない。が、五つ以上も見つかるとなると、ほとんど疑う余地なく、この人物はたびたび燃えている獣脂のろうそくに触れているにちがいない――おそらく夜、片手に帽子、もう一方に溶けて垂れるろうそくを持って二階へ上がるんだと思うよ。いずれにせよ、ガスの炎で獣脂のしみがつくことはない。納得したかい？」

「いやあ、実に独創的だ」と言って私は笑った。「だが君もついさっき言ったように、何の犯罪も行われていず、ガチョウを失ったほかに害がないのだから、それも皆、精力の浪費のようだね」

シャーロック・ホームズが口を開いて答えかけた時、ドアがパッと開き、頬を紅潮させ、びっくりしてぼう然とした顔の、守衛のピーターソンが部屋に駆け込んできた。

「ガチョウですよ、ホームズさん！　あのガチョウが！」と彼はあえぎあえぎ言った。

「ええ？　で、あれがどうした？　息を吹き返して羽ばたき、台所の窓から飛んでいったかい？」彼は男の興奮した顔をよく見ようとしてソファの上でぐるっとからだをねじった。

「見てください！　女房があいつの餌袋ん中で見つけたものを！」彼は手をさし伸ばし、手のひらの中央にきらきらと輝く青い石を見せた。大きさは豆よりやや小さいが、純粋な輝きにより、彼の手の暗いくぼみの中で電気の点のようにきらきら光っていた。

シャーロック・ホームズは口笛を吹いて座り直した。「おいおい、ピーターソン！」彼は言った、「これは大変な発見だぞ、本当に。何を手にしたかわかるだろうね？」

「ダイヤモンドですか？　宝石ですね。パテ粉のようにガラスに傷がつきますから」

「宝石どころではない。これはあの宝石だ」

「モーカー伯爵夫人の青いガーネットじゃないか！」と私は叫んだ。

「まさにその通りだ。僕がこのところ毎日、タイムズでそれに関する広告を読んでいるからには、そのサイズと形を知っているのも当然だがね。唯一無二のもので、その価値は憶測するほかないが、提供された報酬の千ポンドは確かに市場価格の二十分の一以内ではないね」

「千ポンド！　ああ！」守衛はドンと椅子に座り込み、私たちの顔を代わる代わる見つめた。

「それが報酬だがね、僕は訳があって、宝石さえ取り戻せれば伯爵夫人が財産の半分でも投げ出すのをいとわない感情的理由が背景にあるのを知っているんだ」

「私の記憶が正しければホテルコスモポリタンで紛失したんだったね」と私は言った。

「まさしくその通り、十二月の二十二日、ちょうど五日前だ。配管工のジョン・ホーナーがレディーの宝石箱から盗んだかどで告発された。この男に不利な証拠は強力で、事件は巡回裁判に付託された。ここに何か事件の記事があると思うよ」彼は新聞をひっかき回しては日付に目をやり、やっと一つのしわを伸ばし、それを二つに折り、次のような記事を読み上げた。

「ホテルコスモポリタンの宝石泥棒。配管工ジョン・ホーナー（26）が今月二十二日、モーカー伯爵夫人の宝石箱から青いガーネットとして知られる高価な宝石を盗んだ罪で起訴された。ホテルの上級接客係、ジェイムズ・ライダーの証言によると、盗難の当日、ホーナーをモーカー伯爵夫人の化粧室へ通し、暖炉の格子の二本目の緩んだ棒を修繕させたという。彼はしばらくホーナーとともに残ったが、最後には呼ばれて席をはずした。戻ってみると、ホーナーは姿を消し、机の引き出しがこじ開けられ、後になって伯爵夫人がいつも宝石を入れていることがわかった小さなモロッコ革の小箱が、化粧テーブルの上に空になって置かれていた。直ちにライダーは急を知らせ、同夕、ホーナーは逮捕された。しかし宝石は本人からもその部屋からも発見されなかった。伯爵夫人のメイド、キャサリン・キューザックは、盗難を発見したライダーの驚愕の叫びを聞き、部屋に駆け込んでみると、先の証人が述べたような事態になっていたと宣誓証言した。Ｂ区のブラッドストリート警部の証言によると、逮捕の際ホーナーは必死に抵抗し、強い口調で潔白を主張した。被告に窃盗の前科の証拠もあり、警察裁判所判事は犯罪を略式に処理することを拒絶し、巡回裁判に付託された。審理の間激しい感情を表していたホーナーは決定に卒倒し、法廷から運び出された。

フム！　警察裁判はこれでよし、と」とホームズが考え込むように言い、新聞をわきへ放った。「さて、僕たちの解くべき問題は、こちらの端にある抜き取られた宝石箱からあちらの端にあるトッテナム・コート街のガチョウの餌袋に至る一連の出来事だ。どうだい、ワトソン、僕たちのつまらん推理が罪のないものではなくなって急により重大な様相を帯びてきたじゃないか。ここに石がある。石はガチョウによってもたらされ、ガチョウはヘンリー・ベイカー氏によってもたらされ、この紳士は痛んだ帽子と、そのほかに僕がさっき君をうんざりさせた特徴をすべて持ち合わせている。そこで今、僕たちは本気になってこの紳士を捜し、彼がこのちょっとした謎に演じた役割を確かめにかからなければならない。このために僕たちがまず試みるべきは最も単純な手段であり、それは疑いなく、すべての夕刊に広告することにある。これが失敗したら、ほかの方法に頼ることにしよう」

「どんな文句にする？」

「鉛筆とその紙切れをくれ。さてさて、それではと。

グッジ街角で拾得したガチョウと黒のフェルト帽。お返しするのでヘンリー・ベイカーさんは今夕6:30、ベーカー街221Bへ問い合わせを。

簡潔明瞭だろ」

「実に。しかし見るだろうか？」

「そうだね、きっと新聞には目を光らせているよ。だって貧乏人には損害は甚大だからね。明らかに彼は窓を壊した不運とピーターソンの接近にびくびくして逃げる以外に思いつかなかったけれども、それ以来、はずみで鳥を落としたことをひどく悔しがっているにちがいない。それにまた、名前を挿入すれば見ることになるさ。彼を知っている人が皆、彼の注意をそこに向けるだろうからね。さあいいかい、ピーターソン、広告代理店までひとっ走りして、これを夕刊に入れさせるんだ」

「どれにです？」

「ああっと、グローブ、スター、ペルメル、セント・ジェイムズ、イブニング・ニュース、スタンダード、エコー、ほかに思いつくもの何でもだ」

「承知しました。それでこの石は？」

「ああ、うん、石は僕が預かろう。ありがとう。それでね、ピーターソン、帰りにちょっとガチョウを買って僕んとこへ置いてってくれ。君の一家が今がつがつやっているやつの代わりにこの紳士に一つ渡すのがどうしても一ついるんでね」

守衛が立ち去ると、ホームズは石を取り上げて明かりにかざした。「すばらしいものだ」と彼は言った。「ちょっと見てごらんよ、この輝き、きらめきを。犯罪の核であり焦点であるのも当然だ。よい宝石はみんなそうだ。悪魔のお気に入りの誘惑手段だ。大きくて古い宝石になるとそのカットされたすべての面が血なまぐさい事件の表象かもしれないね。この石はまだ二十年たっていない。中国南部のアモイ川の岸辺で発見されたものだが、驚くべきことにガーネットの特徴をすべて備えていながら、色合いだけがルビー色の赤ではなく青なのだ。新しいにもかかわらず、これには既に不吉な歴史がある。二つの殺人、硫酸を浴びせられた事件、自殺、数件の窃盗がこの重さ四十グレーンの炭の結晶のために引き起こされている。こんな美しいおもちゃが絞首台、刑務所御用達になるなんて誰が思う？　今は金庫にしまって、僕たちの所にあるからと伯爵夫人に一筆知らせておこう」

「このホーナーという男は無実だと思うかい？」

「わからないね」

「ではどうだろう、こっちのもう一人のヘンリー・ベイカーは、問題に何か関係があるかな？」

「ヘンリー・ベイカーはまったく潔白な人間である可能性が高そうだね。彼は自分の背負っている鳥が純金でできているよりもはるかに価値があるとは考えてもみなかったんだからね。しかしそれは広告に反応があったらごく簡単なテストをして決定することにしよう」

「それまでは何もできないのか？」

「なんにも」

「それなら僕は往診を続けることにするよ。でも夕方、君の言った時刻には戻ってくるよ。すっかりこんがらがった事件がどう解決するのか見てみたいからね」

「それは嬉しいね。七時には食事にするよ。確かヤマシギだと思うよ。そうそう、近頃の出来事を考えると、ハドソンさんに餌袋を調べるように頼んどくべきかな」

私はある患者に手間取り、再びベーカー街に着いた時には六時半を少し過ぎていた。家に近づくと、縁なし帽に上着のボタンをあごまで留めた背の高い男が外の、明り取りから投じられた明るい半円の中で待っているのが見えた。ちょうど私が着いた時にドアが開き、私たちは一緒にホームズの部屋へ案内された。

「ヘンリー・ベイカーさんですね」彼は肘掛け椅子から立ち上がり、ゆったりとして愛想良く――彼はたやすくこうした態度をとることができた――客を迎えて言った。「どうぞこちらの火のそばにおかけください、ベイカーさん。寒い夜ですし、お見受けしたところ、あなたの循環系は冬よりも夏向きですね。ああ、ワトソン、ちょうどいいところに来たね。それはあなたの帽子ですか、ベイカーさん？」

「ええ、間違いなく私の帽子です」

彼は大柄な男で、丸い肩、大きな頭、そして幅広の知的な顔は、白髪交じりの茶色の尖ったあごひげにかけて緩やかに傾斜をなしていた。赤みがかった鼻と頬、差し伸ばした手のわずかな震えが彼の習慣に関するホームズの推測を思い出させた。色のさめた黒いフロックコートの前のボタンは上まですっかり留められ、襟は立てられ、やせひょろけた手首がカフスもシャツもうかがわせない袖から突き出ていた。彼は言葉を慎重に選び、ゆっくりしたぽつりぽつりとした話しぶりだったが、全体として、運命による虐待を受けた学者か文学者といった印象を与えた。

「僕たちは数日間これらのものをそのまま持っていました、」ホームズは言った、「というのもそちらから所番地を知らせる広告が出ると思っていましたので。こうなってみるとどうして広告なさらなかったか、わけがわかりませんね」

客はちょっと恥ずかしそうに笑った。「昔のように余分な金がないんです」と彼は言った。「私を襲った乱暴者の一団が帽子も鳥も持っていってしまったのは間違いないと思いましてね。取り戻そうなんて望みのない試みにこれ以上金を使いたくなかったのです」

「至極もっともなことです。ところで、あの鳥なんですが、仕方なしに食べてしまいました」

「食べた！」客は興奮して椅子から腰を浮かせた。

「ええ、僕たちがそうしないとどっちにしろむだになってしまったでしょうから。しかしこのサイドボードの上の別のガチョウも目方はほとんど同じですし、まったく新鮮ですから、同じようにあなたの目的に充分かなうと思いますが？」

「ああ、もちろん、もちろんです」と答え、ベイカー氏はほっと一息ついた。

「当然、我々の所にはまだあなたの鳥の羽、足、餌袋、といったようなものがありますから、お望みなら――」

その男はいきなり大笑いを始めた。「私の冒険の記念品として役に立つかもしれませんな」と彼は言った。「しかしそのほかに今は亡き我が友の四散した手足が私にとってどんな役に立つものか、皆目わかりませんな。いや、お許しを得て、そのサイドボードの上にすばらしい鳥があるようですから、そちらに注意を集中したいと思います」

シャーロック・ホームズは私のほうへ鋭い視線を送り、わずかに肩をすくめた。

「では、そちらがあなたの帽子、そちらがあなたの鳥です」と彼は言った。「ところで、差し支えなければあなたの鳥をどこから手に入れたか教えていただけませんか？　僕は鳥には目がないほうでしてね、あれほどよく育ったガチョウはめったに見たことがありません」

「いいですとも」と、既に立ち上がって新たに自分の所有となった物をわきに抱えたベイカーが言った。「私たちは数人でよく大英博物館の近くのアルファ・インに集まるんです――私たちは日中、その博物館で見つかります、おわかりですね。今年そこの主人が、ウィンディゲイトって名ですが、ガチョウクラブというのを始めましてね、毎週いくらか支払うと、クリスマスには一人一羽、鳥がもらえるってわけです。で、私は滞りなく支払い、後はご存知の通りです。いや大変感謝します。なにしろ、縁なし帽ではこの年にも、このまじめくさった顔にも似合いませんからな」滑稽なほどもったいぶった態度で、私たち二人にしかつめらしく頭を下げ、彼は大またで帰っていった。

「ヘンリー・ベイカー氏はこれでよしと」と、ホームズは後ろ手にドアを閉めて言った。「彼があの問題について何一つ知らないのはきわめて確かだ。腹がへってるかい、ワトソン？」

「いや、別に」

「では夕食は夜食にすることにして、手がかりがまだ新しいうちに追跡してみようよ」

「いいとも」

寒さの厳しい夜で、私たちはアルスターコートを着け、のどのまわりにクラバットを巻いた。外は、晴れ渡った空に星が冷たい輝きを放ち、通行人たちの息はピストルが発射される時のように白く噴き出していた。私たちは鋭い、大きな足音を響かせ、医師の地区である、ウィンポール街、ハーレー街を抜け、それからウィグモア街からオックスフォード街へと回った。十五分で着いたブルームズベリのアルファ・インは、ホルボーンへ流れ込む通りの一つの角にある小さなパブだった。ホームズは個室のドアを押し開け、赤ら顔の白いエプロンをつけた主人にビールを二杯注文した。

「このビールが君んとこのガチョウほどのものだったらすばらしいだろうがね」と彼は言った。

「うちのガチョウ！」男は驚いたようだった。

「うん。ほんの三十分前、ヘンリー・ベイカーさんと話をしたんだ。ここのガチョウクラブのメンバーだってね」

「ああ！　ええ、なるほど。でもねえ、だんな、あれはうちのガチョウじゃないんで」

「ほう！　じゃあ、どこのだろう？」

「ええと、コベントガーデンの仲買から二ダース入れたんで」

「ほんとかい？　それなら知ってるのがいるよ。誰だったね？」

「ブレックンリッジって名ですよ」

「ああ！　それは知らないな。じゃあ、ご主人、君の健康とお店の繁盛を。おやすみ」

「さてお次はブレックンリッジ氏だ」外の凍る空気の中に出てコートのボタンをかけながら彼は続けた。「思い出してくれたまえ、ワトソン、この鎖の一方の端はガチョウのようななんでもないものだが、もう一方には僕たちが無実を証明しない限り、七年の懲役は堅いという男がいるんだからね。僕たちの調査がただ彼の有罪を確かめるだけということもありうるが、いずれにせよ、僕たちがつかんでいる捜査の線は警察には見逃されているものだし、奇妙な偶然から僕たちの手にゆだねられたものだ。最後の最後まで徹底的に追求しよう。じゃあ、南へ向いて、早足！」

私たちはホルボーンを横切り、エンデル街を通り、ジグザグのスラムを抜け、コベントガーデン市場へ出た。大きな露店の一つにブレックンリッジの名が掲げられ、馬面だが鋭い顔立ちで頬髯を刈り込んでいる経営者が少年を助けて店を閉めていた。

「今晩は。寒いですね」とホームズが言った。

仲買人はうなずき、物問いたげな視線を私の連れに飛ばした。

「ガチョウは売り切れのようだね」と、ホームズは何もない大理石の板を指さして続けた。

「明日の朝なら五百でも売りますよ」

「それではだめだ」

「なら、ガスの灯っている露店がいくつかありますよ」

「ああ、だが君のとこを薦められてね」

「誰からで？」

「アルファの亭主さ」

「ああ、ええ。あそこに二ダース届けましたよ」

「しかもすばらしい鳥だったね。で、あれはどこから手に入れたんだね？」

驚いたことにその質問を聞いて仲買人は激怒した。

「おい、そいつは、だんな」と彼は、ふんぞり返り、腰に手を当てて言った。「何のつもりだ？　さあ、はっきりさせようじゃないか」

「はっきりしてるさ。アルファに入れたガチョウを誰が君に売ったのか知りたいんだ」

「ほう、なら、絶対教えねえよ。だから、ほれ！」

「ああ、たいしたことじゃないんだ。だがどうしてこんなつまらんことでそう熱くなるのかわからんねえ」

「熱くなる！　あんただってたぶん熱くなるぜ、こううるさくされたらな。ちゃんとした品にちゃんと金を払ってそれで取引は終わりだ。それを『あのガチョウはどこだ？』、『あのガチョウを誰に売った』、『あのガチョウをいくらで売る』だぜ。こんなばか騒ぎを聞いたらガチョウは世界中にあれしかないと思っちまうぜ」

「やれやれ、ほかの連中が何を尋ねてきたって僕には関係ないよ」とホームズは無頓着に言った。「君が教えてくれなければ賭けは中止、それだけのことだ。でも僕はね、鳥のことならいつでも来いさ、自分の判断には賭けたっていい、で、僕の食べた鳥はいなか育ちだってほうに五ポンドさ」

「へえ、ならあんたは五ポンド取られたね、都会育ちだからね」と仲買人はぴしゃりと言った。

「そんなはずはない」

「そう言ってんだろ」

「信じないね」

「俺より鳥のことをよく知ってるとでも思ってんのかい？　がきの頃からさばいてんだぜ。いいかい、アルファんとこに行った鳥は全部都会育ちよ」

「そんなことを信じさせようったってだめだよ」

「なら、賭けるかい？」

「君の金を取ることになるだけだなあ、僕が正しいのはわかってるんだから。だが君の場合は一ソブリンいただくことにするかな、強情を張ってはいけないと教えてやるために」

仲買人はにやりとほくそ笑んだ。「帳簿を持ってきな、ビル」と彼は言った。

小さな少年が小さくて薄い帳面と、大きな、背表紙が油で汚れた一冊を持ってきて、それらを吊るしたランプの下に並べた。

「さてそれではうぬぼれ屋さん、」仲買人は言った、「ガチョウは切らしてると思ったけどな、店じまいの前にまだ一羽あったのをあんたが見つけてくれそうだ。さてこの小さな帳面だがいいですかい？」

「それで？」

「これは俺の購入先の名簿だ。おわかりかな？　さて、ではと、ほらこのページがいなかの連中で、名前の後ろにある番号は大きな台帳のどこに取引の記録があるかだ。さてお立合い！　この赤いインクの別のページがおわかりかな？　これはだね、町の供給先の名簿だ。さあ、三番目の名前を見てもらいましょう。ひとつそいつを読み上げてもらえますかな」

「ブリクストン街117、オークショット夫人――249」と、ホームズが読み上げた。

「その通り。今度は台帳でそれを見つけてもらおうかな」

ホームズは示されたページを開けた。「ここにあった、『オークショット夫人、ブリクストン街117、鶏卵、鶏肉業』」

「さて、それでは、最後に何て書いてあるかな？」

「『十二月二十二日。ガチョウ二十四羽、七シリング六ペンス』」

「その通り。その調子だ。で、その下には？」

「『アルファのウィンディゲイト氏に売却、十二シリング』」

「まだ言うことがあるかな？」

シャーロック・ホームズはひどく悔しそうだった。彼は口も利けないほど不愉快といった様子で顔を背けながら、ポケットからソブリン金貨を取り出し、売り台に放り出した。彼は数ヤード行って街灯の下で立ち止まり、彼独特のさも嬉しそうな、声を立てない笑いを発した。

「頬ひげをあんなカットにしてポケットから『ピンカン』が突き出ている男は必ず賭けで釣りだせるものだ」と彼は言った。「僕と賭け事をしていると思ってくれたから引き出せたことで、たぶん百ポンド目の前に積んだってあの男はあんなに完璧な情報をくれやしないと思うよ。さて、ワトソン、僕たちの探求も終わりに近づいているようだし、決定すべきことは、さらに今夜このオークショット夫人の所へ行くべきか、あるいはそれは明日に取っておくべきか、の一点が残るだけだ。あの無愛想な男の言ったことから、明らかに僕たちのほかにもこの問題に熱心なのがいるわけで、僕としては――」

私たちが後にしたばかりの露店から派手な騒ぎが起こり、彼の言葉は突然中断させられた。振り返ってみると、小柄なネズミ面の男が揺れるランプの投げかける黄色い光の輪の中心に立っており、仲買人のブレックンリッジのほうは露店の戸口ですくんでいる相手に向かって激しくこぶしを振っていた。

「お前もお前のガチョウももうたくさんだ。どいつもこいつもどうともなっちまうがいい。これ以上ばかな話で俺を苦しめに来たら犬をけしかけるからな。オークショットさんになら、連れてくれば答えてやるが、お前に何の関係がある？　そのガチョウを俺がお前んとこから買ったか？」

「いいえ。ですが、それでも一羽は私のなんで」と小柄な男は哀れな声を立てた。

「へえ、なら、そりゃあオークショットさんに聞きな」

「彼女はあなたに聞けと」

「ええい、プロシア王に聞こうとどうしようと知ったこっちゃねえ。もうたくさんだ。こっから出てけ！」彼は猛然と突進し、尋ねにきた男は闇の中へ消え去った。

「やあ！　これでブリクストン街を訪ねずにすむかもしれないぞ」とホームズがささやいた。「来たまえ、この男が何者か確かめよう」明かりのついた露店のまわりをぶらつくまばらな人の群れの間を大またで歩き、友はすぐに小柄な男に追いつき、その肩に手を触れた。彼はパッと振り返り、私にはすっかり色を失ったその顔がガス灯の中に見えた。

「いや、どなたですあなたは？　何の御用です？」彼は震える声で尋ねた。

「失礼ですが、」ホームズは穏やかに言った、「今あなたが店員にいろいろ尋ねているのが耳に入ってしまったのでね。僕がお役に立てるかと思いまして」

「あなたが？　あなたは誰です？　どうしてあなたがあのことで何か知ってるはずがあるんですか？」

「シャーロック・ホームズと申します。僕の職業はほかの人の知らないことを知ることです」

「でもあなたがこれを知ってるわけがないでしょう？」

「失礼、僕は何もかも知ってるんです。あなたが一生懸命追跡しているガチョウはブリクストン街のオークショット夫人からブレックンリッジという仲買人へ、同様に彼からアルファのウィンディゲイト氏へ、彼から彼のクラブへ売られ、そしてそのメンバーの一人がヘンリー・ベイカーさんというわけです」

「おお、あなたこそ私がぜひとも会いたいと思っていた人です」と男は手をさし伸ばし、指を震わせながら叫んだ。「これはとても説明できないくらい私にとって重大なことなんです」

シャーロック・ホームズは通りかかった四輪馬車を呼び止めた。「それならこんな吹きさらしの市場より暖かい部屋で話し合うほうがいいでしょう」と彼は言った。「しかし先に進む前にどうぞ、僕が助力させていただくのがどなたなのか、教えてください」

男は一瞬ためらった。「ジョン・ロビンソンと申します」と、彼は横目で見ながら答えた。

「だめだめ。本当の名を」とホームズは優しく言った。「偽名で話をしようとするとどうしてもぎこちなくなるものです」

見知らぬ男の白い頬がパッと赤く染まった。「そうですね、それじゃあ、」彼は言った、「本当はジェイムズ・ライダーという名です」

「その通り。ホテルコスモポリタン主任接客係。どうぞ馬車に乗って。すぐにあなたの知りたいことをすべてお話しできますよ」

小柄な男は突っ立ったまま、これが棚ぼたなのか破滅の淵なのかよくわからないといった様子で、半ばおびえ、半ば希望を抱いた目で私たちを代わる代わる見やった。それから彼は馬車に乗り込み、三十分後私たちはベーカー街の居間に戻っていた。道中、何も話はしなかったが、新たな道連れの激しく、浅い息づかいや、握り締めたり開いたりしているその手が彼の神経の緊張を物語っていた。

「さあ着きました！」とホームズが元気よく言い、私たちは列をなして部屋へ入った。「こんな天気には暖炉が一番ですねえ。寒そうですね、ライダーさん。どうぞその肘掛け椅子に。あなたのそのちょっとした問題を解決する前に、ちょっと室内履きをはかせてください。さあ、ではと！　例の何羽かのガチョウがどうなったか、知りたいんでしょうね？」

「ええ、そうです」

「というよりむしろ、あの、ガチョウですかな。ある一羽の鳥にあなたは関心があるんでしょう――白い、尾に黒い縞のある」

ライダーは興奮に震えた。「ああ、」彼は叫んだ、「それがどこへ行ったか教えていただけませんか？」

「ここに来ました」

「ここに？」

「そう、非常に驚くべき鳥であると判明しました。君が関心を持つのも不思議はない。死んで卵を産みましたよ――これまで人類が見た中で最も美しく輝いている小さな青い卵を。それはここの僕の博物館にあります」

私たちの客はよろよろと立ち上がり、右手でマントルピースをつかんだ。ホームズは金庫の錠をあけ、青いガーネットを掲げた。それは星のように、冷たく、きらきらと、多数の先端のある光を放ち、輝いていた。ライダーは自分の物と主張するか関係を否定するか決めかね、引きつった顔でねめつけながら立っていた。

「万事休すだよ、ライダー」とホームズは静かに言った。「しっかりしろ、君、火の中に突っ込んじまうぞ。背中を支えて椅子へ、ワトソン。この男は重罪を犯して咎められずに済ますには血の気が不足しているね。ブランデーを少しやるんだ。そう！　これでちょっとは人間らしくなった。なんとも小物だな、まったく！」

一瞬彼はよろよろして倒れそうになったが、ブランデーにより頬に赤みがさし、おびえた目で告発者を見つめて座っていた。

「僕はほぼすべての輪を、必要となるかもしれない証拠を握っているから、君に教えてもらうべきことはわずかしかない。それでも事実を完璧に知るにはそのわずかな部分も解決したほうがいい。ライダー、君はこのモーカー伯爵夫人の青い石のことは知っていたね？」

「その話を私にしたのはキャサリン・キューザックでした」と彼は途切れ途切れの声で言った。

「なるほど――奥様の侍女だね。それで苦もなく急に金持ちになれるという誘惑に君は抵抗できなかった。もっとましな連中だって君の先例となっていたんだからね。しかし君の取った手段はあまり良心的ではなかったな。思うに、ライダー、君にはとんでもない大悪党の素質があるらしいな。君は、あの配管工のホーナーという男が以前何かそのような事に関わっていて、疑いがそれだけ容易に彼に向けられることを知っていた。それで君はどうした？　奥様の部屋でちょっと一仕事して――君と共謀者のキューザックとでね――うまく彼が呼びにやられるようにした。それから彼が立ち去ると、宝石箱から盗み、警報を発し、あの不運な男を逮捕させた。それから――」

ライダーは突然敷物の上に身を投げ出し、友のひざをつかんだ。「お願いです、お慈悲を！」彼は金切り声を立てた。「父のことを考えてください！　母のことを！　二人とも胸がつぶれてしまいます。これまで道を誤ったことはないんです！　もう二度といたしません、誓います。聖書にかけて誓います。裁判ざたにはしないでください！　お願いです、どうか！」

「椅子に戻りたまえ！」とホームズは厳しく言った。「今になってぺこぺこはいつくばるのも結構だが、少しは身に覚えのない罪で被告席に着かされるかわいそうなホーナーのことを考えたまえ」

「逃げますよ、ホームズさん、私は国を出ます。そうすれば彼に対する告発は破綻するでしょう」

「ヘン！　その話もしよう。まずは次にやったことを包み隠さず聞かせてもらおう。どうして石があのガチョウの中に入ったのか、どうしてあのガチョウが市場に出たのか？　本当のことを話すんだ、君が無事に済むにはそれしかないんだから」

ライダーは乾いた唇に舌を這わせた。「起こったことをそのまま申します」と彼は言った。「ホーナーが逮捕され、私にはすぐに石をどこかへ持っていくのが一番のように思えました。いつ警察が私や私の部屋を捜索しようと思い立つかわからなかったからです。ホテルの周囲には安全と思われる場所はありませんでした。私は仕事のふりをして外出し、姉の家へ向かいました。姉はオークショットという男と結婚し、ブリクストン街に住み、そこで市場へ出す鳥を太らせています。道々会う人会う人皆が警官か探偵に見えました。で、寒い夜でしたのに顔から汗を流しながらブリクストン街に着きました。姉は私に、どうしたの、なぜそんなに顔色が悪いの、と訊きました。私はホテルで宝石の盗難が会ってろうばいしていると言いました。それから私は裏庭へ行き、パイプを吹かし、どうしたらいちばんいいか考えました。

昔モーズレイという友人があったのですが、彼は悪事に走り、ちょうどペントンヴィルに服役してきたところです。いつだったか会った時、その男が泥棒どものやり口とか、どうやって連中が盗んだものを処分するかという話を始めたことがあるんです。私は彼のしたことを一、二知ってますのでね、彼が私に背かないのはわかっていました。そこで私はその足で彼の住むキルバーンへ行って、彼に秘密を打ち明けようと決心しました。彼は石を金に変える方法を教えてくれるでしょうから。しかしどうやったら無事に彼の所へ行けるでしょう？　ホテルから来る時に経験した苦痛を思いました。今にも捕まって調べられるかもしれないし、ベストのポケットには石がある。私はその時壁に寄りかかって足下をよちよち歩いているガチョウを見ていたのですが、突然ある考えが浮かんでどんなに優れた探偵でも出し抜くことができる方法を教えてくれたのです。

数週間前、姉が私にクリスマスプレゼントとして好きなガチョウを選んでいいと言ったことがあり、姉が必ず約束を守ることはわかっていました。今ガチョウをもらって、それに入れて石をキルバーンまで持っていこう、と思いました。庭には小さな小屋があり、その裏に私は一羽の鳥を追い込みました――すばらしく大きなので、白くて、尾に縞模様がありました。私はそれを捕まえてくちばしをこじあけ、指が届く限り、のどの奥まで石を押し込みました。鳥はごくりと飲み、石が食道を通って餌袋に落ちるのがわかりました。ところがそいつが羽ばたいたりもがいたりしたので、どうしたのかと、姉が出てきました。私が姉に話しかけようとして振り向いた時、そいつは自由になって仲間の中へ飛び込みました。

『いったいあの鳥に何をしていたの、ジェム？』と姉は言います。

『あれだよ、』私は言いました、『クリスマスに一つくれるって言ったろ、一番太ったのを確かめてたんだよ』

『ああ、』と姉です、『それなら取りのけておいたわよ、ジェムの鳥、って呼んでるの。あの向こうの大きくて白いやつよ。二十六羽いるけど、一つはあんたのになって、一つは私たちの、二ダースは市場よ』

『ありがとう、マギー、』と私です、『でもどれでもいいんだったら、今触ってたのがいいんだけど』

『あっちのほうがゆうに三ポンド重いわよ、』姉は言いました、『あんたのために特別に太らせたのよ』

『いいんだいいんだ。あっちをもらうよ、今もらってくから』と私は言いました。

『まあ、好きになさい』と彼女はちょっとむっとして言いました。『で、どれが欲しいの？』

『あの尾に縞のある白いやつだよ、群れのど真ん中にいる』

『ああ、いいわよ。締めて持っていきなさい』

さて、ホームズさん、私はその通りにしてはるばるキルバーンまで鳥を持っていきました。私はあいつに自分のしたことを話しました。そういうことを気楽に話せる男ですから。あいつは息が詰まるまで笑い、私たちはナイフを取ってきてガチョウを開きました。私はゾッとしました。石は跡形もなく、何かひどい間違いが起こったのがわかりました。その鳥を置いてあわてて姉のところへ戻り、裏庭へと急ぎました。そこに鳥は一羽も見えませんでした。

『みんなどこへやっちゃったの、マギー？』と私は叫びました。

『業者のところよ、ジェム』

『どこの業者？』

『コベントガーデンのブレックンリッジよ』

『でも尾に縞のあるのがもう一羽いた？』と私は尋ねました。『俺の選んだのと同じような』

『ええ、ジェム、尾に縞のあるのは二羽いて、あたしには区別がつかなかったわ』

さて、それで、もちろん何もかもはっきりしたので、私は必死になってあのブレックンリッジという男の所へ走りました。ところが彼はすぐに全部売ってしまったうえ、一言もどこへ売ったのか教えてくれません。今夜お聞きになりましたよね。そうなんです、いつもあんなふうな答えでした。姉は私が発狂したと思ってます。私自身も時々そう思います。そして今や――今や私は泥棒の烙印を押されました。品性を売り渡してまで求めた富に触れることもなく。助けてください！　どうか、お助けを！」彼は突然、こらえきれずに両手で顔を覆ってすすり泣きを始めた。

長い沈黙が続き、彼の激しい息遣いとホームズが指先でテーブルの端を叩く規則正しい音だけが聞こえていた。それから友は立ち上がり、ドアを開け放った。

「出て行け！」と彼は言った。

「何ですって！　ああ、神の祝福がありますように！」

「何も言うな。出て行け！」

それにもう何も言う必要はなかった。彼がバタバタと駆け出し、ガタガタと階段を下り、バタンとドアを閉め、カタカタ鋭い足音を立てて通りを走って行くのが聞こえた。

「だってねえ、ワトソン、」ホームズは陶製のパイプに手を伸ばしながら言った、「僕は警察に彼らの欠陥を補うために雇われてるんじゃないからね。ホーナーに危険があるなら話は別だけどね。だがあの男がホーナーに不利な証人として裁判に出ることはないだろうし、訴訟事実も崩壊するにちがいない。僕は重い罪を減刑してやっていることになるんだろうが、たぶん魂を救済しているのかもしれないよ。あの男は二度と道を誤らないだろう。それこそひどいおびえようだったからね。今刑務所に送ったら、常習犯の一生にしてしまうよ。その上、許しの季節じゃないか。偶然が我々の行く手に非常に奇妙で気まぐれな問題を差し挟む、そしてその解決こそが報酬なのだ。すまないがベルを押していただけまいか、博士、新たなる問題に取り掛かろうよ、ここでもまた、ある鳥が主役となるのだがね」

# まだらの紐

この八年にわたって我が友シャーロック・ホームズの方法を研究してきた私の七十あまりの事件の覚書に目を通すと、たくさんの悲劇、いくつかの喜劇、多数のただ不思議なばかりの事件が見つかるが、平凡なものは一つもない。それは、彼が富を得るためではなく、自らの技術を愛するがために仕事をしているので、異常な、いやそれどころか奇怪な傾きを持たない調査に関わることを拒絶したからである。しかし、これらのさまざまな事件のうちでも、サリー州の名門の一家、ストーク・モランのロイロット家に関するものほど奇妙な特徴を示した事件は思い出せない。問題の出来事が起きたのは私がホームズと付き合い始めた頃で、私たちは独身で、ベーカー街の部屋を共有していた。前に記録に載せるはずのものだったのだが、当時、秘密にすることを私は約束しており、それを誓った婦人が先月若死にしたため、約束から解放されたばかりなのである。私は訳があって知っているのだが、グリムズビー・ロイロット博士の死に関して広まった噂は事実を真実よりも恐ろしいものにしがちであり、今や事実を明らかにしたほうがよいと思うのである。

1883年四月初旬のある朝、目を覚ますと身支度を済ましたシャーロック・ホームズが私のベッドの傍らに立っていた。彼は概して朝寝坊であり、マントルピースの上の時計を見ると七時を十五分過ぎただけだったので、私はいささか驚き、おそらく少し腹を立てて彼を見上げた。私自身は規則正しい習慣の持ち主だったからである。

「起こしてすまないね、ワトソン、」彼は言った、「でも今朝は皆同じ目に会ってるんだ。ハドソンさんがたたき起こされ、ハドソンさんは僕にやり返し、僕は君に、さ」

「で、何事だい―火事かい？」

「いや。依頼人だ。若い婦人がかなりの興奮状態で来ているらしい、僕に会いたいと言い張ってね。彼女は今、居間で待っている。さて、若いご婦人方が朝のこんな時間に首都を歩き回って、眠たがってる人をベッドからたたき起こすとなると、伝えなくてはならないきわめて緊急の用事があるんだと思うよ。もしも面白い事件になるなら、きっと君も発端から見守りたいだろうと思ってね。とにかく、君を起こして、その機会を提供しようと考えたんだ」

「いや君、何としたってそいつを見逃すつもりはないよ」

私にとって何より深い喜びは、ホームズの専門家としての捜査をたどり、その迅速な推理にほれぼれとすることだった。それは直感のようにすばやいけれども、常に論理的な根拠に基づいていて、それを基に彼は託された問題を解明するのだった。私はすばやく服を引っ掛け、数分で用意をして友と一緒に居間へ下りた。私たちが部屋に入ると、窓の所に座っていた黒い服を着て深くベールをかぶった婦人が立ち上がった。

「おはようございます」とホームズは元気よく言った。「僕がシャーロック・ホームズです。これは僕の親友で同僚のワトソン博士で、この人の前では僕の前同様にお話しくださって大丈夫です。おや！　嬉しいねえ、暖炉の火を起こしておくとはハドソンさんも気が利いている。どうぞそちらへ寄って、コーヒーを一杯もらいましょうね、震えてらっしゃるようですから」

「寒くて震えているのではありません」と女性は言われるままに席を変え、低い声で言った。

「では、どうして？」

「恐怖からです、ホームズさん。怖いんです」彼女がそう言いながらベールをあげると、本当に哀れなくらい動揺し、顔はすっかり引きつって青ざめ、追われている動物のように落ち着きのないおびえた目をしていることが見て取れた。彼女は顔立ちや姿こそ三十歳の女性だったが、髪には早くも白髪がまじり、表情は疲れ、やつれていた。シャーロック・ホームズは例の鋭い、何も見落とすことのない視線を彼女に走らせた。

「恐れてはいけません」と、彼はなだめるように、身を乗り出して彼女の前腕を軽く叩きながら言った。「僕たちがすぐに解決してみせますから、間違いなくね。今朝列車で到着したようですね」

「すると、私をご存知ですの？」

「いいえ、しかし往復切符の半券を左の手袋の中に握り締めているのが見えますから。朝早く出られたにちがいないが、駅に着くまでには道の悪いところをずいぶん二輪馬車に揺られましたね」

婦人はひどくびっくりし、当惑して我が友を見つめた。

「不思議なことはないんです」と彼は微笑みながら言った。「あなたのジャケットの左腕には七箇所も泥がはねかかっています。まったく新しい汚れです。そんなふうに泥をはねあげるのは二輪馬車のほかありませんし、それもあなたが御者の左側に座る場合だけです」

「根拠が何であるにせよ、まったくその通りです」と彼女は言った。「六時に家を出て、二十分過ぎにレザーヘッドに着き、始発でウォータールーに到着しました。ああ、もうこの緊張には耐えられません。これが続いたら気が狂ってしまいますわ。私には頼りにできる人が一人もいないんです―まったく、ただ一人を除いて。彼は私を愛してますけど、でもねえ、あまり助けにならないんです。私はあなたのことを聞きました。あなたのことをファリントッシュさんから聞きました。すごく困っている時にあなたが助けた人です。彼女があなたの住所を教えてくれました。ああ、私のことも助けられると思いませんこと、せめて私の周りの濃い闇に小さな光を投じられると？　今のところあなたのご尽力に報いることのかなわぬ身ですが、一月か一月半のうちには結婚して、自分で収入を管理できますので、そうすれば少なくとも私が恩知らずでないことはおわかりいただけましょう」

ホームズは机に向かい、錠をあけ、小さな事件ノートを引き出し、それを調べた。

「ファリントッシュ」と彼は言った。「ああそうですね、覚えてますよ、オパールのテイアラに関する事件でした。君に会う前だったと思うよ、ワトソン。僕に言えるのは、喜んであなたの事件にもお友達の事件同様の注意をささげるということだけです。報酬のことなら、僕には仕事そのものが報酬です。しかし、僕が使うことになる費用をあなたのいちばん都合のいい時に支払ってくださるのはご自由です。それではどうか、その問題について、僕たちが意見をまとめるのに役立つと思われることをすべてここでお話しください」

「ああ！」と訪問者は答えた。「私の立場の恐ろしさは、私の恐怖が漠然としたものであり、私の疑いがほかの人にはつまらないことに思えるいくつかの小さな問題にかかっているという点にあるのです。ですから、私が誰よりも助力や助言を求めて当然である彼でさえ、私の話すことを何もかも神経質な女の空想と見ているんです。彼もそうは言いませんが、なだめるような答え方やそらした目を見ればわかります。でも私、聞きましたわ、ホームズさん、あなたは人間の心にあるさまざまな悪を深く見抜くことのできる、と。包囲する危険の中をどうやって歩いたらいいか、助言をお願いします」

「謹聴していますよ」

「ヘレン・ストウナーと申しまして、義父と一緒に暮らしてますが、義父はイングランドで最古のサクソン族の家柄の一つ、サリー州の西の端にあるストーク・モランのロイロット家の最後の生き残りです」

ホームズはうなずいた。「その名前はよく存じています」と彼は言った。

「一族はかつてイングランドでも有数の金持ちで、領地は州境を越えて北はバークシャー、西はハンプシャーに及んでいました。しかし前世紀になって四代続けて継承者が自堕落で浪費癖を持ち、結局摂政期に一人の賭博好きによって一門は決定的に没落しました。残ったのはただ数エーカーの土地と、築二百年の家だけでしたが、その家すら重い借金のかたにとられてあえいでいるのです。先代の地主はそこで生きながらえて、貧乏貴族としてひどい暮らしを送っていました。しかしその一人息子である私の義父は、新しい状況に適応しなければならないと思い、親戚に立て替えてもらって医学の学位を取ることができ、カルカッタへ移り、そこで専門技術と力強い性格によって繁盛医として地歩を固めました。ところが、家の中で起こったいくつかの泥棒にかっとなった義父は現地人の執事を殴り殺し、かろうじて極刑を免れたのです。実際のところ、義父は長期の懲役刑を受け、後になって気難しい、失意の人としてイングランドに戻りました。

インドにいた時、ロイロット博士は私の母、ベンガル砲兵隊のストウナー少将の若い未亡人であるストウナー夫人と結婚しました。姉のジュリアと私は双子で、母が再婚した時私たちはたった二歳でした。母には年千ポンドにもなるかなりの大金があり、これを遺言によりロイロット博士に、私たちが彼と一緒に住む間は全額、私たちが結婚した場合にはそれぞれに一定の年額を与えるという条件で譲りました。イングランドに戻ってまもなく母は亡くなりました。八年前にクルーの近くで鉄道事故に会い、死にました。その時、ロイロット博士はロンドンで開業する試みを断念し、私たちを連れてストーク・モランの先祖代々の古い家に移り住みました。母の残したお金は私たちにとって必要なものすべてを満たすのに充分で、私たちの幸福を妨げるものはないと思われました。

しかしこのころ、義父に恐ろしい変化が生じました。友達も作らず、近所の人たちと交流もしないで、みんな最初はストーク・モランのロイロットが旧屋敷に戻ったのを見てひどく喜んでいましたのに、父は家に閉じこもり、珍しく外に出ると必ず、だれかれかまわず偶然出会う人に乱暴にけんかをしかけるのです。狂気にも等しい激しい気性は代々一門の男たちに受け継がれてきたもので、父の場合はそれが長く熱帯に在住したため強められたのだと思います。続けざまに恥ずべきけんかをして、そのうち二度は警察裁判所にまで行き、とうとう父は村の恐怖の的となり、人々は父が近づいたら逃げますわ。なにしろ父は計り知れない力の持ち主で、怒るとまったく手に負えませんから。

先週も地元の鍛冶屋を欄干越しに小川に投げ込み、私がかき集められるだけのお金を払って、やっとそれ以上世間に知れるのを防ぐことができました。父には移動するジプシーのほかにまったく友達はなく、その放浪者たちに家族の地所である数エーカーのいばらに覆われた土地に野営するのを許し、見返りに彼らのテントでもてなしを受け、時には何週間も続けて彼らと一緒にさまよっていたこともあります。父はまたインドの動物も大好きで、あちらの業者に送らせ、今はチータとヒヒがいて、庭を自由に歩き回るので、その主人とほとんど同じくらい村人に恐れられています。

気の毒な姉のジュリアと私の暮らしがあまり楽しくなかったことは私の話からご想像がつきましょう。召使はいつかず、長い間家の仕事をすべて私たちでしたのです。彼女は死んだ時やっと三十でしたが、髪の毛はもう白くなり始めていました。私も同様ですが」

「ではお姉さんは亡くなったんですね？」

「彼女はちょうど二年前死んだのですが、そのことについてお話ししたいのです。申しましたような暮らしをしておりますと、私たちが同じ世代や地位の人とあまり会うことがないのはおわかりでしょう。でも、私たちには叔母、ホノリア・ウェストフェイルという母の未婚の妹がいて、ハローの近くに住んでいますが、私たちは時折短い期間この婦人の家を訪ねるのを許されていました。ジュリアは二年前のクリスマスにそこで予備役の海軍少佐と会い、婚約しました。姉が戻って婚約を知った義父は結婚に何の反対もしませんでしたが、結婚式の日まで二週間を切った頃、恐ろしい出来事が起きて私から唯一の仲間を奪ったのです」

シャーロック・ホームズは椅子の背にもたれ、目を閉じ、頭をクッションに沈めていたが、ここで半ばまぶたをあけ、客のほうを見やった。

「細かい点まで正確にお願いします」

「それはたやすいことですわ。あの恐ろしい時に起きたことはすべて記憶に焼き付けられていますから。館は既に申しましたように非常に古く、今は翼の一つだけ使って住んでいます。この翼の寝室は一階にあり、居間は建物の中央の区画にあります。これらの寝室は順にロイロット博士の寝室、二番目が姉の、三番目が私のになっています。それらの間は直接行き来できませんが、皆同じ廊下に出られます。よくわかるように話せてます？」

「ええ、申し分なく」

「三つの部屋の窓は芝生に面しています。あの運命の夜、ロイロット博士は早く自分の部屋へ入りましたが、私たちは義父が休むために下がったのではないとわかっていました。というのは義父が習慣で吸っている強いインド葉巻の匂いに姉が悩まされていましたので。それで彼女は自分の部屋を出て、私の所へ来て、しばらく座って近づいてきた結婚式のことでおしゃべりしていました。十一時に彼女は部屋を出ようと立ち上がったのですが、戸口で立ち止まり、振り返りました。

『ねえ、ヘレン、』彼女は言いました、『誰かが真夜中に口笛を吹くのを聞いたことがない？』

『ないわ』と私は言いました。

『あなたが口笛を吹けるはずはないわよねえ、眠っていて？』

『まさか。でもどうして？』

『ここ数日毎晩、いつも朝の三時ごろ、低い、はっきりした口笛が聞こえるのよ。あたし眠りが浅いから、それで目が覚めるの。どこから聞こえるかはわからないけど―隣の部屋からかもしれないし、芝生からかもしれない。あなたが聞いたかどうかちょっと訊いてみようと思ったのよ』

『いいえ。聞かなかったわ。植え込みにいるあのいやらしいジプシーにちがいないわ』

『たぶんね。でも芝生からならあなたも聞かないのは不思議ね』

『ああ、でもあたしはあなたより眠りが深いから』

『そうね、どっちにしてもたいしたことじゃないわ』彼女は私に微笑み返し、ドアを閉め、それから少しして彼女が鍵を錠に差し込む音が聞こえました」

「ほう」とホームズは言った。「夜はいつも鍵をかける習慣ですか？」

「ええ、いつも」

「それはなぜ？」

「博士がチータとヒヒを飼っていることには触れたと思いますが。二人ともドアに鍵をかけなくては安心できませんでしたわ」

「その通りですね。どうぞ先へ進めてください」

「その夜は眠れませんでした。不幸が迫っているという漠然とした予感が心を離れないのです。姉と私が双子であることを思い出してください。一心同体の二つの魂を結ぶ絆がどれだけ微妙なものかはご存知ですね。嵐の夜でした。外では風がうなり、雨はざあざあと窓を打っていました。突然、風のざわめきの中をおびえた女の狂乱した叫び声がつんざいたのです。私には姉の声とわかりました。私はベッドを飛び出し、ショールを羽織り、廊下へと駆け出しました。ドアをあけた時私は、姉が描写したような低い口笛を、それから少しして金属の塊が落ちたようなガチャンという音を聞いたように思いました。廊下を走って行くと、姉の部屋のドアの錠があけられ、それがゆっくりとちょうつがいで回転したのです。私はそこから何が出てこようとしているのかわからないので、恐怖に襲われてそれを見つめました。廊下のランプの明かりで戸口に現れた姉を見ると、その顔は恐怖に青ざめ、両手で探るように助けを求め、全身は酔っ払いのようにゆらゆら揺れてました。私は彼女に駆け寄り、腕に彼女を抱きかかえましたが、その瞬間彼女の膝が崩れたらしく、彼女は床に倒れました。彼女はひどく苦しいのか、のたうち回り、四肢は激しくけいれんしていました。初め私は、彼女には私がわからないのだと思いましたが、彼女の上にかがみこむと、彼女は突然、決して忘れられない金切り声で言いました、『ああ、神よ！　ヘレン！　紐よ！　まだらの紐！』ほかにも彼女には言いたいことがあり、指で博士の部屋の方向に空を指したのですが、新たなけいれんが彼女を襲い、その言葉を詰まらせました。私は義父を大声で呼びながら駆け出し、ガウンを着て部屋から急いでくる義父に出くわしました。義父が姉の傍らに着いた時には彼女は意識がなく、義父がのどにブランデーを流し込み、村の医者も呼びにやりましたけれども、努力の甲斐もなく、姉はゆっくりと衰弱し、意識を取り戻すことなく死にました。それが私の最愛の姉の恐ろしい最期でした」

「ちょっと待って、」ホームズが言った、「その口笛と金属音ですが、確かですか？　断言できますか？」

「それは州の検死官も審理の時に訊いたことですわ。それを聞いたという印象は強いものですが、でも、すさまじい風や古い家のきしむ音の中ですから、ことによると思い違いかもしれません」

「お姉さんは身支度をしていましたか？」

「いいえ、寝巻きを着てました。姉の右手には黒焦げのマッチの燃え残り、左手にはマッチの箱がありました」

「不安を感じて火をつけ、あたりを見回したことを示してますね。それは重要です。それで検死官はどんな結論に至りましたか？」

「検死官はきわめて注意深く事件を調査しましたわ、ロイロット博士の品行は州でもだいぶ前から有名でしたから。でも得心のいく死因を発見できませんでした。ドアは内側からしっかり留められ、窓は幅広の鉄の棒のついた旧式なよろい戸でふさがれ、毎晩しっかり閉められていた、と私は証言で明らかにしました。壁は入念に打診され、どこもまったく堅固であることが明らかになりましたし、床張りも徹底的に調べられ、同様の結果でした。煙突は大きく開いていますが、四つの大きなＵ字のくぎにふさがれています。従って姉が最期を迎えた時、一人っきりだったのは確かです。その上、姉には暴力を受けた痕はありませんでした」

「毒物はどうです？」

「医師たちがそれを調べましたが、何も出ませんでした」

「ではあなたは、この不幸な女性は何で亡くなったと思いますか？」

「彼女は純然たる恐怖と神経的衝撃で死んだと信じています。もっとも、彼女を怖がらせたものが何かは見当もつきませんが」

「その時庭にはジプシーがいましたか？」

「ええ、ほとんどいつもいくらかはいます」

「ああ、それであなたはその、紐に対する言及をどう思いますか―まだらの紐を？」

「単に錯乱による」でたらめな言葉と思うこともありますし、たぶん庭に群れているジプシーたちをそう言ったのだろうと思うこともあります。彼らの多くが頭にかぶっているまだら模様のバンダナが姉の使った奇妙な形容詞を暗示するのかどうか、私にはわかりません」

ホームズはとても満足がいかないといったように首を振った。

「これは非常に難しいですね」と彼は言った。「どうぞお話を続けて」

「あれから二年が過ぎ、私の生活は最近までかつてなく孤独でした。しかし一月前、親友が、長年知っていた人ですが、ありがたいことに私に結婚を申し込んだのです。彼の名はアーミテージ、パーシー・アーミテージと言い、レディングの近くのクレイン・ウォーターのアーミテージさんの次男です。義父は縁組に反対せず、私たちは春のうちに結婚することになっています。二日前、建物の西の翼でいくつかの修理が始まり、私の寝室も壁に穴があけられたので、私は姉の死んだ部屋へ移り、姉が眠ったそのベッドで眠らなければならなくなりました。それで、ゆうべ、目を覚まして横になり、姉の恐ろしい運命を考えていた私が、不意に、夜の静寂の中に姉の死の前触れとなった低い口笛を聞いた時のぞっとするような恐怖をご想像ください。私は飛び起きてランプをつけましたが、部屋の中に何も見えませんでした。でももう一度寝るには動揺がひどすぎるので、私は服を着け、夜明けになるとすぐにそっと抜け出し、向かいにあるクラウン・インで二輪馬車を雇い、レザーヘッドへ走らせ、そこからあなたに会って助言を求めることだけを目的に今朝やってきたのです」

「それは賢明でした」と友は言った。「しかしあなたはすべてを話しましたか？」

「ええ、すべて」

「ミス・ロイロット、いけませんね。あなたはお義父さんをかばっている」

「まあ、どういうことですの？」

答えの代わりにホームズは訪問者の膝にのせられた手を飾る黒いレースのフリルを押し上げた。五つの小さな青黒い斑点、五本の指の痕が白い手首についていた。

「あなたは虐待されていますね」とホームズは言った。

婦人は真っ赤になり、傷ついた手首を覆い隠した。「きつい人ですから、」彼女は言った、「それにたぶん自分の力がよくわからないのでしょう」

長い沈黙があり、その間ホームズは両手であごを支え、パチパチ言う火を見つめていた。

「これは非常に重大な事件です」と、ようやく彼が言った。「行動方針を決める前に知っておきたい細かい点がたくさんあります。しかし一刻の猶予もなりません。僕たちが今日ストーク・モランへ行くとして、お義父さんに知られずにそれらの部屋を調べることはできますか？」

「たまたま、父は今日、何かとても重要な用件でロンドンへ出ると言ってました。たぶん一日中留守にするでしょうし、あなたを妨げるものはないでしょう。今家政婦がおりますが、年寄りで愚かですから、簡単に邪魔にならないようにできます」

「結構。君はこの旅に反対しないね、ワトソン？」

「決して」

「では二人で行きます。あなたご自身はどうなさいます？」

「私には一つ二つ、ロンドンにいる間にやりたいことがあります。でもあなた方がいらっしゃる時間にはあちらにいるように、十二時の列車で戻りますわ」

「では僕たちは午後早くに行くものと思ってください。僕のほうも仕事でいくつか小さな問題に精を出さなければならないのでね。これから朝食ですがいかがですか？」

「いいえ、行かなければ。あなたに悩みを打ち明けたらもう心が軽くなりましたわ。午後お会いするのを楽しみにしています」彼女は厚い黒のベールを顔に垂らし、すうっと部屋から出て行った。

「で、どう思うね、ワトソン？」と椅子の背にもたれてシャーロック・ホームズは尋ねた。

「僕には非常に陰うつで不吉な事件に見えるが」

「まったく陰うつだし、まったく不吉だ」

「それでもあの婦人の言う通り床も壁も堅固で、ドアも窓も煙突も通れないとなると、彼女の姉は謎の最期を遂げた時、疑う余地なく一人きりだったわけだ」

「すると、あの夜間の口笛はどうなる、死にかけた女性の非常に妙な言葉はどうなる？」

「わからんよ」

「夜の口笛に関して思い浮かぶこと、この老先生と親密な間柄のジプシーの一団の存在、継娘の結婚を阻止することが博士の利益になると信ずべき正当な理由がある事実、死に際のまだらの紐についての暗示、そして最後に、よろい戸を閉めている金属の棒の一つが元の位置に戻って引き起こされたかもしれない金属音をヘレン・ストウナー嬢が聞いた事実、これらを結びつけると、その線で謎は晴れるかもしれないと考える十分な根拠があると思うよ」

「だがねえ、すると何をジプシーはしたんだ？」

「見当もつかないな」

「そんな仮説にはいくらも反対理由がありそうだ」

「そうなんだ。まさにそういうわけで僕らは今日ストーク・モランへ出かけるんだ。それらの反対理由が致命的なものか、それともうまく説明できるものなのか、確かめたいんだ。しかし一体全体何事だ！」

その叫び声が思わず友の口から出たのは、私たちの部屋のドアがいきなりバーンと開き、巨大な男がその開いた口に収まったからだった。その服装は専門職のそれと農業のそれが入り交じった妙なもので、黒いシルクハット、長いフロックコート、長いゲートルを着け、狩猟用の鞭を手に持って振っていた。背が高く、実際、帽子は戸口の横木をかすめ、横幅も戸口の左右の端までいっぱいのように見えた。私たち二人に交互に向けられる大きな顔は無数のしわでしなび、黄色く日に焼け、あらゆる邪悪な情熱を刻みつけられ、また、深くくぼみ、怒りを発する目や高く、やせて肉のない鼻はどこか年老いた凶暴な猛禽に似ていた。

「どっちがホームズかな？」と現れた男は尋ねた。

「僕ですが、こちらは存じ上げないようですね」と友は静かに言った。

「ストーク・モランのグリムズビー・ロイロット博士だ」

「これはこれは、博士」とホームズは穏やかに言った。「どうぞお座りください」

「ごめんこうむる。義理の娘がここへ来たな。つけてきたんだ。あれはあんたに何を言っておった？」

「今年はこのところ少し冷えますねえ」とホームズは言った。

「あれはあんたに何を言っておったんだ？」と老人は怒り狂って大声を上げた。

「しかしクロッカスは順調と聞きましたが」と友は動じることなく続けた。

「おい！　言いぬける気か？」と客は一歩進み、狩猟鞭を振りながら言った。「お前のことは知ってるぞ、悪党め！　前に聞いたことがある。おせっかい屋のホームズだ」

我が友はにっこりした。

「でしゃばりのホームズ！」

ホームズの笑みが広がった。

「スコットランドヤードの威張り屋の小役人のホームズ！」

ホームズは嬉しそうにくすくす笑った。「あなたの話は実に愉快です」と彼は言った。「お帰りにはドアを閉めてください、どうしてもすきま風が来ますので」

「言うことを言ったら帰る。わしのことでおせっかいするんじゃない。ミス・ストウナーがここに来ていたことはわかってるんだ。つけたんだ！　わしを怒らせると危険だぞ！　見ろ」彼はさっと前進し、火かき棒をつかみ、大きな茶色い両手でそれをぐいと曲げた。

「この手の届く所には近づかないことだ」と彼はうなり、曲がった火かき棒を暖炉に投げつけて大またに部屋を出て行った。

「実に愛想のいい人物らしい」とホームズは笑いながら言った。「僕はそれほど大きくはないが、彼が残っていれば僕の手の力もあまり彼に劣らないことを見せられたんだがねえ」そう言いながら彼は鋼の火かき棒を拾い上げ、えいとばかりに力を込め、それを元通りまっすぐにした。

「無礼にも僕を警察の役人と混同するとはねえ！　とはいえこの出来事は我々の調査に興を添えてくれたし、若い友人が軽率にもあのけだものにつけられてしまったことで苦しまずにすむようにと思うだけだ。さて、ワトソン、朝食を頼むとしようよ、その後で僕は歩いて民法博士会へ行ってくる、この問題に役立つ情報を何か得られれば、と思うんでね」

一時近くなってシャーロック・ホームズは遠足から戻った。彼はメモや数字を殴り書きした青い紙を一枚手にしていた。

「僕は死んだ奥さんの遺言を見てきたよ」と彼は言った。「その正確な意味を知るために、関係している投資物件の現在の価格を算定しなければならなくてね。奥さんが死んだ当時には千百ポンドにもなろうとしていた総収入が今では農業関係の価格の下落によってせいぜい七百五十ポンドだ。娘たちはそれぞれ、結婚した場合、二百五十ポンドの収入を要求できる。従って、娘が二人とも結婚すれば、あの紳士にははした金しかなくなるし、どちらか一方であってもその不自由は非常に深刻な程度になる。あの男にそういったことの邪魔をする何より強い動機があるとわかったんだから、朝の一仕事もむだではなかったね。さあ、ワトソン、これは深刻だからぐずぐずしてはいられないよ、ましてや僕たちが老人のことに関心を持っているのをあちらも気づいているしね。君の用意がよければ馬車を呼んでウォータールーまで走らせよう。君のリボルバーをそっとポケットに入れておいてくれると非常にありがたいんだが。鋼の火かき棒をくの字にねじ曲げられる男とやりあうにもエレーの二番なら強力だからね。それと歯ブラシがあれば用は足りるかな」

ウォータールーで運良くレザーヘッド行きの列車に間に合った私たちはレザーヘッドの駅前の宿でトラップ馬車を雇い、美しいサリー州の小道を四、五マイル走らせた。空には輝く太陽とふわふわした雲がいくつか浮かぶ、すばらしい日だった。木々や路傍の生垣はちょうど緑の新芽を吹き始め、空気にはしっとりした土の心地よい香りがあふれていた。少なくとも私には、気持ちよい春の気配と私たちが着手している不吉な探求との対照が不思議だった。友はトラップ馬車の前の席に着き、腕組みをし、帽子を目深にかぶり、あごを胸に埋め、深い物思いに沈んでいた。しかし、突然彼はびくっとし、私の肩を叩き、牧草地の向こうを指さした。

「あそこを見たまえ！」と彼は言った。

なだらかな斜面に木の茂った庭園が広がり、頂上ではこんもりとした森になっていた。その枝々の真ん中から非常に古い館の灰色の切妻と高い棟木が突き出ていた。

「ストーク・モランかな？」と彼は言った。

「ええ、だんな、あれがグリムズビー・ロイロット博士の家です」と御者が言った。

「あそこではちょっと建築をやっているんだ」とホームズは言った。「それが僕たちの行くところだ」

「あっちが村です」と、御者は少し離れた左側の屋根のかたまりを指して言った。「ですがあの家へ行きたいなら、この踏み段を越えて、それから牧草地の小道を通ったほうが近くなりますよ。ほらあそこ、婦人が歩いているでしょう」

「それにあの婦人はミス・ストウナーじゃないかな」とホームズは手をかざしながら言った。「うん、君の言うようにしたほうがよさそうだ」

私たちは降りて払いを済ませ、トラップ馬車はレザーヘッドへとガタガタ戻っていった。

「あの男がさ、」踏み段を登りながらホームズが言った、「僕たちは建築家として、あるいは何か明確な業務でここへ来た、と考えてくれたらいいと思ったんだ。それで噂になるのを防げるかもしれない。こんにちは、ストウナーさん。僕たち、約束を守ったでしょう」

急いで私たちを出迎える朝の依頼人の顔はその喜びを物語っていた。「もう心待ちにしておりましたわ」と彼女は叫び、温かく私たちの手を握った。「何もかもうまくいきましたわ。ロイロット博士はロンドンへ行って、夕方前には戻ってきそうもありませんわ」

「光栄にも博士とは知り合いになりました」とホームズは言い、短く起きたことの概略を述べた。それを聞いてミス・ストウナーは唇まで青ざめた。

「まあ！」彼女は叫んだ。「じゃあ、あたしをつけていたのね」

「そのようですね」

「狡猾な人ですから、油断も隙もありませんわ。帰ってきたら何て言うでしょう？」

「彼は自分の身を守らなければなりますまいよ。誰か自分より狡猾な者が自分を追跡していることに気づくでしょうから。あなたは今夜あの人を避けて閉じこもっていなければなりません。彼が乱暴をするなら、僕たちが必ずあなたをハローの叔母さんの所へ連れて行きますから。さあ、時間を最大限利用しなければいけませんので、すぐに僕たちを調査すべき部屋へ案内してください」

灰色の石造りの建物は苔むし、中央の部分は高く、両翼はかにのはさみのように屈曲して張り出していた。一方の翼では窓が割れて木の板でふさがれ、また、屋根も一部崩れ落ちて没落を物語っていた。中央の部分も同じように修繕されていなかったが、右側の区画は比較的近代的で、窓のブラインドや煙突から渦を巻いて立ち昇る青い煙がここに家族が住んでいることを示していた。端の壁にはいくつか足場が立てられ、石壁が壊されていたが、私たちが訪ねた時には作業員のいる気配はなかった。ホームズは手入れの悪い芝生を行ったり来たりゆっくりと歩き、深い注意を払って窓の外側を調べた。

「これがあなたがいつも休んでいた部屋の窓で、真ん中がお姉さんの、母屋に接している所がロイロット博士の部屋ですね？」

「その通りです。でも今は私、真ん中で休んでいます」

「改築中は、ということですね。ところで、あの端の壁にあまり差し迫った修繕の必要があるようには見えませんね」

「ありませんでしたわ。私を自分の部屋から移動させる口実だったと思います」

「ああ！　それは暗示的だ。さてと、この狭い翼の向こう側にはこれらの三つの部屋に通じる廊下が走っていますね。そこには、もちろん窓がありますね？」

「ええ、でも非常に小さなものです。狭くて誰も通り抜けられませんわ」

「あなた方が二人とも夜ドアに鍵をかけていたのですから、そっち側から部屋には入れなかったわけです。さて、すみませんがあなたの部屋へ入ってよろい戸を閉めていただけませんか」

ミス・ストウナーが実行し、ホームズは開いた窓を入念に調べた後、手を尽くしてよろい戸をこじ開けようと努めたが、うまくいかなかった。ナイフを通して棒を持ち上げられるようなすき間はなかった。それから彼はレンズを使ってちょうつがいを検査したが、それらは硬い鉄製で、どっしりした石造りにしっかり作りつけられていた。「ハン！」彼はやや当惑してあごをかきながら言った。「僕の仮説は確かにいくつか困難を呈しているね。よろい戸に掛け金をかければ誰も通れないな。じゃあ、内側に何か問題に光明を投じるものがあるか確かめよう」

小さな勝手口がしっくいを塗った廊下に通じ、三つの寝室はそれに面していた。ホームズが三番目の部屋の調査を辞退したので、私たちは直ちに、ミス・ストウナーが現在休んでいる、そして彼女の姉が最期を遂げた二番目へ進んだ。それは質素な小部屋で、古い貴族屋敷の様式で、天井は低く、大きな暖炉があった。茶色い整理だんすが一隅に、白い上掛けをした狭いベッドがもう一隅に、鏡台が窓の左側に立っていた。二つの枝編み細工の椅子を加え、これらが部屋にある家具のすべてで、後は中央に正方形のウィルトンカーペットがあるだけだった。周りの床板や壁の羽目板は茶色い、虫の食ったオークで、非常に古く、変色しているので、家を建てた当初からあったものかもしれない。ホームズは椅子を一つ隅に引き寄せて無言で座ったが、部屋の詳細を見て取るべく、目をぐるぐると行ったり来たり走らせていた。

「あのベルはどこに通じるんですか？」と、ようやく彼は尋ね、ベッドのそばに垂れ下がり、現にその房が枕にのっている太いベルの綱を指さした。

「家政婦の部屋にですわ」

「ほかのものより新しく見えますが？」

「ええ、二年前にそこにつけたばかりです」

「お姉さんが頼んだんでしょうね？」

「いいえ。姉が使ってるのを聞いたことがありませんもの。私たちはいつも欲しいものは自分で取ってくるようにしていました」

「ほう、そこにそんな素敵な引き綱をつける必要はなさそうですね。失礼しますよ、ちょっとこの床を見ないと気が済まないので」彼はレンズを手にうつぶせに身を投げ出し、あちこちすばやく這い回り、床板の裂け目を詳細に調べた。それから彼はその部屋の木の羽目板も同様にした。さらに彼はベッドに歩み寄り、しばらくそれを見つめたり、壁の上へ下へと目を走らせたりしていた。最後に彼はベルの綱を手に取り、勢いよく引っ張った。

「おや、これはただの飾りだ」と彼は言った。

「鳴りません？」

「ええ、ワイアーにつながってさえいませんよ。これはおもしろい。ほら見えるでしょう、通気孔の小さな口の真上の鉤にくくりつけてあります」

「なんてばかげたこと！　私、一度もそれに気づきませんでした」

「実に奇妙だ！」ホームズは綱を引きながらつぶやいた。

「この部屋には一つ二つ、非常に変わった点があります。たとえば、別の部屋に向けて通気孔を開けるとは何とばかな工事でしょう、同じ手間で外気に通じることができたろうにね！」

「それもかなり新しいものですわ」と婦人は言った。

「ベルの綱と同じ頃にやったんですね？」とホームズが言った。

「ええ、その頃いくつか小さな改装をしましたので」

「それは非常に興味深い性質のものだったようですね――飾りのベルの引き綱、通気しない通気孔ですか。お許しを得て、ストウナーさん、今度は内側の部屋へ我々の調査を進めるとしましょう」

グリムズビー・ロイロット博士の部屋は継娘のそれより大きかったが、家具は同じように質素だった。キャンプ用ベッド、大部分専門書でいっぱいの小さな木の棚、ベッドの脇の肘掛け椅子、壁に寄せた簡素な木の椅子、丸いテーブル、大きな鉄の金庫、が目に映る主要なものだった。ホームズはゆっくりと歩きまわり、それらすべて、それぞれを非常に熱心に調べた。

「この中には何が？」と彼は金庫を叩きながら尋ねた。

「義父の仕事の書類です」

「ああ！　では中を見たことがあるんですね？」

「一度だけ、数年前に。書類でいっぱいだったのを覚えてますわ」

「たとえば中に猫なんかいないでしょうね？」

「ええ。奇抜な考えですこと！」

「では、これをご覧なさい！」彼はその上に置いてあったミルクの入った小さな皿を手に取った。

「いいえ。猫は飼っていませんわ。でもチータとヒヒがいます」

「ああ、そう、そうでした！　まあ、チータも確かに大きな猫ですが、でも皿一杯のミルクでは、たぶん、その要求を満たすにはあまり役に立ちませんね。一つ、ぜひはっきりさせておきたい点があるんです」彼は木製の椅子の正面にしゃがみ込み、多大な注意を払ってその座るところを調べた。

「ありがとう。これはすっかりけりがつきました」と彼は言い、立ち上がってレンズをポケットに入れた。おや！　ここにおもしろいものがある！」

彼の目に留まった物は小さな犬用の鞭で、ベッドの一角につるされていた。しかしその鞭は先に輪を作るために巻かれて結ばれていた。

「それをどう思う、ワトソン？」

「まったくありふれた鞭だ。だがなぜ結んであるのかはわからないよ」

「それほどありふれているかい？　ああ、まったく！　邪悪な世とはいえ、利口な男が頭脳を犯罪に向けると最悪だね。もう十分調べたようですから、ストウナーさん、お許しを得て外の芝生の上を歩きましょう」

この調査の現場を離れた時ほど怖い顔、暗い表情の友を、私は見たことがなかった。私たちは何度も行ったり来たり、芝生の上を歩いたが、ミス・ストウナーも私も、彼が自ら物思いから覚めるまで、彼の思考に割って入るつもりはなかった。

「絶対に必須のことですが、ストウナーさん、」彼は言った、「あなたにはあらゆる点で完全に僕の忠告に従っていただきます」

「間違いなくそうしますわ」

「事はあまりに深刻ですからいかなる躊躇も無用です。あなたの生命はあなたの応諾にかかっています」

「大丈夫です、あなたに一任しますわ」

「まず第一に、この友人と僕はあなたの部屋に泊まらなければなりません」

ミス・ストウナーも私もびっくりして彼を見つめた。

「ええ、そうしなければなりません。説明しましょう。あそこにあるのは村の宿屋ですね？」

「ええ、あれがクラウンです」

「結構。あそこからあなたの部屋の窓は見えますね？」

「もちろん」

「お義父さんが戻ってきたら、あなたは頭痛のふりでもして部屋にこもらなければいけません。それから、夜彼が部屋へ下がるのが聞こえたら、窓のよろい戸をあけて、掛け金をはずし、僕たちへの合図としてランプをそこに置き、それから、何でも必要になりそうなものを持って以前使っていた部屋へ静かに引き下がってください。修繕中とはいえ、一晩くらい何とかなりますよね」

「ああ、ええ、何でもありません」

「後は僕たちに任せてください」

「でも何をなさるんですの？」

「僕たちはあなたの部屋で一晩過ごし、あなたを不安にしたあの物音の原因を調査します」

「ねえホームズさん、あなたはもう結論を下しているんでしょう」とミス・ストウナーは友の袖に手をかけて言った。

「あるいはね」

「でしたら、お願いですから、姉の死の原因が何だったのか教えてください」

「できればお話しする前により明確な証拠をつかみたいのです」

「せめて教えていただけますわね、私自身の考えは正しいのでしょうか、姉は突然の恐怖がもとで死んだのでしょうか？」

「いいえ、そうじゃないと思います。おそらくもっと確実な原因があったと思うのです。さあ、ストウナーさん、おいとましなければ、ロイロット博士が戻って僕たちを見たら、僕たちの旅がむだになります。ごきげんよう、そして勇気を出して、僕の言ったことをしていれば、僕たちがすぐにあなたを脅かす危険を追い払ってしまいますから安心なさい」

シャーロック・ホームズと私は難なくクラウン・インに寝室と居間を取れた。それは上の階にあり、並木道の門とストーク・モランの館の居住している翼を眺望することができた。日暮れにグリムズビー・ロイロット博士の乗った馬車が通り、彼の巨大な姿が彼を送る小さな少年の人影を横に従えてぼんやりと見えた。少年が重い鉄の門をあけるのに少しばかり苦労し、私たちにも博士のしゃがれ声の怒号が聞こえ、彼が激怒して固めたこぶしを少年に向かって振り上げるのが見えた。トラップ馬車は走り行き、数分後に居間の一つのランプがつけられて木々の間に突然パッと光が生じるのが見えた。

私たちは迫り来る闇の中にともに座っていた。「どうだろう、ワトソン、」ホームズが言った、「今夜君を連れて行くのは本当にいささか気が咎めるんだ。紛れもなく危険をはらんでるんでね」

「私が役に立つのか？」

「君の存在は非常に力になると思う」

「だったらもちろん行くとも」

「それはとてもありがたい」

「危険と言うんだね。明らかに君はあの二つの部屋で私に見えたものより多くを見てきたんだね」

「いや、でも僕のほうが少しだけ多くのことを推論したかなと思うんだ。君も僕と同じだけのものをすべて見たんだろうに」

「私にはベルの引き綱を除くと注目すべきものは何も見えなかったが、どんな目的にあれが役立つのか、実のところ、とても見当がつかないよ」

「通気孔も見たろう？」

「ああ、でも二つの部屋をつなぐ小さな穴がそれほど異常なものとは思わないがね。小さくてネズミも通り抜けられないくらいだったじゃないか」

「僕はストーク・モランに来る前から通気孔が見つかるとわかってたよ」

「ホームズ君！」

「ああ、いや、そうなんだ。彼女の話の中でロイロット博士の葉巻の匂いを彼女の姉が感じたと言ったのを覚えているだろう。ほら、もちろんそのことからすぐに二つの部屋が通じていることがわかったんだ。それは小さなものでしかありえない、さもなければ検死官の調査で所見が述べられているはずだ。僕は通気孔があると推論した」

「しかしそれで何が悪いんだね？」

「そうさね、少なくとも日付の点で不思議な偶然の一致がある。通気孔が造られる、ロープが垂らされる、ベッドで寝ている婦人が死ぬ。変だと思わないかい？」

「いまだに何の関係があるのかわからないが」

「あのベッドで何かきわめて妙なことに気づかなかったかい？」

「いや」

「あれは床に固定されていたよ。あんなふうにしっかり留められたベッドをこれまでに見たことがあるかね？」

「あるとは思えないね」

「婦人はベッドを動かすことができなかった。あれは常に通気孔に対して、そしてロープに対して相対的に同じ位置になければならない。あのロープなるものはと言えば、明らかにベルの引き綱にするためのものではなかった」

「ホームズ、」私は叫んだ、「君のにおわしていることがおぼろげながらわかってきたようだ。私たちは巧妙で恐ろしい犯罪をすんでのところで防ぐことになるんだね」

「実に巧妙で、実に恐ろしい。医者が道を踏み外すと第一級の犯罪者になる。精神力があり、知識がある。パーマーやプリチャードは専門でもトップの一人だったよ。この男はさらに深く打ってくるがね、ワトソン、僕たちはいっそう深く打ち返せると思うよ。しかし夜が明けるまでは恐ろしい思いをするからね。とにかくパイプでも吸って、数時間はもっと楽しいことに心を向けようよ」

九時ごろ木々の間の光が消え、館の方向は真っ暗になった。ゆっくりと二時間が過ぎ、それから突然、ちょうど十一時きっかりに、一筋の明るい光が私たちの真正面にパッと輝いた。

「合図だ」とホームズは言って立ち上がった。「中央の窓からだ」

私たちが出る時、彼は宿の主人とちょっと言葉を交わし、遅くなったが知り合いを訪ねてくるので向こうで泊まるかもしれない、と説明した。すぐに私たちは暗い道へと出た。冷たい風が顔に吹きつけ、闇の中にきらめく正面の黄色い明かりが憂鬱な用向きで行く私たちを導いた。

庭園の古い塀には裂け目が修理されずに大きく口を開けていたので、中へ入るのにほとんど苦労はなかった。私たちが木々の間を進み、芝生に到達し、それを横切り、窓から中へ入ろうとした時、月桂樹の木の茂みから醜くゆがんだ子供のようなものが飛び出し、ねじれた四肢で草の上に身を伏せ、それからさっと芝生を横切って闇の中へ走り去った。

「おいおい！」私はささやいた。「見たかい？」

ホームズもその時は私同様びっくりしていた。彼は動揺し、その手で万力のように私の手首を絞めた。それから彼は低い声で笑い出し、私の耳に口を近づけた。

「素敵な一家だ」と彼はつぶやいた。「あれはヒヒだよ」

私は博士が愛する奇妙なペットのことを忘れていた。そこにはチータもいて、いつなんどきそれが肩にのっているかもしれないのだった。白状すると、ホームズに倣って靴を脱ぎ、寝室へ入った時にはほっとした。友は音を立てずによろい戸を閉め、ランプをテーブルの上へ移し、部屋中に目を配った。何もかも私たちが昼間見た通りだった。それからそっと私に近寄り、手でラッパを作り、再び私の耳にささやきかけたが、非常に静かな声で私はその言葉を聞き取るのがやっとだった。

「かすかな音が僕たちの計画には致命的だ」

私はうなずいて聞こえたことを示した。

「僕たちは明かりなしで座っていなければならない。通気孔を通して博士に見えるからね」

私は再びうなずいた。

「眠ってはいけない。それはまさに君の命を左右するかもしれない。必要に備えてピストルを準備してくれ。僕はベッドの端に座るから、君はその椅子に」

私はリボルバーを取り出し、テーブルの隅に置いた。

ホームズは細長い籐のステッキを持ってきており、これをそばのベッドの上にのせた。その横に彼はマッチの箱とろうそくの燃えさしを置いた。それから彼はランプを消し、私たちは闇の中に置かれた。

あの恐ろしい寝ずの番をどうして忘れられよう？　音は何も、息を吸う音さえ聞こえなかったが、私は友が目を見開き、私から数フィートの所に、私と同じように神経を緊張させて座っているのがわかった。よろい戸がまったく光線をさえぎり、私たちは完全な暗闇の中で待っていた。外からは時折ヨタカの鳴き声が聞こえ、また、一度私たちの部屋の窓の所で長く引いた猫のような声がして、本当にチータが放し飼いになっていることがわかった。遠く、十五分ごとにとどろく教会の時計の太い音色が聞こえた。その十五分が何と長く思えたことか！　十二時を打ち、一時、二時、三時、それでもまだ私たちは無言で何事かが起きるのを待っていた。

突然、瞬間的にかすかな光が上の通気孔の方向に見え、それはすぐに消えたが、油の燃えるのと熱した金属の強い匂いは続いていた。誰かが隣室で暗室灯をつけたのだ。そっと動く音が聞こえ、それからもう一度すっかり静かになったが、匂いはますます強くなった。三十分間私は耳をすまして座っていた。それから不意に別の音が聞こえるようになった――やかんから絶えず出ている蒸気の小噴射のような、非常に優しい、心地よい音だった。それを聞いた瞬間に、ホームズはベッドからはね起き、マッチをすり、ステッキでベルの綱を激しく打ち据えた。

「見たろう、ワトソン？」彼は叫んだ。「見たろ？」

しかし私は何も見なかった。ホームズが火をつけた時、私は低い、はっきりした口笛を聞いたが、突然の光が私の疲れた目にはまぶしく、友がそのように猛烈に打ち据えたものが何か、私にはわからなかった。しかし、彼の顔が真っ青で恐怖といとわしさでいっぱいなのはわかった。

彼が打つのをやめ、通気孔を見上げていると、突然、夜の静寂の中から私のかつて聞いたこともない恐ろしい叫び声が起こった。それはどんどん大きくなり、しゃがれた叫びは苦痛と恐怖と怒りがすべて入り混じったものすごい悲鳴となった。その叫び声は村の離れた所でも、遠くの牧師館でも眠っている人をベッドから起こしたと言う。私たちは心底ぞっとし、その最後の反響がそれが沸き起こった静寂の中へ消えてしまうまで、私はホームズを、彼は私を見つめたまま突っ立っていた。

「いったいどうしたんだ？」私はあえぎながら言った。

「すべて終わったということさ」とホームズは答えた。「それにたぶん、結局、これが一番いいんだ。ピストルを取りたまえ、ロイロット博士の部屋へ入ろう」

厳粛な顔で彼はランプをともし、先に立って廊下を行った。二度彼は部屋のドアを叩いたが、中から返事はなかった。それから彼は取っ手を回して中へ入り、私は撃鉄を起こしたピストルを手に彼に続いた。

私たちの目に入ったのは奇妙な光景だった。テーブルの上にはふたの半分開いた暗室ランプがあり、扉が半開きの鉄の金庫に明るい一条の光線が当たっていた。そのテーブルのそばの木の椅子にグリムズビー・ロイロット博士は座り、灰色の長いガウンを着け、むき出しの足首がその下に突き出し、足はかかとのない、赤いトルコ風上履きに突っ込んでいた。その膝には昼間私たちが注目した長い鞭の短い柄が渡されていた。彼のあごは上を向き、目は恐ろしい、硬直した凝視を天井の一隅にじっと据えていた。彼の額の周囲には茶色っぽいまだらの入った黄色い紐があり、彼の頭に堅く巻きつけられているように見えた。私たちが入っても彼は音も立てず、動きもしなかった。

「紐だ！　まだらの紐だ！」とホームズがささやいた。

私は一歩前へ出た。一瞬のうちに彼の奇妙な頭飾りが動き出し、髪の毛の間からもたげられたのはずんぐりしたひし形の頭と膨らんだ首、いまわしい蛇だった。

「沼毒蛇だ！」とホームズは叫んだ。「インドで最も危険な蛇だ。彼はかまれて十秒のうちに死んでしまった。まさに、暴力をなせば暴力に跳ね返り、たくらむ者は自ら他人のために掘った穴に落ちる。ではこの生き物を元の巣へ押し込もう、そうすればミス・ストウナーをどこか避難場所へ移せるし、州警察に起こったことを知らせられる」

彼は話しながら死者の膝からすばやく犬用の鞭を引いて取り、輪をその爬虫類の首に投げてそれを恐ろしい止まり木から引き剥がし、腕を伸ばして運び、鉄の金庫の中に投げ込み、閉じ込めた。

これがストーク・モランのグリムズビー・ロイロット博士の死の真実である。既に長々と続いている物語をさらに長引かせ、私たちがどのようにしておびえている娘に悲しい知らせを伝えたか、どのように彼女を朝の列車でハローの善良な叔母の手に届けたか、どれだけのんびりと警察の調査が進められ、博士が危険なペットを無分別にもてあそぶうちに最後を迎えたという結論に達したか、などを語る必要もあるまい。事件について私のまだ知らなかったことを少々、翌日、旅の帰りにシャーロック・ホームズが教えてくれた。

「僕はね、」彼は言った、「まったく誤った結論に達していたが、それはねえ、ワトソン君、不十分なデータから推論することがいつもどれだけ危険か、を示している。ジプシーの存在とまだらの紐という言葉、間違いなく、死んだ娘があわててマッチの火明かりで見えたものを説明するために使った言葉は僕を完全に間違った手がかりに導くのに十分だった。ただし、いかなるものにせよ部屋の住人を脅かした危険が窓からもドアからも侵入できないとはっきりした時点で、直ちに自分の見解を再考したことだけは僕も誇っていいだろう。僕の注意はすぐに、既に君に言ったように、あの通気孔とベッドに垂れ下がったベルの綱に向けられた。これがただの飾りであり、ベッドが床に留められていると発見した瞬間に、綱は何かが穴を通り抜けてベッドへ近づくために伝わるものとしてそこにあるのではないかという疑いが起こった。すぐに僕は蛇だろうと思いつき、それと、博士がインドから生き物を届けさせているという情報を結びつけ、おそらく僕は間違っていないと思った。化学反応で発見されえないある種の毒を使うという考えは東洋で訓練を積んだ利口で冷酷な男にこそ浮かぶものだ。そうした毒に即効性があることも彼の立場からは好都合だ。実際、目の鋭い検死官でなければ毒牙の作用した場所を示す二つの小さな黒い穴を識別できまい。それから僕は口笛のことを考えた。もちろん彼は朝の光で犠牲者に正体がわかる前に蛇を呼び戻さなければならない。彼はおそらく僕たちが見たあのミルクを使って呼べば戻るように訓練したのだ。彼は最善と思われる時間にそれを通気孔に通し、間違いなく綱を這い降り、ベッドにたどり着くようにした。それはそこにいる人をかむかもしれないし、かまないかもしれない、あるいは一週間も彼女は毎晩免れるかもしれない、が、遅かれ早かれ犠牲になるにちがいない。

博士の部屋へ入る前に僕はこうした結論に達していた。彼の椅子を調べて、彼にその上に立つ習慣があったことがわかったが、もちろん、彼はそうしないと通気孔に届かなかったのだ。金庫、ミルクの皿、鞭縄の輪を見れば、疑惑が残っていたとしても決定的に吹き飛ばすに十分だった。ミス・ストウナーの聞いた金属音は明らかに、彼女の義父が急いで扉を閉めて恐ろしい占有者を閉じ込めた時のものだ。結論が出たところで、それを試すために僕の取った手段はわかるね。君もきっと聞いただろうが、僕はあれがシューシュー音を立てるのを聞き、すぐに火をつけ、あれを攻撃した」

「結果として通気孔に追い込んだね」

「そしてまた結果として反対側にいた主人に襲い掛かることになった。僕のステッキの打撃がいくつか急所を突き、蛇の怒りをかきたてたので、あれは最初に目に入った人物に飛び掛ったのだ。そんなわけで僕は間違いなくグリムズビー・ロイロット博士の死に間接的に責任があるが、あまり僕の良心の重荷になりそうもないね」

# 技師の親指

長年にわたる友人、シャーロック・ホームズ氏との親交の期間中、彼に解決を託された問題の中に私が間に立った事件が二つだけあった――技師の親指の事件と、ウォーバートン大佐の発狂事件である。後者のほうが鋭い、独創的な観察者にとって優れた活躍の場を与えるものだったかもしれないが、もう一方は、彼が数々の驚くべき成果を得た、あの演繹的推理法を用いる機会こそ少なかったとしても、その奇妙な発端、劇的な細部からすれば、記録するによりふさわしいものかもしれない。この話は再三新聞にも載せられたと思うが、ご多分に漏れず、そういう、紙面の一段の半分にひとまとめにして説明される物語では、事実が目の前でゆっくりと進行し、新しい発見のたびに一歩ずつ余す所ない真実に近づき、それにつれて謎が晴れて行くのに比べると、ずっと印象が薄められるものである。当時、それらの出来事は私に強烈なショックを与えたが、二年が経過してもその印象はほとんど弱まっていない。

1889年の夏、私が結婚して間もない頃、今私が要約しようとしている出来事が起こった。私は民間開業医に復帰し、結局ホームズをベーカー街の部屋に見捨てることになってしまっていたが、それでもたびたび彼を訪ねていたし、時には彼を説きつけ、その自由奔放な習慣を改めて私たちを訪ねてくるようにさせることもあった。私の患者も着実に増え、また、私がパディントン駅からあまり遠くない所に住んでいたこともあり、駅員の中からも数人の患者を得た。そのうちの一人の痛みのある長患いを私が治したところ、彼は熱心に私の力を触れ回り、彼の顔がきく病人をすべて私の所へよこすようにしてくれた。

ある朝、七時少し前にドアをたたく音で目を覚ますと、メイドがパディントンから男性が二人来て診察室で待っていると取り次いだ。経験から鉄道での患者が軽くすむことはめったにないのを知っていたので、私はあわてて服を着け、階下へ急いだ。私がおりていくと、なじみの車掌が部屋から出てきて後ろ手にしっかりドアを閉めた。

「連れてきましたぜ」と彼はささやき、肩越しに親指でさした。「大丈夫です」

「それでどうしたんだね？」彼の態度から何か変わった人が私の部屋に閉じ込められていると思い、私はそう尋ねた。

「新しい患者です」と彼はささやいた。「自分で連れてきたほうがいいと思いましてね。そうすりゃ逃げ出せませんから。無事そこにいますよ。じゃあ行かなくちゃ、先生、つとめがありやすんでね、先生とおんなしで」彼、この頼りになる客引きは私に礼を言う間も与えずに立ち去った。

診察室に入るとテーブルのそばに紳士が座っていた。彼は地味な混色のツイードのスーツを着て、柔らかいハンチングを私の書物の上に置いていた。片手にハンカチを巻いていたが、それにはいたるところ血のしみがついていた。彼は若く、せいぜい二十五くらいで、男らしい力強い顔だったと言えよう。しかし彼はひどく青ざめ、激しい動揺に苦しみ、全力を傾注して気持ちを抑えつけているように見えた。

「こんなに早く起こしてしまってすみません、先生、」彼は言った、「しかし夜の間にまったくひどいことになりましてね。今朝列車で来て、パディントンでお医者さんがどこかと尋ねたら、奇特な男が親切にここまで付き添ってくれました。メイドさんに名刺を渡したんですが、サイドテーブルの上に置きっぱなしになってますね」

私はそれを取り上げてチラッと見た。『ヴィクター・ハザレイ、水力技師、ヴィクトリア街16Ａ（四階）』。それが朝の訪問者の名前、肩書き、住居だった。「お待たせしてしまって申し訳ありません」と私は言って書斎用の椅子に腰を下ろした。「夜の旅でこちらについたばかりのようですが、それも退屈な時間だったでしょう」

「おお、とても退屈と呼べるような夜ではありませんでした」と言って彼は笑った。彼は椅子の背にもたれ、腹を揺すり、高い声でからからと思いっきり笑っていた。この笑いに私の医者の本能が頭をもたげた。

「やめなさい！」と私は叫んだ。「落ち着くんだ！」私は水差しから水を注いだ。

しかしそれは役に立たなかった。彼は、重大な危機がすっかり過ぎ去った時などによくある強烈なヒステリーの発作に襲われていた。まもなく彼は再び正気づき、すっかり疲れて青ざめた顔をしていた。

「ばかなまねをしてしまいました」と、彼はあえぎながら言った。

「そんなことはありませんよ。これをどうぞ」私がブランデーを少し水に混ぜてやると、その青ざめた頬に血色が戻ってきた。

「だいぶいいです！」と彼は言った。「では、先生、できましたらどうぞ私の親指を、というより親指のあったところを治療してください」

彼はハンカチをほどいて手を差し出した。私の動じることのない神経でもそれを見るとぞっとした。突き出された四本の指とともに、親指のあったはずのところには恐ろしい、赤い、海綿状の面があった。それはちょうど根元のところからたたき切られたか引きちぎられていたのだ。

「うわ！」私は叫んだ。「これはひどい傷だ。相当出血したにちがいない」

「ええ、そうなんです。やられた時私は気絶しましたし、長いこと気を失っていたにちがいないと思います。正気づくとまだ血が出ていましたので、私はハンカチの端で手首のまわりを思い切りきつく縛り、枝を使って締め上げました」

「すばらしい！　あなたは外科医になればよかった」

「だってこれは水力学の問題ですし、私の畑に入ってきますからね」

「これは、」私は傷を調べて言った、「非常に重くて鋭いものでやられましたね」

「肉切り包丁のようなものでした」と彼は言った。

「事故ですね？」

「とんでもない」

「え！　人殺しに襲われましたか？」

「まったく実に凶悪でした」

「恐ろしいことを言いますね」

私は傷をスポンジでぬぐい、消毒し、処置し、最後にコットンの詰め物と石炭酸処理した包帯で覆った。彼は時折唇をかんでいたけれども、ひるむことなく後ろによりかかっていた。

「いかがです？」終わったところで私は尋ねた。

「すばらしい！　ブランデーと包帯で生き返ったようです。すっかり弱ってましたが、ずいぶんといろんな目に会いましたのでね」

「できればそのことは話さないほうがいいでしょう。明らかに神経に障るようですから」

「ああ、いいえ、今はもう。この話は警察にしなければいけないでしょう。でもここだけの話、この傷という説得力ある証拠がなければ、警察が私の話を信じたらむしろ驚きですよ。何しろひどく異常なものだし、裏付ける証拠もあまりありませんので。それに、たとえ信じてくれたとしても、私の提供できる手がかりはとてもあいまいですから、正義が果たされるかどうか疑問です」

「ほう！」私は叫んだ、「そこに何か問題のようなものがあって解決してもらいたいのでしたら、警察へ行く前に私の友人のシャーロック・ホームズ君を訪ねることを強くお勧めします」

「ああ、その人のことは聞いたことがあります」と客は答えた。「それにこの問題を取り上げてもらえればとても嬉しいです。もっとも、もちろん警察も利用しなければいけませんがね。その人に紹介してもらえますか？」

「それがいいでしょう。私が自分で彼の所へ案内しますよ」

「大変ありがとうございます」

「馬車を呼んで一緒に行きましょう。あそこで軽い朝食を取るのにちょうど間に合いますよ。ご気分は大丈夫ですか？」

「ええ。話をしてしまうまでは落ち着きませんし」

「では使用人に馬車を呼ばせるとして、私もすぐにご一緒しますから」私は二階へ駆け上がり、妻に手短にいきさつを説明し、五分のうちにはハンサム馬車に乗り、新たな知人とともにベーカー街へ向かっていた。

シャーロック・ホームズは予期したとおり、ガウン姿で居間でぶらぶらし、タイムズの人生相談欄を読み、食事前の一服を吹かしていた。パイプには前日の喫煙で残った半端やらかみ煙草やらを注意深く乾かしてマントルピースの隅に集めたものを詰めていた。彼は私たちを穏やかに愛想よく迎え、出来立てのベーコンエッグを注文し、ともに充分な食事を取った。それが済むと彼は新たな知人をソファに座らせ、彼の頭の下に枕をあてがい、その手の届く所にブランデーの水割りのグラスを置いた。

「あなたが普通でない経験をなさったのはすぐにわかりますよ、ハザレイさん」と彼は言った。「どうぞ、横になってすっかりくつろいでください。話をしてみて、疲れたらやめて、少し酒でも飲んで力を取り戻してください」

「ありがとうございます、」私の患者は言った、「でも先生に包帯をしてもらって別人のようですし、朝食をいただいてすっかり治ったと思います。極力貴重なお時間を取らせないように、すぐにも私の異常な経験に取り掛かろうと思います」

ホームズは、その本質の鋭さ、熱心さを隠す、半ばまぶたを閉じた疲れた表情で大きな肘掛け椅子に座り、私はその向かい側に腰を下ろした。そして私たちは客が詳細に物語る奇妙な話に黙って耳を傾けた。

「知っていただきたいのは、」彼は言った、「私が孤児で、独身で、一人でロンドンの下宿に住んでいることです。職業は水力技師で、見習いで入ったグリニッジの有名な会社、ヴェナーアンドマシスンの七年間にかなり仕事の経験を積みました。二年前、見習い期間を務め上げ、また父が死んでかなりの金額を相続したので、自分で事業を始めようと決意し、ヴィクトリア街に仕事場を構えました。

誰でも独立して事業を始めた当初はわびしい経験をするものと思います。私の場合、特別にそうでした。二年の間に三件の相談と小さな仕事が一つあり、私の職業がもたらしたものはまったくそれで全部なのです。総所得は27ポンド10シリングです。毎日私は朝の九時から午後の四時まで自分の小さな巣で待ち、そうするうちついには気がめいってきて、もう決して仕事が入らないのではないかと思うようになりました。

ところが昨日、ちょうど事務所を出ようかと考えていたところに事務員が来て、仕事で私に会いたいという紳士が待っていると言うのです。持ってきた名刺には『ライサンダー・スターク大佐』と名が印刷されていました。彼のすぐ後ろから現れた大佐本人は中背よりやや大きいものの恐ろしくやせた人でした。あれほどやせた人は見たことがない気がします。顔全体は鼻とあごに向かって尖り、頬の皮膚は突き出た骨に引っ張られてぴんと張っていました。それでも、目は輝き、歩き振りはきびきびしていて、態度は自信ありげでしたので、やつれて見えるのは元々の体質で病気のせいではないようです。質素でもきちんとした身なりで、年の頃は、三十よりは四十といったところですかね。

『ハザレイさん？』と彼はいくらかドイツなまりで言いました。『あなたを推薦されましてね、ハザレイさん、仕事に熟練しているばかりでなく、分別もあり、秘密を守れる人だと』

私はそうした挨拶を受けた若い男の例に漏れず、喜んで、お辞儀をしました。『どなたがそんなに私を褒めてくださったかお聞きしてもよろしいですか？』

『そうですね、できればちょっと今のところは言わないでおいたほうがいいでしょう。あなたが孤児であり、また独身であり、ロンドンに一人で住んでいるってことも同じ人から聞きました』

『まったくその通りです』と私は答えました。『しかし失礼なことを申すようですが、そういったことが私の仕事の能力に関係するとは思えないんですが。あなたが私になさりたい話は仕事のことですよね？』

『確かにそうですね。しかしあなたにも私の言うことが実際にみんな要点であるとわかりますよ。私はあなたに仕事を依頼しますが、絶対秘密というのがきわめて重要です――秘密厳守となれば、おわかりでしょう、もちろん、家族水入らずで暮らしている人より、一人っきりの人のほうが期待が持てますから』

『私が秘密を守ると約束したら、』私は言いました、『絶対にそうするものと信頼してくださってかまいません』

彼は私が話す間じっと私を見ていましたが、あんなに疑り深い、不審そうな目は見たことがないように思いました。

『では約束しますね』と、ようやく彼が言いました。

『ええ、約束します』

『絶対に、完全に口をつぐむことですよ、前も、その間も、後も？　決してそのことに触れてはいけない、言葉でも書面でも？』

『もう約束しましたので』

『結構』彼は突然飛び上がり、電光のように走って部屋を横切り、さっとドアをあけました。外の廊下には誰もいませんでした。

『大丈夫だ』と戻ってきて彼は言った。『事務員ってやつは時折主人のしていることに好奇心を抱くものですからね。これで無事に話せます』彼は椅子を私のごく近くまで引き寄せ、再び例の不審そうな、考え込むような目つきで私をじっと見始めました。

このやせた男の奇妙なふざけた行動に、嫌悪と恐怖にも似た気持ちが私の心に沸き起こり始めました。依頼人を失う不安もありましたが、それでも私は苛立ちを表さずにはいられませんでした。

『どうかご用件を話してください、』私は言いました、『私の時間も貴重ですから』どういうわけかこんな言葉が口をついて出てしまいました。

『一晩の仕事で五十ギニーというのはいかがですかな？』と彼は尋ねました。

『大変結構ですね』

『一晩の仕事と言いましたが、一時間といったほうが当たってるでしょうな。あなたにただ意見を聞きたいだけなのですが、水圧プレス機のギアの具合が悪いのです。どこが悪いのか教えてもらえればすぐに自分たちで直すつもりです。そんな依頼をどう思いますか？』

『仕事は楽で払いは気前がいいようですね』

『まさにその通りです。今夜の最終列車で来て欲しいのですがね』

『どちらへ？』

『バークシャーのアイフォードです。オックスフォードシャーとの州境近くの小さな家で、レディングまで七マイルほどです。パディントンからの列車で11時15分ぐらいにそこへ着くでしょう』

『結構です』

『私が馬車であなたを迎えに出ますから』

『すると遠いのですか？』

『ええ、私たちの小さな屋敷はどいなかにあります。アイフォードの駅からたっぷり七マイルです』

『では真夜中前にはそちらへ着けませんね。帰りの列車がある見込みもないでしょうね。私は今晩泊まらざるをえないわけですか』

『ええ、間に合わせの寝る場所を用意するのは何でもありません』

『そりゃ実に不便ですね。もう少し都合のいい時間に行けませんか？』

『遅い時間に来てもらうのが一番と判断したのです。若くて無名のあなたに、ご専門の第一人者の意見にも等しい謝礼を支払おうというのはそれだけの不自由に対する報酬なんです。それでも、もちろんあなたがこの仕事から手を引きたいのでしたら、まだ充分間に合いますよ』

私は五十ギニーのことを、それがどれだけ助けになるかを考えました。『とんでもない、』私は言いました、『喜んでそちらのご希望に合わせます。しかし、私にして欲しいことが何なのか、もう少しはっきり知りたいのですが』

『そうでしょうとも。無理やりしてもらった秘密の約束があなたの好奇心を刺激したのも当然です。何にしろすべて知ってもらった上で引き受けてほしいと思います。絶対に立ち聞きされたりしないでしょうね？』

『絶対に』

『ではと、こういうことなんです。おそらく、フラー土というのが貴重なものであり、イングランドでは一、二箇所でしか見つからないことは知ってますね？』

『聞いたことがあります』

『少し前に私は小さな土地を、非常に小さな土地をレディングから十マイルのところに買いました。すると幸運にも畑の一つにフラー土が埋蔵されていることを発見したのです。しかし調査してみると、この鉱床は比較的小さなもので、左右両側の、といっても隣人の地所ですが、ずっと大きな鉱床をつなぐものになっていることがわかりました。善良な隣人たちは彼らの土地に金鉱並みの大変高価なものが含まれていることをまったく知らなかったのです。当然、彼らがその真の価値に気づく前に彼らの土地を買えば得をするわけですが、残念ながら私はそれだけの資金を持ち合わせませんでした。しかし私が数人の友人に秘密を打ち明けたところ、彼らは、静かにこっそりと我々自身の鉱床を採掘し、そうやって金を稼げば隣人の土地を買うことができると言いました。我々はここしばらくそれをやっているのですが、それで、作業の助けにするために水圧プレス機を組み立てました。このプレス機が既に言ったように故障したので、それについてあなたの助言が欲しいのです。ところで、我々は非常に用心深く秘密を守っていますが、我々の家に水力技師が来ていることが知れてしまうと、すぐに何やかや聞かれることになり、それで、事実がわかってしまうと、土地を手に入れて我々の計画を実行するチャンスともおさらばになります。そういうわけであなたが今夜アイフォードへ行くことを誰にも言わないように約束してもらったんです。すべてわかっていただけたと思いますが？』

『よくわかりました』と私は言った。『一つだけよくわからないのはフラー土を掘るのに水圧プレスがどのように使えるんでしょう、だってそれは採掘場から砂利のように掘り出されるんですよね』

『ああ！』と彼はぞんざいに言いました。『我々には独自の工程があるんです。我々は土をレンガ状に圧縮して、それでわからないようにそれを移すんです。しかしそれはほんの枝葉のことです。さあ、すっかり秘密を打ち明けてしまいましたよ、ハザレイさん、あなたを信頼している証しですよ』そう言いながら彼は立ち上がりました。『ではアイフォードで11時15分に待ってますよ』

『間違いなく参ります』

『そして誰にも言わないように』彼は最後に長々と不審そうに私を見つめ、それから、冷たい、湿っぽい手で私の手を握り、急いで部屋を出て行った。

さて、冷静になってすべてを考え合わせてみて、あなた方もそうでしょうか、私はこの不意に私に委託された仕事に非常にびっくりしました。一方では、もちろん私は喜びました。謝礼は私が自分で自分の業務に値をつけた場合に請求すべきものの少なくとも十倍でしたし、この注文が別の仕事につながるかもしれませんから。他方、お客の顔と態度は私に不愉快な印象を与えましたし、私にはあのフラー土に関する説明が用向きを誰にも話さないようにという彼の極度の心配や真夜中に行く必要性を充分説明するものとは思えませんでした。しかし、私は不安をすべて捨て去り、夜食をたっぷり取り、パディントンへ走らせ、口をつぐめという命令に厳密に従って、出発しました。

レディングでは乗換えで車両も駅も移動しなければなりませんでした。しかし私はアイフォード行きの終列車に間に合い、十一時過ぎに小さくて暗い駅に着きました。そこで降りる乗客は私だけで、ホームには角灯を持った眠そうなポーターが一人いるほかは誰一人いませんでした。しかし小門をくぐりぬけた時に私は今日知り合った人が反対側の陰にいるのを見つけました。黙って彼は私の手を握り、ドアをあけたまま待っていた馬車に私を急がせました。私たちは馬をできる限り早く走らせて行きましたが、彼は両側の窓を引き上げ、木の部分を叩いていました」

「馬は一頭ですか？」とホームズが口を挟んだ。

「ええ、一頭だけです」

「毛色を見ましたか？」

「ええ、馬車に乗り込む時に側灯で見えました。栗毛でした」

「疲れてるようでしたか、それとも元気でしたか？」

「ああ、元気でつやつやでした」

「ありがとう。話の腰を折ってすみません。どうぞその実に興味深い話を続けてください」

「そうやって駅を離れ、私たちは少なくとも一時間は走らせました。ライサンダー・スターク大佐はほんの七マイルと言ってましたが、速度から想像すると、それと、かかった時間からすると、十二マイル近いと思うんですがね。彼は私の横にずっと黙って座っていましたが、彼のほうに目をやった時に一度ならず、彼がじっと私を見ていることに気づきました。あのあたりのいなか道はあまりよくないと見えて、私たちは恐ろしくガタガタ揺られました。私は窓から外を眺めて自分たちがどこにいるのかわかるものが何かないかと思ったのですが、窓がすりガラスでできていて、時折ぼんやり輝く明かりのそばを通過するというほかは、何も見分けられませんでした。時々私は旅の単調さを破るために思い切って何か言ってみたのですが、大佐はそっけなく答えるだけで、会話はすぐにだれてしまいました。しかし、やっとのこと、ガタガタいう道がカラカラいう平らな砂利道に変わり、馬車は止まりました。ライサンダー・スターク大佐は飛び降り、私が後に続くと、正面に口を開けた玄関へ急いで私を引っ張り込みました。私たちは言ってみれば直接馬車から玄関へと入ったので、私は家の正面をつかの間かいま見ることさえできませんでした。私が敷居をまたいだ瞬間にドアが私たちの後ろで激しくバタンといって閉まり、私は走り去る馬車のガラガラいう車輪の音をかすかに聞きました。

家の中は真っ暗で、大佐は手探りでマッチを探し、小声でぶつぶつ言っていました。不意に廊下の反対側の端のドアがあき、長い、金色の光線が私たちのほうへ流れてきました。それは次第に太くなり、ランプを手にした女性が姿を現しました。彼女はそれを頭の上に掲げ、顔を突き出して私たちを見つめていました。見るときれいな女性で、光が当たって輝く暗色のドレスのつやからそれが高価な素材であることもわかりました。彼女が外国語で二言三言、尋ねるような口調で話し、私の連れがつっけんどんにそっけない返事をすると、彼女はひどくびっくりしてランプを手から落としそうになりました。スターク大佐は彼女に近寄り、何か耳元でささやき、それから彼女をさっき出てきた部屋へ押し戻し、ランプを手に私のほうへ戻ってきました。

『できればすみませんが数分間この部屋で待っていただきたい』と、彼は別のドアをあけながら言いました。それは落ち着いた、小さな、質素な家具のある部屋で、中央に丸いテーブルがあり、その上にドイツの本が何冊か散らばっていました。スターク大佐はドアのそばのハーモニウムの上にランプを下ろしました。『全然待たせませんから』と言い、彼は闇の中へ消えました。

私はテーブルの上の書物に目をやり、ドイツ語は知りませんが、そのうち二つは科学論文であり、後のものは詩集であることがわかりました。それから私は窓に歩み寄り、風景でも見えないかと思ったのですが、オークの木の雨戸がしっかり閉められ、すっかりそれを覆っていました。驚くほど静かな家でした。廊下のどこかで古い時計がカチカチ大きな音を立てていましたが、そのほかはすべてが静まり返っていました。ぼんやりとした不安が私を襲い始めました。このドイツ人たちは何者なんだろう、彼らはこの見知らぬ、辺鄙な場所に住んで何をしているんだろう？　それにここはどこなんだろう？　アイフォードから十マイルばかりのところにいる、わかっているのはそれだけで、北か、南か、西か、東かも見当がつきません。それにしても、レディングとかほかの大都市がその距離の範囲にあるとすれば、そこも結局それほど人里離れていないかもしれません。それでもまったく静かでしたから、いなかにいるのは間違いありませんでした。私は部屋を行ったり来たりし、気力を失わないように小声で鼻歌を歌い、五十ギニーの謝礼をとことん稼ぐんだと思っていました。

突然、完全な静寂の中、前置きとなる音もなく、ドアがゆっくりと開きました。戸口には、玄関ホールの闇を背景にあの女が立ち、その熱を帯びた美しい顔にはランプから黄色い光が注がれていました。私は一目見ただけで彼女がひどく怖がっているのがわかり、それで私自身もぞっとしました。彼女は震える指を上げて私に黙っているように警告し、おびえた馬のように後ろの暗がりをチラチラ見ながら、片言の英語で二、三言私にささやきかけました。

『私行かなければ』と彼女は言いましたが、懸命に努力して静かに話しているようでした。『行かなければ。ここにはいられません。するのはあなたのためならないです』

『でも奥さん、』私は言いました、『まだ私はやってきた目的を果たしてません。機械を見るまではとても出て行けません』

『待っていてもむだです』と彼女は続けました。『そのドアから出られます。誰も邪魔しません』それから、私が微笑んで首を振るのを見て、彼女は突然抑えていたものを振り捨て、両手をもみしだきながら一歩前に出た。『お願いだから！』彼女は小声で言いました。『手遅れにならないうちにここから出て行って！』

しかし私は元々ちょっと強情でして、何か邪魔が入るとますます仕事をやってやろうという気になるのです。私は五十ギニーのこと、退屈な旅のこと、その後に来るだろう不愉快な夜のことを考えました。これがみんなむだになるのか？　どうして私が仕事もやり終えずに、当然もらうべき報酬もなくこそこそ逃げなければいけないのか？　この女性はおそらく偏執狂だろう。そこで、彼女の様子に白状するのも恥ずかしいほど動揺はしていたのですが、断固として私は首を振り続け、そこに残るという意図を表明しました。彼女が再び哀願しようとした時、頭上でドアがバタンと閉まり、階段を歩く足音が聞こえました。彼女は一瞬聞き耳を立て、絶望のしぐさで両手を上げ、来た時と同じように突然、音もなく消えました。

新来者はライサンダー・スターク大佐と、背が低く太っていて、二重あごのひだからチンチラあごひげを伸ばしている男で、ファーガソン氏であると紹介されました。

『これは私の秘書兼マネージャーです』と大佐は言いました。『ところで、今さっき私はこのドアを閉めておいたと思いましたがね。すきま風が当たったんじゃないですか』

『いえいえ、』私は言いました、『部屋がちょっとむんむんするようなので、私が自分で戸をあけたんです』

彼は例の疑わしげな視線を私に投げました。『じゃあ、できれば仕事に取り掛かったほうがいいですね』と彼は言いました。『ファーガソンさんと私と一緒に来て機械を見てください』

『帽子をかぶったほうがいいでしょうね』

『ああ、いいえ、家の中ですよ』

『え、家の中でフラー土を掘るんですか？』

『いや、いや。ただ圧縮するだけです。でもそれはどうでもいい。ただ私たちはあなたに機械を調べてもらってどこが悪いのか教えてもらいたいだけです』

大佐がランプを持って先頭に立ち、太ったマネージャーと私が後について、私たちは階上へ上がりました。古い家で、廊下、通路、狭いらせん階段、小さくて低いドアが入り組んでいて、ドアの敷居は何世代もそれをまたいだためへこんでいました。一階より上にはじゅうたんもなく、家具のある様子もなく、壁のしっくいははがれ落ち、湿気により緑色の、からだに悪そうなしみが出ていました。私はできるだけ平気なふりをしようとしましたが、あの婦人の警告を無視したとはいっても忘れることはなく、二人の連れを警戒していました。ファーガソンは気難しい、無口な人のようでしたが、彼の数少ない言葉から彼が少なくとも同国人であることはわかりました。

ライサンダー・スターク大佐はようやくある低いドアの前で立ち止まり、鍵をあけました。中は小さな方形の部屋で、三人が一度に入るのは無理のようでした。ファーガソンは外に残り、大佐は私を招じ入れました。

『我々は今、』彼が言いました、『現に、水圧プレス機の中にいるんでして、誰かがスイッチを入れようものなら、きわめて不愉快なことになるわけです。この小さな部屋の天井が実際下降するピストンの端で、この金属の床の上に何トンもの力で降りてくるのです。外側の側面の小さな水柱が力を受け、それを伝達し、増幅するのでして、その方法についてはあなたは精通しておられる。機械は動くのは何でもないんですが、どこか動作がぎこちなく、その力をいくぶん減じているのです。できれば点検していただいてどうすれば正常にできるか、我々に教えてください』

私は彼からランプを受け取り、徹底的に機械を検査しました。それは実際巨大で、莫大な力を働かせることができるものでした。しかし、外に出て制御するレバーを押し下げると、すぐにシューという、側面のシリンダーの一つを水が逆流しているわずかな漏れの音に気づきました。検査の結果、駆動棒の先端のまわりの弾性ゴムのバンドが一つ縮んでいて、作用する軸受けを完全にはふさいでいないことがわかりました。力の損失の原因は明白でしたので、私はそれを相手に指摘し、彼らは非常に注意深く私の意見を聞き、ではどうやったら正常にできるかについていくつか実際的な質問をしました。それをはっきり彼らに説明した私は機械室の主要部に戻り、自分の好奇心を満足させるためにそれをよく見ました。一目見ればフラー土の話がまったくのでたらめなのは明らかでした。そんな強力なエンジンをそんな不適当な目的に使おうと思うなんてばかげてますからね。壁は木でできているのに床は大きな鉄の皿になっていて、調べてみると、一面に金属の薄皮が付着していました。私が、それが何なのか正確なところを確かめようとしてかがんでそこを削り取っていると、突然ドイツ語でぶつぶつ言う声が聞こえ、私を見下ろす大佐のやせこけた顔が見えました。

『そこで何をやってるんです？』と彼は尋ねました。

私は聞かされていた念の入った話にだまされていたことに怒りを感じました。『すばらしいフラー土ですね』と私は言いました。『この機械ですが、正確にはどんな目的でこれを使うのかを知れば、もっといい助言ができると思うんですがね』

その言葉を発した瞬間に私は自分の無謀な発言を後悔しました。彼は厳しい顔になり、その灰色の目に悪意の輝きが生じたのです。

『結構、』彼は言いました、『この機械のことを何もかも教えてやろう』彼は後ろに下がり、小さなドアをバタンと閉め、錠に鍵をかけました。私はそこに突進し、取っ手を引っ張りましたが、それはとてもしっかりしていて、蹴ろうが押そうがびくともしませんでした。『おーい！』私は叫びました。『おーい！　大佐！　出してください！』

それから突然私は静寂の中である音を聞き、心臓が口から飛び出しそうになりました。それはレバーがガチャッという音と漏れのあるシリンダーのシューという音です。エンジンを作動させたのです。ランプはまだ床の上に、私が皿を調べる時に置いたそのままになっていて、その光で黒い天井が私の上に降りてくるのが見えました。ゆっくり、ぎくしゃくしてはいましたが、その力で一分もしないうちに私を形のないどろどろしたものに砕きつぶすにちがいないことは私自身、誰よりもよく知っていました。私はドアに体当たりし、叫び声を上げ、爪で錠を引っ張りました。私は大佐に出してくれるよう懇願しましたが、無慈悲なレバーのガチャガチャいう音が私の叫び声をかき消しました。天井は頭の上、わずか一、二フィートで、手を上げればその硬い、ざらざらした表面に触れられるほどです。その時、死の苦痛はそれにぶつかる時の姿勢に大きく左右されるという考えが頭をよぎりました。うつぶせに寝ていたら重みは背骨を襲うわけで、それがぽきりと折れる恐ろしい音を思って私は身震いしました。おそらく反対のほうが楽だろう、それにしても、揺れながら私の上に降りてくる、その必ず死をもたらす黒い影を寝ながら見ている勇気が私にあるだろうか？　既に私はまっすぐ立っていられませんでしたが、その時あるものが目に入り、ほとばしるような希望が胸によみがえってきました。

既に申しましたように床と天井は鉄製でしたが壁は木です。最後にあわててあたりを見回した時、二枚の板の間に黄色い明かりの細い筋が見え、小さな羽目板が後ろに押されるにつれてそれが次第に広がっていくではありませんか。実際ここに死から逃れるドアがあろうとは一瞬信じられないくらいでした。次の瞬間、私は向こう側へと身を投げ出し、半分気を失って倒れました。羽目板は私の背後で閉まりましたが、ランプはガチャンと砕け、すぐ後に二つの金属の板がガーンとぶつかり、ほんの紙一重で逃げることができたのだとわかりました。

誰かが必死に私の手首を引っ張るので我に返ると、私は狭い廊下の石の床に横たわっていて、女の人が私にかがみこみ、左手でぐいぐい私を引っ張り、右手にはろうそくを持っていました。私が愚かにも警告を受け付けなかった例の友達でした。

『さあ！　早く！』彼女は息を切らしながら叫びました。『あの人たちがすぐにここへ来るわ。あなたがあそこにいないとわかるでしょうから。ああ、少しも時間をむだにしないで、来て！』

とにかく今度は私も彼女の忠告を突っぱねたりしませんでした。私はよろよろと立ち上がり、彼女とともに廊下を走り、らせん階段を下りました。階段は別の広い通路に通じていて、ちょうど私たちがそこに着いた時、走る足音と二つの叫び声が、一つはもう一つに答えて私たちのいる階から、一つは下のほうから聞こえました。私のガイドは立ち止まり、困り果てたようにあたりを見回しました。それから彼女がさっとドアをあけると、それは寝室に通じていて、窓の向こうには月が明るく輝いていました。

『これしかないわ、』彼女が言いました、『高いけれど、飛べるでしょう』

彼女がそう言った時、廊下の向こうの端の明かりが目に入り、片手に角灯、もう一方に肉屋の包丁のような武器を持って突進してくるライサンダー・スターク大佐のやせた姿が見えました。私はあわてて寝室を横切り、勢いよく窓をあけ、外を見ました。月明かりに見える庭はなんとも静かで気持ちよく健全で、下まではせいぜい三十フィートしかなさそうでした。私は敷居によじ登りましたが、私の救い主と私を追う悪党の間に何が起きるか聞こえるまでは、と飛ぶのをちゅうちょしました。彼女が虐待されるなら、どんな危険を冒しても戻って彼女を助けようと決意しました。その考えが私の頭に浮かんだ時には彼は戸口にいて彼女を押しのけていましたが、彼女は彼にしがみついて彼を引きとめようとしました。

『フリッツ！　フリッツ！』彼女は英語で叫びました。『この間の約束を思い出して。二度とあんなことにならないと言ったでしょう。彼は黙ってるわ！　ああ、彼は黙ってるわ！』

『ばかを言うな、エリーゼ！』と、彼は彼女から逃れようともがきながら叫んだ。『我々を破滅させるのか。彼は多くを見すぎたんだ。通せ、おい！』彼は彼女を片側に投げつけ、窓に突進し、重そうな武器で私に切りかかりました。私が行くことにして両手で窓敷居にぶら下がった時、彼の一撃が下されました。私は鈍い痛みを覚え、つかんだ手がゆるみ、下の庭に落ちたのです。

私は動揺していましたが、落ちてけがはしませんでした。それで私は起き上がると全力でやぶの間に逃げ込みました。まだ到底危険を脱してはいないとわかってましたから。しかし、走っていて突然、ひどいめまいと吐き気が襲ってきました。私はずきずきと痛む手を見下ろし、その時初めて自分の親指が切り落とされていて傷から血が流れ出ているのを見たのです。私はそのまわりをハンカチで縛ろうとしましたが、突然耳の中でブンブン言い出し、次の瞬間、失神してバラの木の間に倒れました。

どのくらい意識を失ったままでいたのかわかりません。非常に長い時間だったにちがいなく、私が我に返った時は月が沈み、明るい朝が訪れていました。私の服はすっかり露に濡れ、上着の袖は親指の傷からの血でびしょぬれでした。そのずきずきする痛みにより一瞬のうちに私は夜の冒険を細大漏らさず思い出し、まだ追跡を免れていないかもしれないと思い、パッと立ち上がりました。しかし驚いたことに、あたりを見回してみると家も庭も見当たらないのです。私が横たわっていたのは本道の近くの生垣の隅で、ほんの少し下った所に長い建物があり、近づいてみるとそれは前夜到着したあの駅でした。手の醜い傷がなかったら、あの恐ろしい数時間の間に起きたことはすべて悪い夢だったのかもしれないのですが。

半ばぼーっとして、私は駅に入り、朝の列車のことを尋ねました。レディング行きが一時間以内にあるようでした。到着した時にもいたポーターが勤務についているのを私は見つけました。私は彼にライサンダー・スターク大佐のことを聞いたことがあるか尋ねました。彼はその名を知りませんでした。前の晩に私を待っている馬車に気がついたか？　いや、気づかなかった。どこか近くに警察署はあるか？　三マイル先に一つある、とのことでした。

遠くて私には行かれません、弱っていたし具合が悪かったですから。警察に話をするのはロンドンへ戻ってからに延ばすことに決めました。六時ちょっと過ぎに私は到着し、そこでまず傷を治療してもらいに行き、それで先生がご親切にこちらへ連れてきてくださったわけです。事件をお任せしてご忠告通りにするつもりです」

私たちは二人ともこの異常な物語を聞き終わった後しばらく無言で座っていた。それからホームズは棚から切抜きを入れた重い備忘録を一つ下ろした。

「ここに一つあなたにも興味があると思われる広告があります」と彼は言った。「一年ほど前に全紙に出たものです。こうです。

『本月九日に行方不明、ジェレマイア・ヘイリング氏、二十六歳、水力技師。夜十時に下宿を出て以来消息聞かれず。服装は――』

等、等。ほう！　これはこの前に大佐が機械の修理を必要とした時を意味しているんでしょうね」

「なんてこった！」と私の患者は叫んだ。「それであの娘の言ったこともわかります」

「間違いありません。明らかに大佐は冷淡で無鉄砲な人間で、何物にも彼の策略の邪魔をさせまいときっぱりと決意している、まるで乗っ取った船では一人も生かしてはおかないという徹底的な海賊のようですね。さて、現在一刻一刻が大事ですから、あなたが耐えられるようでしたらアイフォードに出発する前に直ちにスコットランドヤードへ出かけましょう」

三時間ほど後、私たちは皆でレディングからバークシャーの小さな村へ向かう列車に乗っていた。シャーロック・ホームズ、水力技師、スコットランドヤードのブラッドストリート警部、私服の男が一人、それに私である。ブラッドストリートは座席の上にその州の測量図を広げ、忙しくコンパスでアイフォードを中心とした円を描いていた。

「どうです」と彼は言った。「その円は村から半径十マイルのところを描いたものです。我々の求める場所はどこかその線の近くにちがいない。十マイルと言いましたよね」

「一時間たっぷりの遠乗りでした」

「それにあなたが意識を失っている間に彼らはあなたをつれてその道中を引き返したとお考えなんですな？」

「そうしたにちがいありません。持ち上げられてどこかへ運ばれたという記憶は混乱してまして」

「私にわからないのは、」私が言った、「庭で気を失って倒れているあなたを発見した連中がどうしてあなたの命を助けなければならなかったのかです。あるいは悪党も女性の哀願に気をやわらげたのでしょうかね」

「それはありそうもないように思います。生まれてこの方あれ以上冷酷な顔は見たことがありません」

「ああ、それもみんなすぐに解決できますよ」とブラッドストリートが言った。「さて、円も描いたし、後はただその上のどの点に私たちの捜している連中が見つかるかわかればいいんですがなあ」

「僕はそこに指を置けると思うよ」とホームズが穏やかに言った。

「へえ、ほんとですか！」警部は叫んだ。「もう意見を固めたんですね！　さあ、それじゃ、どうですためしに、誰があなたと一致するかな。私は南だな、州もそっちのほうがさびれてるから」

「じゃあ私は東です」と私の患者は言った。

「私は西を取ります」と私服の男が言った。「そっちにはいくつか静かな小さい村があります」

「では私は北だ、」私は言った、「そっちには丘がないし、この友人は馬車が登るのにはまったく気づかなかったと言いますからね」

「さあ、」警部は笑いながら叫んだ、「見事に意見が分かれましたよ。我々の間では結局出発点に戻ってしまいましたね。あなたは誰に決定票を投じますか？」

「君たちはみんな間違っている」

「しかし私たちみんなのはずはありませんよ」

「ああ、いや、そうなんだよ。僕はここを指すよ」彼は指を円の中心に置いた。「ここが彼らを見つけるべき場所だ」

「でも十二マイルの遠乗りは？」とハザレイがあえぎながら言った。

「六マイル出て六マイル戻ったんです。これ以上簡単なことはない。あなたが自分で言ったでしょう、乗り込んだ時馬は元気でつやつやしてたと。悪い道を十二マイルもやってきてそんなはずがありますか？」

「なるほど、それはまったくありそうな策略だ」とブラッドストリートが考え深げに言った。「むろんこれがどんな一味かについては疑いの余地がありませんね」

「まったくね」とホームズは言った。「連中は大規模な贋金作りで銀の代わりになるアマルガムを作るために機械を使ってたんだ」

「我々も利口な一味が仕事をしていることはしばらく前から知っていたんです」と警部は言った。「やつらは半クラウンを千単位で製造していましてね。我々はレディングまではたどったんですがね、それ以上はだめでした。やつらが痕跡を隠すやり方を見ると相当のベテランですね。しかし今度は、この幸運のおかげで、逃しっこなしだと思いますよ」

しかし警部は間違っていて、その犯人たちは正義の手に落ちる運命にはなかった。私たちがアイフォード駅になだれ込むと、巨大な煙の円柱が近くの小さな木立の後ろから流れ出て大きなダチョウの羽のように景色の中にたなびいているのが見えた。

「家が燃えているのかな？」列車は再び目的地へと吹かして行き、ブラッドストリートが尋ねた。

「そうです！」と駅長が言った。

「いつ出火したんですか？」

「夜のうちだと聞いていますが、ええ、ますますひどくなって全体が炎上しています」

「誰の家なんです？」

「ベッヒャー博士のです」

「ねえ、」技師が口をはさんだ、「ベッヒャー博士はドイツ人で、すごくやせていて、長い、鋭い鼻をしてませんでしたか？」

駅長は思い切り笑った。「いえ、いえ、ベッヒャー博士はイギリス人で、この教区じゃ見当たらない上等の裏地のついたベストを着てましたな。しかしあの人の所には紳士が一人滞在していて、患者だと思いますがね、あれは外国人ですね、ちょっとしたバークシャー牛でも襲わないような顔をしてますよ」

駅長は話を終えていなかったが、私たちは皆、火事の方向へ急いでいた。道は丘の頂上にあり、私たちの正面には大きく翼を広げたしっくい塗りの建物があってあらゆる裂け目や窓から火が吹き出していたが、庭では正面の三台の消防車が鎮火しようとむなしく努力していた。

「あれです」とハザレイがひどく興奮して叫んだ。「砂利道があるし、私が横たわっていたバラの木の茂みがある。あの三階の窓から私は飛んだんです」

「まあ、少なくとも、」ホームズは言った、「あなたは彼らに対する復讐を果たしたわけです。疑う余地なく石油ランプがプレス機に砕かれた時、木の壁に火がついたんでしょうが、間違いなく彼らはあなたを追うことで興奮しすぎていてその時は気づかなかったんですね。さあ、昨夜のお友達がいないかこの群集に目を光らせてください、もっとも、きっと連中、今頃はもう百マイルも先ではないかと思いますが」

そしてホームズの恐れた通りになり、その日から今日まで美しい女性についても、邪悪なドイツ人についても、気難しいイングランド人についても何の消息もきかれていない。その朝早く一人の農民が、数人の人と何か非常にかさばる箱を載せてレディングの方角へ急いで走っていく荷馬車に出会ったが、逃亡者たちの痕跡はすべて消え、ホームズの手腕を持ってしても彼らの所在に関するごく小さな手がかりさえ発見できなかった。

消防士たちは中に奇妙なものが配置されているのを見つけてだいぶあわてていたが、さらに三階の窓敷居に切断されて間もない人の親指を発見してなおさらうろたえてしまった。しかし日没近くなってようやく努力が報われ、彼らは炎を鎮圧した、が、既に屋根は焼け落ち、建物全体が完全な廃墟と化していたので、いくつかのねじれたシリンダーと鉄の管を除き、私たちの不運な知人に高価な犠牲を払わせた機械は跡形もなかった。離れに貯蔵された大量のニッケルとスズが発見されたが、コインは一つも見つからず、それが既に言及した例のかさばった箱の存在を説明するものかもしれなかった。

どのようにして水力技師が庭から彼が意識を取り戻した場所まで運ばれたかは、永久に謎のままであったかもしれないところだったが、柔らかい腐植土がありのままを教えてくれた。彼は明らかに二人の人間によって運ばれ、そのうち一人は驚くほど小さな足で、他方は並外れて大きな足だった。概して、無口なイングランド人が仲間より大胆ではなかった、あるいは凶悪ではなかったので、意識を失った男を危険のないところへ連れて行こうという女を助けたというのも大いにありそうなことだった。

「やれやれ、」私たちが再びロンドンに戻る座席に着いた時、技師が哀れっぽく言った、「とんでもない仕事になりました！　私は親指を失い、五十ギニーの謝礼をふいにし、それで何を得たでしょう？」

「経験です」とホームズが笑いながら言った。「間接的には貴重なことかもしれませんからね。これからの人生、その話さえすればおもしろい人だという評判を取れますよ」

# 独身の貴族

セントサイモン卿の結婚とその奇妙な終わり方がこの不幸な花婿の出入りする上流社会の関心事でなくなって久しい。新しいスキャンダルが次々と前面に出て、そのピリッとした小味が四年前のドラマからゴシップを奪ってしまったのだ。しかし、私には事実のすべてが一般の人々に明かされてはいないと信じるだけの理由があり、また我が友シャーロック・ホームズがこの問題の解決にかなりの貢献をしているので、この驚くべきエピソードについて少しばかり描かなくては彼の伝記も完成しないと思うのである。

私自身の結婚の数週間前、まだベーカー街でホームズと部屋を共有している日々のこと、彼が午後の散歩から戻ると、テーブルの上に一通の手紙が彼を待っていた。私は一日中家にこもっていた。天気が突然、激しい秋風を伴った雨に変わり、アフガン戦役の記念品としてからだに入れて持ち帰った私のジェザイル弾が時折しつこくうずいていたからである。上体を安楽椅子に、足を別のにのせた私は手元にたくさんの新聞を置いていたが、ついにその日のニュースもたくさんになり、それらをすべて脇に放り出し、ぐったりと横になり、テーブルの上の封筒の大きな紋章と飾り文字を眺め、友人に手紙を書いた高貴な人は誰だろうとぼんやり考えていた。

「やんごとなき方の書簡が来てるよ」と彼が入ってきたので私が言った。「朝来た手紙は確か魚屋からのと港の税関吏からのだったろう」

「うん、確かに僕の所にはいろいろな人から手紙が来るんで楽しいね」と彼は笑いながら言った。「それにたいてい身分の低いほうがおもしろい。これは例の、人を退屈させるか寝させるかの、ありがたくもない社交界の呼び出しのようだよ」

彼は封を破り、中身に目を走らせた。

「ああ、これは、それでもおもしろいことになるかもしれないな」

「では社交じゃないんだね？」

「うん、明らかに仕事上だ」

「すると貴族の依頼人か？」

「イングランドでも指折りの名門だ」

「君、おめでとう」

「言っとくがね、ワトソン、僕には依頼人の地位など事件のおもしろさと比べたらあまり重要なことじゃないんだ。しかし、あるいはこの新しい調査にもそれがないとは限らないからね。君は精を出して最近の新聞を読んでいたようじゃないか？」

「そのようだね」と私は隅の大きな束を指さしながら元気なく言った。「ほかにすることがなかったんだ」

「そりゃあよかった、君にいろいろ教えてもらえそうだね。僕は犯罪のニュースと身の上相談のほかは何も読んでないんだ。身の上相談はいつも役に立つんでね。しかし君が最近の出来事をそんなに詳しく見てるとすると、セントサイモン卿とその結婚についても読んでいるだろうね？」

「ああ、そりゃあ、興味津々だから」

「それはいい。僕が手に持っている手紙はセントサイモン卿からだ。僕が読むからさ、その代わり君はそこにある新聞をひっくり返してこれに関係したものをすべて聞かせてくれないか。彼はこう言ってる。

親愛なるシャーロック・ホームズ様

バックウォーター卿の話ではあなたの判断と思慮分別には絶対的な信頼をおいてよいとのことです。そこで、私はあなたを訪ね、私の結婚に関連して起こった非常につらい出来事についてあなたのご意見を伺うことに決めました。スコットランドヤードのレストレード警部が既にこの件で動いていますが、警部は、あなたの協力は何の差しさわりもないし、むしろ何か役に立つかもしれないと思う、と言ってくれました。私は午後四時に伺いますので、その時間に何かほかの約束がおありなら、それを延期していただきたい、この件は最高に重要ですので。

敬具

セントサイモン

グロブナー・マンションからの日付、羽ペンで書かれていて、閣下は不運にも右手の小指の外側をインクで汚してしまった」と、ホームズは書簡をたたみながら言った。

「四時と言ってるね。今三時だ。一時間で来るね」

「それならちょうど君の助けを借りて問題をはっきりさせる時間があるね。新聞をひっくり返して、抜き取ったものを時間の順に並べてくれたまえ。その間に僕は依頼人についてちょっと見てみよう」彼はマントルピースのそばに並んだ参考図書から赤い表紙の一冊を取った。「あったあった」と彼は座って膝の上にそれを広げながら言った。「ロバート・ウォルシンガム・ド・ヴェア・セントサイモン、バルモラル公爵の第二子。フム！　紋章は青地に、黒の中央帯、上部に鉄菱三つ。1846年生まれ。四十一歳なら結婚する年だな。前内閣で植民地担当の次官。父の公爵は元外務大臣。プランタジネット家の直系、母系にチューダー家の血筋を引く。ほう！　まあ、ここにはあまり役に立つことはないな。もう少し実のあることを、ワトソン、君にお願いしなくちゃならんようだね」

「欲しいものを見つけるのにほとんど苦労はないよ、」私は言った、「ごく最近にあったことだし、これは私に際立った印象を与えたからね。しかし、君は一つ調査を手がけていたし、ほかの問題で邪魔されることを嫌うとわかっていたので、私はこのことに触れるのをためらったんだ」

「ああ、君の言うのはグロブナー・スクエアの家具運搬車の問題のことだね。あれはもうすっかり解決した―もっとも実のところ、最初から明らかだったが。どうか新聞を選り抜いた成果を聞かせてくれたまえ」

「ここに私の見る限り最初の報知がある。モーニングポストの個人消息欄にあって、日付は、ご覧の通り、数週間前だ。

（伝えられるところでは）バルモラル公爵の第二子、ロバート・セントサイモン卿と米国カリフォルニア州、サンフランシスコのアロイシャス・ドーラン殿の長女、ハティー・ドーラン嬢の結婚が決まり、噂が正しければまもなく行われるであろう。

それだけだ」

「簡潔にして要を得ているね」と、ホームズはその長く、細い足を火のほうへ伸ばしながら言った。

「同じ週の社交紙にこれを敷衍した記事がある。ああ、これこれ。

まもなく結婚市場にも保護の声が上がるであろう。現在の自由貿易の原則が我々の国産品に著しく不利に見えるからだ。次々に、英国の貴族の家の経営が大西洋を越えてくる我々の美しいいとこたちの手に渡されている。先週、これらの魅力的な侵略者に奪い取られた貴重なもののリストに、重要な一品が付け加えられた。二十年以上も天使の矢に耐えてみせていたセントサイモン卿がこのたび、カリフォルニアの大富豪の魅惑的な娘、ハティー・ドーラン嬢との近づく結婚を明確に発表したのである。その優美な姿と目を見張るような顔でウェストベリー・ハウスの祭典に多くの注目を集めたドーラン嬢は一人っ子であり、目下報告されるところでは持参金は六桁をかなり超え、さらに将来見込まれるものがある。バルモラル公爵がこの数年にわたって絵画を売ってこざるをえなかったことは公然の秘密であり、またセントサイモン卿にはバーチムアの小さな地所を除いて財産はないので、縁組によって苦もなく公的に共和党の婦人から英国貴族夫人に変身することができるカリフォルニアの女相続人ばかりが勝利者でないのは明らかである」

「何かほかには？」とホームズはあくびしながら尋ねた。

「ああ、あるよ、たくさん。じゃあ、モーニングポストの別の知らせがあるよ、結婚式はごく内輪のものになり、ハノーバー・スクエアのセントジョージで行われ、親友が六人だけ招かれ、一行はアロイシャス・ドーラン氏が手に入れたランカスター・ゲートの家具付きの家に戻るそうだ。二日後、つまり先週の水曜日のそっけない発表によると、式は行われ、ピーターズフィールドの近くのバックウォーター卿の家でハネムーンを過ごすということだ。花嫁の失踪の前に現れた報知はこれで全部だ」

「何の前だって？」と、ホームズがびっくりして尋ねた。

「レディーが消えたんだ」

「それでいつ彼女は消えた？」

「結婚披露宴でだ」

「なるほど。これは思っていたよりおもしろそうだ、というより、実に劇的だね」

「うん、私には少しばかり異常だと思われたな」

「式の前に消えるのはよくあるし、ハネムーンの最中も時々ある。しかしそんなに敏速に消えたのは思い当たらないね。どうか詳しいところを聞かせてくれたまえ」

「言っとくけど、非常に不完全だよ」

「あるいは僕たちが穴を埋められるかもしれないね」

「たいしたものじゃないが、昨日の朝刊の記事に書かれているのを、ひとつ読んでみよう。『上流社会の結婚式の奇妙な出来事』という見出しだ」

ロバート・セントサイモン卿一家はその結婚式に関連して起きた奇妙で痛ましい出来事により手ひどい驚愕に陥れられた。式は昨日の紙面で簡単に発表した通り、前日の朝行われた。しかし今に至るまで、しつこく広まっていた奇妙な噂が確かめられることになるとは思われなかった。友人たちのそれをもみ消そうという試みもむなしく、いまや大衆の注目は大いにそこに引きつけられているので、一般の話題を無視するふりをしてもあまり役には立たない。

ハノーバー・スクエアのセントジョージで執り行われた式はきわめて内輪のもので、花嫁の父親であるアロイシャス・ドーラン氏、バルモラル公爵夫人、バックウォーター卿、ユースタス卿、レディー・クララ・セントサイモン（花婿の弟と妹）、レディー・アリシア・ウィッティントンのほか列席者はなかった。一行はその後そろって披露宴の準備されているランカスター・ゲートのアロイシャス・ドーラン氏の家へ移った。そこでちょっとしたトラブルがあった。氏名不詳の女が婚礼の一行の後から懸命に家に押し入ろうとし、彼女にはセントサイモン卿に対して何か要求する権利があると主張したらしい。執事と従僕が長々と骨を折ったあげくやっと女は追い出された。花嫁は運良くこの不愉快な妨害の前に家に入り、披露宴の席に着いてたが、突然、気分がすぐれないと訴え、自室へ引き取った。なかなか彼女が戻らないので父親が彼女の部屋へ行ったが、メイドから、彼女が部屋へ上がってきていたのはほんのひと時で、アルスターコートとボンネットを取ると彼女は急いで廊下へ降りていったと聞かされた。従僕の一人が、そのような服装の婦人が家を出るのを見たが、女主人は一座に加わっていると信じていたので、それが彼女とは思いもよらなかったと言明した。娘の失踪を確かめたアロイシャス・ドーラン氏が花婿とともに直ちに警察に連絡し、非常に精力的な捜査が行われているので、おそらくこのきわめて奇妙な事件も迅速に解決されることだろう。しかし、昨夜遅くなるまで、行方不明の夫人の所在については何もわかっていない。この件には犯罪が絡んでいるという噂があり、警察は既に元になる騒ぎを引き起こした女を、嫉妬もしくはほかの動機から、花嫁の奇妙な失踪に関係していると考え、逮捕したとのことである。

「それで全部かい？」

「一つだけ小さな記事だが暗示的なのが別の朝刊にある」

「それで――」

「そのミス・フローラ・ミラー、騒ぎを引き起こした婦人だが、実際に逮捕されている。彼女は以前、アレグロでバレリーナをしていて、花婿を長年知っていたらしい。それ以上詳しいことはないから、いまや事件全体を君はつかんでいるわけだ――新聞に発表されている限りにおいてはね」

「それに非常におもしろい事件のようだね。これは絶対に逃したくないな。だがベルが鳴ってるね、ワトソン、時計も四時少し過ぎとなれば、間違いなくこれは我々の高貴な依頼人のようだ。行くことはないよ、ワトソン、むしろぜひ立ち会ってもらいたい、僕の記憶を確かめるためだけでも」

「ロバート・セントサイモン卿」とボーイがさっとドアをあけて取り次いだ。入ってきた紳士は気持ちのよい、教養あふれる、青白い顔で、鼻は高く、口元には怒りっぽそうなところがあり、ぐらつかない、見開いた目は常に運命に命じ、従わせて楽しんできた人のそれだった。態度はきびきびしていたが、全体の様子は年に似合わない印象を与えた。いくらか猫背で歩く時に少し膝を曲げていたからである。髪の毛もつばのカールした帽子を取ってみると生え際に白髪が交じり、てっぺんは薄くなっていた。服装はといえば、高い襟、黒のフロックコート、白いベスト、黄色の手袋、エナメルの靴、明るい色のゲートルで、程よいおしゃれに注意を払っていた。彼はゆっくりと部屋の中へ歩み、首を左から右に振り向け、右手の紐から下がる金縁の眼鏡を揺らしていた。

「こんにちは、セントサイモン卿」とホームズが立ち上がってお辞儀をしながら言った。「どうぞそちらの肘掛け椅子に。これは僕の友人で同僚のワトソン博士です。少し火のほうへお寄りになって、それで問題を話し合いましょう」

「容易に想像がつくことでしょうが、私にとって実につらいことなんです、ホームズさん。急所を突かれてしまいました。あなたが既にこの種の微妙な事件をいくつか扱っているのは承知していますが、私たちの階級のものはほとんどないでしょうね」

「いいえ、まだまだ上が」

「何ですって」

「最近のその種の依頼人は国王でした」

「へえ、本当ですか！　思いもよりませんでした。で、どちらの王です？」

「スカンジナビア王です」

「え！　夫人がいなくなりましたか？」

「おわかりのことと思いますが、」ホームズは物柔らかに言った、「あなたの件で約束するのと同様の秘密厳守を他の依頼人にも適用しますので」

「もちろん！　まったくその通り！　まったくその通りです！　失礼失礼。自分の事件のことでしたら私は、あなたの意見をまとめるのに役立つならどんな情報でも喜んで提供します」

「ありがとうございます。僕も新聞に公表されたことは既にすべて知っていますが、それ以上は何も知りません。正しいものと考えていいんでしょうね、たとえばこの、花嫁の失踪に関する記事ですが」

セントサイモン卿はそれにざっと目を通した。「ええ、正確です、これに関する限り」

「しかし意見を申し上げるには相当補足していただくことが必要です。僕があなたに質問するのが事実を知る近道では、と思うのですが」

「どうぞそのように」

「ミス・ハティー・ドーランと最初に会われたのはいつです？」

「一年前、サンフランシスコでです」

「米国へ旅行中ですね？」

「そうです」

「その時婚約したのですか？」

「いいえ」

「それでも親しい関係だったんですね？」

「彼女との交際は楽しかったですし、彼女も私が楽しんでるのをわかったはずです」

「彼女の父上は非常に富裕ですね？」

「西海岸一の金持ちと言われてます」

「で、どうやって資産を築いたんでしょう？」

「鉱山です。数年前には無一文だったんです。しかし金を掘り当て、それを投資し、とんとん拍子に上り詰めたわけです」

「さて、あなたはその若いご婦人、奥様の性格に関してどんな印象をお持ちですか？」

高貴の人はいくぶん早く眼鏡を揺らし、じっと火の中を見つめた。「ねえ、ホームズさん、」彼は言った、「妻は父親が金持ちになる前に二十歳になっていました。その間彼女は鉱山のキャンプの中を自由に走り、森や山を歩き回っていたのですから、学校の教師よりもむしろ自然から教育を受けたわけです。我が国で言うおてんば娘で、性格は激しく、自由奔放で、いかなる伝統にもとらわれません。衝動的――いや、激しい、と言おうとしたのです。彼女は決断が早く、大胆不敵に決めたことを実行します。他方、彼女が根は気高い女性であると思わなかったら、」―彼は少し威厳を込めて咳払いをした―「私も自らの光栄ある名を彼女に与えたりしなかったでしょう。彼女には英雄的な自己犠牲ができるし、何にせよ不名誉なことは彼女も嫌いだ、と私は信じてます」

「奥様の写真をお持ちですか？」

「これをもってきました」彼はロケットを開き、非常に美しい女性の顔を見せてくれた。それは写真ではなく、象牙に描かれた細密画だったが、画家がそのつやのある黒髪、大きな暗色の目、非常に美しい唇の印象をいかんなく引き出していた。ホームズは長い間真剣にそれを見つめていた。それから彼はそれを閉じ、セントサイモン卿の手に戻した。

「その後、この若い婦人がロンドンへ来て、あなた方は交際を再開したんですね？」

「ええ、父親が彼女をこの前のロンドン社交期に連れてきたのです。私は彼女に数回会い、婚約し、今回結婚しました」

「かなりの持参金だそうですね？」

「妥当な持参金です。せいぜい私の一族では普通といった程度です」

「で、もちろんそれは、結婚は既成事実ですから、あなたの手に残りますね？」

「実際、それはまだ尋ねるどころじゃありませんでした」

「それは当然でしょうね。式の前日にミス・ドーランに会いましたか？」

「ええ」

「彼女の機嫌は良かったですか？」

「最高でした。これから私たちで何をするかということばかり話してました」

「ほう！　それは非常に興味深い。それで婚礼の日の朝は？」

「この上なく快活でした。少なくとも式の後までは」

「で、その後何か彼女の変化に気づいたのですか？」

「そうですね、実は、その時、彼女の気性が少しばかり激しいことを示す、以前にも見せていた兆しが見え始めたのです。しかし、出来事はお話しするまでもないささいなことで、事件と関係があるはずがありません」

「それでもどうぞ、すべてを聞かせてください」

「おお、子供じみたことです。私たちがベストリーのほうへ行く時に彼女がブーケを落としたのです。その時彼女は信徒席の前を通っていて、それは信徒席の中に落ちました。一瞬手間取りましたが、信徒席にいた紳士が拾って彼女の手に戻し、それは落ちてだめになった様子もありませんでした。それなのに、私がそのことを彼女に話すと、彼女はぶっきらぼうな返事をしました。それに家へ向かう馬車の中で彼女はばかげていると言っていいほどにこのつまらない事件に動揺していました」

「ほう！　信徒席に紳士がいたと言いましたね。では、一般の人たちがいくらかいたのですね？」

「ああ、ええ。教会があいているのに人を締め出すのは無理ですから」

「その紳士は奥様の友人ではありませんでしたか？」

「いいえ、いいえ。礼儀上紳士と言いましたが、まったく下層階級の人のようでした。身なりもほとんど目に入りませんでした。しかし実際、私たちは要点からかなり外れているんじゃないでしょうか」

「では、レディー・セントサイモンは行く時よりもいくらか機嫌をそこねて結婚式から戻られた、と。父上の家へ再び入って彼女は何をしました？」

「メイドと話をしているのを見ました」

「で、そのメイドの名は？」

「アリスです。アメリカ人で彼女についてカリフォルニアから来ました」

「信任の厚い召使ですか？」

「それが少し過ぎるようで。私には女主人が彼女に勝手なふるまいを許しているように見えました。それでも、もちろん、アメリカではこういうことについて別な見方をしますから」

「奥様はどのくらいそのアリスと話してましたか？」

「おお、数分です。私はほかのことを考えていました」

「話の内容が耳に入りませんでしたか？」

「レディー・セントサイモンは何か『鉱区の横領』とかいうことを言っていました。彼女はいつもスラングのようなものを使っていました。私にはどんな意味だかわかりません」

「アメリカのスラングは時によって非常に意味深長ですからね。で、メイドと話し終えた奥様はどうされました？」

「披露宴の部屋へ歩いて行きました」

「あなたとですか？」

「いいえ、一人で。そういうちょっとしたことでも彼女は非常に自立的でした。それから、十分ぐらい私たちは座ってましたが、彼女はそそくさと立ち上がり、少々詫びの言葉をつぶやき、部屋を出ました。それから帰ってきません」

「しかしそのメイド、アリスが、彼女が自室へ行って花嫁衣裳をアルスターコートで隠し、ボンネットを着けて出て行ったと証言したんでしたね」

「その通りです。そして彼女はその後、フローラ・ミラーと一緒にハイドパークへ歩いていくのを見られています。現在拘留されている、あの朝ドーラン氏の家で騒ぎを起こしていた女です」

「ああ、ええ。その若い婦人とあなたの彼女との関係については少々詳細を知りたいですね」

セントサイモン卿は肩をすくめ、眉を上げた。

「私たちは数年間親しくしていました。非常に親しく、と言ってもいいかもしれません。彼女は以前、アレグロにいました。私はけちな扱いはしませんでしたし、彼女には私に不平を言う正当な理由は何もありません、が、女というものをご存知でしょう、ホームズさん。フローラはかわいい女ですが、きわめて性急で、献身的に私を愛していました。私が結婚しようとしていると聞いて、彼女は恐ろしい手紙を書いてよこし、それで、実を言うと、私が結婚式を内輪で挙げた理由は教会でスキャンダルがありはしまいかと恐れたからなんです。彼女はドーラン氏の玄関口に私たちが戻ってすぐに現れ、懸命に押し入ろうとし、妻に向かって非常に口汚い言葉を浴びせ、脅しさえしましたが、私はその種のことが起こるだろうと見越し、私服の警官を二人そこに置いてましたので、彼らがすぐにまた彼女を追い出しました。騒いでも役に立たないと見ると、彼女は静かになりました」

「奥様はそれをすべて聞かれましたか？」

「いいえ、ありがたいことに、聞いてません」

「で、その後その女と歩いているのを目撃されたのですね？」

「ええ。そのことをスコットランドヤードのレストレード氏はとても重大視しています。フローラが妻をおびき出し、何か恐ろしいわなを仕掛けたと考えているのです」

「まあ、考えられる仮説ですね」

「あなたもそう思いますか？」

「そのようですね、とは言いませんでしたよ。しかしご自身はそれがありそうなこととは考えないんですね？」

「フローラは虫も殺せないと思います」

「それでも、嫉妬は不思議なほど人を変えるものですからね。では、あなた自身の考えでは何が起こったのでしょう？」

「いや、実際、私は説明を求めに来たので、提出しに、じゃないですから。私はすべての事実をお話ししました。しかし、お尋ねですから申しますが、今回のことによる興奮、社会的に限りなく高く上り詰めたという意識が結果として妻にちょっとした神経障害を引き起こしたということもありうるという考えが浮かびました」

「要するに、突然精神障害を起こされたと？」

「そうですね、実際、多くの人が熱望しているのに叶わないたくさんのものに―私に、じゃなくてですよ―彼女が背を向けたことを考慮すると、ほかにはどうにも説明がつきませんね」

「まあ、それも確かに考えられる仮説ですね」と微笑みながらホームズは言った。「さてと、セントサイモン卿、僕はほとんどすべてのデータを得たようですね。失礼ですが、披露宴の席に着いていて窓の外は見えませんでしたか？」

「道路もハイドパークも別の側が見えていました」

「なるほど。それではもうお引止めする必要はないと思います。こちらからお知らせしますので」

「あなたにこの問題が解決できますように」と、依頼人は立ち上がりながら言った。

「もう解決しました」

「え？　何ですって？」

「もう解決したと言っているのです」

「では妻はどこに？」

「そういう細かいことはおっつけお知らせしますよ」

セントサイモン卿は首を振った。「それにはあなたや私より賢い頭が必要ではないかと思いますよ」と彼は言い、堂々と旧式な作法でお辞儀をし、出て行った。

「僕の頭をご自分と同じレベルに置いてくださるとはセントサイモン卿も実にご親切だねえ」とシャーロック・ホームズは笑いながら言った。「証人尋問も終わったしウィスキーソーダと煙草をやるかな。事件は依頼人が部屋に入ってくる前から結論が出ていたからね」

「ホームズ君！」

「いくつか類似した事件の記録があるんだ。もっともさっきも言ったがこれほど敏速に消えたのはないがね。僕の質問はすべて推理を確証するためにしたんだ。ソローも言ってるように、状況証拠だって時によっては、ミルクの中に鱒を見つけるようなもので非常に説得力があるからね」

「しかし君の聞いたことはすべて私も聞いたんだ」

「でも前にもあった事件を知らないからね、それが僕にはとても役に立つんだ。数年前にはアバディーンで相似した例があったし、普仏戦争の翌年にもミュンヘンでほとんど同じ系統のものがあった。これはそういった事件の一例だが、やあ、レストレードが来た！　こんにちは、レストレード！　サイドボードの上に余分のタンブラーがあるし、煙草も箱に入ってるよ」

警察の探偵は明らかに船員に見える、ピージャケットにクラバットという装いをし、黒いズックの袋を手に持っていた。簡単に挨拶して彼は腰を下ろし、差し出された煙草に火をつけた。

「で、どうしたね？」とホームズは目を輝かせて尋ねた。「不満そうな顔だねえ」

「ええ不満ですよ。例のいまいましいセントサイモン事件ですよ。問題の表も裏もわかりません」

「本当かね！　驚くじゃないか」

「聞いたこともないような込み入った事件です。あらゆる手がかりが指の間からすり抜けていくようですよ。一日中これにかかりっきりです」

「それにずいぶん濡れる羽目になったらしいね」とホームズは、ピージャケットの袖に手を触れて言った。

「ええ、サーペンタイン池をさらっていたんです」

「一体全体何のために？」

「レディー・セントサイモンの遺体を捜してですよ」

シャーロック・ホームズは椅子の背にもたれて思い切り笑った。

「トラファルガー・スクエアの噴水の水盤もさらったかい？」

「なぜです？　どういう意味です？」

「レディーを見つける見込みはあっちでもこっちでもまったく同じだろうよ」

レストレードは友に怒りの視線を投げかけた。「あなたはすっかりわかってるんでしょうよ」と彼はうなるように言った。

「まあ、起こったことを聞いたばかりだけどね、結論は出たよ」

「ほんとですか！　じゃあサーペンタインはこの件に何の関係もないと思うんですね？」

「まず関係なさそうだねえ」

「ではできましたら我々がこれを発見したのはどういうことかご説明いただけますかな？」そう言いながら彼は袋をあけ、すっかり変色し、ずぶぬれになった波紋絹のウェディングドレス、白いサテンの靴、花嫁のリースとベールを床の上に放りだした。「どうです」と彼は言い、積み重なったもののてっぺんに新しい結婚指輪を置いた。「ちょっとした難問でしょう、ホームズ先生」

「ほう、これはこれは！」と友は言い、青い指輪を空中に向かってふっと吹いた。「サーペンタインからさらい出したのかい？」

「いいえ。公園の管理人が岸の近くに浮いているのを見つけたんです。彼女の衣類と確認されましてね、衣類がそこにあるなら死体も遠からん所にあるだろうと思われましたので」

「そのすばらしい推理によれば、あらゆる人間の死体がその人の衣装の近くで見つかることになるね。で、こうなって、君は何を求めているのかな？」

「フローラ・ミラーが失踪に関係している証拠です」

「それは難しいんじゃないかと思うよ」

「おやおや、あなたは、またですか？」レストレードはいくぶん皮肉をこめて叫んだ。「ねえ、ホームズ、あなたの推理やら推論やらはあまり実際の役に立たないんじゃないですか。二分間に二度もへまをしましたよ。このドレスはミス・フローラ・ミラーに間違いなく関係しています」

「で、どんなふうに？」

「ドレスにはポケットがあります。ポケットには名刺入れがあります。名刺入れにはメモがあります。そしてこれがそのメモであります」彼はそれを目の前のテーブルにピシャリと置いた。「お聞きください。

『準備が済んで私が見えたらすぐに外へ。F.H.M.』

さて、私の説は初めから、レディー・セントサイモンはフローラ・ミラーにおびき出されたのであって、疑う余地なく彼女と共謀者に失踪の責任があるというものでした。これは、彼女のイニシャルが署名され、疑う余地なく玄関口でそっとレディーの手にすべりこませ、レディーを自分たちの手元におびき寄せたメモそのものです」

「実に見事だ、レストレード」とホームズは笑いながら言った。「いや本当に実にすばらしい。見せてくれたまえ」彼は気のなさそうにその紙を取り上げたが、たちまち注意を引きつけられ、小さく喜びの叫び声を上げた。「これは実際重要だ」と彼は言った。

「ほう！　そう認めますか？」

「きわめて重要だ。心からおめでとうを言おう」

レストレードは勝ち誇って立ち上がり、頭をかがめて覗きこんだ。

「あれ、」彼は叫んだ、「あなたが見てるのは裏側ですよ！」

「とんでもない、こっちが表だ」

「表ですって？　ばかなことを。メモはこっちに鉛筆で書いてあるんです」

「そしてこっちにあるのはホテルの請求書の断片らしいが、これが僕には非常に興味あるんだ」

「そこには何もありません。私が前に調べましたよ。

『十月四日、部屋代８シリング、朝食２シリング６ペンス、カクテル１シリング、昼食２シリング６ペンス、シェリー酒８ペンス』

何もないじゃないですか」

「おそらく何もないね。それでもとても重要だ。メモのほうはといえば、これもまた重要だ、少なくともイニシャルはね、だからもう一度おめでとうと言おう」

「いいかげん時間をむだにしました」とレストレードは立ち上がりながら言った。「私が信じるのは勤勉であって、暖炉のそばに座ってご立派な理論を弁じたてることじゃありませんから。さようなら、ホームズさん、どちらが先に問題の真相を究明するか見てみましょうよ」彼は衣類をかき集め、袋の中に押し込み、ドアへと向かった。

「一つだけヒントだ、レストレード」と、ホームズはものうげに、競争相手が姿を消す前に言った。「この問題の正しい解答を教えよう。レディー・セントサイモンは神話だ。そんな人物は存在しないし、かつて存在したこともない」

レストレードは嘆かわしげに友を眺めた。それから彼は私のほうを向き、額を軽く三度叩き、頭をものものしく振り、急いで出て行った。

彼が後ろ手にドアを閉めるやいなや、ホームズは立ち上がってコートを身につけた。「あの男の言う屋外の仕事にも一理あるからね、」彼は言った、「それでねワトソン、君にはしばらく新聞でも読んでいてもらうよりしょうがないかな」

シャーロック・ホームズが出て行ったのは五時過ぎだったが、私がひとりぼっちでいる時間はなく、一時間もしないうちに料理屋だという男が非常に大きな平たい箱を持ってやってきた。これを彼は一緒に連れてきた若者の手を借り、解いて中身を出したのだが、まもなく、まったく驚いたことに、実に贅沢なちょっとしたコールドサパーが私たちのつつましい下宿のマホガニーの上に並べられだした。ヤマシギのつがい、キジ、パテドフォアグラのパイ、それに年代物のボトルもあった。これらすべてを並べ終えると、二人の訪問者は、品物の払いは済んでいてこの住所にと注文されているというほか何の説明もなく、アラビアンアイトの精霊のように消えうせた。

九時直前にシャーロック・ホームズは元気よく部屋に入ってきた。彼は厳粛な顔つきをしていたが、その目の光を見て、私は彼が自らの結論に失望していないなと思った。

「じゃあ連中は夕食を並べてったんだね」と彼は両手をこすり合わせながら言った。

「客があるらしいね。五人分並べてったよ」

「うん、何人か客が訪ねてくるかなと思うんだ」と彼は言った。「セントサイモン卿がまだ来てないとは驚いたな。おや！　あの足音は、今階段を上がってるかな」

実際、せわしげに現れたのは午後の客で、眼鏡を一段と激しくぶらぶら揺らし、その貴族的な顔には非常にうろたえた表情があった。

「では僕の使いが行きましたね？」とホームズが尋ねた。

「ええ、それで実を言うと内容にはひどくびっくりしました。おっしゃってることは確かですか？」

「これ以上なく確かです」

セントサイモン卿はぐったりと椅子に腰を下ろし、手で額をなでた。

「公爵が何と言うか、」彼はつぶやいた、「家族の一員がそんな恥辱を受けたと聞いたら？」

「まったく偶然の出来事です。そこには恥辱など何も認められませんよ」

「ああ、あなたはこういう問題を別の見地から見ているんです」

「誰が悪いのでもないでしょう。あの婦人はほかにどうしようもなかったと思うんですがね、もっとも、突然ああいうやり方をしたのは確かに遺憾ですが。彼女には母親がいないので、こういう重大な時に忠告できる人が誰もなかったんです」

「これは侮辱です、公然たる侮辱です」とセントサイモン卿は指でテーブルを叩きながら言った。

「気の毒な娘さんがまったく前例のない立場に置かれたことをしんしゃくしなければいけません」

「酌量の余地はありません。本当に私は非常に怒っています、私は恥辱を受けたのです」

「ベルが聞こえたようですね」とホームズが言った。「そう、踊り場に足音がする。この問題で寛大な見方をするよう、僕ではあなたを説得できないなら、セントサイモン卿、もっと上手に擁護できる人をここに連れてきています」彼はドアをあけ、二人の男女を招じ入れた。「セントサイモン卿、」彼は言った、「フランシス・ヘイ・モールトン夫妻をご紹介します。ご婦人は既にお知り合いのことと思いますが」

この新来者たちを見て、依頼人は椅子からぱっと立ち上がり、背筋をぴんと伸ばしてたち、威厳を損なわれたといった体で目を伏せ、手をフロックコートの胸に突っ込んでいた。婦人はさっと歩み寄り、彼に手を差し出したが、彼は依然、目を上げることを拒んでいた。訴えかける彼女の顔が抗しがたいものであったことを考えると、それが彼の決意の表明であったのだろう。

「怒ってるのね、ロバート」と彼女は言った。「そうね、すごくもっともだと思うわ」

「どうか弁解は無用に願いたい」とセントサイモン卿は苦々しげに言った。

「おお、そうね、私、あなたにほんとにひどいことをしたし、行く前にあなたに話すべきだったとわかってます。でも私ちょっと動揺してしまって、こっちでフランクを見てからというもの、まったく自分が何をしているのか、言っているのかわからなかったの。あそこの祭壇の前で卒倒して倒れなかったのが不思議なくらい」

「もしかしたら、モールトンさん、あなたがこの事を説明する間、友人と僕は失礼したほうがいいでしょうか？」

「私が口を挟んでもよければ、」見知らぬ紳士が言った、「この件では少しばかり秘密が多すぎたようです。私としては、全ヨーロッパとアメリカに本当のことを聞いてもらいたいです」彼は小柄で屈強、日に焼けた男で、きれいにひげをそり、鋭い顔立ち、機敏な物腰だった。

「じゃあ、私がすぐに私たちのことを話します」と婦人は言った。「フランクと私は1884年にパパが採掘していた、ロッキーの近くのマクワイアーのキャンプで会いました。私たち、フランクと私は婚約していました。でもその後、ある時父が豊かな鉱脈を掘り当て、大金をもうけたのに、このフランクの方は気の毒に払い下げられた土地の鉱脈が尽き、何も得られませんでした。パパが金持ちになるほどフランクは貧しくなりました。それでとうとうパパはもう私たちが婚約を続けることを聞き入れようとせず、私をサンフランシスコへ連れていきました。でもフランクはあきらめませんでした。それで彼は私を追いかけてきてパパに何も知られないようにして私と会いました。知ったらパパは怒るに決まってますから、私たちは自分たちだけで何もかも取り決めました。フランクは自分も行って大もうけする、パパと同じくらいになるまでは決して戻ってきて私を求めたりしない、と言いました。そこで私はいつまでも彼を待つと約束し、彼がいる限りほかの誰とも結婚しないと誓いました。彼は言いました、『だったらなぜすぐに結婚してはいけない、そうすれば君のことは安心していられるじゃないか。戻ってくるまで君の夫だとは言わないから』で、私たちは相談し、彼が何もかもうまく用意して、牧師もすっかり準備して待っていたので、その場で私たちは結婚しました。それでフランクは幸運を求めて去っていき、私はパパの所へ帰りました。

次に聞いた時フランクはモンタナにいて、それから彼はアリゾナに試掘に行き、次はニューメキシコから彼の消息を聞きました。その後、鉱夫のキャンプがアパッチ・インディアンに襲撃されたという長い記事が新聞に載り、殺された人の中にフランクの名がありました。私はその場で気絶し、その後何ヶ月もひどい病気でした。パパは私を肺病と思い、サンフランシスコ中の医者の半分に診せました。一年以上何の知らせもなく、それで私はフランクは本当に死んだものと疑いませんでした。その時セントサイモン卿がサンフランシスコに来て、私たちはロンドンに来て、結婚が準備され、パパはとても喜びましたが、私はいつも、気の毒なフランクにささげたこの心の中に代わりの位置を占められる人はこの地球上に誰もいないと思っていたのです。

でも、セントサイモン卿と結婚していたら、もちろん私は自分の義務を果たしていたでしょう。愛は思いのままにできませんが、行動はできますからね。私はできる限り良い妻になるつもりで彼とともに祭壇に向かいました。でもちょうど祭壇の手すりのところへ来て、振り返って、信徒席の一列目に立って私を見ているフランクを見た時の私が何を感じたか、想像できますかしら。初めは彼の幽霊かと思いましたが、もう一度見ると、彼はじっと立ち、何か問うような、彼に会って私が嬉しいのか残念なのか尋ねるような目をしていました。倒れなかったのが不思議です。何もかもがぐるぐる回り、牧師の言葉は蜂がうなるように耳の中でブンブン言っていました。私はどうしたらいいかわかりませんでした。式を止めて教会で大騒ぎすべきだったでしょうか？　私がもう一度彼を見やると、彼は私の考えていることがわかったようでした。私に黙っているようにと唇に指を当てたからです。その時私は彼が一枚の紙片に走り書きするのを見て、私に手紙を書いているのがわかりました。私は彼の席を通り過ぎる時に彼のほうへブーケを落とし、彼は花束を返す時に手紙をそっと私の手の中に入れました。それはほんの一行、彼が合図した時に彼の所へ行くように求めるものでした。もちろん私は、私の第一の義務は現在彼に対するものであることを一瞬も疑わず、何であろうと彼の支持に従おうと決意しました。

戻った私は、カリフォルニアで彼を知っていていつも彼の味方だったメイドに話をしました。私は彼女に、何も言わずにいくつか衣類を荷造りし、アルスターコートを用意するように命じました。セントサイモン卿に話しておくべきだったのはわかっていますが、彼のお母さんやああいうお偉方たちの前ではとても難しいことでした。私はとにかく逃げて後から説明しようと決心しました。席に着いて十分もたたないうちに窓から反対側の道にいるフランクが見えました。彼は手招きし、それからハイドパークの方へ歩きだしました。私はそっと出て、服を着け、彼の後を追いました。誰か女の人が来て何かしらセントサイモン卿のことで話しかけてきました――ちょっと聞いたところでは彼自身にもちょっとした結婚前の秘密があるようでした――が、私は何とか彼女を振り払い、まもなくフランクに追いつきました。私たちは一緒に馬車に乗り、彼がゴードン・スクエアに取っていた貸間に走らせ、そしてこれが私が何年も待っていた本当の結婚式だったのです。フランクはアパッチに捕まっていましたが逃げ出し、サンフランシスコまで来て、私が彼を死んだものとあきらめてイングランドへ向かったことを知り、私をここまで追いかけ、私の第二の結婚式のその朝になってやっと私に出会ったのです」

「私は新聞を見たんです」とアメリカ人は説明した。「名前と教会は載っていましたが、彼女の住んでいるところはわかりませんでした」

「それから私たちはどうすべきか話し合い、フランクはぜひ公表したいという考えでしたが、私は恥ずかしいので、消えてしまって二度とみんなと会わないようにしたい気持ちでした――ただ、できればパパには手紙を書いて生きてることだけは知らせて。私は貴族の方々やレディーたちがあの披露宴の席に着いて私が戻るのを待っていることを考えると恐ろしくてなりませんでした。それでフランクは私の花嫁衣裳や何かを持っていって束にして、私が跡をたどられないように、誰にも見つからない所へ投げ捨てました。こちらのご親切な方、ホームズさんが今夜私たちを訪ねていらっしゃらなければ、私たちは明日にもパリへ向かうところだったでしょう。どうやって私たちを見つけたのかはとてもわかりませんが、私が間違っていてフランクが正しい、秘密にするのは自分たちを悪者にしていることになる、とこの方ははっきりと、優しく教えてくださいました。それからホームズさんはセントサイモン卿一人と話をする機会を与えると申し出られ、それで私たちはそのまますぐにこちらの部屋を訪ねてきたのです。さあ、ロバート、これで全部です、あなたに苦痛を与えたとすればとても申し訳なく思いますし、あまり私のことを悪く思わないでいただきたいのです」

セントサイモン卿は決して固い態度を崩そうとはせず、眉をひそめ、唇を堅く結び、それでもこの長い物語に耳を傾けていた。

「失礼だが、」彼は言った、「私には個人的な、一身上の事柄をこんなふうに人前で話す慣習はないのです」

「ではあなたは私を許してくださらないのね？　では行く前に握手もしてくださらない？」

「ああ、それで君が満足なら、もちろん」彼は手を差し出し、彼女が彼の方に差し伸べた手を冷ややかに握った。

「あなたも親しく食事の席に加わってくださるのではと思ったのですが」とホームズは提案した。

「それは少し無理なことをおっしゃっていると思います」と閣下は答えた。「この最近の出来事については私も甘受せざるをえないかもしれませんが、それで浮かれ騒ぐことを期待されても困ります。では失礼して、もうおいとまさせていただきたいと思います」彼は私たち皆にさっとお辞儀し、大またに部屋を出て行った。

「では、せめてあなた方だけでもご一緒していただけるでしょうね」とシャーロック・ホームズが言った。「僕はアメリカの人と会うのがいつも楽しみなんですよ、モールトンさん、というのも僕はね、遠い先には君主の愚行や大臣のへまが妨害することなく、我々の子供たちが星条旗にユニオンジャックを加えた旗の下、一つの世界的国家の市民になる日が来る、と信じているものの一人なんです」

「興味深い事件だったね」と、客が立ち去った時ホームズが言った。「一見ほとんど説明不能の事柄が簡単に説明できることがあるのをきわめて明確に示す役に立つからね。あの婦人の語った一連の出来事より自然なことはありえないのに、結果は、たとえばスコットランドヤードのレストレード氏からすると、これ以上不思議なものはないんだね」

「では君はまったく戸惑わなかったんだね？」

「初めから二つの事実が明らかだった。一つは、あの婦人が結婚式をするのをとても喜んでいたこと、もう一つは、彼女が家へ戻って数分のうちにそれを後悔していたことだ。とすると、明らかに朝の間に何か彼女の考えを変えさせることが起きていたのだ。どんなことが起こりえたか？　花婿の連れの中にいたので、彼女は外にいる時に誰かに話しかけることはできなかった。では彼女は誰かを見たのか？　そうだとすると、アメリカから来た誰かにちがいない。なぜなら、彼女がこの国で過ごした時間はごく短いので、誰にしろ、彼女がただその相手を見ただけでそこまで完全に意向を変更する気になるほどの深い影響力を獲得することはありえない。こうして除外していくと、僕たちが既に、彼女がアメリカ人を見たかもしれないという考えに到達したのはわかるね。ではこのアメリカ人は何者か、そしてなぜそれほどの影響力を彼女に対して持っているのか？　恋人かもしれない。夫かもしれない。彼女が娘時代を危険な場所、奇妙な状況で過ごしたことはわかっていた。セントサイモン卿の話を聞く前に僕はそこまで達していた。セントサイモン卿の話で、信徒席にいた男のこと、花嫁の態度に変化のあったこと、手紙を受け取るためにブーケを落とすという見え透いたやり口、彼女が腹心のメイドに助けを求めたこと、鉱区の横領という彼女が口にした非常に重要な言葉――これは鉱夫の言い回しで他人に優先権のあるものを所有するという意味だ――について知った時、全体の状況が完全に明らかになった。彼女は男と逃げた、そしてその男は恋人か前夫だ――後者である見込みが優勢だった」

「それでいったいどうやって彼らを見つけたんだね？」

「それは難しくなったかもしれないところだったが、我が友レストレードが自分ではその価値を知らない情報を手にしていたんでね。イニシャルはもちろんきわめて重要だが、もっと大事なことは、彼がこの一週間にロンドンでも最高級のホテルの一つで支払いをしたとわかったことだ」

「なぜ高級だと推理した？」

「料金からだ。宿泊料八シリング、シェリー一杯八ペンスは一番高いホテルの一つであることを示している。そんな料金を請求する所はロンドンにも多くはない。二番目に訪ねたノーサンバーランド・アベニューのホテルで宿泊者名簿を調べて、フランシス・H・モールトンというアメリカ紳士がほんの前日出発したことがわかり、明細を見ると、あの請求書の控えにあった項目が載っていた。手紙はゴードン・スクエア226に転送するようになっていた。そこでそちらへ向かい、幸運にも恋人たちが家にいたので、思い切って僕は父親のように忠告をして、あらゆる面で彼らの立場を公に対して、とりわけセントサイモン卿に対して、少しでもはっきりさせたほうがいいことを彼らに指摘した。ここで彼に会うようにと彼らを招待し、見ての通り、彼に約束を守ってもらった」

「でもそれほど結構な結果ではないね」と私は言った。「彼のふるまいはどう見てもあまり優しいとは言えないよ」

「ああ、ワトソン、」ホームズは微笑みながら言った、「たぶん君だってあまり優しくしてもいられまいよ、もしも、さんざ苦労して求婚して結婚式までしたあげく、一瞬のうちに妻も、財産も奪われてしまったらね。僕たちはセントサイモン卿についてはきわめて寛大に判断してもいいし、自分たちが同じような立場に立たされずにすみそうなことを自分の星に感謝してもいいんじゃないか。椅子を引いてバイオリンを取ってくれたまえ。唯一僕たちに残された解決すべき問題は、この寒い秋の夜をどうやって過ごすか、だからね」

# 緑柱石の宝冠

「ホームズ、」私は張り出し窓から通りを見下ろしながら言った。「おかしな男がこっちへやってくる。あれを一人で出すとはねえ、身内の人がけしからんと言うべきかなあ」

友はものうげに肘掛け椅子から立ち上がり、ガウンのポケットに手を入れたまま、私の肩越しに眺めた。晴れて乾燥した二月の朝で、地面には前日の雪がまだ高く積もり、冬の陽に明るくきらめいていた。通りの中央の雪は往来に掘り返されて崩れた茶色い帯になっていたが、両側と歩道の端に積みあがった雪は今も降った時と同様白かった。灰色の歩道はきれいに雪かきされていたが、まだ滑って危ないので、いつもより通行人が少なかった。実際、突飛な振る舞いが私の注意を引いた紳士一人を除くとメトロポリタン鉄道の駅のほうから来る人は一人もいなかった。

それは五十年配で長身、恰幅がよく人目に立つ男で、大きな、きわめて印象的な顔、堂々たる姿をしていた。地味だが高価な服を着け、黒のフロックコート、ぴかぴかの帽子、きちんとした茶色のゲートル、仕立ての良い真珠色のズボンという姿だった。それなのに、その動きは威厳のある服装や顔立ちと滑稽な対照をなしていた。懸命に走っては、時折、足に負担をかけることにあまり慣れていない人間が疲れてするように、ちょこっと飛び跳ねているのだ。男は走りながら急に手を上下に動かしたり、首を上下左右に振ったり、苦しいのか顔を異常にゆがめたりしていた。

「いったいあの男はどうしたんだろう？」と私は尋ねた。「番地をいちいち見上げてるが」

「ここに来るんだと思うよ」と、ホームズは手をこすり合わせながら言った。

「ここに？」

「うん。僕の専門的な意見を聞きに来るんじゃないかな。あの症状を見ればわかるというものだ。ほうら！　言った通りだろ？」彼がそう言うと同時に、男はあえぎながら我が家の戸口に駆け寄り、ベルの紐を引いて家中にガラガラ言う音を鳴り響かせた。

すぐに私たちの部屋へ現れた男は、まだ息を切らし、まだしきりに身振り手振りしていたが、じっと見つめる悲嘆と絶望の目つきに、私たちの微笑みはたちまち恐怖と同情に変わった。しばらくの間男は口もきけず、からだを揺すったり、髪を引きむしったりし、理性を失う限界まで追い立てられているかのように見えた。それから、突然パッと立ち上がり、力まかせに壁に頭を打ち付けだしたので、私たち二人で駆け寄り、男を部屋の中央へと引き離した。シャーロック・ホームズは男を安楽椅子に押し込み、そばに腰掛け、男の手を軽くたたき、ゆっくりとなだめるように話しかけた。彼はそうした調子をよく心得ていたのである。

「お話があって僕の所へいらしたんじゃないですか？」と彼は言った。「急いだのでお疲れですね。どうか落ち着くのをお待ちになって、それから、どんな小さなものでもあなたの提出される問題を喜んで調べてさせていただきます」

男は一分以上座ったまま胸を波打たせ、激しい感情と戦っていた。それから彼はハンカチで額をぬぐい、唇を堅く結び、私たちに顔を向けた。

「きっと私を狂人とお思いでしょう？」と彼は言った。

「あなたが何か大変な問題を抱えておられるのはわかります」とホームズは答えた。

「まったくえらいことなんです！　そりゃもう理性も失いますよ、いきなり恐ろしいことになりました。公然たる不名誉に直面するかもしれません。これまで評判を汚すようなことは何一つない人間だったのに。私的な苦難は誰にでもあります。しかし二つが同時に襲うとは、それもこんな恐ろしい形では、魂まで震撼させられてしまいますよ。その上私一人のことじゃないんです。何かこのひどい事態から抜け出る方法を見つけ出さないとこの国の最も高貴な方が傷つくかもしれません」

「どうか気を静めて、」ホームズは言った、「あなたがどなたか、何事があなたに降りかかったのか、僕もはっきりしたところを知りたいのですが」

「私の名は、」訪問者は答えた、「お聞き及びではないかと思います。スレッドニードル街のホルダーアンドスティーヴンソン銀行のアレグザンダー・ホルダーです」

確かにそれはこのロンドンの、シティー第二の大銀行グループの代表社員の名として私たちもよく知っていた。では、何が起こり、ロンドンでも第一流の市民の一人をこの実に哀れむべき状態に至らしめたのか？　私たちは好奇心いっぱいで、彼がもう一度苦闘の末、心を励まして話を始めるのを待っていた。

「時間が貴重だと思います」と彼は言った。「それで私はこちらへ急いだのです。警察の警部さんにあなたの協力を得てはどうかと言われましたので。地下鉄でベーカー街まで来て、そこから急いで歩きました。この雪では馬車はゆっくりですから。それでこんなに息が切れているんです。めったに運動しない人間ですから。もう良くなりましたので、できるだけ手短に、とはいえ明瞭に、事実をお話ししましょう。

もちろん良くご存知でしょうが、銀行業の成功は取引の増加や預金者の数もさることながら、有利な投資を発見できるかどうかに左右されます。最も利の多い資金の投資手段の一つに確実な担保のあるところへの貸付があります。私たちはこの数年、そちらの方面にかなり力を入れており、貴族のお客様も多く、絵画や蔵書や食器を担保に大金を貸し出しております。

昨日の朝、銀行の事務所に座っていますと、一人の事務員が私の所へ名刺を持ってきました。名前を見て私はびっくりしました。というのもそれはまさしく――いや、できればあなたにも世界中に知られた名前であるというほかには申し上げないほうがいいでしょうが――イングランドで最も高貴な、名門の、身分の高いお名前です。私はその名誉に感激し、その方が入ってこられた時にそう言おうとしましたが、その方は不愉快な仕事を急いで終えたいといった様子で、すぐに取引に入りました。

『ホルダーさん、』その人は言いました、『あなたのところでは金の貸し出しをしておられると教えられたことがあるのですが』

『担保がしっかりしていればそうしております』と私は答えました。

『すぐに50,000ポンド、絶対に必要なんです』とおっしゃいます。『もちろん、その程度のわずかな金額は友人たちから何度でも借りられますが、私はなるべくこれを事務的なこととして扱いたいし、自分でその事務を処理したいのです。容易におわかりでしょうが、立場上自分から義理を作るのは賢明とは言えないのです』

『その金額をどのくらいの期間お望みか、伺ってもよろしいですか？』と私は尋ねました。

『来週の月曜日には大金が入りますので、そうしたら間違いなく貸出金に、あなたが正当と考えて請求されるいかなる利息でもつけて返済します。しかし金がすぐに支給されることがぜひとも必要なんです』

『私の個人的な金で耐えられる負担でしたら、』私は言いました、『これ以上議論せずに喜んでお貸しするところなんですが。一方、会社の名でお貸しするとなると、共同経営者に対して公正であるためにも、たとえあなた様の場合であっても、実務としてあらゆる予防措置を取ると申し上げなければなりません』

『むしろそうしていただきたいのです』そうおっしゃるとそばに置かれていた正方形の黒いモロッコ革の箱を持ち上げられました。『おそらく緑柱石の宝冠のことはお聞きになったことがあるでしょう？』

『最も貴重な帝国の公有財産の一つですね』と私は言いました。

『その通りです』箱が開けられ、そこには柔らかい肌色のベルベットにくるまれ、今、名を聞いた見事な宝石がありました。『三十九個の巨大な緑柱石が付いています』とその方はおっしゃいました。『金の彫刻の価格は計り知れません。一番低く見積もっても宝冠の価値は私がお願いした金額の倍です。私はこれを担保としてあなたに預ける所存でおります』

私は高価な箱を手に取り、やや困惑して高名な依頼人のほうを見ました。

『価値をお疑いですか？』とお尋ねです。

『いいえまったく。ただ私が疑問に思いますのは――』

『私がそれをお預けすることの適否ですね。その点は心配無用です。私も絶対に間違いなく四日で取り戻せるのでなければそうしようとは夢にも思いません。純粋に形式的な問題です。担保として充分ですか？』

『十二分です』

『おわかりでしょう、ホルダーさん、私はあなたについていろいろ聞いていることに基づくあなたに対する信頼をはっきり示しているわけです。私はあなたが思慮深く、このことに関するいかなる噂話も控えるだけでなく、できる限りあらゆる警戒をしてこれを保存されるものと信じています。何らかの損害が生じれば、世間に大きなスキャンダルが巻き起こるのは言うまでもありますまい。いかなる損傷も完全に失われた場合とほとんど同様に重大なことになります。というのもこれらに匹敵する緑柱石は世界に一つもなく、取り替えるのは不可能だからです。それでも、私はあなたを全面的に信頼してこれをお預けし、月曜の朝自分で取りに来ようと思います』

依頼人がお帰りを急いでおられるのを察し、私はそれ以上何も申さず、出納係を呼び、千ポンド札五十枚をお支払いするよう命じました。しかし、目の前のテーブルにのった高価な宝石とともに、再度一人になってみると、私はいささか不安を抱きながら自分に課せられた巨大な責任のことを考えずにはいられませんでした。国家の所有物ですから、何か不幸な出来事が起きれば、その結果恐ろしいスキャンダルになるのは疑いの余地がありません。早くも私はその管理を引き受けたことを後悔しました。しかし、もう事を変更するには遅すぎましたので、私はそれを私個人の金庫にしまいこみ、再び仕事に取り掛かりました。

夕方になり、私はそんな高価な物を事務所に置いて帰るのは無分別と思いました。銀行家の金庫はこれまでにもこじ開けられたことがありますし、どうしてそれが私にないと言えましょう。そうなったら、私はどんな恐ろしい立場におかれることか！　そこで私はそれから数日間は常に箱をどこへでも持ち歩き、必ず手の届く所にあるようにしようと決めました。そのために私は馬車を呼び、ストリーサムの家まで宝石を携行して帰りました。私はそれを二階へ持っていって化粧室にある書き物机にしまうまで息も自由にできませんでした。

さてここで、ホームズさん、状況を完全に理解していただきたいので私の所帯について一言。馬丁とボーイは別の建物で寝ますのでまったく除外していいでしょう。女中が三人いますが長年私の所におりまして、疑う余地なく絶対的に信頼できます。ほかにもう一人いる小間使いのルーシー・パーは雇ってからほんの数ヶ月しかたちません。しかし、彼女には申し分のない推薦状がありましたし、私はいつも満足しておりました。実にかわいい娘でして、引き寄せられたファンが時折家のまわりをぶらついています。ただ一つそれだけ、彼女にも欠点があることがわかりましたが、私たちは彼女があらゆる面で善良な娘であると信じています。

召使についてはそんなところです。家族のほうはいたって小人数でお話しするにも長くはかかりません。私は男やもめで、アーサーという一人息子がおります。あれにはがっかりさせられているんです、ホームズさん、嘆かわしい限りです。疑いもなく悪いのは私自身です。私があれを甘やかしたからだって言われます。おそらくそうでしょう。妻が死んだ時私が愛するものはあれだけだと思ったのです。たとえ一瞬でもあれの顔から微笑みが消えていくのを見るのは耐えられませんでした。あれの願いを拒んだことは一度もありません。あるいはもっと厳しくしたほうがどちらのためにも良かったのでしょうが、私としてはそれが最善のつもりだったのです。

もちろん私の意向は私の事業で、あれが跡を継ぐことでしたが、あれはビジネス向きの性質ではありませんでした。あれはわがままで、きまぐれで、実を言うと、安心して大金を扱わせることはできませんでした。若いうちにあれは貴族のクラブのメンバーになり、そこで、作法は洗練されていますので、すぐに懐が豊かで金のかかる趣味を持ったたくさんの人たちと親しくなりました。覚えたことと言えばどっぷりとカード遊びにつかること、競馬で金を浪費することで、何度も私の所へ来ては小遣い銭の前借をしたいと懇願したものですが、それで賭博の借金を清算したのでしょう。あれも一度ならずつき合っている危険な仲間から逃れようとしましたが、そのたびに友人のサー・ジョージ・バーンウェルの影響で引き戻されました。

サー・ジョージ・バーンウェルはあれがしょっちゅう家に連れてくるのですが、私も気がついてみるとあの魅惑的な物腰には抗しきれないくらいですから、実際、ああいう人が息子を支配する力を得たのも驚くにはあたりません。アーサーより年上で、まったく世慣れた人で、あらゆる所へ行ったことがあり、何でも見たことがあり、話がすばらしく上手で、非常に姿も美しい人です。しかしその魅力的な存在から遠ざかり、冷静に考えてみれば、冷笑的な話し振りやその目にある表情からしてまったく信用できない人であると確信するのです。私はそう思いますし、女性の鋭い洞察力で人を見るメアリーもそう思っています。

さて、もうお話しすべきはあの娘のことだけですね。あの娘は私の姪で、兄が五年前にあの娘をこの世に一人ぼっちにして死んだ時、私はあの娘を養女にし、それ以来自分の子と思ってきました。あの娘は我が家の太陽です。かわいいし、愛らしいし、美しいし、すばらしい管理者であり家政婦ですが、それでいてあんなに思いやりがあり、穏やかで、優しい女性はいません。あの娘は私の片腕です。あの娘がいなければ私はどうしていいかわかりません。一つだけ問題があるとすれば私の願いにもかかわらずいつかあの娘が出て行くことです。二度息子があの娘に結婚を申し込んだのですが、なにしろ熱烈に愛していますから、しかし、二度とも断られました。誰かが息子を正道に引き戻せたとしたらそれはあの娘だったろうと思いますし、結婚していれば全人生が変わったかもしれないと思うのですが、ああ！　今となってはもう手遅れです、永久に手遅れです！

さてホームズさん、我が家に住む人間についてはもうご存知ですから、私の不幸な物語を続けるといたしましょう。

あの晩夕食後に応接間でコーヒーを飲んでいた時、私はアーサーとメアリーに依頼人の名前だけは隠して、その日あったこと、我が家に貴重な宝物があることを話しました。コーヒーを運んできたルーシー・パーが部屋を出ていたのは確かだと思います。が、ドアが閉まっていたとは断言できません。メアリーとアーサーはたいそう興味を持ち、有名な宝冠を見たがりましたが、私は動かさないほうがいいと思いました。

『どこに置いたの？』とアーサーが尋ねました。

『私の書き物机の中だ』

『それじゃあ、夜、家に押し入られたりしないといいけどね』とアーサーは言いました。

『鍵をかけてある』と私は答えました。

『ああ、あの書き物机ならそこらの使い古しの鍵で合うだろうよ。子供の頃納戸の戸棚の鍵で開けたことがあるよ』

あれはよく乱暴なことを言うので、私はあれの言ったことを深く考えませんでした。しかし、アーサーはその夜、ひどくまじめな顔をして私の部屋までついてきました。

『ねえ、パパ、』目を伏せながら言いました、『二百ポンドくれませんか？』

『いや、だめだ！』私は厳しく答えました。『金のことではお前にはあまりにも寛大にしすぎた』

『確かに優しくしてくれたよ、』あれは言いました、『でもその金はどうしても要るんだ、さもないと二度とクラブには顔出しできないんだ』

『そりゃまた実に結構なことじゃないか！』と私は叫びました。

『そうだけど、でも僕を面汚しにしたくはないだろう』とあれは言いました。『不名誉には耐えられないよ。僕は何とかその金を工面しなければならないし、パパがくれないなら、ほかの方法をやってみなけりゃならないんだ』

私は非常に腹が立ちました。これが一月に三度目の要求でしたから。

『私からは一文ももらえないと思え』と私は叫び、それでアーサーはお辞儀をして、もう何も言わずに部屋を出て行きました。

アーサーが言ってしまうと、私は書き物机の錠をあけ、宝物が無事であるのを確かめ、再び鍵をかけました。それから私は家の戸締りが大丈夫か見回りをしました。この務めは普段はメアリーに任せていますが、その夜は自分でやったほうがいいと思ったのです。階段を下りるとメアリーが玄関ホールの横の窓辺にいて、それを閉めて鍵をかけているところへ私は近づきました。

『ねえ、パパ』とあの娘は少し心配そうな、と私には思えたのですが、様子で言いました。『今夜ルーシーに外出許可を与えました？』

『とんでもない』

『彼女はたった今裏口から入って来たのよ。誰かに会いに側門へ行っただけなのは間違いないけど、とても無用心だし、やめさせるべきだと思うの』

『明日の朝彼女にそう言いなさい、それとも私のほうがよければ私が言おう。戸締りはすべて大丈夫かな？』

『大丈夫よ、パパ』

『それじゃおやすみ』私はあの娘にキスして、またベッドルームへ上がり、すぐに寝付きました。

私は事件に関係がありそうなことはすべてお話しするように努めていますが、ホームズさん、どうぞはっきりしない点があれば何なりとお尋ねください」

「それどころか、あなたのお話は非常に明快です」

「ここで私の話はとりわけはっきりさせたいと思う部分にさしかかります。私はあまり眠りの深いほうではなく、内心の心配のためにいつもより余計にそうなりやすかったのは間違いありません。それで、朝の二時ごろ、私は家の中の何かの音で目が覚めました。それは私がすっかり目を覚ます前にやみましたが、どこかの窓がそっと閉められたかのような印象が残ったのです。私は寝ながら聞き耳を立てていました。突然、恐ろしいことに、はっきりと隣室で静かに動く足音がしたのです。私はそっとベッドを出て、恐怖にすっかりどきどきしながら、化粧室のドアの端から覗き込みました。

『アーサー！』私は叫び声を上げました、『悪党！　泥棒！　よくもまあ、その宝冠に触れるとは』

ガスは私が残した時のまま細く燃え、惨めな息子はシャツとズボンだけの姿で明かりのそばに立ち、手に宝冠を持っていました。そしてそれを力いっぱいねじるか、曲げるかしているようでした。私の叫び声を聞いたアーサーはつかんでいたそれを落とし、真っ青になりました。私はそれを引っつかんで調べてみました。緑柱石の三つついた金の金具が一つなくなっていました。

『この悪党！』私は怒りに逆上して叫びました。『壊したな！　お前は私の名誉を永久に汚してしまった！　盗んだ宝石はどこだ？』

『盗んだ！』とあれは叫びました。

『そうだ、泥棒！』私はあれの肩を揺すぶりながらどなりました。

『何もなくなってない。何もなくなるはずがない』とあれは言いました。

『三つなくなっているんだ。お前はどこにあるか知っている。お前を泥棒とだけじゃなくうそつきと呼ばなければならないのか？　ほかにもお前がもぎ取ろうとしているのを私は見たんだぞ！』

『そんな悪態はもうたくさんだ』とあれは言いました。『もう我慢できない。僕はこの件についてはもう一言も言うつもりはない。僕と決めてかかって侮辱しているんだから。朝になったら家を出ていきます。自分でやっていきます』

『警察の手に任せることになるんだぞ！』私は悲しみと怒りで半狂乱になって叫びました。『これは徹底的に調べてもらうからな』

『僕からは何もわからないさ』と、アーサーは、あれにそんなところがあるとは思いもしなかったほど激昂して叫びました。『警察を呼びたいなら、警察にできるだけ調べさせたらいい』

この頃には家中が起き出していました。私が怒って声を張り上げていましたので。メアリーが最初に私の部屋へ駆け込み、宝冠とアーサーの顔を見て、一部始終を見て取り、叫び声を上げ、意識を失って床に倒れました。私は警察を呼びに女中をやって、直ちに調査を任せました。警部と巡査が家にやってくると、むっつりと腕組みをして立っていたアーサーが、盗みで自分を告発するつもりかどうか、私に尋ねました。既にこれは個人的問題ではなく、公的なものになってしまった、台無しになった宝冠は国有財産だから、と私は答えました。私は法にすべてを委ねようと決心していました。

『せめて、』あれは言いました、『すぐに僕を逮捕させないで。僕が五分間家を離れてよければ、僕だけじゃなく父さんのためにもなるんだけど』

『逃げるためか、あるいは盗んだ物を隠すためか』と私は言いました。その時、私は自分が置かれた恐ろしい立場を悟り、私ばかりでなく私よりずっと偉い人の名誉が危ういということ、国中が騒動になるようなスキャンダルを起こす恐れがあることを思い出してくれ、とあれに懇願しました。ただ、なくなった三つの宝石をどうしたかを言ってくれさえすればそういうことをすべて避けられるのですから。

『問題を直視したほうがいい』と私は言いました。『お前は現場を押さえられたんだし、自白して罪が重くなるはずはない。お前ができる限りの償いを、すなわち宝石のありかを私たちに教えさえすれば何もかも許され、忘れられるだろう』

『その寛容さは許しを請う人にどうぞ』とあれは答え、冷笑しながら私から顔をそむけました。すっかり硬化してしまい、私が何を言っても効果がないことがわかりました。方法は一つだけでした。私は警部を呼びいれ、アーサーを拘留してもらいました。直ちに本人だけでなく、あれの部屋と、家の中の宝石を隠せそうな所はすべて捜索されました。宝石はまったく発見されず、また見下げ果てた息子はどんなに私たちが説得したり脅したりしても口を開こうとしませんでした。今朝アーサーは独房に移され、私は、警察の手続きをすべて済ました後、あなたの手腕を生かして事件を解明していただくようお願いしにこちらへ急いだのです。警察はあからさまに、今のところ何もわからないと白状しています。必要とお考えなだけ金は使ってかまいません。私は既に千ポンドの謝礼を申し出ております。ああ、私はどうしたらいいでしょう！　名誉と、宝石と、息子を一晩で失ってしまいました。ああ、どうしたらいいんでしょう！」

彼は手を頭の両側に当て、前後に揺れながら、言語に絶する悲しみに打たれた子供のようにひとり言をうなっていた。

シャーロック・ホームズは数分の間、眉をひそめ、暖炉に目を据えながら無言で座っていた。

「あなたのところは来客は多いですか？」と彼は尋ねた。

「共同経営者とその家族、それと時折アーサーの友人が来るほかはまったく。サー・ジョージ・バーンウェルは最近幾度か来ました。ほかには誰もないと思います」

「お宅では社交界へはよくお出かけですか？」

「アーサーはよく。メアリーと私は家に残ります。私たちは二人とも好きじゃないのです」

「若い娘さんには珍しいですね」

「おとなしい性格なんです。それに、それほど若くもありません。二十四歳ですから」

「この事件は、あなたのお話からすると、彼女にも衝撃だったようですね」

「ええ、ひどく。私以上にショックをうけています」

「あなた方はお二人とも息子さんの有罪を疑っていないのですか？」

「この目で宝冠を手に持っているのを見ながらどうして疑えましょう」

「僕にはそれが決定的な証拠とはとても考えられません。一体、宝冠の残りは傷ついていたのですか？」

「ええ、ねじれていました」

「では、息子さんがそれをまっすぐにしようとしていたとは思いませんか？」

「ありがとうございます！　息子と私のために言ってくださってるんですね。しかしそれは荷が勝ちますね。一体あれはあそこで何をしてたんでしょう？　潔白な意図があったなら、なぜそう言わなかったのでしょう？」

「まさにその通りです。また有罪なら、なぜ嘘をでっちあげなかったのでしょう？　息子さんの沈黙が僕にはどちらにも取れるように思えるのです。この事件にはいくつか奇妙な点があります。あなたを眠りから目覚めさせた物音を警察はどう思っていましたか？」

「アーサーが自分の寝室のドアを閉めた時の音だろうと考えていました」

「そんなばかな！　重罪を決意した人間が家族を起こすほど音高くドアを閉めるなんて。では、宝石の紛失について彼らは何と言ってました？」

「まだ張り板を打診したり、家具を調べたりして見つけようとしています」

「家の外を調べてみようとしてましたか？」

「ええ、驚くほど精力的にやってました。既に庭中綿密に調べていました」

「さて、そうなるとですね、」ホームズは言った、「この問題はあなたや警察が当初考えようとしたよりも、実はずっと根が深いということがいまや明らかではありませんか？　あなたには単純な事件に見えていますが、僕にはきわめて複雑です。あなたの説の意味するところをよく考えてごらんなさい。あなたの考えでは、息子さんはベッドを出て、大変な危険を冒してあなたの化粧室へ行き、書き物机を開け、宝冠を取り出し、力任せにほんの一部を引きちぎり、どこか別の場所へ行って、三十九の宝石のうちの三つを誰にも見つけられないほど巧みに隠し、それから残りの三十六を持って、発見されるかもしれない大きな危険に身をさらして部屋に戻ったのですよ。そこでお尋ねしますが、そのような説が批判に耐えられますか？」

「しかしほかに何かありますか？」と銀行家は絶望のしぐさをして叫んだ。「動機が潔白なら、なぜあれは説明しなかったのでしょう？」

「それを見つけ出すのが僕たちの務めです」とホームズは答えた。「それではと、よかったら、ホルダーさん、一緒にストリーサムへ出発し、それで一時間を投じてもう少し詳しく細部に目を向けるとしましょう」

友はこの遠征に私の同行を主張し、それは、聞いたばかりの物語に深く好奇心と同情をかき立てられた私も切望することだった。実を言うと、銀行家の息子の有罪は不幸な父親同様、私にも明らかに思われたが、それでも私はホームズの判断を信頼していたので、普通に受け入れられる説明に彼が満足していないうちは希望を持つだけの根拠があるにちがいないと思っていた。南側の郊外への道中ずっと、彼はほとんど口も利かず、あごを胸にうずめ、帽子を目深にかぶり、深い物思いに沈んでいた。我々の依頼人はかすかな希望の光が示されたことで元気を取り戻したらしく、自分の仕事のことで私と取りとめのないおしゃべりを始めたほどだった。短い鉄道の旅を終え、少し歩くと、大資本家の地味な住宅、フェアバンク荘についた。

フェアバンク荘はかなり大きな、白い石造りの方形の家で、道路から少し奥まって立っていた。雪をかぶった芝生の、二つの馬車の進入路が入り口を閉ざした二つの大きな鉄の門の正面まで伸びていた。右側には小さな木の茂みがあり、整った生垣の間を道路から台所へ続き、御用聞きの勝手口になっている狭い道に通じていた。左側には厩に至る細道が走っていたが、これは敷地内ではなく、あまり使われないものの公道だった。ホームズは私たちを戸口に立たせたまま、ゆっくりと家をぐるりと回り、正面を横切り、御用聞きの道を通り、それから庭の後ろをぐるりと回って厩への道へ歩いていった。あまり長くかかるので、ホルダー氏と私はダイニングルームへ入り、彼の戻るのを火のそばで待った。私たちが無言でそこに座っているとドアが開き、若い婦人が入ってきた。彼女は中背よりやや高く、ほっそりとし、暗色の髪と目は真っ青な肌と対照をなし、余計に濃く見えた。いまだかつてあれほど真っ青な女性の顔は見たことがないように思う。唇にも血の気はなく、目は赤く泣きはらしていた。彼女が静かに部屋へ入った時、私は彼女に、朝銀行家から受けた印象よりも深い悲しみを感じ、それは彼女が明らかにすばらしい自制力を持つ、強い性格の女性であるだけになおさら目立った。私の存在を無視し、彼女はまっすぐに叔父に近寄り、その手で彼の頭を優しく、女らしく愛撫した。

「もうアーサーを釈放するように命じたんでしょう、パパ？」と彼女は尋ねた。

「いや、いや、お前、事件は徹底的に調べなければいけない」

「でも彼が無実なのは絶対に確かよ。女の直感がどんなものかご存知でしょう。私にはわかっています、彼は何も悪いことをしていないし、あまり厳しいことをしたら後で後悔なさるわ」

「じゃあなぜあいつは黙ってるんだ、もし無実なら」

「わからないわ。たぶんパパが疑うので怒ったからでしょう」

「どうして疑わずにいられる、現にあいつが宝冠を手にしているのを見たんだ」

「ああ、でもただ手に取って見ていたのよ。ああ、どうか、どうか私の言葉を信じて、彼は無実よ。こんなことはやめにしてもう何も言わないで。アーサーが監獄にいるなんて考えるだけで恐ろしいわ！」

「私は宝石が見つかるまで絶対にやめない、絶対にだ、メアリー！　私にとっても恐ろしい結果だがお前はアーサーへの愛情で目が見えなくなってるんだ。事をもみ消すどころか、もっと徹底的に取り調べてもらおうとロンドンから紳士を一人お連れしたんだ」

「こちらの方ですの？」と彼女は私のほうへ向き直って尋ねた。

「いや、こちらのご友人だ。今は厩の道を回ってらっしゃる」

「厩の道を？」彼女は黒い眉をあげた。「あそこで何が見つかりそうだというのかしら？　ああ！　この方ね。私はいとこのアーサーが無実であるという私の確信が真実であることをあなたが見事に証明してくださると信じております」

「僕は完全にあなたのご意見を共有するものですし、ご一緒にそれを証明できるのではないかと思っています」ホームズはマットの所へ戻り、靴の雪を叩き落しながら答えた。「メアリー・ホルダーさんでいらっしゃいますね。少し質問をさせていただけますか？」

「どうぞお願いします、この恐ろしい出来事の解決のお役に立つのでしたら」

「あなたご自身はゆうべ何も聞きませんでしたか？」

「何も、この叔父が大声で話し出すまでは。それを聞いて起きてまいりました」

「昨晩あなたが窓と戸の戸締りをしましたね。すべての窓をしっかり閉めましたか？」

「はい」

「今朝もすべて閉まってましたか？」

「はい」

「恋人のいるメイドがいましたね？　彼女が男に会いに外に出たとあなたが昨夜叔父上におっしゃったようですが？」

「ええ、それに彼女は応接間で給仕していて叔父の宝冠についての話を聞いたかもしれません」

「なるほど。彼女が外へ出て恋人に話し、二人で泥棒を計画したのかもしれないとおっしゃるんですね」

「だがそんなあいまいな説を並べて何になりましょう？」銀行家がいらだたしげに叫んだ。「アーサーが宝冠を手にしているのを見たと言ったでしょうに」

「ちょっとお待ちを、ホルダーさん。必ずその話に戻りますから。その娘ですがね、ミス・ホルダー。彼女が勝手口から戻るのを見たのでしたね？」

「はい。夜ドアが閉まっているかどうか確かめに行って、そっと入ってくる彼女に会ったのです。男も見えましたわ、暗がりの中に」

「誰だかわかりましたか？」

「ええ、もちろん！　野菜を配達する八百屋でした。フランシス・プロスパーという名です」

「その男が立っていたのは、」ホームズは言った、「ドアの左側、すなわち、戸口に来るために必要である以上に道の奥でしたね？」

「ええ、そうでした」

「そして男の片足は木の義足ですね？」

恐怖に似たものが若い婦人の表情豊かな目の中に現れた。「まあ、あなたは魔法使いのようですわね」と彼女は言った。「どうしてそれがわかりますの？」彼女は微笑んだが、ホームズのやせた、真剣な顔にはそれに応える微笑みはなかった。

「今度は二階へ上がらしていただきたいのですが」と彼は言った。「おそらくもう一度家の外側を点検したいということになるでしょう。あるいは上へ行く前に下の窓を調べたほうがいいかもしれない」

彼は窓から窓へと迅速に歩き回ったが、ただ一度、厩の道を見渡せる玄関ホールの窓の所で立ち止まった。彼はそれをあけ、強力な拡大鏡で敷居をきわめて入念に調べた。「さあ二階へ行きましょう」やっと彼が言った。

銀行家の化粧室は質素な家具を備えた小さな部屋で、グレーのじゅうたん、大きな書き物机、縦長の鏡があった。ホームズは最初に書き物机に近寄り、錠を熱心に見ていた。

「どの鍵を使ってあけられたんでしょう？」と彼は尋ねた。

「息子自身が指摘した、物置の戸棚の鍵ですよ」

「それをお持ちですか？」

「鏡台にのっているやつです」

シャーロック・ホームズはそれを取り上げ、書き物机をあけた。

「音のしない鍵ですね」と彼は言った。「あなたが目を覚まさなかったのも無理はない。この箱に宝冠が入っていたんですね。ちょっと見てみなければいけませんね」彼は箱をあけ、王冠を取り出してテーブルの上に置いた。それは見事な宝石細工の芸術的見本であり、三十六個の石はかつて私が見たことのないすばらしいものだった。宝冠の片側の端が割れ、そこで三つの宝石を取り付けている金具が引きちぎられていた。

「さて、ホルダーさん、」ホームズは言った、「こちら側の金具は不幸にも失われたものと同じつくりです。これを引きちぎっていただけませんか」

銀行家は恐ろしさにあとじさった。「そんなことは夢にも考えられません」と彼は言った。

「では僕が」ホームズがいきなりそれに力を加えたが、むだだった。「少し曲がったかな」と彼は言った。「しかし、僕の指の力は並外れて強いけれども、これを壊すのはかなり骨ですね。普通の人間ではできません。さあ、もし僕が無理にも壊したら、何が起きると思いますか、ホルダーさん？　ピストルを発射したような物音がするでしょう。それがみんなあなたのベッドから数ヤード以内で起こって、あなたが何も聞かなかったのはどうしてですか？」

「どう考えていいかわかりません。私にはまったくの闇です」

「しかし、あるいはこのまま進むにつれて明るくなるかもしれませんよ。どうお思いです、ミス・ホルダー？」

「実を言うと、叔父同様、当惑しています」

「ご覧になった時息子さんは靴も室内履きもつけていなかったんですね？」

「ズボンとシャツのほかには何も」

「ありがとう。我々がこの調査で驚くほどの幸運に恵まれているのは確かですから、問題の解明に成功しなかったら完全に我々自身の責任でしょうね。お許しを得て、ホルダーさん、今度は外で調査を続けるとしましょう」

無用な足跡は彼の仕事をより困難にするかもしれないからと説明し、彼自身の頼みで、彼は一人で行った。一時間かそれ以上、彼は働き、雪で足を重くし、相変わらず謎めかした顔つきで、やっと彼は戻った。

「もう見るべきものはすべて見たと思います、ホルダーさん」と彼は言った。「お役に立つには下宿へ戻るのが一番です」

「しかし宝石は、ホームズさん。あれはどこです？」

「わかりません」

銀行家は手をもみしだいた。「もう二度と見ることはあるまい！」と彼は叫んだ。「それで息子は？　望みを持っていいですか？」

「僕の考えは少しも変わっていません」

「では、一体全体、昨日の夜、私の家でどのような悪事が演じられたのでしょう？」

「明朝、九時と十時の間にベーカー街の下宿へ僕をお訪ねいただければ、それを明らかにするために喜んでできるだけのことをしましょう。宝石を取り戻すことだけを条件に、あなたの代理として白紙委任をいただいている、そしてあなたは僕の引き出す金額に制限は設けない、と理解しています」

「あれを取り戻すためでしたら私の財産でも差し上げましょう」

「結構です。これから明日までにその件を調査するとしましょう。ごきげんよう。もしかすると夕方前にもう一度こちらへ来なければいけないかもしれません」

事件に関する友の意見がもう固まっているのは明らかだったが、とはいえ彼の結論がどんなものか、ぼんやりと想像することさえ私の手には余った。帰途の途中何度か、私はその点について彼に探りを入れようと努めたが、そのたびに彼が何か別の話題へそらすので、ついには私もすっかりあきらめてしまった。私たちが自分たちの部屋へ戻りついた時にはまだ三時前だった。彼は自室へ急ぎ、再び数分のうちに、よくいる浮浪者の装いで下りてきた。カラーを折り返し、てかてか、よれよれの上着、赤いクラバット、くたびれたブーツで、その階級の完璧な見本となっていた。

「これでいいだろう」と、彼は暖炉の上の鏡をチラと覗き込んで言った。「君も一緒に来られればよかったんだけどねえ、ワトソン、うまくないと思うんだ。僕はこの件で手がかりをつかんでいるのかもしれないし、幻影を追いかけているのかもしれない、だがどちらかはすぐにわかるだろう。数時間で戻れると思う」彼はサイドボードの上の牛肉の塊から一枚スライスし、それを輪切りのパン二枚の間にはさみ、この粗末な食事をポケットに押し込むと、探検に出発した。

ちょうど私がティーを終えた時だった、彼が見るからに上機嫌で、古い、脇にゴム入りのブーツを手に持って振りながら戻ってきた。彼はそれを隅に放り出し、自分で茶を入れた。

「通りすがりに立ち寄っただけで、」彼は言った。「すぐにまた行くんだ」

「どこへ？」

「ああ、ウェストエンドの反対側だ。帰るまで少しかかるかもしれない。遅くなるようだったら起きて待っていることはないよ」

「うまくいってるのかね？」

「ああ、そう、そう。何も文句なしだ。あれからストリーサムまで出かけてね、だがあの家には寄らなかった。このちょっとした問題は実におもしろい。いくらもらっても逃せないところだったね。だがここに座って油を売っているわけにはいかないし、このみっともない服を脱いできわめて品行方正な自分に戻らなくては」

彼に根拠があって満足していることはそれを暗示する言葉だけではなく、彼の様子からより強く見て取れた。彼の目はきらきら光り、黄ばんだ頬にほんのり赤みさえさしていた。彼は急いで二階へ上がり、数分後には玄関のドアがバタンと閉まったので、彼がもう一度お気に入りの狩りへと出かけたのがわかった。

私は真夜中まで待ったが、彼の戻る兆しはなく、それで自分の部屋へ引き下がった。新しい手がかりを得た彼が昼夜何日も続けて出ているのは珍しいことではないので、彼が遅くなっても私は驚かなかった。何時に彼が戻ったのかわからないが、私が朝食に下りた時には、彼は片手にコーヒーのカップ、他方に新聞を持ち、元気ですっかり身支度を整えていた。

「先に始めてしまってすまないね、ワトソン、」彼は言った、「だがほら、今朝はかなり早い時間に依頼人との約束があったろう」

「おや、もう九時過ぎだね」と私は答えた。「あれがその彼でも驚くことはないな。ベルが聞こえたようだよ」

確かにそれは私たちの友人の金融業者だった。私は彼の変わりようにショックを受けた。本来幅広でがっちりした造りのその顔がいまややつれて落ち窪み、髪の毛も少なくとも少し白くなったように見えたからである。彼が部屋に持ち込んだ疲労と無気力は前日の朝の猛烈さよりもさらに痛ましく、私が押しやった肘掛け椅子に彼はどさっと倒れこんだ。

「何をしたせいでこんなつらい目に合わされるのかわかりません」と彼は言った。「ほんの二日前、私はまったく気がかりなこともない、幸福で成功した人間でした。今私は名誉を汚された年寄りとして一人ぼっちにされるのです。一つの不幸のすぐ後からまた別の不幸がやってきます。姪のメアリーに見捨てられてしまいました」

「見捨てられた？」

「ええ。今朝ベッドに寝た跡はなく、部屋は空っぽで、玄関のテーブルの上に私への書置きがありました。私は昨日の夜あの娘に、怒りのためではなく悲しみのあまり、あの娘が息子と結婚していればあいつも何もかもうまくいったかもしれないのに、と言ってしまいました。たぶんそんなことを言うなんて軽率だったのでしょう。この手紙で触れているのもその話です。

最愛の叔父様へ

叔父様には迷惑をかけてしまったし、私が別の行動を取っていればこの恐ろしい不幸も決して起こらなかったと思います。そういう考えがあっては、叔父様のもとではもう二度と幸せにはなれませんし、永久にお別れしなければいけないと思います。私の将来は心配なさらないでください、備えがありますから。それと、何より、私を捜さないで、無益な労力ですし、私のためにもなりませんので。

たとえ何があろうともいつもあなたの

メアリー

その手紙はどういう意味でしょう、ホームズさん？　自殺を指していると思いますか？」

「いや、いや、そんなことはありません。あるいは考えられる限り最良の解決策かもしれません。僕はね、ホルダーさん、あなたの苦難も終わりに近づいていると思います」

「え！　何ですって！　何かお聞きになったんですね、何かおわかりになったんだ！　宝石はどこです？」

「宝石一つ当たり千ポンドを法外な金額と思わないでしょうね？」

「一万でも払いますよ」

「そんなには必要ありません。三千ポンドで用が足ります。あと少々謝礼金がありましたね。小切手帳はお持ちですか？　ペンはここです。四千ポンドと記入していただきましょう」

ぼう然とした顔で銀行家は要求された小切手を切った。ホームズは机に歩み寄り、三つの宝石がついた小さな三角形をなす金の断片を取り出し、それをテーブルの上に放り出した。

喜びの叫びとともに依頼人はそれをひっつかんだ。

「手に入れたんですね！」と彼はあえぎながら言った。「助かった！　助かった！」

その喜びの反応は先ほどまでの悲しみと同じくらい激しく、彼は取り戻した宝石を胸に抱きしめた。

「ほかにもう一つあなたは借りを返さなければいけません、ホルダーさん」とシャーロック・ホームズがやや厳しく言った。

「借りですと！」彼はペンを取り上げた。「金額を言ってください、お支払いしましょう」

「いや、僕に対する義務ではありません。あなたはあの高潔な若者、息子さんに謙虚にわびを言わなければなりません。彼はこの件で僕の息子だとしたら誇りに思うような行動を取ったのです。はからずも僕に息子はありませんがね」

「では取ったのはアーサーではなかったのですね？」

「昨日も言いましたが今日も繰り返しましょう、違います」

「確かなんですね！　ではすぐに急いであいつのところへ行って本当のことがわかったと知らせてやりましょう」

「彼はもう知っています。僕はすべてが解けた時彼と面会し、彼に話すつもりがないとわかったので僕が彼に話をして、それで彼も僕が正しいと認めた上で、まだ僕にも完全にはっきりしていなかったごくわずかな細かい点を補足して話さないわけにいかなくなりました。しかし、今朝あなたが知らせに行けば、彼も口を開くかもしれません」

「どうか教えてください、そうすると、何なのでしょう、この異常ななぞは！」

「お話ししましょう、それから僕がそれに到達した手段も示しましょう。最初に言わせていただきますが、これはお話しする僕にも、お聞きになるあなたにもきわめてつらいことです。というのは、サー・ジョージ・バーンウェルとあなたの姪のメアリーの間に合意があったのです。二人は今一緒に逃げています」

「私のメアリーが？　ありえません！」

「不幸なことにありうるばかりじゃない、確かなことなんです。あなたも息子さんもこの男を家庭に迎え入れた時、その本当の人格を知らなかったのです。彼はイングランドで最も危険な男の一人です。破産した賭博者、まったく絶望的な悪党、感情も良心も持たない男です。あなたの姪御さんはそんな男については何も知識がありませんでした。彼が以前にも百遍もしたことのある誓いの言葉を彼女にささやいた時、彼女は自分ひとりが彼の心を動かしたと信じ込んだのです。彼が何を言ったのかは誰にもわかりませんが、少なくとも彼女は彼の手先となり、ほとんど毎晩彼に会うのが習慣になっていました」

「信じられません、信じるものですか！」と銀行家は青ざめた顔で叫んだ。

「ではあの夜あなたの家で起きたことをお話しましょう。あなたの姪はあなたがご自分の部屋に行ったと思うや、そっと下へ降りて、厩の道に通じる窓越しに恋人と話をしました。彼の足跡は雪の下まで通っており、それだけ長くそこに立っていたわけです。彼女は彼に宝冠の話をしました。その話に彼の金に対する邪悪な欲望が燃え立ち、彼女を自分の意のままに従わせました。彼女があなたを愛していたのは間違いありませんが、恋人への愛がほかの愛をすべて消してしまうという女性は多いですし、彼女もその一人だったのでしょう。男の指示を聞き終えたかと思うとあなたが下りてくるのが見え、それで彼女は急いで窓を閉め、木の義足の恋人と規則破りをしたメイドのことをあなたに話しました。それはすべて本当のことでしたがね。

息子さんのアーサーはあなたと話し合った後ベッドに入ったものの、クラブでの借金のことが心配でよく眠れませんでした。真夜中に彼は静かな足音が部屋の前を通り過ぎるのを聞き、それで起き上がって外を見て、いとこがこそこそと廊下を歩いていってあなたの化粧室へ姿を消すのを見てびっくりしました。驚きにぼう然とした若者は、急いで服を着て、この奇妙な出来事の結果何が起こるか見ようとその暗いところで待っていました。まもなく彼女がまた部屋から現れ、廊下のランプの明かりで息子さんは彼女が高価な宝冠を両手に持って運んでいるのを見たのです。彼女は階段を下りていき、彼は、恐怖に震えながら、走っていってあなたの部屋の戸口に近いカーテンの後ろに滑り込みました。そこからは下のホールで何が起こるか見えたのです。彼が見ていると、彼女はそっと窓をあけ、宝冠を暗闇の中にいる誰かに手渡し、それからもう一度窓を閉めると、カーテンの後ろに隠れて立っている彼のすぐそばを通り、急いで部屋へ戻りました。

彼女がその場にいる間は愛する女性のことを残酷に暴露するのを避けるため、彼は行動に移れませんでした。しかし彼女がいなくなった瞬間に、この不幸があなたにとってどれほど決定的か、あれを取り戻すことがどれほど重要か、彼は悟りました。彼はそのまま、はだしで駆け下り、窓をあけ、雪の中に飛び出し、月明かりの中に黒ずんだ姿が見えたあの道を走りました。サー・ジョージ・バーンウェルは逃げようとしましたが、彼が捕まえ、二人の間で争いになり、宝冠の片側を息子さんが、他方を相手が引っぱりました。格闘の最中に息子さんがサー・ジョージを殴って目の上を切りました。それから何か突然パチンという音がして、息子さんは自分が宝冠を手にしているのを見て、駆け戻り、窓を閉め、あなたの部屋へ上がり、宝冠が格闘でねじれてしまったことに気づいてまっすぐにしようとしていると、ちょうどあなたがその場に現れたのです」

「そんなことがあるものですか？」銀行家はあえいだ。

「そこで、あなたに心から感謝されてもいいはずだと彼が思っているところへ、あなたが悪態をつくものだから、彼を怒らせたのです。彼は、彼の思いやりにほとんど値しない人であっても、その人の秘密を漏らして本当の事情を説明することはできませんでした。彼は騎士道的な見地から、彼女の秘密を守ったのです」

「それであの娘は宝冠を見て悲鳴を上げ、気絶したんですね」とホルダー氏は叫んだ。「おお、神よ！　私は何ともののわからないばか者だったろう！　それにあれが五分間外へ出してほしいと頼んだこと！　あいつはなくなった破片が取っ組み合いの現場にあるかどうか確かめたかったんだ。まったくひどい見損ないをしていた！」

「お宅に着いた時、」ホームズは続けた、「僕は直ちにきわめて注意深く家のまわりを回って、雪の中に何か役に立つ痕跡がないか観察しました。前夜から何も降っておらず、また強い寒気によって跡が保存されていることもわかっていました。御用聞きの道に沿って進みましたが、そこはすっかり踏み荒らされて見分けがつかなくなっていました。しかし、そのすぐ向こうの台所のドアの反対側で女が男と立ち話をしていて、男の片側の丸い痕跡から木の義足をつけていることが明らかでした。彼らに邪魔が入ったこともわかりました。女は、そのつま先が深くかかとが浅い跡から明らかなように急いで戸口へ駆け戻っているのに、木の義足は少し待ってから立ち去っているからです。その時僕はこれがあなたのお話にもあったメイドとその恋人だろうと思いましたが、取調べでそれが明らかになりました。庭を回って発見したのはでたらめな足跡ばかりで、警察のものだな、と思いました。しかし、厩の小道に入ると、目の前の雪の中に、非常に長い、込み入った物語が書き込まれていました。

二列の足跡が一つ、それはブーツを履いた男のもので、僕が見て喜んだ第二の二列の足跡ははだしの男のものでした。僕はあなたに伺ったことから後者は息子さんであると直ちに確信しました。最初のは往復歩いていますが、もう一つは早く走っていて、それはブーツでくぼんだ所を踏んで跡をつけていますので、彼が相手を追っていってるのは明らかでした。私はそれらの元をたどり、それらが玄関の広間の窓の所へ続いているのを発見しましたが、ブーツの男が待っている間にそこの雪はすっかりなくなっています。それから僕が反対側の端へ歩いていくと、それはその小道を百ヤードかもう少し行ったところでした。そこで、ブーツの男が振り向いたこと、雪がめちゃめちゃで格闘があったらしいこと、最後に、血が数滴落ちていることがわかり、僕が間違っていないことが証明されたのです。そのあとブーツの男は小道を走って行き、別の小さな血のしみからけがをしたのはこちらだとわかりました。突き当たりの本道まで来ると、歩道は雪かきされていたので、それでその手がかりは終わりでした。

しかし、家の中に入り、覚えているでしょうが、僕は広間の窓の敷居と枠を拡大鏡で調べ、すぐに誰かがそこを通り抜けたとわかりました。入ってくる時にそこに置かれた足の甲の輪郭を識別することができました。そこで、僕は何が起きたのかに関して考えをまとめることができるようになったのです。男が一人、窓の外で待っていた。誰かが宝石を持っていった。その行為を息子さんに目撃された。彼は泥棒を追跡し、その男と格闘した。彼らは宝冠を引っ張り合い、二人の力が合わさって一人ではなしえない損傷が生じた。彼は手に入れた物を持って戻ったが、相手の手に破片を残してきた。ここまで、僕は確信しました。そこで問題は、その男が誰で、男に宝冠を持っていったのが誰か、です。

昔から僕が言っている格言ですが、不可能なことを除外した結果、残されたものは、どんなにありそうにないことであろうと、真実でなければならないのです。さて、あなたが下へ持っていったのでないことはわかっていますから、残るはあなたの姪とメイドたちだけです。しかしメイドだとすれば、なぜ息子さんは彼らの代わりにあえて自身を告発させたのでしょう？　考えられる理由はありません。しかし彼はいとこを愛しているのですから、彼が彼女の秘密を守った理由は立派に説明がつきます。恥ずべき秘密であってみればなおさらのことです。僕はあなたが彼女をあの窓辺で見たことと、彼女が再び宝冠を見た時に気絶した様子を思い出し、僕の推論は間違いないものになりました。

では誰が彼女の共謀者になりえたでしょう？　明らかに恋人です。なぜなら、彼女があなたに対して感じている愛と感謝にまさるものがほかにありえましょうか？　あなた方がほとんど外へ出ず、交際範囲も非常に限られていることはわかっていました。しかしその中にサー・ジョージ・バーンウェルがいました。以前僕は彼が女性の間で評判の悪い男と聞いたことがあったのです。あのブーツを履き、なくなった宝石を持っているのは彼に相違ありませんでした。彼は、息子さんが彼だと気づいたのはわかっていましたが、自分は安全だと信じこんでいました。若者が一言でも漏らせば自分の家族を傷つけることになるからです。

さて、次に僕が取った手段については、あなたご自身も察しがつくことでしょう。僕はのらくら者のなりをしてサー・ジョージ・バーンウェルの家へ行き、うまく彼の従者と知り合いになり、ご主人が前の晩に頭に傷を負ったことを知り、最終的には、六シリング費やし、脱ぎ捨ててあった靴一足を買ってすべてを確かめたというわけです。これを持って僕はストリーサムまで旅し、ぴったり足跡に合うことを確認しました」

「昨日の晩身なりの悪い浮浪者が小道にいるのを見ましたよ」とホルダー氏が言った。

「その通りです。それが僕です。目指す男はわかったので、僕は家に帰り、服を着替えました。それから僕は難しい役を演じなければなりませんでした。スキャンダルを防ぐために告発は避けなければいけないし、あれほどずるい悪党ならこの問題が我々の自由にはならないことを見抜いているのがわかっていたからです。僕は彼に会いに行きました。もちろん初め、彼は何もかも否定しました。しかし僕が起こったことを何もかも言って聞かせると、彼は虚勢を張ろうとし、壁からこん棒を取りました。しかし、僕はあれがどんな男か承知していましたので、相手が打ちかかろうとする前に彼の頭にピストルを突きつけました。それで彼はいくらか物分りが良くなりました。僕は彼に持っている石をある値段で買い取るつもりがあると言いました。一個につき千ポンドです。それを聞くと初めて彼は悲しそうな様子を見せました。「ちくしょうめ！」と彼は言いました。「三つ六百でやっちまった！」僕はすぐに、告発することはないと彼に約束し、宝石を持っている故買屋の住所をどうにか手に入れました。僕はそちらへ向かい、散々値切り、一つ当たり千ポンドで石を手にしました。それから僕は息子さんの所へ立ち寄ってすべてうまくいっていることを伝え、二時ごろにようやく、働きづめと言ってもいい一日を終えて寝ました」

「公然たる大スキャンダルからイングランドを救った一日でもあります」と銀行家が立ち上がって言った。「お礼の言葉も見つかりませんが、必ずご恩に報いるつもりです。本当にあなたの手腕は聞いていたことをはるかに超えていました。さて、それでは私は息子の所へ飛んでいって悪いことをしたと詫びなければなりません。かわいそうなメアリーについてあなたがおっしゃったことは、ひどく胸にこたえます。あなたの手腕でもあの娘が今どこにいるかわからないでしょうねえ」

「こう言って差し支えないと思いますが、」とホームズは答えた、「彼女はサー・ジョージ・バーンウェルの行く所ならどこでも行くでしょう。また、それと同時に確かなことですが、彼女の罪がどんなものであれ、彼らはまもなく十二分な罰を受けることでしょう」

# ブナ屋敷

「芸術そのもののために芸術を愛する者にとっては」と、シャーロック・ホームズはデイリー・テレグラフの広告面を放り出し、言い出した。「表に現れたものが重要でない、つまらないものであるほど、そこに強烈な喜びを見出せることがしばしばあるものだ。僕はね、ワトソン、君がこの真理を良く理解して、親切にも例のちょっとした僕たちの事件の記録を残してくれる時に、まあ時には潤色していることも言っておかなければならないが、僕が関わった多くの有名な事件や扇情的な裁判よりも、むしろそれ自体は取るに足らないものであっても、僕が専門領域とする推理と論理合成の能力を発揮する場のある出来事に重きを置いてくれているのが嬉しいんだ」

「そうは言っても、」私は微笑みながら言った、「これで私の記録が扇情主義だと非難されてきたことから完全に免れたわけではないようだね」

「君の間違いはおそらく」と言いながら、彼は火ばしで赤熱した熾きをつまみ、桜材のパイプに火をつけた。それは彼がよく、瞑想より議論をする気分の時に陶製のパイプと取り替えるものだった。「君の間違いはおそらく、実際のところ事件に関して唯一注目すべき点である、原因から結果に至る厳密な推理を記録するにとどまらず、いちいち叙述に色彩や生気を加えようとしたところにあるんだ」

「その点、私は君のことは完全に正当な取り扱いをしたと思うがね」と私はいささか冷淡に言った。というのも、この友人の風変わりな性格の中でも強烈な要素であると一度ならず気づいていたうぬぼれに反感を覚えたからである。

「いや、利己主義や自負心から言うんじゃないんだ」と、彼は例によって、私の言葉よりも私の考えていることに答えて言った。「僕が自分の芸術に対して完全に正当であれと要求するとすれば、それはこれが個人的なことではない、僕自身を超越したことだからだ。犯罪はありふれている。論理はめったにない。従って君が述べるべきは犯罪よりも論理だ。君は一連の物語において講義の課程となるべきはずだったものを台無しにしてしまったんだ」

それは早春の寒い朝で、私たちは朝食後にあのベーカー街の部屋の明るい暖炉の両側に座っていた。深い霧がこげ茶色の家並みの間に流れ降り、向かいの窓は黄色の濃い渦を通して暗く、形のないおぼろのようにぼんやり見えていた。部屋ではガス灯がともり、白いテーブルクロスに輝き、磁器や金属がかすかに光っていた。食卓がまだ片付けられていなかったのだ。シャーロック・ホームズはその朝ずっと黙ったまま、日付順に新聞の広告欄に休むことなく目を通し、あげく、どうやら探索をやめたらしく、いささかご機嫌斜めになって私の著作の欠点について講義したのである。

「それと同時に、」彼は座ったまま長いパイプを吹かしたり、暖炉の中を見つめたりして一呼吸おいてから言った、「君が扇情主義の罪に陥るはずがない、なぜなら君がご親切に興味を持ってくれた僕たちの事件のうち、相当数は全然法的な意味で犯罪を扱ったものではないからだ。ボヘミア王を助けるためにしたささいなこと、ミス・メアリー・サザーランドの奇妙な体験、唇のねじれた男に関する問題、独身の貴族に起きた出来事、これらは皆、法の範囲外にある事柄だった。しかし扇情的なことを避けるうちにつまらないことになってきたんじゃないかね」

「その最後のことは当たっているかもしれない、」私は答えた、「しかし、方法については、私は固く守ったが、新奇で興味深いものになっているよ」

「フン、ねえ君、大衆が、歯を見て織工が、左の親指を見て植字工がわからないような大多数の不注意な大衆が分析や推理の微妙なあやに関心を持つものかね！　しかし、実際、君のがつまらないとしても、君を責めはすまい、偉大な事件の日々は過去のものだからね。人は、いや少なくとも犯罪者はすっかり企画力や独創性を失ってしまったよ。僕のちょっとした仕事についても、どうやらなくなった鉛筆を取り戻したり、寄宿学校のお嬢さんに助言をしたりする業務に堕しているらしい。しかしまあ、とうとうどん底に落ちたようだ。今朝受け取ったこの手紙は僕にとって最低のものになるんじゃないかな。読んでみたまえ！」彼はしわくちゃになった手紙を投げてよこした。

それはモンタギュー・プレイスから、前夜の消印で、こんなふうに書かれていた。

ホームズ様

家庭教師にと声をかけられているのですが、その口を受けるべきか、断るべきか、どうしてもご相談したいのです。ご迷惑でなければ明日十時半に伺います。

敬具

ヴァイオレット・ハンター

「知ってるお嬢さんかい？」と私は尋ねた。

「いや、僕は」

「もう十時半だよ」

「うん、きっとあのベルがそうだ」

「君が思っているよりもおもしろいものになるかもしれないよ。覚えてるだろう、青いガーネットの事件を、最初はただの酔狂に見えたのに重大な調査に発展したじゃないか。これだってそうなるかもしれないさ」

「まあ、それを期待しようか。だが僕たちの疑念もすぐに解決するだろう、僕の間違いでなければ、問題の人がやってきたよ」

そう言っているうちにドアが開き、若い婦人が部屋に入ってきた。彼女は質素な服をきちんと着て、晴れやかで利口そうな顔にはチドリの卵のようなそばかすがあり、自分なりのやり方で身を立てようという女性らしいきびきびした態度であった。

「本当にお手数をかけてすみません」と彼女は、立ち上がって迎える友に言った、「でも私、とても奇妙な体験をしまして、相談する両親も親戚のようなものもないものですから、できましたら私がどうすべきか、どうか教えていただきたいと思いまして」

「どうぞおかけください、ハンターさん。お役に立てることなら喜んで何でもしますよ」

ホームズが新しい依頼人の話し方と態度に好印象を受けたのが見て取れた。彼はあの鋭い観察法を彼女に適用し、それからまぶたを垂れ、指先を合わせ、気を落ち着けて彼女の話に耳を傾けた。

「私は五年間、」彼女は言った、「スペンス・マンロ大佐のお宅で家庭教師をしておりましたが、二月前大佐がノバスコシア州のハリファックスへの転任命令を受けまして、お子さんたちを連れてアメリカへ行ってしまいましたので、私は勤め口をなくしたわけです。私は広告も出し、広告に応じもしたのですが、うまくいきませんでした。とうとう貯めていた少しばかりのお金も底をつき始め、私はどうしたらいいか、途方に暮れてしまいました。

ウェストエンドにウェスタウェイという有名な婦人家庭教師の斡旋所があり、私は週に一度くらい寄って何か私に適したものが出ていないか確かめるようにしていました。ウェスタウェイというのはそこの創業者の名前で、実際に経営しているのはミス・ストウパーです。彼女は小さな事務室の中に座っていて、仕事を探している婦人たちは控え室で待っています。で、一人ずつ案内され、彼女が台帳を調べて応募者に合うものがあるかどうか見るのです。

さて、先週私が訪ねていつものように小さな事務室に案内されてみると、そこにいたのはストウパーさん一人ではありませんでした。とてもにこやかな顔で、何段にも折り重なった巨大なあごが丸くなってのどを覆っている、ものすごく太った男の人が彼女のそばに座って眼鏡をかけて、入っていく婦人たちをとても真剣に見ているのです。私が中に入ると、その人は椅子から飛び上がってさっとストウパーさんのほうを向きました。

『これはいい』とその人は言いました。『これ以上は望めません。すばらしい！　すばらしい！』すっかり乗り気になっているようで、すごく朗らかな様子で両手をこすり合わせていました。とても気持ちのよい感じの人なので、見ていてまったく愉快でした。

『勤め口を探してるんですね、お嬢さん？』とその人は尋ねました。

『はい、そうです』

『婦人家庭教師として？』

『はい、そうです』

『で、給料はどのくらいをお望みですかな？』

『前のスペンス・マンロ大佐の所では月４ポンドいただいていました』

『おお、ツッツッ！　不当だ、まったく不当だ！』と叫ぶと、カンカンに怒ったといった様子で太った手を空中に振り上げました。『こんなに魅力と教養にあふれた婦人にどうしてそんな情けない金額を出せるんでしょう？』

『私の教養は思ってらっしゃるほどではないかもしれません』と私は言いました。『フランス語が少し、ドイツ語が少し、音楽、デッサン??』

『ツッツッ！』その人は叫びました。『そんなことはまったく関係ありません。問題はあなたが淑女の礼儀、ふるまいを身につけておられるか、おられないかです。要はそこです。身につけていなければ、いつの日かこの国の歴史において重要な役割を果たすかもしれない子供をしつけるのには向きません。しかし身につけておられるなら、ええ、その場合、紳士たるもの、どうしてあなたに身を落として三桁以下のものを受け取れなどと頼めますか？　うちでのあなたの給料は初めは年に百ということになります』

ご想像がおつきでしょうか、ホームズさん、私にとって、貧窮しているとはいえ、そのような申し出は少し出来過ぎと思われました。しかし、その紳士はおそらく私の顔に不信の色を見たのでしょう、財布を開き、紙幣を一枚取り出しました。

『これも習慣でね』と、二つの目が顔の白いしわの間の細く輝く裂け目になるほどとても感じよく微笑みながら言いました、『若い婦人方には事前に給料の半額を前払いすることにしてるんです、旅にも衣装にもちょっとした出費があるでしょうからね』

こんなに魅惑的で思いやりのある男性にはあったことがないように思えました。私には既にいろいろな商人に付けがありましたので、前払いはとても助かるのですが、それでも全体のいきさつにはすっかり引き受ける前にもう少し知りたいと思わせる不自然なものがありました。

『どちらにお住まいか伺ってよろしいですか？』と私は言いました。

『ハンプシャーです。魅力的ないなかですよ。ウィンチェスターの向こうへ五マイル行った、ブナ屋敷です。とても美しい地方ですしね、きわめて貴重な古い貴族屋敷です』

『それで私のするべきことは？　それがどんなものかわかるとありがたいのですが』

『子供が一人います。ちょうど六歳のかわいい子が跳ね回ってますよ。ああ、スリッパでゴキブリを殺すところをごらんになったら！　ピシャ！　ピシャ！　ピシャ！　三回、瞬く間ですよ！』そう言って椅子の背にもたれ、また目がなくなるほど笑いました。

『では私の唯一の務めは、』私は訊きました、『お子さんただ一人をお世話することですの？』

『いや、いや、それだけじゃない、それだけじゃないんですよお嬢さん』とその人は叫びました。『あなたの務めは、きっと良識で察しがつくことでしょうが、どんな小さなことでも妻の命令に従うということです。常に、それが婦人として礼儀正しく従うべき命令であれば、ですがね。難しいことじゃないでしょう、ええ？』

『お役に立てれば嬉しいですわ』

『そうですとも。ところで、たとえば服ですがね。私たちには好き嫌いがありましてねえ、好き嫌いは激しいが心優しいですよ。私たちの出す服を着て欲しいと頼んだとしてですね、私たちのちょっとした気まぐれに反対はなさらんでしょうなあ、ええ？」

『ええ』と私はその言葉にかなりびっくりしながら言いました。

『あるいはここに座って欲しいとか、あっちに座って欲しいとか、いやじゃないでしょうか？』

『ええ、かまいませんわ』

『あるいは私たちの所へ来る前に髪をかなり短くして欲しいと言っても？』

私は耳を疑いました。ご覧のように、ホームズさん、私の髪は豊かなほうで、やや変わった風合いの栗色です。芸術的、と思われてきたものです。それをそんなふうにいきなり犠牲にするなんて夢にも思うはずがありません。

『申し訳ありませんがそれはとても無理です』と私は言いました。その人は小さな目で私をじっと見つめていましたが、私の言葉を聞いてその顔に陰がよぎるのがわかりました。

『申し訳ないがとても重要なことなんです』とその人は言いました。『私の家内のちょっとした気まぐれ、婦人の気まぐれでして、ねえ、ご婦人の気まぐれは考慮に入れなければなりません。それではあなたは髪を切りたくないんですな？』

『ええ、本当にできませんわ』と断固として私は答えました。

『ああ、結構です。それではこの件は完全に終わりですね。残念ですな、ほかの点ではまったくあなたはぴったりですから。そうなると、ストウパーさん、私はあと何人かあなたんところのお嬢さん方を見たほうがいい』

経営者はこの間ずっと座って忙しく書類をいじり、私たちのどちらにも言葉をかけませんでしたが、その時私を見やった彼女の顔の苛立ちを見て私は、私の拒絶によって彼女がかなりの手数料を失ったのじゃないかと思わざるをえませんでした。

『あなた、このまま名前を名簿に載せておいて欲しいですか？』と彼女は訊きました。

『よろしければ、ストウパーさん』

『まあ、実際、ちょっとむだのようですけどね、これだけ結構な申し出をそんなふうに断るんですものね』と彼女は厳しく言いました。『私たちがあなたのためにこんな就職口をほかにも見つけようと努力するなんて思わないでくださいよ。さようなら、ハンターさん』彼女はテーブルの上の鐘を叩き、私はボーイに送り出されました。

さて、ホームズさん、下宿に戻ると、戸棚には何もないに等しく、テーブルの上の二、三の請求書を見て、私はとてもばかなことをしてしまったのではないかと自問し始めました。だって、この人たちに奇妙な好みがあってひどく異常なことに服従するよう期待したと言っても、少なくとも彼らにはその奇抜なことに対して支払いをする用意があったわけです。年に100ポンドももらっている女家庭教師はイングランド中にもめったにいませんもの。その上、この髪の毛が私にとって何の役に立つでしょう？　髪を短くして良くなる人はたくさんいますし、あるいは私だってその一人かもしれません。翌日私は間違いを犯したと考えるようになり、その次の日にはそれを確信しました。私がもう少しで自尊心を打ち負かして、それこそ斡旋所に戻り、あの口がまだ空いているかどうか尋ねようという時にあの紳士本人からの手紙を受け取りました。ここにありますのでお読みいたしますわ。

ウィンチェスター近郊、ブナ屋敷

ハンター様

ストウパーさんがご親切にもあなたの住所を教えてくれましたので、あなたがご自分の決断を考え直してはいないかお尋ねするためにこちらからお手紙します。私があなたの話をしましたところ、それにいたく引かれた妻がどうしてもあなたに来て欲しいと申します。私たちの難しい好みのためにあなたに多少なりともお掛けするご迷惑に対して償うため、喜んで四半期に30ポンド、つまり年120ポンドお出しします。ご迷惑と言ってもそんなに過酷なものではありません。家内は特に冴えた青の色合いが好きで、あなたには午前中、室内でそういう服を着てもらいたいのです。しかし、あなたが自分で買う必要はありません。今はフィラデルフィアにいる娘のアリスのものがありますので、それがあなたにぴったり合うだろう、と私は考えています。それから、あちこちに座ったり、指示されたように遊んだりすることについては、必ずしもあなたにご迷惑はかかりますまい。あなたの髪の毛のことは、私としても、短い対面の間にその美しさに気づかずにはいられませんでしたので、確かにお気の毒ですが、残念ながらこの点は相変わらず断固として譲れませんし、給料の増額があなたの損失を償うことになれば、と思うばかりです。あなたの務めは、子供に関する限り、ごく軽微です。さあ、ぜひいらしてみてください、ウィンチェスターに二輪馬車でお迎えにあがります。列車の時刻をお知らせください。

敬具

ジェフロ・ルーキャスル

この手紙を受け取ったばかりですが、ホームズさん、私は引き受けようと決意しています。しかし、決定的な一歩を踏み出す前にあなたにご検討いただきたいと思ったのです」

「そうですねえ、ハンターさん、あなたが決心しておられるなら、問題は解決です」と、ホームズは微笑みながら言った。

「でも断れとはおっしゃらないでしょう？」

「正直なところ、僕の妹が申し込むとしたら黙って見過ごしていたくはない勤め口ですね」

「全体としてどういうつもりなんでしょうね、ホームズさん？」

「ああ、データがありませんので。なんとも言えません。もしかしてあなた自身、何か意見がおありじゃないですか？」

「そうですね、考えられる答えはただ一つのように思えます。ルーキャスルさんはとても優しくて気立てのよい人に見えました。奥さんが精神異常で、あの人としては奥さんが施設に連れて行かれないように事を内密にしておきたい、突発的なことを防ぐためにあらゆる点で奥さんの気まぐれに調子を合わせている、というのは考えられませんか？」

「考えられる解答ですね。実際、現状では最もありそうな答です。しかしいずれにしても、若い婦人にとって気持ちのいい家族ではないらしいですね」

「でもお金です、ホームズさん、お金です！」

「まあ、そうですね、もちろん給料はいいですね、よすぎます。それが心配です。なぜ彼らはあなたに年120ポンドも出すのでしょう？　40ポンドで自由に選べるのに。何か奇妙な理由が背後にあるにちがいありません」

「事情をお話ししておけば後で助けていただきたい時におわかりいただけると思いましたの。あなたが後ろについていてくださると思えばずっと心強いですから」

「おお、そのつもりでいてくださってかまいませんとも。間違いなくあなたの小さな問題はこの数ヶ月間に出会ったものの中で最も興味深いものになりそうです。いくつかの特徴には明らかに新奇なところがあります。もしあなたが迷ったり、危険を感じることがあったら？」

「危険！　どんな危険があると思われます？」

ホームズはいかめしく首を振った。「それを定義できたら危険ではなくなります」と彼は言った。「しかしいつでも、昼夜を問わず、電報をくださればあなたを助けに参じます」

「それで充分です」彼女は元気よく椅子から立ち、その顔から不安は一掃されていた。「これですっかり安心してハンプシャーまで出かけられますわ。すぐにルーキャスルさんに手紙を書き、残念ですけど今夜髪の毛を切り、明日ウィンチェスターへと発ちます」ホームズに短く感謝を表し、私たち二人に別れを告げ、彼女はばたばたと帰っていった。

「少なくとも、」階段を下りてゆく彼女のしっかりとした速い足どりを聞きながら私は言った、「彼女は若いが、充分に自分のことは自分でできる婦人らしいね」

「そして彼女にはその必要があるだろうよ」とホームズは重々しく言った。「僕の間違いでなければ、それほどたたないうちに彼女から便りがあるだろう」

まもなく友の予言は実現した。二週間が過ぎ、その間私の考えはしばしば彼女の方に向かい、この孤独な女性の迷い込んだ奇妙な人生経験の横道はどんなものだろうと思っていた。普通でない俸給、奇異な条件、楽な務め、そのすべてが何か異常なことを指し示していたが、気まぐれなのか陰謀なのか、その男が博愛主義者なのか悪党なのか、それはまったく私の能力の及ぶところではなく、決定できなかった。ホームズはといえば、しばしば三十分ほど続けて眉をしかめ、ぼんやりと座っていることがあるのに私は気づいたが、私がこの問題を口にすると、彼は手を振ってそれを払いのけた。「データ！　データ！　データ！」彼はいらだたしげに叫んだ。「粘土がなくてはレンガは作れない」それにもかかわらず、いつも最後は彼の妹ならそんな勤め口は引き受けさせないと彼はつぶやくのだった。

ある晩遅く、ついに私たちは電報を受け取った。ちょうど私は寝ようと思い、ホームズは例によって終夜の化学研究に没頭している時だった。彼はしばしばそれに夢中になり、よく私は、夜レトルトと試験管にかがみこんでいる彼をそのままにし、朝、食事に下りた時、同じ姿勢の彼を発見したものだった。彼は黄色の封筒を開き、それから電文を一瞥すると、それを私に放ってよこした。

「ちょっとブラッドショーで列車を調べてくれ」と彼は言い、化学の研究に戻った。

呼び出しは短い、緊急のものだった。

どうか明日正午、ウィンチェスターのブラック・スワン・ホテルにおいでください[と言っていた]。ぜひ来てください！　困っています。ハンター

「一緒に来るかい？」とホームズが目を上げて尋ねた。

「ぜひ行きたいね」

「じゃあちょっと調べてくれ」

「九時半の列車がある」と、私はブラッドショーをざっと見て言った。「ウィンチェスターに11時30分に到着予定だ」

「それはちょうどいい。それならアセトン類の分析は延期したほうがいいかもしれないね。朝最高の状態でいる必要があるなら」

翌日十一時、私たちはイングランドの古都に近づいていた。ホームズは道中ずっと朝刊に没頭していたが、ハンプシャーの州境を過ぎるとそれらを放り出し、景色に感心し始めた。申し分のない春の一日で、ライトブルーの空には西から東へ流れるふわふわした白い小さな雲が点々としていた。太陽は非常に明るく輝いていたが、爽快だが身を切るような寒気は気力を奮い立たせるものだった。いなかへ入り、オルダーショットの起伏ある丘陵地帯では、明るい新緑の群葉の間から農場の赤や灰色の小さな屋根がのぞいていた。

「生き生きとして美しいねえ」私はベーカー街の霧からやっと抜け出したことにすっかり夢中になって叫んだ。

しかしホームズは重々しく首を振った。

「わかるかな、ワトソン、」彼は言った、「僕みたいな性質の心も困りものでね、あらゆるものを自分の専門の問題と関連させて見ることになるんだ。君はこの散在する家々を見てその美しさに感嘆する。僕がこういうのを見てだね、頭に浮かぶ唯一の考えは、家が孤立していてあそこでは咎められることなく犯罪が行われるかもしれないという印象なんだ」

「何てこった！」と私は叫んだ。「誰がこういう美しい農場を犯罪と結びつけるものかね？」

「ああいうのを見るといつも僕はある意味ぞっとするんだ。僕は経験に基づいて確信するよ、ワトソン、ロンドンの最も低俗で下劣な裏通りよりも晴れやかで美しいいなかに恐ろしいことが記録されているとね」

「脅かさないでくれよ！」

「しかし理由はきわめて明白だ。町中では世論の圧力が法の果たしえない事をするからね。不道徳な路地といっても苦しめられる子供の叫び声や飲んだくれの殴る音は必ず近所の人の同情や憤りを呼ぶからね、それにすべての司法機関も近くにあるので一言訴え出れば動き出すし、だから犯罪と被告席の間はほんの一歩なんだ。だがこれらの、それぞれ自分たちの土地の中にぽつんとある家々を見たまえ、大部分がほとんど法律も知らない、貧しい無知な人々で満たされている。そういう場所で、毎年のように、誰にもわからずに、残虐非道な行為、隠れた邪悪が続いているかもしれないことを想像したまえ。僕たちに助けを求めてきたこの女性がウィンチェスターに行って住んでいるなら、僕は決して彼女のことを心配しなかっただろう。いなかの五マイルが危険にするんだ。といっても、彼女が個人的におびやかされているのでないことは明らかだ」

「うん。彼女が私たちに会いにウィンチェスターまで来られるなら逃げられるはずだ」

「その通り。彼女は自由にしている」

「じゃあ、いったいどうしたんだろう？　何か説明を思いつかないのかい？」

「僕は七通りの説明を考え出したが、そのどれもが僕たちの知る限りの事実に当てはまる。しかしそのどれが正しいかは新たな情報によってのみ決定されるものだし、それがきっと僕たちを待っていることがわかるだろう。おや、大聖堂の塔が見えるから、まもなくミス・ハンターの伝えるべきことをすべて知ることになるよ」

ブラック・スワンは駅から程近い、ハイ街にある名高い宿で、そこで若い婦人は私たちを待っていた。彼女は居間を取り、テーブルには私たちの昼食が用意されていた。

「来てくださってとても嬉しいですわ」と熱を込めて彼女は言った。「お二人ともご親切にありがとうございます。でも本当に私、どうしたらいいかわからないんです。ご忠告は私にとって非常に貴重なものになります」

「どうか何が起きたのか話してください」

「そうしますわ、それに急がなくては、私ルーキャスルさんに三時までに戻ると約束しましたので。私、今朝町に出る許可をいただきましたが、あの人は目的が何かまったく知りませんの」

「すべてを順を追って聞かせてください」ホームズは長く細い足を火のほうへ突き出し、心を静めて耳を傾けた。

「まず、私は、概してルーキャスル夫妻から現実にはまったく虐待を受けていないと言ってよいでしょう。そう言わなければ彼らに対して公平じゃありませんから。しかし私はあの人たちが理解できないし、あの人たちのことは安心していられません」

「何が理解できないのです？」

「あんなことをする理由ですわ。でも起こった通りにすべてお聞かせしましょう。私が参りました時、ルーキャスルさんはここで私に会い、二輪馬車で私をブナ屋敷に連れて行きました。それはあの人の言ったように美しい所にありましたが、それ自体は美しくありませんでした。それはしっくい塗りの大きな四角い家ですが、湿気や悪天候のためそこらじゅうしみやら筋がついています。まわりは庭で、三方は森、もう一方は野原が傾斜して、玄関から百ヤードのあたりをカーブして通るサザンプトンへの幹線道路へと下っています。この正面の庭はこの家のものですが、まわりの森はすべてサザンプトン卿の領地の一部です。玄関の前からすぐにブナの木立になっていますので、屋敷の名前がついたのです。

私は相変わらず愛想のいい雇い主に送られ、その晩に彼から奥さんと子供に紹介されました。ベーカー街のお部屋でありそうなことだと思われたあの推測は、ホームズさん、間違いでしたわ。ルーキャスル夫人は狂ってはいません。彼女は無口な、青白い顔の人でした。ご主人よりずっと若くて、三十は過ぎてないと思うんですが。ご主人は四十五以下とは思えません。彼らの話から推測すると結婚して七年ほどで、あの人は男やもめで、最初の奥さんとのただ一人の子供は娘さんでフィラデルフィアに行っているのです。ルーキャスルさんが内緒で話したところでは娘さんが出て行った理由というのが継母に対して理性的でない嫌悪感を抱いたからだそうです。娘さんも二十歳以下のはずはありませんから、立場上、父親の若い奥さんと一緒では居心地が悪いにちがいないのはよくわかります。

ルーキャスル夫人は見た目同様中身も特色のない人に思えました。彼女が私に与えた印象は好意的でもその逆でもありません。取るに足らない人です。彼女が夫と小さな息子を熱愛していることは容易にわかりました。明るい灰色の目をいつも一方から一方へとさまよわせていて、どんなささいな用でも気がついて可能な限りそれに先回りするのです。彼もまた彼女に対してあけすけににぎにぎしく優しさをふりまいてますし、概して幸せな夫婦のようです。それでもあの女性には秘密の悲しみがあるんです。彼女はよくこれ以上はない悲しげな顔つきで深い物思いに沈んでいたものです。泣いているのを見てびっくりしたのも一度ではありません。私時々思うんですが、彼女の心の重荷になっているのは子供の性質ですわ。あんなに甘やかされてすっかりだめになり、あんなに意地悪な子供には会ったことがありませんもの。その子は年の割りに小さく、頭がひどく不釣合いに大きいんです。生まれてからずっと突発的な残忍な感情とその合間のふさぎこんだふくれっつらを繰り返して過ごしているようです。自分より弱い生き物に苦痛を与えるのが唯一の楽しみらしく、ネズミや小鳥や昆虫を捕まえる計画にはまったく驚くほどの才能を見せています。でもこの子のことはあまり話したくありませんし、ホームズさん、それに実際、あまり私の話に関係ありません」

「僕にはあらゆることの詳細がありがたいのです」とホームズが言った、「あなたの見たところ関連があろうとなかろうと」

「重要なことは一つももらさないように努めます。あの家で唯一不愉快なことは、私、すぐに感じましたが、召使たちの様子とふるまいです。それは二人だけで、夫婦者です。トラーという名ですが、男は粗野で無骨で、白髪交じりの髪と頬ひげがあり、のべつ酒の匂いをさせています。私が行ってから二度、すっかり酔っ払っていましたが、ルーキャスルさんはそれに気がつかないようでした。妻のほうは背が高く丈夫な女で不機嫌な顔をして、ルーキャスル夫人と同じように無口ですが、ずっと愛想がないんです。彼らはとても不愉快な夫婦ですが、幸いにも私がほとんどの時間を過ごすのは子供部屋か自室で、それらは建物の一隅に互いに隣り合ってあります。

ブナ屋敷に到着して二日間は私の生活も穏やかでした。三日目、ちょうど朝食が終わった時、ルーキャスル夫人がやってきて夫に何かささやきました。

『ああ、そうだね』と言い、彼は私のほうを向きました。『あなたにはとても感謝してますよ、ハンターさん、私たちの気まぐれに調子を合わせて髪まで切っていただいて。それであなたの外観がこれっぽっちも損なわれていないのは保証しますよ。今度は冴えた青の服があなたにどのくらい似合うか見たいのですが。あなたの部屋のベッドの上に広げてありますから、お手数だがそれを着てくだされば私たち二人ものすごく感謝します』

私に用意されていた服は妙な色合いの青のものでした。上等な素材の毛織物でしたが、紛れもなく前に誰かが着ていた痕がついていました。それは寸法を取ったみたいにぴったりでした。ルーキャスル夫妻はどちらもそれを見て大喜びで、それもまったく大げさじゃないかと思うほど熱烈でした。二人は私を応接間で待っていましたが、それは建物の前面全体に広がる非常に大きな部屋で、床にまで達する長い窓が三つあります。椅子が一つ、中央の窓の近くに、それに背を向けて置かれていました。私はこれに座るように求められ、それからルーキャスルさんが部屋の反対側を行ったり来たりしながら、私が今まで聞いたこともないような滑稽な話を次々に始めました。想像もつかないくらいおかしくて、私はもう笑い疲れてしまいました。ところがルーキャスル夫人には明らかにユーモアのセンスがなく、にこりともしないで、ひざに手を置き、悲しげな、心配そうな顔つきで座っていました。一時間ほどして、ルーキャスルさんは突然、その日の仕事を始める時間になったので私は服を着替えてかまわないから子供部屋のエドワード坊やのところへ行くように、と言いました。

二日後にこれと同じことがまったく同じような状況の下で行われました。私はまた服を替え、また窓の所に座り、また思いっきり笑いました。私の雇い主には数限りない滑稽話のレパートリーがあり、それにまた話し振りも真似のできないものなんです。それから彼は黄色の背表紙の小説を私に渡し、私自身の影がページの上に落ちないように椅子を少し横向きに動かし、彼のために朗読してくれと頼みました。私が十分ほど読み、章の中心に入ったところで、突然、文の途中なのに、彼はやめて服を替えるよう、命じました。

容易に想像がつきましょう、ホームズさん、この異常なお芝居にいったい何の意味があるのかについてどれだけ私の好奇心が湧いたか。私気づいたのですが、彼らはいつも非常に注意深く私の顔を窓からそらしているのです。それで自分の背後で何が起こっているのか、私は見たくてたまらなくなりました。初めそれは不可能に思えましたが、すぐに私は方法を考え出しました。私の手鏡が壊れていまして、それで私、名案を思いつき、ガラスのかけらをハンカチに隠しました。次の機会、笑っている最中に、私はハンカチを目に当て、ちょっと工夫して後ろにあるものをすべて見ることができました。白状しますががっかりしましたわ。何もなかったんです。少なくともそれが最初の印象でした。しかし、二度目に見た時私は、サザンプトン街道に男の人が一人、小さなあごひげのあるグレーのスーツの人が立って私のほうを見ているらしいのに気づきました。それは重要な幹線道路ですから、そこにはいつも人がいます。でもその人は庭の境の垣に寄りかかって真剣に見上げていました。私がハンカチを下ろしてルーキャスル夫人に目をやると、彼女は私にじっと目を向けてとても鋭く見つめていました。彼女は何も言いませんでしたが、私が手に鏡を持って後ろにあるものを見たことを彼女が見抜いたのは確かです。彼女はすぐに立ち上がりました。

『ジェフロ、』彼女は言いました、『道路に失礼な人がいてハンターさんをじろじろ見てますわ』

『あなたの友達ではありませんか、ハンターさん？』と彼は訊きました。

『いいえ、このあたりの人は誰も知りません』

『おやおや！　何て無礼な！　どうぞ振り返って身振りであれを追い払ってください』

『気に留めないほうがいいにちがいありませんわ』

『いや、いや、ずっとここらでぶらぶらしていることになる。どうぞ振り返って、ああいうのは手を振って追い払ってください』

私は言われた通りにしましたが、同時にルーキャスル夫人がブラインドを引き下ろしました。それが一週間前で、その時から私は二度と窓の所に座ることも、青い服を着ることも、道路の男を見ることもありませんでした」

「どうぞ続けて」とホームズは言った。「あなたのお話はきわめて興味深いものになりそうです」

「ちょっとまとまりのない話だと思われるのじゃないかと思いますし、私の話すいろいろな出来事の間にはほとんど関係がなかったということになるかもしれません。ブナ屋敷に着いた最初の日、ルーキャスルさんが私を台所のドアの近くに立つ小さな離れに連れて行きました。それに近づくと、鎖がガチャガチャ言う鋭い音と大きな動物が動き回るような音が聞こえました。

『ここをのぞいてごらんなさい！』とルーキャスルさんは二枚の板の間の裂け目を示して言いました。『美しいでしょう？』

のぞいてみて私は二つの燃えるような目と、闇の中にちぢこまるおぼろげな姿に気づきました。

『怖がることはない』と、雇い主は私がびくっとするのを見て笑いながら言いました。『何でもない、カーロです、私のマスチフの。私のと言いましたがね、ほんとはトラーのです、馬丁のね、こいつと何でもできるのはあの男だけでね。えさは一日一回で、それもあまりたくさんじゃない、それでこいつは常に飢えている。トラーが毎晩放すので、こいつの牙を相手にする侵入者はえらい目に会いますよ。だからどんな訳があっても夜は敷居をまたがないでください、非常に危険ですからね』

その警告は意味のないものではありませんでした。というのも二日後の夜、午前二時ごろ私はたまたま寝室の窓から外を見たのです。美しい月明かりの晩で、家の正面の芝生が銀色に光ってまるで昼のように輝いていました。私はその場に立ってのどかな美しい光景に見とれていましたが、その時屋敷の影の中を何かが動いているのに気づきました。それが月の光の中に現れ、私はそれが何だかわかりました。それは巨大な犬で子牛ほどもあり、黄褐色で、あごは垂れ、鼻面は黒く、大きく骨が突き出ていました。それはゆっくりと歩いて芝生を横切り、反対側の影の中に消えました。その恐ろしい歩哨に私は心底ぞっとしましたし、泥棒だったとしてもあれほど恐ろしくなかったと思います。

さて、今度は非常に奇妙な体験をお話ししなければなりません。ご承知のように私はロンドンで髪を切りましたが、それを大きく巻いてかばんの底に入れておきました。ある晩、子供が寝た後、私は退屈しのぎに部屋の家具を点検したり、自分の小物を整理し直したりし始めました。部屋には一つ、古い整理だんすがあり、上の二段はあいていて空でしたが、下のほうは鍵がかかっていました。私は初めの二段を下着でいっぱいにしましたが、まだしまい込むものはたくさんありましたので、当然のこと、三段目が使えないのには困りました。私は単なる手落ちで締まっているのかもしれないという気がして、それで自分の鍵束を取り出し、あけてみようとしました。その最初の鍵がぴったりと合い、私は引き出しを引いてあけました。そこにあったものは一つだけでしたが、きっとあなたにもそれが何だったか絶対に当てられないと思います。それは私の髪を巻いたものだったのです。

私はそれを手に取って調べてみました。それは同じ独特の色合い、同じ濃さでした。しかしその時、そんなことはありえないという思いが頭をもたげました。どうして私の髪の毛が引き出しにしまい込まれるはずがありましょう？　震える手で私はかばんを解き、中の物を出し、底から私の髪の毛を引き出しました。私は二つの髪を並べて置きましたが、ほんとにまったく同じものでした。おかしなことでしょう？　私は当惑してしまって、それがどういうことかまったくわかりませんでした。私はその不思議な髪を引き出しに戻し、ルーキャスルさんにはそのことについて何も言いませんでした。彼らが錠を下ろした引き出しをあけたのは私が間違っていたと思ったからです。

お気づきかもしれませんが、ホームズさん、私は生まれつき観察力があり、すぐに建物全体の図面がかなり良く頭に入りました。ところが、まったく住んでいないらしい翼が一つありました。トラー夫妻の住まいの戸口と向かい合ったドアがその一角に通じているのですが、常に錠が下りていました。しかしある日、私が階段を昇っていくと、このドアから出てくるルーキャスルさんと出会ったのです。彼は鍵を手にし、顔つきはいつも見慣れている率直で陽気な人とはまったく別の人物になっていました。頬は赤く、額にはすっかり怒りのしわが寄り、激昂してこめかみに静脈が浮き出ていました。彼はドアに鍵をかけ、何も言わず、こちらを見もせず私の横を急いで通り過ぎました。

これが私の好奇心をそそりました。それで子供と庭に散歩に出た時、建物のその部分の窓が見える側へぶらっと回りました。窓は四つ並んでいて、そのうち三つはすっかり汚れていましたが、もう一つにはよろい戸が閉められていました。明らかにすべて人が住まなくなっていました。私がぶらぶら行き来しながら、時折それらに目をやっていると、ルーキャスルさんがいつものように陽気で楽しげな様子で私の所へ来ました。

『ああ！』彼は言いました。『私があなたに言葉もかけずに通り過ぎたからといって私を無作法だと思わないでくださいね。仕事のことでうわの空だったんですよ』

私は別に気に障ってはいないからと断言しました。『ところで、』私は言いました、『あちらのほうには結構つながって余分な部屋があるようですわね、その一つはよろい戸が閉まってますし』

彼は驚いたようで、私の言ったことにギクッとしたように私には見えました。

『写真も趣味でしてね』と彼は言いました。『あそこに暗室を作ったんです。でもまあ！　なんて観察力の鋭いお嬢さんと出くわしたものだろう。信じられんくらいだ。まったく信じられんくらいだ』彼は冗談めかして話していましたが、私を見る目には冗談など少しもありませんでした。私がそこに読み取ったのは冗談ではなく、疑いと苛立ちでした。

さて、ホームズさん、その時から私はあの一続きの部屋には私の知らない何かがあることを理解し、やっきとなって調べたのです。それなりに好奇心もあったとはいえ、単なる好奇心ではありませんでした。むしろ義務感でした?私がその場所に入り込むことで何かよいことがあるかもしれないという感じです。女の本能って言いますわね。あるいはそんな感じがしたのは女の本能だったかもしれません。とにかく、そこで、私は禁制のドアを通るチャンスがないか熱心に見張っていました。

やっと昨日チャンスが来ました。それからですね、ルーキャスルさんのほかにも、トラーと妻の二人もこの人のいない部屋部屋で何かすることがあって、一度トラーが大きな黒いリネンの袋を運んであのドアを通るのを見ました。近頃の彼は大酒を飲んで、昨日の晩もすっかり酔っ払い、それで私が二階に行きますと、ドアに鍵があったのです。彼がそこに残していったのは絶対に確かです。ルーキャスル夫妻はどちらも下にいて、子供も一緒でしたので、私には絶好のチャンスでした。私は鍵穴の鍵を静かに回し、ドアをあけ、そっと通りました。

私の目の前には壁紙もじゅうたんもない小さな廊下があり、それは向こうの端で直角に曲がっていました。この角を曲がるとドアが三つ並んでいて、その一つ目と三つ目はあいていました。どちらも中は空き部屋で、埃だらけで陰気くさく、一方には窓が二つ、他方には一つあり、厚い埃のため、窓越しの夕方の光はほの暗くかすかに差し込んでいました。中央のドアは閉まっていて、その外側に渡して、幅広い鉄製のベッドの棒が一本くくりつけられていて、一方の端は壁についた輪に南京錠で留められ、他方は頑丈な紐でしっかり留められていました。その上ドアそのものも錠を下ろされ、そこには鍵はありませんでした。このバリケードのあるドアは疑いなく外側のよろい戸の閉まった窓に対応していますが、ドアの下から漏れるかすかな明かりからその部屋が真っ暗ではないことがわかりました。明らかにそこには上から明かりを取る天窓があったのです。私が廊下に立ってその不吉なドアを見つめ、ここにどんな秘密が隠されているのかと思っていると、突然部屋の中から足音が聞こえ、ドアの下から細く漏れ出るほの暗い光に映る、行きつ戻りつする影が見えたのです。それを見て、狂ったような、理性的でない恐怖が私のうちに沸き起こりましたの、ホームズさん。過敏になった神経が突然私を見捨て、私は向きを変えて走りました、まるで恐ろしい手に後ろから服のすそをつかまれているかのように走りました。私は廊下を駆け、ドアを通り抜け、まっすぐにルーキャスルさんの腕に飛び込みました。外で待っていたのです。

『そう、』彼は微笑みながら言いました、『ではあなただったんだ。ドアがあいているのを見た時、そうにちがいないとは思いましたがね』

『ああ、怖かった！』と私はあえぎながら言いました。

『お嬢さん！　お嬢さん！』?思いもつかないほど優しくなだめるような物腰でした?『何が怖かったんですか、え、お嬢さん？』

でもほんのちょっと猫なで声が過ぎました。やりすぎだったのです。私は警戒を強めました。

『まったくばかでしたわ、人のいないところに入ったりして』と私は答えました。『薄暗がりで寂しいし不気味なものですから、怖くなって駆け出して戻ってきました。ああ、あちらはそれは恐ろしいほど静かなんですもの！』

『それだけですか？』と彼は鋭く私を見据えて言いました。

『まあ、どうお思いになったんですか？』と私は訊きました。

『どうして私がこのドアに錠をしていると思いますか？』

『ほんとにわかりませんわ』

『用のない人を入れないためです。おわかりですか？』彼は依然、最高に愛想のよい態度で微笑んでいました。

『知っていれば絶対??』

『そう、では、今は知っているわけです。もしあなたがまたこの敷居の向こうに踏み入ったら』?ここでその微笑みは一瞬硬化して憤怒の笑いとなり、彼は鬼のような顔で私をにらみつけました。『あなたをマスチフに食わせてしまいますぞ』

私はとても恐ろしかったので何をしたかわかりません。おそらく彼の横を抜けて自分の部屋へ駆け込んだにちがいありません。何も覚えていず、気がつくとベッドに寝てからだじゅう震えていました。その時、あなたのことを考えたのです、ホームズさん。何か助言をいただかなければもうあそこにはいられなくなりました。私はあの家も、あの人も、あの女性も、召使たちも、子供さえも怖くなったのです。みんなが私には恐ろしかったのです。あなたにさえ来ていただけば、すべてうまく行くだろうと思いました。もちろん、あの家を逃げ出せばいいのですが、好奇心も恐怖とほとんど同じくらいに強かったのです。すぐに私は決心しました。あなたに電報を打とうと。帽子とマントを着け、家から半マイルほどにある局へ行き、そしてずっと楽な気分になって戻りました。玄関に近づいた時犬が放されているんじゃないかという恐ろしい疑念が心に浮かびましたが、その晩はトラー自身が酔って人事不省の状態だと思い出し、あの家であの獰猛な動物に力をふるえるのは彼だけだと知っていましたので、そうなると誰が思い切ってあれを放すでしょう。私は無事に忍び入り、あなたにお会いするという考えを楽しみに夜半まで目を覚ましたまま横になっていました。今朝ウィンチェスターに出てくる許可をもらうのは難しくありませんでしたが、三時までには戻らなければなりません。ルーキャスル夫妻がどこかへご訪問で、夕方ずっといませんので、子供の世話をしなければいけませんの。これで私の冒険をすべてお話ししましたので、ホームズさん、これがどういう意味なのか、それと何より、私がどうすべきか、教えてくださったらとても嬉しいですわ」

「トラーはまだ酔っ払っていますか？」と彼は尋ねた。

「ええ。彼の奥さんがルーキャスル夫人に彼がどうにもならないと言っているのを聞きました」

「それは結構。そしてルーキャスル夫妻は今晩出かける？」

「ええ」

「丈夫な錠のついた地下室はありますか？」

「ワインセラーが」

「あなたはこの件ではずっと非常に勇敢で賢明な女性として行動してきたようですね、ハンターさん。もう一つお手柄をやってのけられると思いますか？　あなたをまったく並外れた女性と思わなければお願いしないんですが」

「やってみますわ。どんなことですか？」

「僕たち、友人と僕は七時にブナ屋敷に着きます。ルーキャスル夫妻はその時間には出ているし、トラーも何もできないだろうと思います。残るはトラー夫人だけで、これが警報を発するかもしれません。もしあなたが何か用を言いつけて彼女を地下室へやり、それから鍵をかけて彼女を出られないようにすれば、事態はずっと楽になります」

「やりましょう」

「すばらしい！　そこで事件を徹底的に調べるとしましょう。もちろん、もっともらしい説明がただ一つあります。あなたはそこへ連れて行かれて誰かの代役をしている、で、本物のほうは例の部屋に監禁されているのです。それは明白です。この監禁されている人が誰かについては、娘のアリス・ルーキャスル嬢であるのは疑いの余地がありません。僕の記憶が正しければアメリカへ行っていると言われてましたね。あなたは疑いなく身長、姿、髪の色が似ているので選ばれたのです。彼女がそれを切ったので、おそらく何か病気をしたからでしょうね、それで、無論、あなたのも犠牲にしなければならなかったのです。奇妙な偶然からあなたは彼女の髪の毛にぶつかりましたね。道路の男は間違いなく彼女の友人で、あるいはフィアンセでしょうが、疑いなく、あなたは娘の服を着て彼女にそっくりだったわけですので、男はいつ見てもあなたが笑っているのを見て、またその後のあなたのしぐさから、ルーキャスル嬢は紛れもなく幸せであり、もはや彼の求愛を望んでいないと確信したでしょう。夜犬を話すのは彼が彼女と言葉を交わそうとするのを防ぐためです。ここまではかなり明白です。事件でもっとも重大な問題は子供の性質です」

「いったいどんな関係があるんだね？」と私は口走った。

「ワトソン君、君は医学者として常に両親を調べることで子供の性向に関して手がかりを得ているね。その逆も同じように有効であるのがわからないかい？　僕はしばしば子供たちを研究してその両親の性格への最初の、真の洞察を得ているんだ。この子供の性質は異常に残酷で、それもただ残酷であらんがためであり、これはにこやかな父親から受け継いだものと思うが、あるいは母親からとしても、それは彼らの支配下にある哀れな娘にとってよくない兆候だ」

「確かにあなたのおっしゃる通りです、ホームズさん」と私たちの依頼人が叫んだ。「確かにそれが当たっていると思われることが多数思い出されます。ああ、一刻もむだにせず、そのかわいそうな人に助けの手を差し伸べましょう」

「非常に狡猾な男を相手にしているのですから、僕たちは慎重にしなければいけません。七時までは何もできません。その時刻に僕たちはあなたに合流しますから、まもなく謎は解けるでしょう」

私たちは約束通り七時ちょうどにブナ屋敷に着いた。トラップ馬車は路傍のパブの所に置いてきた。沈む夕日に濃色の葉が磨かれた金属のように輝いている木立は、ミス・ハンターが戸口に微笑みながら立っていなかったとしても、その家の目印として充分だった。

「うまくいきましたか？」とホームズが尋ねた。

ドシンバタンという大きな音が下の階のどこかから聞こえた。「あれが地下室のトラー夫人です」と彼女が言った。「だんなは台所の敷物の上でいびきをかいて寝てますわ。ここに彼の鍵束があります。ルーキャスルさんのものの合鍵です」

「実に見事にやってのけましたね！」ホームズは熱狂的に叫んだ。「さあ案内してください、すぐにこの腹黒い事件を終わりにしましょう」

私たちは階段を昇り、ドアの錠をはずし、続いて廊下を通り、ミス・ハンターが描写したバリケードの前に立った。ホームズは紐を切り、横断する棒を取り除いた。それから彼はその錠にさまざまな鍵を試したがうまくいかなかった。中からはまったく音が聞こえず、その静寂にホームズの顔が曇った。

「手遅れでなければいいが」と彼は言った。「ハンターさん、僕たちだけで入ったほうがよさそうです。さあ、ワトソン、肩をここに当てて、中へ入れるかどうかやってみよう」

それは古いがたがたのドアで、私たちが力をあわせるまでもなくすぐに動いた。私たちは一緒に部屋の中に駆け込んだ。そこは空だった。小さく粗末なベッド、小さなテーブル、下着の入ったかごのほかに家具はなかった。上の天窓は開き、虜囚はいなかった。

「ここで何か悪事が行われたんだ」とホームズが言った。「見事なやつめ、ハンターさんの意図を察して犠牲者を連れ去ったのだ」

「でもどうやって？」

「天窓からだ。すぐにどうやってやってのけたかわかるだろう」彼は屋根の上に躍り上がった。「ああ、やっぱり、」彼は叫んだ、「ここに軒にかけた長くて軽いはしごの端がある。そうやってやったのさ」

「でもそれは不可能です、」ハンター嬢が言った、「ルーキャスル夫妻が出かけた時にははしごはそこにありませんでした」

「戻ってきてやったんですよ。言っておきますが彼は利口で危険な男です。今階段から聞こえる足音が彼であってもさほど驚きませんね。ワトソン、君もピストルを用意したほうがいいと思うよ」

その言葉が彼の口から出るやいなや、男が、非常に太ってたくましい、重いステッキを手にした男が部屋の戸口に姿を現した。ハンター嬢はその男を見て叫び声を上げ、壁へ後ずさりしたが、ホームズが飛び出し、男の前に立ちはだかった。

「この悪党！」と彼は言った。「君の娘さんはどこだ？」

太った男はまわりに目をやり、それから開いた天窓を見上げた。

「それは私の訊くことだ、」男は金切り声で言った、「この泥棒ども！　スパイどもに泥棒ども！　捕まえたぞ、ええ？　貴様らは私の思うままだ。どうするか見てろ！」彼は向きを変え、全速力でガタガタと階段を下りていった。

「あの犬を連れに行ったんだわ！」とハンター嬢が叫んだ。

「リボルバーがあります」と私が言った。

「玄関のドアを閉めたほうがいい」とホームズが叫び、私たちは皆そろって階段を駆け下りた。私たちが玄関に着くか着かぬかのうちに、猟犬のほえる声、それから激しい苦痛の叫び声が、聞くも恐ろしい身の毛のよだつような、不安を呼ぶ音を伴って聞こえてきた。赤い顔で四肢を振るわせた年配の男が勝手口からよろよろと出てきた。

「なんてこった！」と彼は叫んだ。「誰かが犬を放しちまった。あれは二日えさをやってないんだ。早く、早く、でないと手遅れになる！」

ホームズと私が走り出て家の角を曲がり、トラーもあわてて後に続いた。巨大な飢えたけだものが黒い鼻面をルーキャスルののどに埋めており、彼は倒れてのたうち回り、叫んでいた。私が走っていってそいつの脳を吹き飛ばすと、それは倒れたが鋭い、白い歯はまだ彼の首のしわの中でかみしめられていた。大変に苦労して私たちはそれを離し、生きてはいるもののひどく噛みさかれた彼を家に運び込んだ。私たちは彼を客間のソファに横たわらせ、酔いのさめたトラーをやって夫人に知らせを伝えさせ、私は彼の苦痛をやわらげるためにできるだけのことをした。私たち皆が彼のまわりに集まっていると、背の高い、げっそりやせた女が部屋に入ってきた。

「トラーさん！」とハンター嬢が叫んだ。

「ええ、先生。ルーキャスルさんが戻った時にあなた方の所へ上がっていく前に出してくれました。ああ、先生、何を計画しているのか私に知らせて下さらなかったのが残念です。そうしたらあなたの骨折りはむだだとお教えしましたのに」

「ほう！」と、ホームズが彼女を鋭く見て言った。「トラーさんがこの件については誰よりも良く知っているのは明白ですね」

「はい、そうでございます。知っていることは喜んでお話しいたします」

「では、どうぞ、座って、聞かせてください。実を言うと僕にもまだ不明の点がいくつかありますのでね」

「すぐに説明いたしましょう」と彼女は言った。「それにもっと前に地下室から出ることができたらそうしましたのに。このことで警察裁判所に用があるのでしたら、覚えていてくださいまし、私はあなた方の味方の一人ですし、またミス・アリスの味方でもあったのです。

父親が再婚して以来、彼女は家で幸せなことはありませんでした、ミス・アリスは。彼女は無視されたようになり、まったく発言権がなかったのですが、本当にひどいことになったのは彼女が友達の家でファウラーさんと会ってからです。私の知る限り、ミス・アリスには遺言によって彼女自身の財産があるのですが、彼女は無口で忍耐強いので、ええ、彼女はそれについては一言も言わず、まったくすべてをルーキャスルさんに任せていたのです。あの人は彼女が一緒にいるなら心配ないとわかっていましたが、夫が現れることになると、夫は法が認めるものをすべて請求するでしょうから、父親としてそれに待ったをかけておくべきだと思ったのです。あの人は彼女に、彼女が結婚するしないに関わらず、彼女の金を彼が使えるという書類への署名をさせたかったのです。彼女がそれをしないとなると、彼は彼女を苦しめ続け、ついに彼女は脳炎を起こして、六週間瀕死の状態でした。その後彼女はやっと良くなりましたが、すっかりやせて骨と皮になり、美しい髪も切られてしまいました。しかしそれでも彼女の若い人に心変わりはなく、彼女に忠実この上ない男性であり続けました」

「ああ、」ホームズが言った、「あなたがご親切にも話してくださったことで問題はかなりはっきりしますので、後はすべて僕に推測できそうです。それでルーキャスル氏はこの監禁という方法を取ったのですね？」

「そうです」

「そして、不愉快きわまる粘り強いファウラーさんを追い払うためにロンドンからハンターさんを連れてきた」

「その通りですわ」

「しかし立派な船乗りのように辛抱強いファウラーさんは彼らを妨害し、あなたに会って何らかの根拠を挙げて、すなわち金か何かの方法で、あなたの利害が彼のに一致する、とあなたを納得させることに成功した」

「ファウラーさんは話のわかる気前のいい紳士ですわ」とトラー夫人は穏やかに言った。

「そんなふうにして彼はあなたのだんなさんが酒を切らさないようにし、はしごを主人が出かけた時のために用意していた」

「実際あなたのおっしゃる通りです」

「本当にあなたにはお詫びを言わなければなりませんね、トラーさん、」ホームズは言った、「確かにあなたは僕たちを悩ませていたことをすべて解いてくれたんですから。ああ、地元の外科医とルーキャスル夫人が来たらしいから、ワトソン、僕たちはハンターさんに付き添ってウィンチェスターに戻るのが一番だね。どうも僕たちの告訴権は今やちょっと疑わしいようだからね」

このようにして玄関前にブナの木立のある不吉な家の謎は解けた。ルーキャスル氏は一命を取り留めたが、すっかり弱ってしまい、ただ献身的な妻の世話だけを頼りに生きていた。彼らは相変わらず古い召使たちと暮らしていた。おそらくルーキャスル氏も、彼の過去の生活の多くを知っている召使と別れるのは難しいと思ったのだろう。ファウラー氏とルーキャスル嬢は脱出の翌日、サザンプトンで特別許可を得て結婚し、彼は今モーリシャス島で行政職についている。ヴァイオレット・ハンター嬢に関しては、友人ホームズが、ひとたび彼の問題の中心でなくなるや、もはや彼女に関心を示さないので私はやや失望したが、彼女は今、ウォルソールの私立学校の校長をしており、私は彼女がそこで相当に成功しているものと信ずるのである。